

スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法：
名詞と動詞を中心とした記述と分析

古本 真

はしがき

スワヒリ語は、よくよく知られた言語で、アフリカの言語のなかでは、研究の蓄積がもっとも多い言語の一つと言っても過言ではないかもしれない。実際、言語学研究に携わるものであれば、バントゥ系言語やアフリカの言語を専門としていなくても、誰しも一度はスワヒリ語の例文を目にしたことがあるだろう。あるいは、後学のために学んだことがあって、名詞クラスや膠着的な形態構造などという、ちょっとした言語に関する知識をもつものも少なくないだろう。

しかしながら、スワヒリ語の方言という点、その姿をイメージできるものは限られるに違いない。東アフリカ沿岸部には、20前後のスワヒリ語の方言があるといわれるが、その多くが断片的な記述や記録しか残されていない状況にある。

本論文で研究対象とするスワヒリ語マクンドゥチ方言は、他のスワヒリ語の諸方言と比べれば、既に十分な量の記述がなされている。ただし、それは「他の方言と比べれば」の話であって、まだまだ、多くの問題が積み残されたままになっている。こうした積み残しが、そもそもの記述研究の量の不足によって生じていることは疑いようがない。しかし、問題はそれだけだろうか。

従来のスワヒリ語諸方言の記述研究は、スワヒリ語の文法に照らし合わせながら、スワヒリ語との形式的な異同をまとめることに終始しているものがほとんどで、それぞれの方言の体系性はほとんど考慮されてこなかった。また、基準となるスワヒリ語の文法の枠組みというのも、歴史的な言語変化や言語の分岐を解明することに主眼を置いた20世紀前半までのバントゥ諸語研究の時流に合わせて形作られたもので、必ずしも共時的な言語事実をとらえるのに適したものとはなっていないが、それに対する反省というのもスワヒリ語方言研究のなかでされてこなかった。記述の積み残しがあるもう一つの要因として、こうした研究態度というのも挙げることができるだろう。

筆者は、これまで、スワヒリ語マクンドゥチ方言の参照文法執筆を目指して、調査や研究に取り組んできた。未だ参照文法の完成からはほど遠い段階にあるが、マクンドゥチ方言の記述研究、あるいはスワヒリ語の方言研究をいくばくかは進展させることができたと自負している。本論文は、こうした筆者のこれまでの研究成果をまとめたものである。

ここまで、研究を進めるうえで、本当に多くの方にお世話になった。特に以下の方々へは記して謝意を表したい。

マクンドゥチでいつも、筆者を温かく迎え入れてくれる Zimba Khatibu Bonde 氏とその家族。メインインフォーマントとして（ときに退屈な）調査に協力してくれている Sigombe Haji Choko 氏、Zainabu Khatibu Bonde 氏。調査をコーディネートしてくれる Zuwena Rajabu Ali 氏。ザンジバルでの生活をサポートしてくれる Girish Zalera 氏。

大学院の指導教官である吉田豊教授（京都大学）。マクンドゥチ方言を調査する機会を与えてくださった竹村景子教授（大阪大学）。筆者の現在の受入研究者である米田信子教授（大阪大学）。共同研究者の高橋康德氏（神戸大学）。

2018年6月

古本 真

目次

はしがき.....	i
目次.....	iii
表と図の目次.....	x
略号一覧.....	xii
1章 マクンドゥチ方言とその話者について.....	1
1.1 地理.....	1
1.2 系統.....	3
1.3 言語名について.....	3
1.4 話者数について.....	4
1.5 先行研究の概観.....	4
1.6 データとインフォーマントについて.....	5
1.7 マクンドゥチ方言の類型論的特徴.....	6
1.8 本論文の目的と概要.....	6
2章 音韻の概要.....	8
2.1 音素目録と表記.....	8
2.2 音節構造.....	10
2.3 プロソディ.....	11
3章 名詞類の概要.....	13
3.1 名詞と名詞クラス.....	14
3.1.1 1/2 クラス.....	15
3.1.2 3/4 クラス・3/10 クラス.....	18
3.1.3 5/6 クラス.....	19
3.1.4 7/8 クラス.....	21
3.1.5 9/10 クラス.....	23
3.1.6 15, 16, 18 クラス.....	24
3.2 形容詞.....	29
3.2.1 典型的な形容詞.....	29
3.2.2 非典型的な形容詞.....	32

3.2.3	数量詞.....	34
3.2.4	形容詞から派生した名詞について.....	35
3.2.5	状態副詞.....	36
3.2.6	形容詞による名詞の修飾について.....	37
3.3	代名詞.....	38
3.4	指示詞.....	41
3.4.1	指示詞の形態的特徴.....	41
3.4.2	指示詞の統語的特徴.....	42
3.4.3	指示詞の指示対象について.....	45
3.5	所有詞.....	46
3.6	属辞でマークされる名詞句.....	49
3.7	疑問詞.....	52
3.8	名詞と修飾語の語順.....	58
4章	動詞類の概要	60
4.1	動詞活用形.....	60
4.1.1	動詞語幹.....	62
4.1.1.1	三つの語幹.....	62
4.1.1.2	語幹の初頭母音の「融合」.....	66
4.1.1.3	無意味形態 <i>ku-</i> について.....	68
4.1.2	TAM 接頭辞.....	72
4.1.3	否定接頭辞.....	76
4.1.4	人称接頭辞.....	79
4.1.4.1	人称接頭辞の異形態について.....	80
4.1.4.2	目的語接頭辞の出現について.....	85
4.1.4.3	目的語接頭辞のその他の特徴.....	89
4.2	特殊な形式的特徴をもつ動詞.....	90
4.2.1	欠損動詞.....	90
4.2.2	<i>-na</i> 「所有」.....	91
4.2.3	<i>-enda</i> 「行く」.....	95
4.2.4	<i>-chaka</i> 「欲する」.....	97
4.3	動詞連続.....	99
4.4	派生動詞.....	102
4.5	助動詞.....	108

5章 名詞と動詞不定形の音調実現	112
5.1 先行研究の記述と実際の音調実現.....	112
5.2 「抑揚のない」名詞と動詞不定形.....	114
5.3 ストレスの不在.....	118
5.3.1 「9/10」クラスの1音節名詞.....	118
5.3.2 無意味形態 <i>ku-</i> の随意的脱落.....	119
5.4 5章のまとめ.....	120
6章 動詞末母音の形態素らしさ	122
6.1 末母音の基本的性質.....	122
6.1.1 末母音の形態的特徴と語幹の分布	122
6.1.2 語基と末母音の形態的な結びつき	124
6.2 末母音の「形態素」としての特徴.....	125
6.2.1 末母音 <i>a</i> の機能.....	125
6.2.2 末母音の形式と表される事態の不一致	126
6.2.3 末母音の欠如.....	127
6.2.4 不規則な形式の完結語幹	128
6.2.5 小括.....	134
6.3 語基盤モデルと PFM に基づく説明.....	134
6.3.1 形態素基盤モデルと語基盤モデル	134
6.3.1.1 形態素基盤モデル.....	134
6.3.1.2 語基盤モデル.....	135
6.3.2 語基盤モデルを用いた語幹形成の説明	136
6.3.2.1 想定される形態パターン.....	136
6.3.2.2 形態パターンに基づく語幹の形成.....	138
6.3.2.3 <i>-langanza</i> ~ <i>-langanza</i> 「修理する」の完結語幹.....	140
6.3.3 PFM について	141
6.3.3.1 「推論的」かつ「具現的」アプローチ.....	141
6.3.3.2 PFM で仮定される二つの規則.....	142
6.3.4 PFM による語幹交替の説明	143
6.3.4.1 語幹の実現プロセス.....	143
6.3.4.2 接頭辞の付加.....	145
6.4 6章のまとめ.....	145

7章 テンス・アスペクト・ムード／モダリティ	146
7.1 動詞の語彙的な特性とアスペクトの関連	146
7.1.1 状態動詞	147
7.1.2 非状態動詞	154
7.1.3 小括	156
7.2 「完結」と「完了」	157
7.2.1 完結形と <i>me-</i> 「完了」でマークされた活用形が表す事態	157
7.2.1.1 「過去」形ではない完結形と <i>me-</i> 形	158
7.2.1.2 「完結」的特徴と「完了」的特徴	159
7.2.1.3 現在との関連	160
7.2.1.4 完結と結果状態を表す完結形	161
7.2.1.5 完結形と <i>me-</i> 形で表される事態の違い	162
7.2.2 対応する否定形	163
7.2.2.1 完結形に対応する否定形と <i>me-</i> 形に対応する否定形	163
7.2.2.2 二つの否定形の違い	164
7.2.2.3 二つの否定形とテンスの関係	166
7.2.3 <i>me-</i> 「完了」と <i>mena-</i> 「起動」の間の機能的な不一致	167
7.3 テンスの不在	168
7.4 文法化した動詞による TAM の標示	171
7.4.1 <i>-ja</i> 「来る」の文法化	171
7.4.1.1 移動を表さない <i>-ja</i> 「来る」	172
7.4.1.2 未来を表す <i>-ja</i>	173
7.4.1.3 過去を表す <i>-ja</i>	175
7.4.1.4 文法化した <i>-ja</i> の形態的特徴	178
7.4.1.5 文法化した <i>-ja</i> の機能	181
7.4.2 <i>-chaka</i> 「欲する」の文法化	182
7.4.3 習慣を表す四つの形式	184
7.5 接続形の用法	186
7.6 7章のまとめ	189
8章 コピュラ動詞とコピュラ文	192
8.1 コピュラ動詞の形態統語的特徴	192
8.1.1 コピュラ動詞と拘束代名詞の共起について	193
8.1.2 コピュラ動詞の補充形	194

8.1.2.1	否定形.....	195
8.1.2.2	過去形と持続形.....	195
8.1.3	コピュラ補語の義務的な後続について.....	197
8.2	コピュラ動詞のアスペクト特性.....	198
8.3	コピュラ動詞を用いないコピュラ文.....	200
8.4	コピュラ動詞型と並置型の使い分け.....	201
8.4.1	コピュラ主語と同一の指示対象.....	202
8.4.2	コピュラ主語の種類.....	204
8.4.3	コピュラ主語の属性と性質.....	204
8.4.4	コピュラ主語の指示対象の所有者.....	206
8.4.5	コピュラ主語の状態.....	207
8.4.6	コピュラ主語の指示対象が存在する場所.....	208
8.4.7	小括.....	210
8.5	コピュラ動詞の使用域が拡大している可能性について.....	211
8.5.1	通言語的な文法化の傾向.....	211
8.5.2	スワヒリ語他変種の事例.....	212
8.5.2.1	場所を表す述語のコピュラへの変化.....	212
8.5.2.2	トゥンバトゥ方言におけるコピュラ動詞の使用.....	213
8.5.2.3	コピュラ動詞の文法化のプロセス.....	213
8.6	コピュラ動詞を用いた「複合時制構文」について.....	215
8.6.1	複合時制構文による TAM の標示.....	215
8.6.2	複合時制構文とコピュラ文におけるコピュラ動詞の違い.....	217
8.6.2.1	統語的な違い.....	218
8.6.2.2	形態的な違い.....	218
8.6.2.3	意味的な違い.....	220
8.7	8章のまとめ.....	222
9章	統語機能と語順	223
9.1	統語機能と統語現象.....	224
9.1.1	主語接頭辞と目的語接頭辞との一致の基本的な性格.....	224
9.1.2	一致と受動文の関係について.....	225
9.1.3	場所を表す名詞句の目的語らしさ.....	226
9.1.4	二つの目的語の対称性.....	228
9.1.4.1	一次目的語と二次目的語.....	228

9.1.4.2	対称的な二つの目的語.....	232
9.1.5	非典型的な目的語.....	233
9.1.5.1	動詞と一致しない目的語.....	233
9.1.5.2	受動文の主語とならない目的語.....	234
9.1.6	主語、目的語以外の名詞句.....	236
9.1.6.1	譲渡不可能名詞 2.....	236
9.1.6.2	付加語.....	238
9.1.7	小括.....	240
9.2	倒置構文.....	241
9.2.1	倒置構文とは.....	241
9.2.2	倒置構文の語順.....	243
9.2.3	例外的な倒置構文.....	244
9.3	主語・目的語・述語の語順.....	246
9.4	9章のまとめ.....	250
10章	関係節.....	251
10.1	関係節の形態的特徴について.....	252
10.1.1	動詞語幹が接頭辞で直接マークされる形式.....	253
10.1.2	コピュラ動詞を介して形成される関係節.....	259
10.1.3	例外的な形態的特徴をもつ関係節.....	262
10.1.3.1	動詞語幹を欠いたコピュラ動詞.....	262
10.1.3.2	所有を表す <i>-na</i>	263
10.1.3.3	コピュラ動詞語幹の異形態 <i>-li</i>	265
10.1.3.4	関係節ではない形式.....	267
10.2	先行詞の関係節内における統語機能.....	267
10.2.1	タイプ 1 の先行詞は主語に限られるという制限について.....	268
10.2.2	タイプ 2, 3, 4 の先行詞の関係節中での統語機能.....	269
10.2.2.1	主語.....	270
10.2.2.2	目的語.....	270
10.2.2.3	付加語.....	273
10.2.2.4	主語・目的語・付加語以外の名詞句.....	274
10.2.2.5	共格標識 <i>na=</i> でマークされる名詞句.....	275
10.2.2.6	所有者.....	276
10.2.2.7	先行詞となる名詞句を想定できない関係節.....	276

10.3	四つの関係節の使い分け	278
10.4	関係節の名詞らしさ	279
10.5	10章のまとめ	284
11章	指示詞縮約形と主題の標示	285
11.1	指示詞縮約形の音形	285
11.2	指示詞縮約形の統語的特徴	286
11.3	指示詞縮約形と主題構成素との一致	288
11.3.1	左方移動された目的語との一致	288
11.3.2	指示詞縮約形が主題構成素と一致しているかの診断	289
11.4	遠くにある指示対象を主題として取り立てる方法	291
11.5	指示詞縮約形によって取り立てられる構成素	293
11.5.1	「冗長な」主題標示	294
11.5.2	指示詞縮約形による Addressation の指定	295
11.5.3	指示詞縮約形は一つしか現れない	297
11.6	11章のまとめ	298
12章	結論	299
付録1	：ピッチを計測した名詞と動詞不定形のリスト	306
付録2	：完結形とコピュラ動詞過去形の共起を示す例	309
付録3	：複合時制構文の例	311
付録4	：民話テキスト「子供が鬼に連れ去られた話」	313
参考文献	326

表と図の目次

表 3-1 : マクンドゥチ方言の名詞と一致する語や形態素.....	15
表 3-2 : 人称代名詞.....	38
表 3-3 : 拘束代名詞.....	39
表 3-4 : 指示詞.....	41
表 3-5 : 所有詞.....	46
表 3-6 : <i>-ngafi</i> 「いくつの」の形式.....	53
表 3-7 : <i>-fi</i> 「どれ」の形式.....	53
表 4-1 : 主語接頭辞・目的語接頭辞・関係節接頭辞.....	79
表 4-2 : 助動詞.....	109
表 5-1 : 2 音節名詞の平均 F0 値.....	114
表 5-2 : 2 音節名詞の標準偏差.....	115
表 5-3 : 3 音節名詞の平均 F0 値.....	115
表 5-4 : 3 音節名詞の標準偏差.....	115
表 5-5 : 動詞不定形 (2 音節) 平均 F0 値.....	116
表 5-6 : 動詞不定形 (3 音節) 平均 F0 値.....	116
表 5-7 : 動詞不定形 (2 音節) の標準偏差.....	116
表 5-8 : 動詞不定形 (3 音節) の標準偏差.....	117
表 5-9 : 1 音節語幹の「9/10」クラス名詞と形容詞.....	119
表 6-1 : マクンドゥチ方言の三つの語幹.....	123
表 6-2 : <i>-ijua</i> 「知る」と受動動詞の語幹の形式.....	126
表 6-3 : 借用語語幹の形式.....	128
表 6-4 : 語基の最終音節が成節鼻音となる動詞と 1 音節語幹の動詞の語幹の形式....	129
表 6-5 : 不規則な完結語幹をもつ動詞の語幹の形式.....	131
表 6-6 : 新たに形成された語幹.....	138
表 7-1 : マクンドゥチ方言の状態動詞の例.....	148
表 7-2 : 派生によって形成される状態動詞の例.....	152
表 7-3 : 非状態動詞の例.....	154
表 7-4 : 完結形と <i>na</i> -形が表す事態に基づく動詞の分類.....	156
表 7-5 : 完結形と <i>me</i> -形が表す事態の違い.....	162
表 8-1 : コピュラ補語の意味的特性とコピュラ動詞の使用の可否.....	211

表 8-2 : マクンドゥチ方言とトゥンバトゥ方言のコピュラ動詞完結形の用法の違い	213
表 10-1 : 関係節接頭辞の形.....	256
表 10-2 : 拘束代名詞の形式.....	257
表 11-1 : 指示詞の基本形と縮約形.....	287
図 1-1 : マクンドゥチ郡の位置.....	2
図 5-1 : <i>kití</i> (LH) 「椅子」の F0 曲線.....	113
図 5-2 : <i>kisímá</i> (LHH) 「井戸」の F0 曲線.....	113
図 5-3 : 2 音節名詞の平均 F0 曲線.....	115
図 5-4 : 3 音節名詞の平均 F0 曲線.....	116
図 5-5 : 動詞不定形の平均 F0 曲線.....	117
図 7-1 : 完結 (完結形) が表す事態.....	162
図 7-2 : 結果状態 (完結形) が表す事態.....	163
図 7-3 : <i>me</i> -形が表す事態.....	163

略号一覧

1	first person (1 人称)	IPFV	imperfective (未完結)
2	second person (2 人称)	ITV	itive (行程)
3	third person (3 人称)	LOC	locative (所格)
AL	allocutive (聞き手)	MED	medial (中称)
APPL	applicative (適用)	NEG	negative (否定)
AUG	augmentative (指大)	NEU	neuter (中立)
BGR	background (前提)	OM	object marker (目的語標識)
C	consonant (子音)	ONM	onomatopoeia (オノマトペ)
CAUS	causative (使役)	PASS	passive (受動)
CF	counter-factual (反実仮想)	PER	persistive (持続)
CL	noun class (名詞クラス)	PFV	perfective (完結)
COM	comitative (共格)	PL	plural (複数)
COMP	complemetizer (補文)	PN	proper noun (固有名詞)
COND	conditional (条件)	POSS	possession (所有)
CONS	consecutive (継起)	PRF	perfect (完了)
COP	copula (コピュラ)	PRO	pronoun (代名詞)
DEM	demonstrative (指示詞)	PROH	prohibitive (禁止)
DIM	diminutive (指小)	PROX	proximal (近称)
DIST	distal (遠称)	PST	past (過去)
FIL	filler (フィラー)	Q	question (疑問)
FUT	future (未来)	RED	reduplication (重複)
FV	final vowel (末母音)	REFL	reflexive (再帰)
HAB	habitual (習慣)	REL	relative (関係節)
HESIT	hesitative (言いよどみ)	SG	singular (単数)
IMP	imperative (命令)	SM	subject marker (主語標識)
INCH	inchoative (起動)	SUBJ	subjunctive (接続)
INF	infinitive (不定)	V	vowel (母音)
INT	interjective (間投詞)		

1章 マクンドゥチ方言とその話者について

本章では、本論文の研究対象となるスワヒリ語マクンドゥチ方言の紹介を行う。1.1 節では、マクンドゥチ方言が話される地域の地理的な情報を提示する。1.2 節、1.3 節、1.4 節では、それぞれ、マクンドゥチ方言の系統、言語名、話者数について述べる。1.5 節では、先行研究の概観を行う。1.6 節には、本論文で用いるデータを提供してくれたインフォーマントの情報を記す。1.7 節では、マクンドゥチ方言の類型的特徴を示す。1.8 節では、本論文の目的と概要について述べる。

1.1 地理

マクンドゥチ方言は、タンザニア連合共和国・ザンジバル、ウングジャ島の南東部のマクンドゥチ郡を中心とした地域で主に話されている。ウングジャ島中西部に位置する島の中心地（図 1-1 の Zanzibar Town）からマクンドゥチ郡（図 1-1 の Makunduchi）までは、およそ 60km ある。

マクンドゥチ郡在住の筆者の調査協力者の言に従えば、マクンドゥチ方言に近似したスワヒリ語の変種の話者は、ウングジャ島南東沿岸部（ムテンデ (Mtende)、マクンドゥチ (Makunduchi)、ジャンビアーニ (Jambiani/Jembiani)、パジェ (Paje)、ブウェジュウ (Bwejuu) に分布していると考えられる。なお、興味深いことにマクンドゥチ郡に近接した地域でもウングジャ島の内陸部は、マクンドゥチ方言に近似する変種の分布域とはみなされていない¹。

ちなみに、ウングジャ島内で話されるマクンドゥチ方言以外のスワヒリ語の変種としては、スワヒリ語の威信変種であるウングジャ方言 (Kiunguja) とトゥンバトゥ方言 (Kitumbatu) が挙げられる。ウングジャ方言は、ウングジャ島の都市部を中心とした広い地域で話されている。また、トゥンバトゥ方言は、ウングジャ島の北部ムココトーニ（図 1-1 の Mkokotoni）から 4km ほど離れたところに位置するトゥンバトゥ島（図 1-1 の Tumbatu Is.）を中心とした北部地域で話されている。

図 1-1 に、マクンドゥチ郡の位置を示す。なお、図 1-1 の左上のアフリカの地図上の塗りつぶした部分がタンザニア、左下のタンザニアの地図の塗りつぶした部分がウングジャ島である。

¹ マクンドゥチから、20km ほど離れたムユニ (Muyuni) にも、話者がいるが、この話者は、マクンドゥチからの移住者であるとされる。

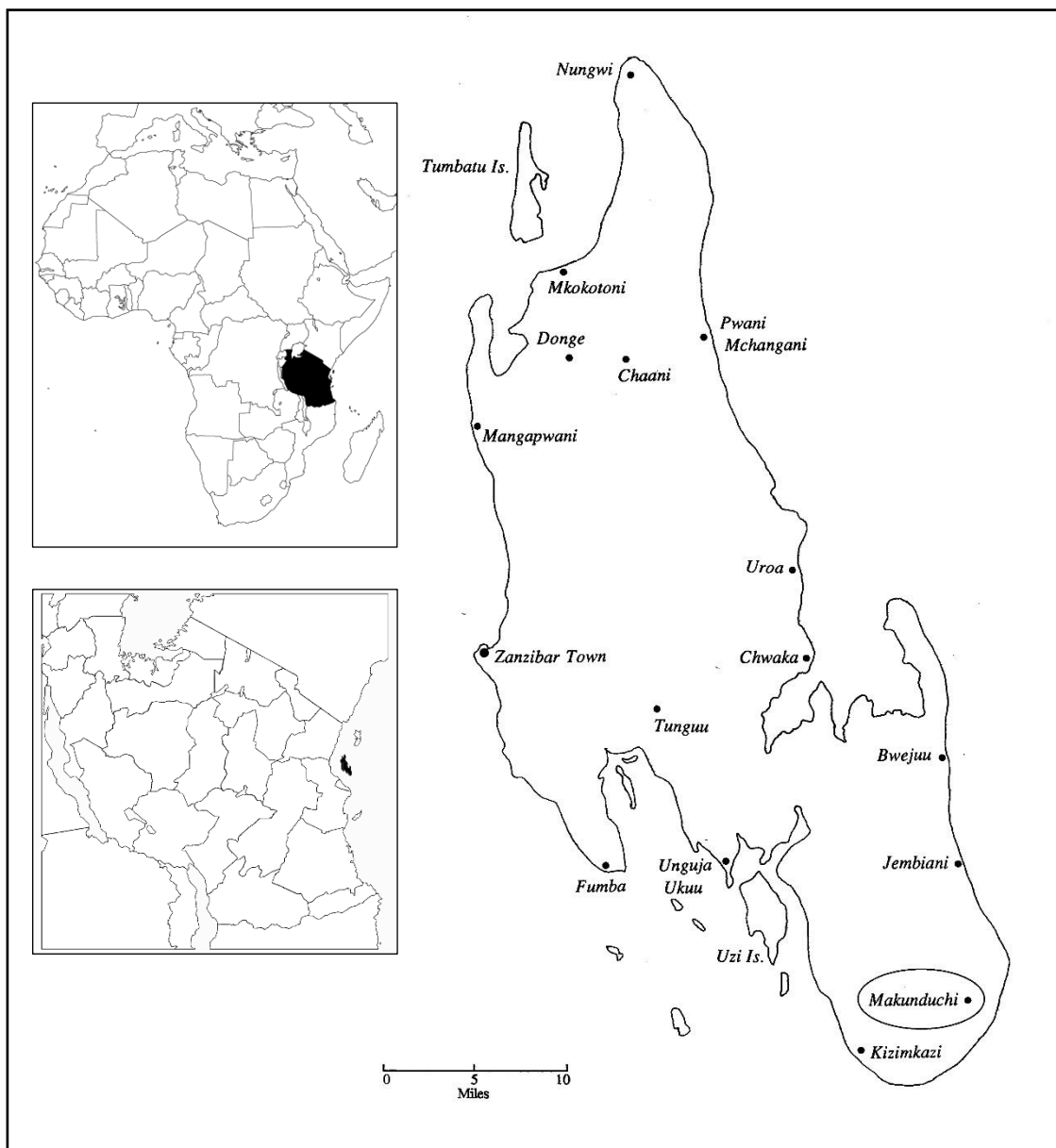


図 1-1 : マクンドウチ郡の位置²

² 図 1-1 のアフリカの地図とタンザニアの地図は、それぞれ CraftMAP (<http://www.craftmap.box-i.net/>) と白地図ぬりぬり (<https://n.freemap.jp/>) から得られたものである。これらの地図のタンザニアとウングジャ島部分の着色は筆者が行っている。また、ウングジャ島の地図は、Nurse & Hinnesbusch (1993: 52) で提示されている地図の一部を加工したものである。

1.2 系統

スワヒリ語は、ニジェールコンゴ語族・ベヌエコンゴ語派に属するバントゥ系言語の一つである。Nurse & Hinnebusch (1993) は、スワヒリ語を含む東アフリカ沿岸部の六つのバントゥ系言語 (Swahili, Mwani, Elwana, Pokomo, Mijikenda, Comorian) が比較的近い系統関係にあるとして、これらの言語に対してサバキ祖語 (Proto-Sabaki) を再建している。そしてサバキ祖語は北東沿岸バントゥ祖語 (Proto-Northeast Coast Bantu) に遡るとされる。

東アフリカ沿岸部には、約 20 ほどのスワヒリ語の変種 (方言) があるとされるが、Nurse (1982a), Nurse & Hinnebusch (1993) は、この約 20 の変種を北部諸方言と南部諸方言に分けている。彼らの主張では、スワヒリ祖語は、まず北部諸方言と南部諸方言に分かれたのちに、それぞれの変種へと分岐したとされる。

マクンドゥチ方言は、上述の方言分類で、南部諸方言に分類される。本論文では、トゥンバトゥ方言のデータに言及することもあるが、トゥンバトゥ方言も南部諸方言の一つである。また、ザンジバルにおいて威信変種となっているウングジャ方言は、音韻面で南部諸方言的な特徴をもつ一方、動詞の活用といった形態面では、北部諸方言的な特徴をもつことが指摘されている (Nurse 1982a)。なお、標準スワヒリ語は、このウングジャ方言を基に策定されている (Whiteley 1969: 80)。

バントゥ諸語研究では、Guthrie (1967–1971) が、バントゥ系の各言語に付したコードを用いる慣習がある。このコードは A から S までのアルファベットの大文字と二桁の数字、それと小文字のアルファベットの組み合わせによって表される。マクンドゥチ方言には、G43c というコードが割り当てられている (Guthrie 1971: 50, Maho 2009: 49)。

1.3 言語名について

マクンドゥチ方言の話者は、彼らの住む地域をカエ (Kae)、彼らの話す変種をカエ方言 (Kikae) と呼ぶ。このカエという語は、「昔」を意味する (ki)kale に由来するとも言われる (Ingrams 1924: 534)。先行研究では、このカエ方言という呼称が用いられることもしばしばあるが (cf. Chum 1963, Racine-Issa 2002, Güldemann 2003)、本論文では、トゥンバトゥ方言の話者が自分たちの住む地域をカイエ (Kaye)、自分たちの話す変種をカイエ方言 (Kikaye) と呼ぶことを考慮にいれて、このトゥンバトゥ方言との混同を避けるために、マクンドゥチ方言という呼称を用いることにする。

比較的古い研究では、マクンドゥチ方言ではなく、ハディム方言 (Kihadimu) という呼称が用いられることもある (cf. Sacleux 1909, Werner 1916, Ingrams 1924)。このハディ

ム (Hadimu) という語は、「召使い」を意味するアラビア語に由来するといわれる (Werner 1916: 356)。現在のマクンドウチには、ハディムというエスニシティをもつ人たちもいるが、ハディム以外の人たちも、マクンドウチ方言を用いる。

本論文では、標準スワヒリ語、もしくはそれに近似している変種の先行研究を引用することもあるが、これらの変種はまとめてスワヒリ語と呼ぶことにする。ただし、筆者自身の調査によって、ザンジバル都市部出身の話者から得られたデータに言及する際は、ウングジャ方言という呼称を用いる。ウングジャ方言は、前述の通り、標準スワヒリ語の基となった変種である。また、スワヒリ語、及びウングジャ方言のデータは、スワヒリ語の正書法を用いて表記する。

1.4 話者数について

2012年タンザニア国勢調査で³、マクンドウチ郡の人口は11,742人とされているが⁴、マクンドウチ郡に、ウングジャ方言の話者もいることを踏まえると、この数字がそのまま、マクンドウチ郡のマクンドウチ方言の話者の数を反映しているとは考えにくい。

1.5 先行研究の概観

マクンドウチ方言の言語特徴を示す断片的な記録は、20世紀初頭から残されている (Sacleux 1909, Werner 1916, Ingrams 1924, 1925)。まとまった量の資料としては、語彙を記録した Chum (1963c, 1994)、及び BAKIZA (2012)、文法を記した Whiteley (1959)、Racine-Issa (2002) が挙げられる。

Chum (1963c) は語釈が英語でつけられている。Chum (1994) と BAKIZA (2012) の語釈はスワヒリ語である (Chum (1994) には、一部英語の語釈もあり)。どちらも、掲載されている語が、スワヒリ語にない語形をもつものに絞られているという特徴がある。Chum (1963c, 1994) には、例文も多数掲載されているが、BAKIZA (2012) に例文はない。なお、Chum (1963a, b, c, 1994) の著者の Haji Chum 氏は、マクンドウチ方言の母語話者とみられる。語彙資料としては、他に、ジャンビアーニ変種で用いられる語彙を記した宮崎 (2013)、パジェ変種で用いられる語彙を記した宮崎 (2017) がある。

³ <http://www.nbs.go.tz/> 参照。

⁴ 統計にマクンドウチ郡そのものの人口は掲載されていない。ここに挙げる数字はマクンドウチ郡を構成する六つの行政地域 (Nganani, Kijini, Mzuri, Kajengwa, Kiongoni, Tasani) の人口の合計である。

Whiteley (1959) は、28 ページの簡易記述で、トゥンバトゥ島、ブウェジュウ、マクンドゥチで話されるスワヒリ語諸変種の音韻、名詞類（名詞、形容詞、指示詞）、関係節を含む動詞活用形の形態的特徴を、具体例とともに記録している。Racine-Issa (2002) は、音韻、名詞類、動詞類を中心にマクンドゥチ方言の文法の記述を行っている。特に形態（音韻）的特徴の網羅性については特筆すべきものがある。ただし、機能面に関する記述は、スワヒリ語との対照にとどまっている部分が多く、不正確な点もみられる。また、統語論に関する記述を欠いていたり、トーンに関する記述が誤っているなどの課題も含んでいる。

この他にテキスト資料として、Whiteley (1960)、Chum (1963 a, b) が挙げられる。テキスト資料は Racine-Issa (2002) も提示している。

1.6 データとインフォーマントについて

本論文では、特に明記しない限り、ザンジバルでの現地調査（2013 年 7–9 月、2014 年 2–3 月、2014 年 12 月–2015 年 2 月、2015 年 6–7 月、2015 年 12 月–2016 年 3 月、2016 年 8–10 月、2017 年 2–3 月、2017 年 9–10 月）によって、筆者自身が集めたデータを用いる。本論文で提示するデータの多くは、Sigombe Haji Choko 氏から得られたものである。特に、容認性判断はほとんどが、この Sigombe 氏によるものである。異なる話者の容認性判断を提示する際は、そのことを注釈に記す。

Sigombe 氏は、マクンドゥチ郡北部のカジェングワ (Kajengwa)、ムトンガニ (Mtongani) 出身の 60 代男性で、現在もこの土地に暮らしている。Sigombe 氏は、父方の祖父母によって育てられたが、この祖父母ともに、マクンドゥチ方言話者である。

本論文では、録音された自然談話のデータも提示することがある。この自然談話のデータの多くは Zainabu Khatibu Bonde 氏から得られたものである。Zainabu 氏はマクンドゥチ郡北部ンガナニ (Nganani) のマタズィ (Matazi) 出身の 60 代女性である。Zainabu 氏は、10 歳前後から 20 歳前後まで、マクンドゥチ郡を離れ、ウングジャ島中部のトゥングウのおじ夫妻のもとで暮らしている。おじ夫妻とともにマクンドゥチ方言話者である。Zainabu 氏の語る民話のうち一編を、付録として稿末に載せる。なお、上述の Sigombe 氏が暮らす地域と、Zainabu 氏が暮らす地域は、徒歩で 10 分程度の距離にある。この二つの地域で、それぞれ独立した言語変種が話されているとは考えにくい。

なお、現在のマクンドゥチ方言の話者は、ほとんどがウングジャ方言も解し自由に用いることができる。筆者のメインインフォーマントである Sigombe 氏と Zainabu 氏も、ウングジャ方言を用いることができる。なお、Sigombe 氏は、読み書きができるが、

Zainabu 氏は、ほとんど学校教育をうけておらず、読み書きができない。

1.7 マクンドゥチ方言の類型論的特徴

本論文では、マクンドゥチ方言に 5 つの母音と、32 の子音を認める。子音の中には、借用語でのみ観察されるものも含まれる。音節構造は、V, CV の開音節が基本となる。ただし、鼻音も単独で音節をなすことがある。プロソディについては、多くのバントゥ諸語やスワヒリ語他変種と異なり、語の次末音節のストレスや、声調の区別をもたないようである。

形態的類型は基本的に、統合的・膠着的であり、接頭辞型の形態法をもつ。ただし、一部接尾辞も観察される。複合や重複もあるが、それほど頻繁には現れない。

基本語順は SVO である。ただし、この語順は固定的ではなく、ある程度の交替がゆるされる。語順の決定には、情報構造も関与していると考えられる。名詞は、13 ある名詞クラスのいずれかに分類される。節内においては主要部標示型で、主語や目的語となる名詞と一致する標識が動詞活用形中に現れる。名詞句内では、主名詞に修飾語が後続する。名詞句内においては、従属部標示型で、名詞修飾語の形は、それらによって修飾される名詞の名詞クラスによって異なる。

動詞の活用では、もっぱらアスペクトやムード／モダリティが標示され、テンスは標示されない。また、テンス・アスペクト・ムード／モダリティは、動詞の活用だけでなく、動詞に由来する助動詞によっても標示されることも指摘すべき点である。また、マクンドゥチ方言には、指示詞に由来する特別な主題標識がある。

1.8 本論文の目的と概要

本論文の目的は、筆者自身のフィールドワークによって得られたデータを用いながら、マクンドゥチ方言の文法に関して、十分な研究がなされていない点を中心に、記述・分析を行うことにある。

本論文は、12 章からなる。まず、2 章で音韻の概要を示す。3 章では、名詞類の概要を説明する。名詞類には、名詞、形容詞、代名詞、指示詞、所有詞、疑問詞が含まれる。4 章では、動詞類の概要を述べる。動詞類には、それ自体が語彙的な内容を表す動詞と、単に TAM (テンス・アスペクト・ムード／モダリティ) の標示のために用いられる助動詞が含まれる。5 章でプロソディに関する新たな発見を報告する。先行研究では、スワヒリ語の他の変種にはないトーン (語声調) の対立が、マクンドゥチ方言にはあると

されてきた。しかしながら、こうした記述に相反して、単独で発音された名詞や動詞不定形は平坦な音調実現を見せる。そして、この事実は、トーンの不在だけでなく、スワヒリ語他変種にみられる次末音節のストレスの不在も示唆する。6章では、動詞活用形末に現れる末母音を形態素とする従来の分析の問題点を指摘して、これまでとは異なるアプローチで動詞活用形形成を説明する。7章では、テンス・アスペクトの標示について説明する。この章では、主に、①語彙アスペクト、②完結と完了を表す活用の区別、③活用におけるテンスの不在、④文法化の過程にある動詞による TAM の標示、⑤接続形の用法を記述する。8章では、コピュラ動詞とコピュラ文の包括的な記述を行う。この章では、まず、コピュラ動詞の形式的特徴や、アスペクトに関する特徴、用いられる条件を記述する。そのあとで、コピュラ動詞を用いて TAM の標示を行う「複合時制構文」の記述を行う。9章では、名詞句の統語機能の分類や、目的語や場所を表す名詞句が主語となる「倒置構文」の記述、SVO が基本語順と考えられる理由の説明を行う。10章では関係節を扱う。この章では、まず関係節の形態的特徴について説明したのちに、どのような統語機能を担う名詞句が先行詞となるかを示す。また、この章では、先行詞を欠いた関係節の「名詞らしさ」についても説明する。11章では、縮約した形で現れる指示詞が、主題標示の機能を担っていることを示す。12章は結論である。論文の最後には、5章、7章、8章の議論を補足するデータと、談話資料を付録している。

- 有気音の表記
- 両唇有声摩擦音 /β/ の設定
- 鼻音の成節性の表記

マクンドゥチ方言の無声破裂音には、有気無気の対立があるため、本論文ではこの点を表記に反映させる。(2-3) は、有気無気の対立を示す語の例である。

(2-3) 有気無気の対立を示す語

- ch^hungu* 「できもの」: *chungu* 「土鍋」
- k^hata* 「布」: *kata* 「ひしゃく」
- m^hk^he* 「あいつにやれ (-*k^ha* 「与える」の命令形)」: *m^hke* 「妻」
- p^haka* 「ネコ」: *paka* 「塗れ (-*paka* 「塗る」の命令形)」
- t^husi* 「棺桶」: *tusi* 「卑語」
- kit^hu* 「モノ」: *kitu* 「ヤマネコ」

スワヒリ語の *p* で転写される無声両唇閉鎖音は、マクンドゥチ方言において、しばしば両唇有声摩擦音として実現することが指摘されている (Whiteley 1959: 46, Chum 1963: 51)。この両唇有声摩擦音は、存在自体に疑問が呈されることもあり (Nurse & Hinnebusch 1993: 63)、両唇有声摩擦音を別個の音素とみなすべきかについては、更なる調査、分析が必要と考えられるが、本論文では、暫定的に、両唇有声摩擦音を音素として認め、表記に反映させる。なお、筆者の観察では、両唇有声摩擦音の実現は確認することができる。(2-4) には、両唇有声摩擦音をもつ語や形態素を提示する。なお、() 内には、対応するスワヒリ語の形式を提示する。

(2-4) a. *βa-* (*pa-*) 「16 クラス主語接頭辞」

- βeleka* (*-peleka*) 「送る」
- βika* (*-pika*) 「料理する」
- βokea* (*-pokea*) 「受け取る」

鼻音には、成節性をもった異音が存在する。鼻音は母音と半母音 /w/ の前で非成節的になり、/w/ 以外の子音の前で成節的になる。なお、[m] の音価決定には、必ずしも後続する子音が関与しないが、それ以外の成節鼻音は、ほとんどの場合、後続する子音に同化することで調音点が決まる。[m] 以外で調音点の同化が生じていない成節鼻音は、*-lanḡanza* 「修理する」の [ḡ] しか見つかっていない。本論文では、音価決定に後続

する子音が関わらない成節鼻音については、*m* というように、(2-2) の音素目録に挙げたアルファベットに、成節性を示す補助記号を付して提示する。また、後続する子音に同化することで調音点が決まる成節鼻音は *N* と表記する。

m は単独で、2 人称複数の主語接頭辞、3 人称単数の目的語接頭辞、18 クラスの主語接頭辞・目的語接頭辞となる。*m* は、この他に名詞の名詞接頭辞として現れたり（例：*m-tʰu* 「人 (1 クラス)」、*m-kono* 「腕 (3 クラス)」）、動詞や動詞から派生した名詞の語中で用いられることもある（例：*-lamka* 「目覚める」、*-chemka* 「沸く」）。*N* は、動詞活用形中に現れる 1 人称単数の主語接頭辞・目的語接頭辞か、行為者標識⁵である。

この他に先行研究で指摘されていない点として、/th, dh, gh/ の /s, z, h/ との交替、/r/ と /l/ の交替が挙げられる。/th, dh, gh/ は、借用語にのみ観察される音素である。それぞれ、/s, z, h/ との交替が観察される。(2-5a) と (2-5b) の交替は同一話者内で観察される。(2-5c) の交替は話者による違いである。前者の *aghalabu* は男性話者に、*ahalabu* は女性話者から得られたものである。

(2-5) /th, dh, gh/ の交替が観察される例

a. *hadithi* ~ *hadisi* 「お話」 b. *dhambi* ~ *zambi* 「罪」 c. *aghalabu* ~ *ahalabu* 「通常」

また、/l/ と /r/ はともに接近音となる。この二つに対しては、*sili* 「私は食べない」と *siri* 「秘密 (借用語)」を最小対として挙げることができる。しかしながら、実現される音のはっきりとした違いは聞き分けにくい。この二つが類似しているということは、先行研究での表記の揺れや、話者の判断の揺れからも見て取れる。例えば、「甘さ」を意味する語の転写には、先行研究間で *usalida* (Chum 1963: 65) ~ *usarida* (BAKIZA 2012a) と揺れがある。また、筆者の聞き取り調査でも、借用語にこうした揺れはないが、固有語の中には *-rembea* ~ *-lembea* 「投げる」のように、揺れがあると判断されるものがある。

2.2 音節構造

V, CV, C₁C₂V, C という音節構造が認められる。C₁C₂V という音節は、C₂ に半母音 /w, y/ が現れる構造が最も一般的である。C₂ が /w/ となる場合、C₁ に /h, w, y, dh, gh, th, ng/ 以外が現れうる。一方、C₂ が /y/ となる場合、C₁ に現れうるのは、/p, pʰ, f, v, l/ のみである。また、C₂ が /w/ となる場合は V に /u/ が現れることはなく、C₂ が /y/ となる場

⁵ 受動文中で、対応する能動文の主語となる名詞句をマークする標識を本論文では「行為者標識」と呼ぶことにする。

合、V の位置に /i/ が現れることはない。単独で一つの音節をなすことができる子音は、鼻音だけである。

最小の自立語は CV か C₁C₂V という音節から成る⁶。V や C のみからなる自立語は存在しない。また、C という音節は語末に現れることがない。(2-6a, b) は、それぞれ CV, CCV という構造をもつ自立語の例である。また、(2-6c) は、C のみからなる音節を含む最小の自立語の例、(2-6d) は、V のみからなる音節を含む最小の自立語の例である。

(2-6) a. *zi* 「ハエ」 (CV)

b. *bwe* 「石」、*pya* 「新しい (5 クラス)」 (CCV)

c. *mke* 「妻」、*Nk^ha* 「私によこせ」 (C.CV)

d. *uso* 「顔」 (V.CV)、*ua* 「花」 (V.V)

借用語に現れる連続する子音が直後の母音と一つの音節を成していると考えれば、音節初頭の子音の連続を含む語として以下のものが挙げられる。なお、*spitali* は *sipitali*、*askari*、*kaskazi* は *asikari*、*kasikazi* と連続する子音の間に母音 *i* が挿入されることもある。ただし、こうした母音の挿入は、「老人語」(*kikongwe*)という印象を与えるようである。ちなみに、以下の例のうち、*spitali* 「病院」と *baskeli* 「自転車」は英語からの借用語、それ以外はアラビア語からの借用語である。

(2-7) 借用語にみられる子音連続

a. /bd/ *labda* 「たぶん」

b. /bl/ *kabla* 「以前」

c. /lh/ *alhamisi* 「木曜」

d. /rdh/ *ardhi* 「大地」

e. /sp/ *spitali* 「病院」

f. /sk/ *askari* 「警察」、*baskeli* 「自転車」、*kaskazi* 「北」

2.3 プロソディ

マクンドゥチ方言に語の意味の弁別に寄与するトーン（語声調）が存在する可能性がいくつかの先行研究で指摘されているが（Whiteley 1959: 47, Racine-Issa 2002: 27）、これ

⁶ スワヒリ語では、自立語（音韻語）は必ず2音節以上からなる。言い換えると、スワヒリ語には CV, CCV のみからなる自立語（音韻語）が存在しない。

らの研究で挙げられている通りのトーンの実現は筆者の調査では確認されていない。2音節や3音節の名詞、動詞不定形を観察する限りでは、音節間でピッチが平坦に推移している場合が多く、トーンと呼ぶに値する現象は（少なくとも今のところ）みられていない。また、音節間でピッチが平坦に推移するということから、スワヒリ語他変種で観察される語の次末音節のストレスが、少なくともピッチという形では実現されないということが指摘できる。この二点については、5章で詳しく論じる。それ以外のプロソディ特徴についてはまだよく分かっていない。

3章 名詞類の概要

本章では、名詞類に分類されるものの記述を行う。まず、次の例をみてほしい。(3-1)では、*ṁtungi*「甕」という名詞が、目的語となっている。そのことは、動詞が、この *ṁtungi* と一致する目的語接頭辞 *u-* でマークされていることから分かる⁷。

- (3-1) *a-ka-u-chukua* *ṁtungi*
3SG.SM-CONS-CL3.OM-take pot (CL3)
「彼女は甕をもって行って」

このように単独で動詞の項となるのは、名詞に限らない。次の例では、最初に所有詞 *yangu*「私の」で修飾された *simu*「携帯電話」が現れ、そのあとで、所有詞 *yako*「あなたの」が修飾する名詞なしで主語として現れている。この例文中の *i-na-tenda*「それは動く」という動詞の *i-* という接頭辞は、*yako*「あなたの」と呼応する主語接頭辞である。

- (3-2) *simu* *yangu* *i-bomoko* *hea yako* *i-na-tenda* *kazi*
phone (CL9) my.CL9 CL9.SM-break.NEU.PFV but your.CL9 CL9.SM-IPFV-do work
「私の携帯電話は壊れているが、あなたの動く」

本論文では、(3-1) の名詞 *ṁtungi*「甕」や、(3-2) の所有詞 *yako*「あなたの」のように、単独で節中の項の位置に現れることができるものを名詞類に分類する。この基準に従った場合、名詞類には、名詞、形容詞、代名詞、指示詞、所有詞、疑問詞が含まれることになる。また、属辞でマークされた名詞句も単独で項の位置に現れることがあるが、本章では、この属辞でマークされた名詞句についても言及する。なお、関係節も修飾する名詞なしで、項の位置に現れることがあるが、関係節については、10章で説明する。

まず、3.1節では、名詞と名詞クラスについて説明する。3.2節では形容詞、3.3節では指示詞、3.4節では所有詞、3.5節では属辞でマークされる名詞句、3.6節では、疑問詞について述べる。3.7節では、名詞句内の語順について説明する。

⁷ 動詞は、主語や目的語と一致する接頭辞でマークされる。この詳細については、4.1.4節を参照されたい。

3.1 名詞と名詞クラス

マクンドゥチ方言の名詞は、名詞句の主要部になるという特徴をもつ。また、すべての名詞は、有限個のいずれかの名詞クラスに必ず属している。

スワヒリ語研究やバントゥ諸語研究では、一般に、名詞修飾語や、動詞活用形中の主語や目的語などとの一致を示す接頭辞の形式ではなく、名詞の語中に現れる名詞接頭辞が、主要な名詞クラスの分類基準とされる (Ashton 1947: 10, Katamba 2003: 103)。マクンドゥチ方言の先行研究でも、この方針は踏襲されているが (Racine-Issa 2002: 30)、本論文では、名詞接頭辞ではなく、名詞と一致する語や形態素の形式を名詞クラス認定の基準とする。こうした立場をとるのは、名詞クラスというコンセプトを純粋に名詞との一致現象を説明するものとしてとらえているためである。名詞と統語的に関連する語や形態素の形式が、名詞に内在する特性によって決まると仮定した場合、名詞クラスは、名詞接頭辞ではなく、名詞と一致する語や形態素に反映されていると考えられる⁸ (cf. Hockett 1958, Greenberg 1978, Heine 1982, Aikhenvald 2000, Dixon 2010a)。

名詞と一致する語や形態素の形式を基準とすると、マクンドゥチ方言には、13 の名詞クラスが存在すると考えられる。本論文では、バントゥ諸語研究で共通して用いられているものを援用して⁹、それぞれのクラスに、1~10, 15, 16, 18 と番号を付す。

Racine-Issa (2002: 30–49) は、11 クラス、及び 17 クラスを独立した名詞クラスとして設定しているが、名詞と一致する語や形態素を基準として名詞を分類した場合、この二つの名詞クラスは、それぞれ、3 クラス、15 クラスと区別することができない。なお、3 クラスと 11 クラスについては、通時的に見た場合、名詞クラスの合流が生じていると考えられる (cf. Nurse & Hinnebusch 1993: 350, 古本 2015)。

表 3-1 に、それぞれのクラスに属する代表的な名詞と、形容詞-*dogo* 「小さい」、指示詞近称、所有詞「私の」、属辞、動詞をマークする主語接頭辞の形式を挙げる。多くの名詞は、[名詞接頭辞-語幹] と分析することができ¹⁰、名詞接頭辞の形式はそれぞれのクラスで、概ね一貫している。形容詞もほとんどの場合、名詞と同じ形式の接頭辞でマ

⁸ 名詞と一致する語や形態素の形を基準として名詞クラスを設定するという考え方はスワヒリ語研究でも、一部で唱えられている (cf. Maw 1969: 40)。

⁹ 名詞クラス番号の使用は、バントゥ系言語の比較言語学研究に端を発するものである。スワヒリ語は、バントゥ祖語で再構されるいくつかの名詞クラスを欠いているとされるため、名詞クラス番号に欠番が生じている。なお、バントゥ祖語に名詞クラスをいくつ認めるべきかについては諸説ある。詳しくは Maho (1999: 246–255) を参照されたい。また、スワヒリ語研究で一般に用いられる名詞クラス番号は、概ね Meinhof (1928: 128) で提示されているものを踏襲しているとみられる。

¹⁰ 本章では、形態的特徴の説明のために、名詞を接頭辞と語幹に分けて提示することがあるが、名詞接頭辞付加という形態論的プロセスがどのような性質のものであるかについては、別途議論する必要があるだろう。

ークされる。なお、以下の表では、接頭辞と名詞や形容詞の語幹の間に形態素境界を示すハイフンを付すが、本論文で例示する際は、必要のない限り、名詞接頭辞と語幹の間にこのハイフンを付すことはしない。

表 3-1 : マクンドゥチ方言の名詞と一致する語や形態素の形式

	名詞	形容詞 「小さい」	指示詞 「これ」	所有詞 「私の」	属辞	主語
CL1	<i>m-t^hu</i> 「人」	<i>m-dogo</i>	<i>yuno</i>	<i>yangu</i>	<i>ya=</i>	<i>ka-</i>
CL2	<i>wa-t^hu</i> 「人」 (複数)	<i>wa-dogo</i>	<i>wano</i>	<i>wangu</i>	<i>wa=</i>	<i>wa-</i>
CL3	<i>m-kono</i> 「腕」	<i>m-dogo</i>	<i>uno</i>	<i>wangu</i>	<i>wa=</i>	<i>u-</i>
CL4	<i>mi-kono</i> 「腕」 (複数)	<i>mi-dogo</i>	<i>ino</i>	<i>yangu</i>	<i>ya=</i>	<i>i-</i>
CL5	<i>tunda</i> 「果物」	<i>dogo</i>	<i>lino</i>	<i>lyangu</i>	<i>lya=</i>	<i>li-</i>
CL6	<i>ma-tunda</i> 「果物」 (複数)	<i>ma-dogo</i>	<i>yano</i>	<i>yangu</i>	<i>ya=</i>	<i>ya-</i>
CL7	<i>ki-t^hu</i> 「物」	<i>ki-dogo</i>	<i>kino</i>	<i>changu</i>	<i>cha=</i>	<i>ki-</i>
CL8	<i>vi-t^hu</i> 「物」 (複数)	<i>vi-dogo</i>	<i>vino</i>	<i>vyangu</i>	<i>vya=</i>	<i>vi-</i>
CL9	<i>n-guo</i> 「服」	<i>n-dogo</i>	<i>ino</i>	<i>yangu</i>	<i>ya=</i>	<i>i-</i>
CL10	<i>n-guo</i> 「服」 (複数)	<i>n-dogo</i>	<i>zino</i>	<i>zangu</i>	<i>za=</i>	<i>zi-</i>
CL15	<i>ku-soma</i> 「読むこと」 / <i>mahaa</i> 「場所」	<i>ku-dogo</i>	<i>kuno</i>	<i>kwangu</i>	<i>kwa=</i>	<i>ku-</i>
CL16	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>βa-dogo</i>	<i>βano</i>	<i>βangu</i>	<i>βa=</i>	<i>βa-</i>
CL18	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>mu-dogo</i>	<i>mno</i>	<i>mwangu</i>	<i>mwa=</i>	<i>mu-</i>

10 クラスまでの名詞は、基本的に、奇数番号のクラスに単数形が、直後の偶数クラスには、同じ名詞の複数形が属している。以下で、それぞれのクラスに属する名詞の特徴を簡単に説明するが、1~10 クラスは、奇数番号クラスとその直後の偶数番号クラスを分けずに説明を行う。15, 16, 18 クラスはそれぞれ、動詞不定形 (15 クラス) や、場所名詞 (15, 16, 18 クラス) のクラスとなる。なお、それぞれの名詞クラスに典型的にみられる接頭辞については、名詞をマークするものだけでなく、形容詞をマークするものについても言及する¹¹。

3.1.1 1/2 クラス

このクラスの大きな特徴として、所属する名詞がすべて有生物を指示対象とするということが挙げられる (例: *m-t^hu/wa-t^hu* 「人」)。ただし、少数だが有生物を指示対象とする名詞でも、他のクラスに属するものがある (例: *bata* 「アヒル」 (5 クラス)、*ki-tu* 「ヤマネコ」 (7 クラス))。また、有生物を指示対象としていても、指大化を表すものは 5/6

¹¹ 名詞や形容詞の形態的特徴については、Racine-Issa (2002: 30–50) も参照されたい。

クラスに、指小化を表すものは 7/8 クラスに属している (例: *ji-dege* 「巨鳥」(5 クラス)、*ki-dege* 「小鳥」(7 クラス))。指大化、及び指小化された有生物を表す名詞については、5/6 クラス、及び 7/8 クラスのところで説明する。

m- (1 クラス)、*wa-* (2 クラス) が、このクラスの名詞をマークする典型的な接頭辞である (例: *m-tʰu/wa-tʰu* 「人」)。ただし、借用語の多くは、この接頭辞をもたない (例: *askari* 「兵、警察官」)。また、なかには 9/10 クラスの名詞と同様の形式の接頭辞をもつ名詞もある (例: *n-dege* 「鳥」)。接頭辞のない名詞や、9/10 クラスと同形の接頭辞をもつ名詞は単複で音形に違いがない。

このクラスの名詞と一致する形容詞は、名詞の語形にかかわらず、*m-/wa-* という接頭辞のいずれかでマークされる (例: *m-dogo/wa-dogo* 「小さい (1/2 クラス)」)。

語幹の初頭音が母音の場合、名詞や形容詞は接頭辞 *m-/wa-* の異形態 *mw-/w-*、*mu-/wa-* でマークされる。例えば、*mw-ana/w-ana* 「子供」では、接頭辞と語幹の初頭母音の間に融合が生じており、接頭辞の形が *mw-/w* となっている¹²。一方、*mu-ongo/wa-ongo* 「嘘つきの」のように、接頭辞と語幹の初頭母音の間に融合が起きない場合は、*mu-/wa-* という形の接頭辞で、名詞や形容詞がマークされる。

このクラスには、一定の形態パターンにそって、動詞から派生した名詞も含まれる。こうした派生名詞には、動詞語幹の形を変えて、名詞接頭辞が付加された形式をとるものと、動詞語幹の形を変えずに、名詞接頭辞 *m-/wa-* と接尾辞 *-ji* が付加されているものがある。(3-3) は動詞の語幹の形式を変えることによって形成されるタイプの名詞の例である。これらはすべて、語幹末の母音が *i* になるという共通点をもつが、語幹の最後の子音のふるまいはそれぞれ異なる。(3-3a) の子音は派生前と派生後で変わっていないが、(3-3b, c) では、それぞれ子音が *b* から *v*、*k* から *s* に変化している。また、(3-3d, e, f) をみると、語幹末で母音が二つ連続する場合は、後ろから二番目の母音の直後に有声摩擦音が挿入されるということも言えるが、挿入される子音は *z* または *v* となっており一貫していない。

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| (3-3) a. <i>m-shoni</i> 「裁う人」 | << <i>-shona</i> 「縫う」 |
| b. <i>mw-ivi</i> 「泥棒」 | << <i>-iba</i> 「盗む」 |
| c. <i>m-βisi</i> 「料理人」 | << <i>-βika</i> 「料理する」 |
| d. <i>m-kwezi</i> 「登る人」 | << <i>-kweya</i> 「登る」 |
| e. <i>m-vyazi</i> 「産む人 (親)」 | << <i>-vyaa</i> 「産む」 |
| f. <i>m-vuvi</i> 「漁師」 | << <i>-vua</i> 「魚を捕る」 |

¹² 本論文では、接頭辞の最後の音節と語幹の初頭母音が、一つの音節を形成する現象を「融合」と呼ぶ。融合は、動詞語幹への接頭辞付加でもみられる (4.1.1.2 節参照)。

(3-4) は、動詞の語幹の形を変えず、名詞接頭辞とともに接尾辞-*ji* を付加することによって形成される名詞の例である。

- (3-4) a. *m-tenda-ji* 「する人」 << *-tenda* 「する」
b. *m-suka-ji* 「編む人」 << *-suka* 「編む」
c. *m-shona-ji* 「縫う人」 << *-shona* 「縫う」
d. *m-kweya-ji* 「登る人」 << *-kweya* 「登る」
e. *m-βika-ji* 「料理する人」 << *-βika* 「料理する」

なお、一つの動詞が、この二つの派生形どちらももつことがあるが(例 *m-shoni/m-shona-ji* 「縫う人」)、こうした違いが何を反映しているのかについてはまだ分かっていない。

親族関係(友人、恋人含む)を表す名詞は、変則的な一致のパターンを示すことから、厳密に見た場合、他の 1/2 クラス名詞とは異なる名詞クラスを成しているといえる。これらの名詞と一致するほとんどの語や形態素は、1/2 クラスのものだが、複数形と一致する所有詞だけが、10 クラスの形式をとる。(3-5) にそうした名詞のうち、筆者がこれまで確認しているものを挙げる。単数形と複数形が異なる場合は、左に単数形を右側に複数形を記す。

(3-5) 複数形の所有詞の形が 10 クラスとなる親族関係を表す名詞の例

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------|
| a. <i>babu</i> 「祖父」(単複同形) | k. <i>mke/wake</i> 「妻」 |
| b. <i>bibi</i> 「祖母」(単複同形) | l. <i>mjukuu/wajukuu</i> 「孫」 |
| c. <i>baba</i> 「父(及び父の男兄弟)」(単複同形) | m. <i>mkwe/wakwe</i> 「夫又は妻の親」 |
| d. <i>mama</i> 「母(及び母の姉妹)」(単複同形) | n. <i>shemegi</i> 「夫の兄弟姉妹」 |
| e. <i>kaka</i> 「兄」(単複同形) | o. <i>wifi</i> 「妻の兄弟姉妹」 |
| f. <i>dada</i> 「姉」(単複同形) | p. <i>rafiki</i> 「友達」 |
| g. <i>ndugu</i> 「年下の兄弟姉妹」 | q. <i>mchumba/wachumba</i> 「恋人」 |
| h. <i>dumbu</i> 「(男からみた) 姉妹」 | |
| i. <i>mjomba/wajomba</i> 「(母方の) おじ」 | |
| j. <i>shengazi</i> 「(父方の) おば」(単複同形) | |

なお、(3-5) に挙げた名詞の単数形と一致する所有詞は、ほとんどの場合、その形から 1 クラスか 9 クラスのものと考えられるが、1 クラスと 9 クラスの所有詞は同一の形式となるため、これらの名詞の単数形と一致する所有詞がどちらのクラスのものであるかは、所有詞の形から判断することができない。仮に、単数形も複数形と同様に例外的な

一致パターンをもつのであれば、これらの名詞と一致する所有詞は9クラスのものとなる。しかし、単数形は一致に関して規則的なふるまいをみせるのであれば、これらの名詞と一致する所有詞は1クラスのものということになる。本論文では、こうした名詞の単数形と一致する所有詞には、便宜上1クラスのグロスを付すことにする。なお、*dumbu* 「(男からみた) 姉妹」のみは、単数形と一致する所有詞が5クラスのものになる。

3.1.2 3/4 クラス・3/10 クラス

植物を指示対象とする名詞（例：*m-gomba/mi-gomba* 「バナナの木」）はこのクラスに属している。ただし、それ以外のものを指す名詞もこのクラスに含まれる。

このクラスの名詞の単数形をマークする接頭辞として、*m-*と *u-*が挙げられる。どちらの接頭辞でマークされるかは名詞によって異なる。単数形の接頭辞が *m-*となる名詞の複数形は、*mi-*という接頭辞をもち4クラスに属する（例：*m-kono/mi-kono* 「腕」）。単数形が *u-*という接頭辞でマークされる名詞は、複数形の形式や名詞クラスに応じて三つのタイプに分けられる。例えば、*u-*という接頭辞をもつ *u-jiti* 「木」の複数形は4クラスの *mi-jiti* だが、同じように *u-*という接頭辞をもつ *ungo*¹³ 「手箕」の複数形は10クラスの *ny-ungo* となる。また、*u-fyagio* 「箒」は、*mi-fyagio* (4クラス) と *fyagio* (10クラス) という二つの複数形をもつ。

ちなみに、スワヒリ語では、*u-*で始まる名詞の複数形は、10クラスに属しており、9/10クラスの接頭辞を伴うとされる (Meinhof 1928: 128, Ashton 1947: 105–106)。マクンドゥチ方言の *u-*という接頭辞をもつ名詞に対応する複数形に、10クラスに属するものだけでなく、4クラスに属するものがあるという共時的な事実は、通時的にはもともと別々の名詞クラスであった「3」クラスと「11」クラスの間で合流が起き¹⁴、それに誘発されて複数形を形成する屈折パターンにも画一化が生じつつあることを示唆していると考えられる (cf. Nurse & Hinnebusch 1993: 350, 古本 2015)¹⁵。*m-*という接頭辞をもつ名詞の多

¹³ *ungo* 「手箕」では、後述する通り、接頭辞 *u-*と語幹-*ungo* の間に融合が生じていると考えられる。

¹⁴ 北東沿岸バントゥ祖語や、バントゥ祖語の段階では、名詞と一致する要素の形式を基準にしても、3クラスと11クラスは別々のクラスとしてたてることのできる (Nurse & Hinnebusch 1993: 345, Meeussen 1967: 97)。

¹⁵ Nurse & Hinnebusch (1993: 350) は、屈折パターンの画一化の前に、名詞接頭辞の変化があったと考えている。しかし、マクンドゥチ方言で、屈折パターンに変化が生じている例は多数みつかれるものの、名詞接頭辞の形式まで変化している例は、*uzi-mzi* 「糸」(Chum 1994: 51, BAKIZA 2012a: 91) と *uwanja-mwanja* 「グラウンド」 くらいしか見つかっていない。このことを考慮に入れると、少なくともマクンドゥチ方言では、屈折パターンの画一化が先に生じていると考えられる。

くは、もともと3クラスに属していた一方、*u-*という接頭辞をもつ名詞は、もともと11クラスという別の名詞クラスに属していたと考えられる。

3クラス名詞と一致する形容詞は、名詞の形式にかかわらず、*m-*という接頭辞でマークされ（例：*m-dogo*「小さい（3クラス）」）、4クラス名詞と一致する形容詞は*mi-*という接頭辞でマークされる（例：*mi-dogo*「小さい（4クラス）」）。10クラス名詞と一致する形容詞は、固有語の9/10クラス名詞と同じ形態的特徴をもつ。10クラス名詞の形態的特徴については、後述するが、形容詞の語幹の初頭音が入破音となる場合、形容詞の語幹には前鼻音化音が現れる（例：*ndogo*「小さい（9/10クラス）」）。

このクラスでも、語幹が母音で始まるものの中には、名詞接頭辞と語幹の初頭母音が融合しているものと（例：*mw-embamba/my-embamba*「細い（形容詞）」、*m-oyo/my-oyo*「心臓」、*w-aya/ny-aya*「ケーブル」）、そうでないものがある（例：*mu-embe/mi-embe*「マンガの木」）。なお、前述の*ungo*「手箕」でも*u-*という接頭辞と語幹*-ungo*の間に融合が生じていると考えられる。

3クラスの名詞の多くは単数を表すが、*m-hogo*「キャッサバ」や*m-chele*「米」は、単数形が数量詞の*mwingi*「多い（3クラス）」と共起することができる。こうした場合は、キャッサバや米が多量であることを表される。なお、*m-hogo*「キャッサバ」は、複数形*mi-hogo*が不自然な形であると判断されるが、後者*m-chele*「米」は、*mi-chele*という複数形の自然談話における使用が確認されている。

3.1.3 5/6クラス

果物を意味する名詞の多くはこのクラスに属する（例：*tunda/ma-tunda*「果物」、*fenesi/ma-fenesi*「ジャックフルーツ」、*papai/ma-papai*「パパイヤ」）。

5クラス名詞は、多くの場合、接頭辞をもたない。6クラス名詞の接頭辞は*ma-*である。ただし、2音節名詞の中には、少数ではあるが、*ji-no/me-no*「歯」、*di-cho/ma-cho*「目」のように、5クラスの単数形も接頭辞をもつものもある。

基本的に5クラス名詞と一致する形容詞は接頭辞を伴わず、6クラス名詞と一致する形容詞は*ma-*という接頭辞でマークされる（例：*dogo/ma-dogo*「小さい（5/6クラス）」）。ただし、形容詞の語幹の初頭音が母音の場合、5クラス名詞と一致する形容詞の初頭には、*j-*という接頭辞が現れる（*j-ekundu*「赤い（5クラス）」）。この*j-*は、*ji-*という接頭辞と語幹の初頭母音との間で融合が生じて形成されていると考えられる。

また、このクラスには、指大化された名詞も属しているが、指大化された名詞は、特殊な形態的特徴をもつ。以下で、この指大化について簡単に説明する。まず、(3-6)に示す通り、指大化を導く形態法には三つのタイプがある。一つめは、(3-6a)のような派

生前の名詞がもつ接頭辞の脱落である。(3-6a) では、*ndege* 「鳥」の接頭辞 *n-*が脱落して、指大化が実現されている。二つ目は、(3-6b) に示す派生前の接頭辞と接頭辞 *ji-*との交替である。(3-6b) では、*ndege* 「鳥」の接頭辞 *n-*が接頭辞 *ji-*と交替している。三つ目は、(3-6c) のような接頭辞 *ji-*の付加である。(3-6c) では、接頭辞をもたない *shetani* 「お化け」に接頭辞 *ji-*が付加されている。

- (3-6) a. *n-dege* 「鳥」 >> *dege* 「巨鳥」
 b. *n-dege* 「鳥」 >> *ji-dege* 「巨鳥」
 c. *shetani* 「お化け」 >> *ji-shetani* 「化け物」

接頭辞 *ji-*は基本的に、一つしか現れないが、語幹が母音で始まる名詞や、語幹が1音節の名詞は、例外的に、*ji-*という接頭辞を二つ伴うことがある。(3-7a) には語幹の初頭音が母音となる *ny-umba* 「家」が指大化された形を提示する。また、(3-7b) には語幹が1音節の *m-tu* 「人」が指大化された形を提示する。なお、接頭辞 *ji-*を一つだけ伴った *j-umba*, *ji-t^hu* も、指大化を表す名詞として用いられる。

- (3-7) a. *ny-umba* 「家」 >> *j-umba* >> *ji-j-umba* 「屋敷」
 b. *m-t^hu* 「人」 >> *ji-t^hu* >> *ji-ji-t^hu* 「巨人」

指大化された名詞は、複数形の形成もほかの名詞と異なる。名詞接頭辞をもつ多くの名詞は、単複で接頭辞が交替するが、指大化された名詞の複数形では、*ji-*という接頭辞が脱落することなく、この *ji-*の前に6クラスの名詞接頭辞 *ma-*が現れる。(3-8a) は、接頭辞の脱落により指大化された名詞の例である。この場合、複数形は語幹に *ma-*という接頭辞が付加されることにより形成される。一方、(3-8b) に示す通り、*ji-*という接頭辞が付加され形成された名詞の複数形は、この *ji-*の前に *ma-*が現れている。

- (3-8) a. *dege* 「巨鳥 (単数)」 : *ma-dege* 「巨鳥 (複数)」
 b. *ji-dege* 「巨鳥 (単数)」 : *ma-ji-dege* 「巨鳥 (複数)」

指大化された名詞と一致する形容詞には、二つのタイプがある。前述の通り、5クラス名詞と一致する形容詞は、語幹の初頭音が母音である場合を除き、基本的に接頭辞を伴わないが、(3-9a) に示す通り、接頭辞を脱落させることにより形成された名詞と一致する形容詞も、接頭辞を欠く。それに対して、(3-9b) に示す通り、*ji-dege* 「巨鳥」のように接頭辞 *ji-*でマークされた名詞と一致する場合、形容詞は名詞と同様に接頭辞 *ji-*でマ

一クされる。なお、(3-9) の *-kubwa* は「大きい」を意味する形容詞である。

- (3-9) a. *dege kubwa* 「大きな巨鳥」
b. *ji-dege ji-kubwa* 「大きな巨鳥」

なお、(3-7) に挙げた母音で始まる語幹や 1 音節の語幹をもつ名詞は、指大化された場合でも、一致する形容詞が、接頭辞でマークされないことがある。*j-umba* 「屋敷」や *ji-tʰu* 「巨人」のように、名詞が接頭辞を一つしか持たない場合は、その名詞と一致する形容詞は接頭辞をとらない。一方、*ji-j-umba* 「屋敷」や、*ji-tʰu* 「巨人」のように、接頭辞を二つとる名詞と一致する形容詞は、接頭辞 *ji-* でマークされる。

本論文では、名詞と一致する語や形態素の形式を基準として名詞を分類しているが、その基準に厳密に則った場合、(3-9b) の *ji-kubwa* 「大きい」のような *ji-* を伴う形容詞で修飾される名詞は、他の 5 クラス名詞とは別のクラスを成していることになる。

6 クラス名詞の中には、対応する 5 クラス名詞がないものも存在する。(3-10) にそうした名詞を挙げる。

(3-10) 対応する 5 クラスの単数形がない 6 クラス名詞

- a. *maziko* 「葬式」
b. *maungo* 「身体」
c. *machozzi* 「涙」
d. *maji* 「水」
e. *mafuta* 「油」

原則として、5 クラスは単数のクラス、6 クラスは複数のクラスとなる。しかしながら、*maziko* 「葬式」は例外的に単数も表す 6 クラス名詞となる。このことは数量詞 *mamoja* 「一つの (6 クラス)」との共起から分かる。一方、*maungo* 「身体」は不可算名詞で数えることはできない。このことは、*machozzi* 「涙」、*maji* 「水」、*mafuta* 「油」といった液体を表す名詞にも当てはまる。

3.1.4 7/8 クラス

このクラスに分類される名詞は、*ki-/vi-* という接頭辞をもつ (例: *ki-tʰu/vi-tʰu* 「物」)。このクラスに属する名詞の意味的な特徴を一般化することは難しいが、言語名は *ki-* という接頭辞を伴い、7 クラスに属する (例: *ki-kae* 「カエ方言」)。

7/8 クラス名詞と一致する形容詞は、名詞と同様に、*ki-/vi-*という接頭辞でマークされる (例: *ki-dogo/vi-dogo* 「小さい (7/8 クラス)」)。

接頭辞 *ki-/vi-*は、語幹が母音で始まる場合、*ch-/vy-*という形になることがある (例: *ch-oo/vy-oo* 「便所」、*ch-embamba/vy-embamba* 「細い (7/8 クラス)」)。これは、融合の結果生じた異形態であると考えられる。

指小化された名詞もこのクラスに属する。(3-11a) に示す通り、指小化は元の名詞接頭辞が *ki-/vi-*と交替することによっても実現されるが、(3-11b) に示す通り、元の名詞接頭辞が *ki-/vi-*と交替するだけでなく、この *ki-/vi-*と語幹の間に、*ji-*という接頭辞が挿入されることもある。

(3-11) a. *n-dege* 「鳥」 >> *ki-dege/vi-dege* 「小鳥」

b. *n-dege* 「鳥」 >> *ki-ji-dege/vi-ji-dege* 「小鳥」

(3-12a) に示す通り、前者のタイプの指小化された名詞と一致する形容詞は、他の 7/8 クラス名詞と一致する場合と同様の形式となるが、(3-12b) に示す通り、後者のタイプの指小化された名詞と一致する形容詞は、*ki-/vi-*という接頭辞だけでなく、*ji-*という接頭辞も伴う。なお、(3-12) の、*-digi* は、「小さい」という意味の形容詞である。

(3-12) a. *ki-dege ki-digi* 「小さな小鳥 (単数)」

b. *ki-ji-dege ki-ji-digi* 「小さな小鳥 (単数)」

この他に、この名詞クラスに関して指摘しておくべきこととして、異なる名詞クラスに属する二つの名詞と同時に一致する接頭辞や名詞修飾語が 8 クラスのものとなることが挙げられる。次の、(3-13) はそのことを示す例である。(3-13a, b) では、動詞-*gwa* 「落ちる」の完結形がそれぞれ主語の *kamba* 「ロープ (9 クラス)」と *mkasi* 「ハサミ (3 クラス)」と一致する主語接頭辞でマークされているが、(3-13c) に示す通り、この二つが並置され主語となる場合、動詞は 8 クラスの主語接頭辞 *vi-*でマークされる。

(3-13) a. *kamba i-gu*

rope (CL9) CL9.SM-drop.PFV

「ロープが落ちた」

b. *mkasi u-gu*

scissors (CL3) CL3.SM-drop.PFV

「ハサミが落ちた」

- c. *kamba* *na=ɱkasi* *vi-gu*
 rope (CL9) COM=scissors (CL3) CL8.SM-drop.PFV
 「ロープとハサミが落ちた」

このように、異なる名詞クラスに属する二つの並置された名詞が、8クラスの語や形態素と一致するという現象は、主語接頭辞だけでなく、目的語接頭辞や指示詞でも確認されている ((3-64) 参照)。

3.1.5 9/10 クラス

このクラスの名詞は単複で同じ形の接頭辞をもつが、このクラスの名詞接頭辞にはいくつかの異形態がある。以下に、そのことを示す例を提示する。

- (3-14) a. *nguo* 「服」 (語幹: *-guo*)
 b. *nyumba* 「家」 (語幹: *-umba*)
 c. *khata* 「(荷物を頭に載せて運ぶ際に挟む) 布」 (語幹: *-kata*)
 d. *vua* 「雨」 (語幹: *-vua*)

(3-14a) の *nguo* 「服」に示す通り、語幹の初頭音が入破音であれば前鼻音化閉鎖音の鼻音部分が接頭辞となる。また、(3-14b) の *nyumba* 「家」のように、語幹の初頭音が母音であれば、鼻音 *ny* が接頭辞として現れる。語幹の初頭音が無声閉鎖音であれば、(3-14c) の *khata* 「布」のように、接頭辞は有気音となる。そして、(3-14d) の *vua* 「雨」のように、語幹の初頭音が摩擦音の場合は、名詞接頭辞は実現形式をもたない¹⁶。

なお、スワヒリ語の1音節語幹をもつ9/10クラス名詞をマークする接頭辞は成節鼻音となるが、(3-15)に示す通り、マクンドゥチ方言の1音節語幹をもつ9/10クラス名詞をマークする接頭辞は、多音節語幹をマークする場合と同様に、非成節的である。これらの9/10クラス名詞の形態的特徴は、5.3.1節で説明する通り、マクンドゥチ方言のプロソディと関わっている可能性がある。

- (3-15) a. *ch'a* 「先端」 (スワヒリ語: *ɲcha*)
 b. *mbwe* 「小石」 (対応するスワヒリ語なし)
 c. *nje* 「外」 (スワヒリ語: *ɲje*)
 d. *p'ya* 「新しい (形容詞)」 (スワヒリ語: *mpya*)

¹⁶ 9/10クラスの語頭に現れる鼻音や有気音が接頭辞とみなされ、このクラスの名詞接頭辞として調音点未指定の鼻音がたてられることもある (Racine-Issa 2002: 41–42)。

また、このクラスには、借用語が多く含まれるが、借用語は接頭辞を持たない（例：*baskeli*「自転車」、*embe*「マンゴー」、*kamba*「ロープ」）。

9/10 クラス名詞と一致する形容詞は、名詞と同じ形態的特徴を持つ。(3-16a) の *ndogo* 「小さい」に示す通り、形容詞の語幹の初頭音が入破音の場合、語頭に前鼻音化阻害音が現れる。語幹の初頭音が母音の場合は、(3-16b) の *nyekundu* 「赤い」に示す通り、語頭に *ny* が現れ、語幹の初頭音が無声閉鎖音の場合は、(3-16c) の *khubwa* 「大きい」に示す通り、有気音が現れる。また、語幹の初頭音が摩擦音の場合、(3-16d) の *zuri* 「よい」に示す通り、接頭辞と分析可能な部分はなく、語幹がそのまま語形を成す¹⁷。

(3-16) a. *n-dogo* 「小さい」(語幹：-*dogo*)

b. *ny-ekundu* 「赤い」(語幹：-*ekundu*)

c. *khubwa* 「大きい」(語幹：-*kubwa*)

d. *zuri* 「よい」(語幹：-*zuri*)

3.1.6 15, 16, 18 クラス

15 クラスは動詞不定形と場所名詞、16, 18 クラスは場所名詞のクラスとなる。このクラスの名詞は、ほとんどが生産的な語形成プロセスによって一時的に形成されたものであると考えられる。動詞不定形は、動詞語幹に接頭辞 *ku-* を付加することによって形成される（例：*ku-soma* 「読むこと」）。場所名詞は、*mahaa* 「場所」と固有名詞を除いて、他のクラスの名詞に所格接尾辞 *-ni* を付加することによって形成される¹⁸（例：*nyumba-ni*

¹⁷ *-zuri* 「よい」は、9/10 クラス名詞と一致する場合、接頭辞を伴わないが、挨拶表現で用いられる場合、*nzuri* というように初頭に鼻音が現れる。これは、ウングジャ方言の影響であると考えられる。ウングジャ方言で、初頭に有声摩擦音が現れる形容詞は、マクンドウチ方言と異なり、接頭辞が鼻音の形で現れる。

¹⁸ 所格接尾辞 *-ni* は動詞不定形にも付加される。仮に、動詞不定形形成を統語的に名詞と同等の性質をもつ動詞の語形を作り出す操作（屈折）、場所名詞形成を新たな語彙素を作り出す操作（派生）と考えた場合、次の例の *ku-ganga-ni* は、屈折によって動詞不定形が形成されたのちに、場所名詞が派生されていることになる。なお、本論文では、これらの形態論的操作を屈折とみなすべきか、派生とみなすべきかや、屈折とはなにか、派生とはなにかという問題についてはこれ以上立ち入らない。

例：*tw-ende=ni* *ku-ganga-ni*
1PL.SM-go.SUBJ=AL.PL INF-heal-LOC
「一緒に治すところに行きましょう」

「家に」¹⁹⁾。この所格接尾辞-*ni* は、固有名詞に付加することはできない²⁰⁾。また、-*ni* が付加された名詞は、形容詞（数量詞含む）で修飾することができない。(3-17a) に示す通り、名詞修飾語がない場合、*nyumba* 「家」は-*ni* でマークされるが、(3-17b, c) に示す通り、名詞が-*ingi* 「多い」で修飾される場合、*nyumba* 「家」は-*ni* でマークされない。

- (3-17) a. *ny-evu* *ny-ende* *nyumba-ni*
 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-go.PFV house-LOC
 「私は家に行った」
- b. *ny-evu* *ny-ende* *nyumba* *nyingi*
 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-go.PFV house many.CL9
- c. **ny-evu* *ny-ende* *nyumba-ni* *kwingi*
 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-go.PFV house-LOC many.CL15
 「私は多くの家に行った」

このクラスの名詞のうち、場所名詞は名詞接頭辞でマークされることがないが、このクラスの名詞と一致する形容詞は、接頭辞でマークされる。それぞれの接頭辞は *ku-*, *βa-*, *mu-* となる（例：*ku-dogo/βa-dogo/mu-dogo* 「小さい (15/16/18 クラス)」）。これらの接頭辞は、母音で始まる語幹をもつ形容詞をマークする場合、その語幹の初頭母音と融合して *kw-*, *β-*, *mw-* となる（例：*kw-ngine/β-engine/mw-ngine* 「別の」 (15/16/18 クラス)）。

動詞不定形と一致する語や形態素の形式は表 3-1 に挙げた通りだが、所有詞と目的語接頭辞については、別のクラスのものが見れる場合もあることが確認されている。(3-18) (3-19) は所有詞の例である。(3-18) で不定形と一致する所有詞は 15 クラスの *kwake* となっているが、(3-19) では、9 クラスの *yake* となっている。

¹⁹⁾ 所格接尾辞-*ni* が付加された 15, 16, 18 クラス名詞は、必ずしも具体的な場所を表すわけではない。例えば、*hadithi* 「お話」に所格接尾辞-*ni* が付加された *hadithi-ni* は「お話の中で」という意味になる。*udogo* 「幼さ」に所格接尾辞-*ni* が付加されると、場所ではなく時間を表し「幼いころに」という意味になる。また *mwaka* 「年」に-*ni* が付加された *mwaka-ni* は「来年」を意味するようになる。この意味は、この語を構成する二つの形態素からは予測できないものである。

²⁰⁾ 所格接尾辞-*ni* はウングジャ方言にもあるが、マクンドゥチ方言の-*ni* の付加は、ウングジャ方言よりも生産的であると考えられる。次の例では英語の *charge* に由来する *chaji* 「充電」に-*ni* が付加されている。*chaji* という語はウングジャ方言でも用いられるが、ウングジャ方言で *chaji* に-*ni* を付加することは容認されない。

例：*simu* *yangu* *i-wa* *chaji-ni*
 phone my.CL9 CL9.SM-COP.PFV charge-LOC
 「私の携帯電話は充電中だ」

(3-18) *ku-soma kwake ku-na mafanikio*

INF-read his.CL15 CL15.SM-POSS success

「彼が学ぶことは成功を有する（成功する）」

(3-19) *kw-enda yake njo=ka-na-kweta ja=vino*

INF-go his.CL9 BGR=3SG.SM-IPFV-buttwalk like=DEM.PRO.CL8

「こんな風に、尻を引きずって進みます。それが彼女の進む様子です。」

(3-20) は目的語接頭辞の例である。(3-20a) の不定形は、15 クラスの目的語接頭辞と一致している。一方、(3-20b) の不定形は、8 クラスの目的語接頭辞と一致している。この目的語接頭辞の違いによる意味の違いは特にない。

(3-20) a. *ku-soma ha-kw-iji*

INF-read 3SG.SM:NEG-CL15.OM-know.PFV

b. *ku-soma ha-v-iji*

INF-read 3SG.SM:NEG-CL8.OM-know.PFV

「彼は読み書きを知らない」

15, 16, 18 クラスの場所名詞は、名詞自体の語形に違いはないが、どこにあるものを指示するかが異なる。それぞれの名詞クラスに属する名詞の指示対象については、現段階で以下のように考えている。

- 15 クラス：聞き手と話し手が共有していないと、話し手が想定する場所。
- 16 クラス：聞き手が話し手が共有していると、話し手が想定する場所。
- 18 クラス：ある場所やモノの内部。

この三つの名詞クラスの使い分けは、スワヒリ語と概ね対応していると考えられるが、本稿の説明がスワヒリ語の先行研究と異なる部分もあるため、以下で簡単にこれらの名詞クラスの指示対象について説明する。まず、18 クラスが、ある場所の内部にあるものを指示対象とするという説明はスワヒリ語の先行研究と見解を異にしない (Ashton 1947: 126)。(3-21) では、主語の *visima-ni* 「井戸の中」が、18 クラスの主語接頭辞と一致しており、井戸の中に水がないということが表されている。

(3-21) *visima-ni ha-m-na maji nga chembe*²¹
 wells-LOC NEG-CL18.SM-POSS water even grain
 「井戸の中には、水が一滴もない」

15 クラスと 16 クラスの場所名詞が表す場所については、それぞれ、不定の場所、定の場所とされることもあるが (Ashton 1947: 126)、本論文で、この二つの名詞クラスの違いを説明するために、話し手と聞き手の場所の共有の有無を仮定する理由として、複合によって形成されている指示詞の使い分けが挙げられる。(3-22)(3-23) は、それぞれ、1 クラスと 9 クラスの指示詞近称 *yuno, ino* と、15 クラス、16 クラスの指示詞近称 *kuno, βano* が複合して形成された指示詞を用いた例である (3.4 節参照)。

(3-22) では、A が *bi-hidaya* 「ヒダヤおばさん (C)」を探しているが、A が B と C の近くにいる場合、B は 16 クラスの指示詞近称に由来する形態素を含む指示詞 *yuno+βa* を使用して、C の場所を示す。一方、B と C は近いところにいるものの、A が B と C から離れたところにいる場合、B は 15 クラスの指示詞近称に由来する形態素を含む指示詞 *yuno+ku* を用いて、C がいる場所を示す。

(3-22) A: *bi-hidaya ka-wa*
 Mrs.-PN 3SG.SM-COP.PFV
 「ヒダヤおばさん (C) いる？」

B: *yuno+βa*
 DEM.PROX.CL1+DEM.PROX.CL16
 「ここのこの人」(A, B, C が近くにいる場合)

B': *yuno+ku*
 DEM.PROX.CL1+DEM.PROX.CL15
 「こっちのこの人」(A が B, C から離れたところにいる場合)

また、(3-23) は A と B が対面しているという設定だが、ペンが A と B の間にあり、双方から見える場合は、16 クラスの指示詞近称に由来する形態素を含む指示詞 *ino+βa* が用いられる。一方、ペンが B の背後にあって、A から見えない場合は、15 クラスの指示詞近称に由来する形態素を含む指示詞 *ino+ku* が用いられる。

²¹ 所有を表す動詞-*na* が、15, 16, 18 クラスの主語接頭辞でマークされる場合、-*na* に後続する名詞が表すものが存在することを意味する (4.2.2 節、9.2.3 節参照)。

(3-23) A: *peni yangu i-wa wapi*
pen my.CL9 CL9.SM-COP.PFV where
「わたしのペンはどこ？」

B: *ino+βa*

DEM.PROX.CL9+DEM.PROX.CL16

「ここのこれ」(ペンが A から見えるところにある場合)

B': *ino+ku*

DEM.PROX.CL9+DEM.PROX.CL15

「こっちのこれ」(ペンが A から見えないところにある場合)

上記二つの例から、聞き手の近くにあったり、聞き手から見えていて、聞き手も既に認識しているようなものを指示する際は、16 クラスの指示詞が用いられる一方、聞き手から遠くにあったり、聞き手に見えないところにあって、聞き手が存在を認識していないようなものを指示する際は、15 クラスの指示詞が使われていることが分かる。本論文では、こうした指示詞の使い分けにもとづいて、話し手と聞き手の場所の共有の有無を 15 クラスと 16 クラスの違いとして暫定的に仮定する。

3.2 形容詞

3.2.1 典型的な形容詞

マクンドゥチ方言で形容詞に分類される語はそれほど多くない。以下に、典型的な形容詞を提示する²²。

(3-24) 典型的な形容詞

-*baya*「悪い」、-*bichi*「未熟な、新鮮な、湿った」、-*bivu*「熟した」、-*bovu*「腐った」、
-*butu*「なまぐらの」、-*chafu*「汚れた」、-*changa*「幼い、未熟な」、
-*dogo~digi*「小さい」、-*ekundu*「赤い」、-*ema*「よい」、-*eupe*「白い」、
-*eusi*「黒い」、-*embamba*「細い、狭い」、-*epesi*「軽い、急いでいる、賢い」、
-*ingine*「別の」、-*fupi*「短い」、-*geni*「見知らぬ」、-*gumu*「硬い、難しい」、
-*kali*「鋭い、刺激的な」、-*kavu*「乾いた」、-*kongwe*「老いた」、-*kubwa*「大きな」、
-*kukuu*「古い」、-*laini*「柔らかい」、-*nene*「太った」、-*pana*「広い」、
-*pevu*「熟した」、-*pya*「新しい」、-*refu*「長い」、-*tamu*「甘い」、-*tupu*「空の、だけ」、
-*zima*「完全な、全体の」、-*zito*「重い、頭の悪い」、-*zuri*「よい」

(3-24) の形容詞は、以下の三つの特徴をもつ。

- ①屈折パラダイムがあり、それぞれの名詞クラスに応じた語形を有する。
- ②名詞を直接修飾できる。
- ③コピュラ動詞なしで叙述する用法をもつ。

①の名詞クラスに応じた形の違いは、接頭辞に現れる。形容詞をマークする接頭辞は、前節で述べた通り、多くの場合、一致する名詞の接頭辞と同形である。ただし、形容詞をマークする接頭辞が、一致する名詞の接頭辞と異なる場合も少数ながらあることに留意されたい。例えば、*n-dege*「鳥」は、9/10クラスの名詞接頭辞でマークされているが、この名詞と一致する形容詞は1/2クラスの *m-/wa-*という接頭辞でマークされる。また、3クラスの名詞と一致する形容詞は、名詞が *u-*という接頭辞でマークされる場合でも、*m-*という接頭辞でマークされる。

語幹の形は、基本的に、名詞クラスによって変わることはないが、例外もある。例えば、-*ema*「よい」が9/10クラスの名詞と一致するとき、語幹は-*jema*となり、形容詞の

²² 本論文では、特に必要がない限り、(3-24) に挙げた形式を、形容詞の見出し形式として提示する。

語形は *n-jema* となる。また、*-refu* 「長い」が、指大化を表す 5 クラス名詞と一致する際は、接頭辞として分析可能な部分はなく、語形が *defu* となる。

②③の特徴は、(3-25) に示す通りである。(3-25a) では、*mdogo* 「小さい (1 クラス)」が *ng'ombe* 「牛」を修飾している。(3-25b) では、*mdogo* が叙述に用いられている。

(3-25) a. *nyi-m-kut^hu* *ng'ombe* *mdogo*
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV cow (CL1) small.CL1
 「私は小さい牛をみた」

b. *yuno* *si=mdogo*
 DEM.PROX.CL1 NEG=small.CL1
 「この人は小さくない」

(3-24) に挙げた典型的な形容詞は、名詞と同じ接頭辞を伴うため、形態的特徴から、形容詞と名詞を区別することは難しい。また、名詞もほかの名詞を修飾することがあり、名詞を修飾できるかどうかで、形容詞と名詞を区別することもできない。例えば、(3-26) では、*wana* 「子供」のあとに、数詞 *wawili* 「二人」が現れ、そのあとに、*wana* を修飾する名詞 *walimu* 「教師」が現れている。なお、(3-26) の *walimu* 「教師」は *wana* 「子供」と同格的な意味関係にあることも考えられるが、「教師である子供が二人いる」という節の後に、「別の子供がいる」という意味の節が後続していることをみると、少なくとも (3-26) で *walimu* 「教師」は *wana* 「子供」を限定的に修飾していると考えられる。

(3-26) *ka-na* *wana* *wawili* *walimu* *na=wengine* *ka-na-o*
 3SG.SM-POSS children (CL2) two.CL2 teacher (CL2) COM=other.CL2 3SG.SM-POSS-CL2.PRO
 「彼は教師である二人のこどもがいて、彼には別の子供もいる」

(3-24) に挙げた形容詞は、第一に、名詞クラスに応じた語形を有するという点で、名詞と異なる。名詞は、原則として単数形と複数形という二つの形しかもたないが、形容詞は、1 から 18 までの各クラスの形式をもつ。

また、文脈から何を指すかが明らかでない限り単独で項の位置に現れることはないという点でも、形容詞は名詞と異なる。例えば、(3-27) の *k'avu* 「乾いた」、*mbichi* 「湿った」は、語頭に有気音や前鼻音化音が現れるという形態的特徴から、10 クラスの *t'ongo* 「目ヤニ」と一致していることが分かる。この例のように、文脈から修飾する名詞が明

らかな場合、形容詞は、節中の名詞句が占める位置に単独で現れることもある²³。

- (3-27) *ramba=ni* *izo* *tʰongo*
lick.IMP=AL.PL DEM.MED.CL10 eye_mucus (CL10)
kʰavu *ᵐ-teme* *mbichi* *ᵐ-meze*
dry.CL10 2PL.SM-spit.SUBJ wet.CL10 2PL.SM-swallow.SUBJ
「あなたたち、その目ヤニをなめなさい。乾いたのは吐き出し、湿っているのは、飲み込みなさい。」

しかし、適切な文脈が与えられない場合、形容詞を単独で用いることはできない。(3-28b) では、形容詞 *ᵐbaya* 「悪い (1 クラス)」が修飾する名詞なしで、項の位置に現れているが、この例は容認されない。この例が容認されなかったのは、形容詞によって指示される対象が判然としないためであると考えられる。

- (3-28) a. *N-m-ono* *ᵐtʰu* *ᵐbaya*
1SG.SM-3SG.OM-see.PFV person bad.CL1
b. **N-m-ono* *ᵐbaya*
1SG.SM-3SG.OM-see.PFV bad.CL1
「私は悪い人であった。」

更に、名詞と形容詞は、他の修飾語で修飾できるかどうかも異なる。(3-29a) の通り、名詞であれば、所有詞で修飾できるが、(3-29b) の通り、形容詞は所有詞で修飾することができない。

- (3-29) a. *ᵐtʰu* *yako* *ka-na-kw-ita*
person (CL1) your.CL1 3SG.SM-IPFV-2SG.OM-call
「あなたの方があなたを呼んでいる」
b. **N-m-ono* *ᵐnene* *yako*
1SG.SM-3SG.OM-see.PFV fat.CL1 your. CL1
「私はあなたの太った人に会った」(意図した解釈)

²³ (3-27) の *tʰongo* 「目ヤニ」の後には、ポーズが現れている。一般に形容詞が名詞を修飾する場合は、名詞と形容詞の間にポーズは置かれない。このことから、(3-27) に関しては、*mbichi* 「湿った (10 クラス)」だけでなく、*kʰavu* 「乾いた (10 クラス)」も、名詞から独立して用いられている可能性がある。

3.2.2 非典型的な形容詞

(3-24) に挙げた形容詞は、それぞれのクラスに応じた語形をもつが、限られたクラスの語形しかもたない形容詞もある。(3-30) に、そうした形容詞の1クラスの語形を提示する。

(3-30) 人の性質を表す形容詞

mchoyo 「ケチな」、*mgovi* 「乱暴な」、*mheke* 「のぞき見をする、秘密をもらす」、*mhuni* 「不良の」、*mkaidi* 「頑固な」、*muongo* 「嘘つきの」、*muovu* 「醜い」、*mpope* 「馬鹿な」、*msavu* 「服をだらしなく着た」、*mtoro* 「さぼりがちな」、*mvivu* 「怠け者の」、*mzembe* 「たるんだ」

こうした形容詞は、人のよくない性質を表すもので、1/2クラスの名詞接頭辞 *m-/wa-* でマークされた形で現れることが多く、他のほとんどの名詞クラスの語形を欠いている。そのため、形態的特徴から、これらが名詞であるか形容詞であるかは、判断しにくい²⁴。ただし、以下の統語的特徴から、これらは、形容詞に分類できると考えられる。

まず、これらの語は、(3-31) に示す通り、単独で項の位置に現れることができない。(3-31) は、*mchoyo* 「ケチな」が単独で目的語とならないことを示している。

- (3-31) a. *N-m-ono* *mt^hu* *mchoyo*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV person (CL1) miserly.CL1
 b. **N-m-ono* *mchoyo*²⁵
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV miserly.CL1
 「私はケチな人にあつた」

また、(3-32) に示す通り、これらの形容詞は、他の修飾語で修飾することもできない。(3-32) は、*mchoyo* 「ケチな」という形容詞が *mdogo* 「小さい」という別の形容詞で修飾できないことを示している。

²⁴ Racine-Issa (2002: 52) は、これらが形容詞でなく、名詞に分類される可能性に言及している

²⁵ 目的語接頭辞と一致する項が別にある場合、(3-31b) のような構成素の連続はあり得る。次の例では、目的語接頭辞は、動詞の前の人名を表す名詞と一致しており、*mchoyo* 「ケチな」は、その名詞の指示対象の性質を表している。

例: *pandu N-m-ono* *mchoyo*
 PN 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV miserly
 「パンドゥはケチだと思った」

(3-32) **N-m-ono* *mchoyo* *mdogo*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV miserly.CL1 small.CL1
 「私は小さなケチな人であった」(意図した解釈)

本論文では、上記二つの統語的な特徴を踏まえて、(3-30) に挙げる語を形容詞に分類する。なお、(3-30) に挙げた形容詞は、人をののしる際、1/2 クラスの名詞接頭辞を伴った語形だけでなく、5 クラスの *ji-* という伴った指大化を表す形式も用いられる。この *ji-* という接頭辞を伴った語形は、コピュラ動詞完結形とともに現れることが多い。(3-33) はそのことを示す例である。

(3-33) *ku-wa* *ji-choyo*
 2SG.SM-COP.PFV AUG-miserly
 「お前はケチだ」

形容詞の中には、接頭辞を伴わず、名詞クラスが変わっても形を変えないものもある。(3-34) にそうした形容詞を挙げる。

(3-34) 形を変えない形容詞
baridi 「冷たい」、*moto* 「熱い」、*hodari* 「有能な」、*maarufu* 「有名な」、
*safi*²⁶ 「きれいな」

(3-35a) は *hodari* 「有能な」が名詞を修飾する例、(3-35b) は *hodari* が叙述に用いられている例である。

(3-35) a. *nyi-m-ono* *mt^hu* *hodari*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV person (CL1) energetic
 「私は有能な人を見た」

b. *muembe* *uno* *hodari*
 mango_tree (CL3) DEM.PROX.CL3 energetic
 「このマンゴーの木は有能だ (実をよくつける)」

²⁶ *safi* は、*upepo m-safi* (wind (CL3) CL3-clean) 「心地よい風」というように、接頭辞を付加して用いる話者もいる。

こうした形容詞は、アラビア語からの借用語とみられるが、借用語でも *-laini* 「やわらかい」のように、接頭辞を伴う語形をもつものもある。

3.2.3 数量詞

数量詞は、*sita* 「6」、*saba* 「7」、*tisa/kenda* 「9」とそれ以降の数詞を除いて、他の形容詞と同じように名詞接頭辞を伴った語形をもち、その接頭辞は一致する名詞の名詞クラスに応じて変わる。(3-36) に、形容詞と同じ形態的特徴をもつ数量詞を挙げる²⁷。

(3-36) 数量詞の例

-moja 「1」、*-wili* 「2」、*-tatu* 「3」、*-ne* 「4」、*-tano* 「5」、*-nane* 「8」、
-ingi 「多い」²⁸、*-haba/-hibi* 「少ない」

次の二つの例に示す通り、数量詞は直接名詞を修飾することも、コピュラ動詞なしで叙述することもできる。(3-37) では、*embe* 「マンゴー」が 10 クラスの形に曲用した「2」*-wili* で修飾されている²⁹。

(3-37) *N-nunuu* *embe* *mbili*
1SG.SM-buy.PFV mangoes (CL10) two (CL10)
「私は、マンゴーを二つ買った」

(3-38) では、*wengi* 「多い (2 クラス)」が叙述のために用いられている。ちなみに、この文で数量詞が叙述のために用いられていることは、2 クラスの指示詞近称の縮約形 *=wa* の使用から分かる (8.3 節参照)。

²⁷ 本論文では詳しく扱わないが、数量を表すものとして、数量詞以外に、全称数量詞がある。全称数量詞としては、まず、「すべての」を意味する *-othi/-opya* が挙げられる。*-othi/-opya* は、形容詞や数量詞と異なり、名詞接頭辞ではなく、動詞をマークする主語接頭辞や、1, 2 人称複数の代名詞に由来するとみられる接頭辞によってマークされる (例: *z-othi* 「すべての (10 クラス)」 < *zi-othi*) (他の語形については Racine-Issa 2002: 57 を参照)。また、他に「あらゆる」を意味する全称数量詞も存在する。これは、主語接頭辞でマークされた *-othi* の初頭音節を重複させた形式をとる (例: *chochothi* 「あらゆる (7 クラス)」 < *cho-chothi* < *ki-othi*)。

²⁸ *-ingi* 「多い」は、数えられるものの量を表す場合、それが二つ以上であれば使うことができる。

²⁹ *m-bili* 「2 (9/10 クラス)」でも語幹の形が *-wili* から変わっている。

(3-38) *wanafuzi wengi=wa*

students many.CL2=DEM.PROX.CL2

「この学生たちが多い (学生がたくさんいる)」

数量詞は、形態的特徴や上記の統語的特徴は他の形容詞と変わらない。しかし、数量詞は、遊離できるという点で、他の形容詞と異なる。(3-39) に示す通り、*wengi*「多い (2クラス)」は、名詞の直後だけでなく、名詞から遊離した動詞の後に現れることもできる。一方、*wakubwa*「大きい (2クラス)」は、(3-40) に示す通り、名詞の直後にしか現れることができない。

(3-39) a. *wanafuzi wengi wa-ja*

students (CL2) many.CL2 3PL.SM-come.PFV 非遊離

b. *wanafuzi wa-ja wengi*

students (CL2) 3PL.SM-come.PFV many.CL2 遊離

「たくさんの学生が来た」

(3-40) a. *wanafuzi wakubwa wa-ja*

students (CL2) big.CL2 3PL.SM-come.PFV 非遊離

b. **wanafuzi wa-ja wakubwa*

students (CL2) 3PL.SM-come.PFV big.CL2 遊離

「大きな学生が来た」

3.2.4 形容詞から派生した名詞について

一部の形容詞の中には、名詞にゼロ派生しているとみられるものもある。(3-41) にそうした名詞を挙げる。

(3-41) 形容詞からゼロ派生している名詞

m-kubwa「兄姉」 (<-*kubwa*「大きい」1クラス)

m-dogo「弟妹」 (<-*dogo*「小さい」1クラス)

m-gezi「客」 (<-*gezi*「見知らぬ」1クラス)

m-kongwe「老人」 (<-*kongwe*「老いた」1クラス)

(3-42) に示す通り、「大きい」を意味する形容詞から派生した *m-kubwa*「兄姉」は、他の

名詞と同じ様に所有詞で修飾することができる。それに対して、形容詞の *mnene* 「太った」は所有詞で修飾することができない。

(3-42) a. *N-m-ono* *mkubwa* *yako*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV elder_brother (CL1) your.CL1
 「私はあなたの兄を見た」

b. **N-m-ono* *mnene* *yako*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV fat.CL1 your.CL1

3.2.5 状態副詞

マクンドウチ方言には、意味だけみれば形容詞に分類できそうだが、他の形容詞とは形態的にも統語的にも異なる特徴をもつ「状態副詞」も存在する。(3-43) は状態副詞のリストである³⁰。

(3-43) 状態副詞の例

barabara 「ちゃんとした、しっかりした」、*fiti* 「健康な」、*hai* 「生きている」、
tayari 「準備のできた」、*wazi* 「開いている」、*kimya* 「静かに」、
macho 「目を覚まして」、*uchi* 「裸で」、*weka* 「一人で」、*wima* 「立って」、
ch^hune 「上裸で」、*k^hundu* 「汚く」

状態副詞は、名詞クラスに応じた形式の変化をしない。また、名詞を直接修飾することもできない。(3-44) は、*hai* 「生きている」という状態副詞が名詞 *nyoka* 「へび」を直接修飾できないことを示している。この例に示す通り、状態副詞は名詞を修飾する際は、必ず関係節化されたコピュラ動詞を要する。

(3-44) a. **ke-me-guiya* *nyoka* *hai*
 3SG.SM-PRF-catch snake alive
 b. *ke-me-guiya* *nyoka* *a-ø-ye-wa* *hai*
 3SG.SM-PRF-catch snake 3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP alive
 「彼は生きたへびを捕まえた」

³⁰ 状態副詞のなかには、スワヒリ語研究で、形容詞に分類されることがあるものも含まれる (cf. Johnson 1939)。

(3-45) に示す通り、状態副詞は、コピュラ動詞なしで叙述することもできない。この点も、他の形容詞とは異なる (8.4.5 節参照)。

- (3-45) a. *ng'ombe ka-wa hai*
cow 3SG.SM-COP.PFV alive
b. **ng'ombe hai*
cow alive
「牛は生きている」

この状態副詞は、二次述語として用いることもできる (cf. Scheultze-Berndt & Himmelmann 2004, 岸本 & 菊池 2008)。二次述語として用いられる際は、(3-46) に示す通り、行為の起こった時点の主語の指示対象の状態を表す。

- (3-46) *nyoka ka-zikwa hai*
snake 3SG.SM-bury.PASS.PFV alive
「蛇は生きたまま埋められた」

3.2.6 形容詞による名詞の修飾について

形容詞は、名詞を修飾する際、名詞の性質を表すだけでなく、指示対象に複数の選択肢をもつ名詞の指示対象を特定するという機能も担う。この特徴は、指示対象が特定されているものを形容詞で直接修飾できないことからうかがえる。(3-47a) は、日本語の訳をみれば容認されそうだが、実際には容認されない。この例が容認されないのは、指示対象を限定する形容詞があるため、その形容詞によって修飾される名詞句の指示対象には、複数の選択肢があるように解釈されるにもかかわらず、現実には、所有詞を含む名詞句の指示対象が既に特定されていることに起因していると考えられる。形容詞があることにより生まれる名詞句 *kisu chako* 「あなたのナイフ」に対する解釈と、実際のこの名詞句の解釈との間に齟齬が生じているのである。指示対象が特定された名詞の性質を、形容詞を用いて表す際は、(3-47b) に示す通り、関係節接頭辞でマークされるコピュラ動詞を介入させる必要がある。このコピュラ動詞については、10.1.3.1 節で説明す

る³¹。

- (3-47) a. **na-chaka kisu chako kidogo*
 IPFV:1SG.SM-want knife your.CL7 small.CL7
- b. *na-chaka kisu chako ki-ø-cho kidogo*³²
 IPFV:1SG.SM-want knife your.CL7 CL7.SM-PFV-CL7.REL:COP small.CL7
 「私はあなたの小さいナイフが欲しい」

3.3 代名詞

代名詞には、自立的なもの、拘束的なものが存在する。自立的なものは、指示対象の人称によって異なる形式をとる。本論文ではこうした代名詞を人称代名詞と呼ぶ。人称代名詞は、2人称単数と3人称単数に限り、短縮形がある。なお、3人称複数の形式は、2クラスの中称の指示詞と同形である。これらは同一の語と認められるかもしれない。まず、表3-2に人称代名詞を提示する。

表3-2：人称代名詞

	単数	複数
1人称	<i>mie</i>	<i>suwe</i>
2人称	<i>we~weye</i>	<i>nyuwe</i>
3人称	<i>ye~yeye</i> ³³	<i>wao</i>

³¹ 次の例に示す通り、形容詞が名詞を直接修飾した場合、形容詞は特異な意味を表すこともあるが、動詞語幹の脱落したコピュラ動詞を介した場合、そのような特異な意味をもつことはない。

- 例：a. *na-lya vyakulya baridi*
 IPFV:1SG.SM-eat food cold
 「私は冷たい／塩気のない食べ物を食べている」
- b. *na-lya vyakulya vi-ø-vyo baridi*
 IPFV:1SG.SM-eat food CL8.SM-PFV-CL8.REL:COP cold
 「私は冷たい食べ物を食べている」

³² 次の例に示す通り、(3-47)のような例では、形容詞の前に、関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞の代わりに、指示詞中称が現れることもある。この位置に指示詞中称が現れる正確な理由は分からないが、現段階では、指示詞の前に節境界があり、指示詞と後続する形容詞は単独で節を成していると考えている。

- 例：*na-chaka kisu chako icho kidogo*
 IPFV:1SG.SM-want knife your.CL7 DEM.MED.CL7 small.CL7

³³ Racine-Issa (2002: 63) は、3人称単数の人称代名詞として *yeyeye* という形式も提示しているが、この形式は筆者のインフォーマントには容認されなかった。

拘束的な代名詞を、本論文では、拘束代名詞と呼ぶ。拘束代名詞は、指示対象の人称、または名詞クラスに応じて異なる形式となる。表 3-3 に拘束代名詞を示す。なお、拘束代名詞は、1, 2 人称複数の形式を欠いている。

表 3-3 : 拘束代名詞

1SG	2SG	3SG/CL1	3PL/CL2	CL3	CL4	CL5	CL6	CL7	CL8	CL9	CL10	CL15	CL16	CL18
-mi	-we	-e~ye	-o~wo	-o	-yo	-hyo	-yo	-cho	-vyo	-yo	-zo	-ko	-βo	-mo

(3-48) には、拘束代名詞の現れる位置を示す。なお、拘束代名詞が生起しうる位置のうち、所有を表す動詞-*na* の直後、コピュラ動詞の直後、共格標識の *na=* の直後、否定標識 *si=* の直後というのは、名詞も現れうるが、主語接頭辞の直後と提題標識の直後に名詞が現れることはない。また、1, 2 人称単数の-*mi*, -*we* が現れるのは共格標識の *na=* の直後のみである。

(3-48) 拘束代名詞の現れる位置

所有を表す動詞-*na* の直後 (1~10 クラスの拘束代名詞に限る)

コピュラ動詞の直後 (15, 16, 18 クラスの拘束代名詞に限る)

主語接頭辞の直後 (不在を表す場合、15, 16, 18 クラスの拘束代名詞に限る)

共格標識の *na=* の直後

否定標識 *si=* の直後

提題標識の *ndi=* の直後

以下に、拘束代名詞が現れる具体例を挙げる。まず、(3-49) は所有を表す動詞-*na* と共起する例である。(3-49) に現れる 7 クラスの拘束代名詞-*cho* の指示対象は *kisu* 「ナイフ」である。

(3-49) 所有を表す動詞-*na* の直後の例

N-na-cho *kisu*

1SG.SM-POSS-CL7.PRO knife (CL7)

「私はナイフをもっている」

(3-50) はコピュラ動詞と共起する例、(3-51) は主語接頭辞の直後に現れる例である。拘束代名詞がコピュラ動詞と共起する場合は、主語の指示対象が、15, 16, 18 クラスの拘束代名詞の指す位置に存在することを表す。それに対して、(3-51) のように、15, 16,

18クラスの拘束代名詞が、否定接頭辞、主語接頭辞とともに現れる場合は、主語の指示対象が、拘束代名詞の指す位置にないことを表す。なお、以下の二つの例で、主語接頭辞は *vyakulya* 「食べ物 (8クラス)」に呼応している。

(3-50) コピュラ動詞の直後の例

vi-wa-ko

CL8.SM-COP.PFV-CL15.PRO

「(食べ物は) そこにある」

(3-51) 主語接頭辞の直後の例

ha-vi-ko

NEG-CL8.SM-COP.PFV-CL15.PRO

「(食べ物は) そこにない」

(3-52) は共格標識 *na=*と共起する例である。なお、共格標識 *na=*は、(3-52) において、「も」と訳することができる付加を表している³⁴。

(3-52) 共格標識の *na=*の直後の例

baba m̄t̄hu na=e a-ka-lia

father person COM=CL1.PRO 3SG.SM-CONS-cry

「お父さんも、泣きました」

(3-53) は否定標識 *si=*と共起する例、(3-54) は提題標識 *ndi=*と共起する例である。

(3-53) 否定標識 *si=*の直後の例

ta si=vyo makame wa=makame³⁵ ka-vyaa wana saba

no NEG=CL8.PRO PN of.CL2=PN 3SG.SM-bear.PFV children seven

「違う、そうではない、マカメの子マカメは、7人の子供をもうけた」

³⁴ 共格標識 *na=*は、付加以外に「ともに」と訳することができる随伴を表すこともある。また、二つの名詞句や節の並置のためにも用いられる

³⁵ (3-53) の属辞でマークされる名詞句によって修飾される名詞は人名であるため、属辞はこの名詞と一致して1クラスの形式で現れることが予想されるが、この例では2クラスの属辞 *wa=*が用いられている。この属辞の交替が起きているはっきりとした理由は不明だが、一つの可能性として、ウングジャ方言からの影響が考えられる。ウングジャ方言において、1クラスの属辞は2クラスと同じ *wa=*という形式をとる。

称や中称のような特異な形式の重複形は存在しないが、完全重複のような形式で用いられることがある。縮約形は、近称が基本形の第1音節、中称が基本形の第2音節に対応した形式をもつ。なお、近称と遠称の指示詞基本形は、初頭音節が、1クラスを除いて主語接頭辞と同形となる(4.1.4節参照)。

また、指示詞には、複合的な形式をもつものも存在する。そのことを示すために、(3-55)に、(3-22)を再掲する。この例では、1クラス近称の指示詞と、15,16クラス近称を複合させた指示詞が用いられている。

(3-55) A: *bi-hidaya ka-wa*

Mrs.-PN 3SG.SM-COP.PFV

「ヒダヤおばさん (C) いる？」

B: *yuno+βa*

DEM.PROX.CL1+DEM.PROX.CL16

「ここのこの人」(A, B, Cが近くにいる場合)

B': *yuno+ku*

DEM.PROX.CL1+DEM.PROX.CL15

「こっこのこの人」(AがB, Cから離れたところにいる場合)

この例で用いた *yuno+βa*, *yuno+ku* のように、1~10クラスまでの有生物やモノを指す指示詞近称と、場所を表す15,16クラスの近称に由来する *+ku+βa* を複合して用いられることもある。複合的な形式をもつ指示詞としては、これ以外に、1~10クラスまでの指示詞中称と、15,16クラスの中称に由来する *+ko+βo* を組み合わせたものも挙げられる(例: *uyo+ko* 「あそこのその人」 *uyo+βo* 「そこのその人」)。指示詞は、後述する通り、文脈指示のために用いられることもあるが、こうした複合的な形式をもつ指示詞は、もっぱら現場指示のために用いられる。

3.4.2 指示詞の統語的特徴

基本形と重複形は、名詞を修飾することも、単独で項の位置に現れることもできる。(3-56)は1クラス近称の基本形 *yuno* が単独で目的語となることを、(3-57)は1クラス近称の重複形 *yuyuyu* が単独で主語となることを示している。

(3-56) *tw-evu tu-mu-okoto yuno*
 1SG.PL-COP.PST 1PL.SM-3SG.OM-pick_up.PFV DEM.PROX.CL9
 「私たちがこの人を拾った」

(3-57) *ka-ja yuyuyu*
 3SG.SM-come.PFV DEM.PROX.CL1
 「この人が来た」

次の二つは、指示詞が名詞を修飾することを示す例である。(3-58) では、5 クラスの中称基本形 *ilyo* が名詞 *dumu* 「容器」を修飾している。また、(3-59) では、5 クラスの中称重複形が *lilyolyo* が名詞 *duka* 「店」を修飾している。

(3-58) *dumu ilyo li-jaa maji*
 container (CL5) DEM.MED.CL5 CL5.SM-fill.PFV water (CL6)
 「その容器は水で満ちている」

(3-59) *duka lilyolyo njo=li-na-lyo-kuza simu*
 shop (CL5) DEM.MED.CL5 BGR=CL5-IPFV-CL5.REL-sell phone (CL9)
 「携帯電話を売っているのは、この店だ」

縮約形は、述語の後に現れて、述語の前に現れる構成素と一致する。現れる位置は、述語の後であれば、述語の直後である必要はなく、述語に後続する項や副詞要素の直後に現れることもある。(3-60) に挙げる二つの例では、*kaja* 「彼は来た」の後に、指示詞縮約形が現れているが、指示詞縮約形のホストとなっている語が、二つの例で異なる。(3-60a) では動詞がホストとなっている一方、(3-60b) では *jana* 「昨日」がホストとなっている。なお、指示詞縮約形は、主題標示の機能を担っていると考えられる。この点については、11 章で詳しく説明する。

(3-60) a. *mwalimu yuno ka-ja=yu*
 teacher(CL1) DEM.PROX.CL1 3SG.SM-come.PFV=DEM.PROX.CL1
 「この先生は、来た」

b. *mwalimu yuno ka-ja jana=yu*
 teacher(CL1) DEM.PROX.CL1 3SG.SM-come.PFV yesterday=DEM.PROX.CL1
 「この先生は、昨日来た」

指示詞基本形は、名詞の後ろだけでなく、名詞の前に現れることもあるが、現れる位置によって、名詞との意味的な関係が異なる。名詞の後ろ側に現れる指示詞は、名詞の指示対象に複数の可能性がある場合に、その名詞の指示対象を限定する役割を担うのに対して、名詞の前に現れる指示詞は、名詞と同格的な意味関係にある³⁶。(3-61) は、そのことを示す一つ目の例である。

- (3-61) a. *jana nyi-m-kut^{hu} yulya ba-sigombe*
 yesterday 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV DEM.DIST.CL1 Mr.-PN
 b. **jana nyi-m-kut^{hu} ba-sigombe yulya*
 yesterday 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV Mr.-PN DEM.DIST.CL1
 「昨日、私はあのシゴンベ（人名）おじさんに会った」

この (3-61) は、指示詞基本形が、固有名詞と共起する場合、名詞の前にしか現れることができないことを示している。この例から、指示対象が既に特定されており、指示対象に複数の可能性がないような名詞の後ろには、指示詞が現れないことが分かる。(3-61b) は、指示詞の役割から、名詞の指示対象に複数の選択肢が生じると解釈されるにもかかわらず、*ba-sigombe* 「シゴンベおじさん」という固有名詞の指示対象に複数の選択肢がないために容認されなかったと考えられる。

指示詞が、名詞の後ろに現れた場合にのみ、名詞の指示対象を限定する働きをもつことは、疑問詞-*βi* 「どれ」を用いたテストでも確かめられる。(3-62) に示す通り、-*βi* 「どれ」を用いた疑問文の答えとなる文で、この疑問詞に対応する名詞が指示詞が共起する場合、指示詞は名詞の後ろにしか現れることができない。

- (3-62) A: *ku-na-chaka uβi*
 2SG.SM-IPFV-want which.CL3
 「どれ（どのかばん）が欲しいの？」
 B: *na-chaka mkoba uno*
 IPFV:1SG.SM-want bag (CL3) DEM.PROX.CL3
 「私はこのかばんが欲しい」

³⁶ スワヒリ語の指示詞も、名詞の後ろだけでなく、前に現れることがある。Givón (1976: 158) は、スワヒリ語の遠称は名詞に先行するか後続するかで文脈指示か現場指示が変わるとしているが、この説明は少なくともマクンドウチ方言の指示詞には当てはまらない。

B': #na-chaka uno nkoba
 IPFV:1SG.SM-want DEM.PROX.CL3 bag (CL3)

「私は、これ、かばんが欲しい」

この「どれ」を用いた疑問文が答えとして要求しているのは、ある集合に属するものの中から一つを限定することである。指示詞が名詞の前に現れた場合は、この疑問文の適切な答えとはならない。この例からも、名詞の前後、どちらに現れるかによって、指示詞は、名詞の指示対象を限定する役割を果たすかが異なることが分かる。なお、指示詞が名詞の前に現れる (3-62B') は、疑問詞 *nini* 「何」を用いた疑問文「何がほしいの」の答えにはなる。

3.4.3 指示詞の指示対象について

現場指示のために用いられる際の近称と中称の使い分けは、概ね話し手からの距離によって説明できる。例えば、近称は、話し手がもっているものを指し示す際に用いられ、中称は、聞き手など、話し手以外がもっているものを指し示す際に用いられる。一方、1~10 クラスの遠称は、近称や中称と異なり、視界にあるものを指示することができない。そのことは、(3-63a) に示す通り、*tazama* 「見る」という動詞の命令形と指示詞遠称が共起できないことからもうかがえる。

- (3-63) a. **tazama* *gari* *ilya*
 look.IMP car(CL9) DEM.DIST.CL9
 b. *tazama* *gari* *iyo+ko*
 look.IMP car(CL9) DEM.MED.CL9+DEM.MED.CL15
 「あの車をみる」³⁷

1~10 クラスの遠称は、例えば、直前まで視界にあったが、現在はどこかにいってしまい視界から消えたものを指すために用いられる。遠くに見えているものを指し示す際は、(3-63b) に示す通り、遠称ではなく、前述の中称の基本形と 15 クラスの中称に由来する *+ko* を複合させた形式を用いる。

中称と遠称の指示詞は、文脈指示のために頻繁に用いられる。一方、近称の指示詞が文脈指示のためにはあまり用いられない。ただし、(3-64) のような例で、近称の指示詞が文脈指示のために用いられることが確認されている。

³⁷ (3-63) の容認性判断は、マクンドゥチ郡南部出身の話者（男性、推定 40~50 代）による。

(3-64) A: *kamba na=ḡkasi vit^hu vino ku-vi-tuu wapi*
 rope COM=scissors things(CL8) DEM.PROX.CL8 2SG.SM-CL8.OM-put.PFV where
 「ロープとハサミ、これらのものをお前はどこに置いた？」

B: *ka-tazame chumba-ni*
 ITV-look.IMP room-LOC
 「部屋に探しにいけ」

この例では、指示詞に先だって現れている *kamba* 「ロープ」と *ḡkasi* 「ハサミ」を指すために 8 クラスの指示詞近称の基本形 *vino* が用いられているが、(3-64B) の応答から、(3-64A) で、用いられる 8 クラスの指示詞近称の指示対象は、現場にないことが分かる。指示詞重複形の詳細な用法や機能については、現段階ではまだわかっていない。

3.5 所有詞

所有詞は、修飾される名詞の所有者を表し、所有者の人称と所有物の名詞クラスに応じて異なる形式をとる。表 3-5 に所有詞を提示する。表 3-5 の横軸は所有者の人称を、縦軸は所有物の名詞クラスを表す。

表 3-5 : 所有詞

	1SG	2SG	3SG	1PL	2PL	3PL
CL1	<i>yangu</i>	<i>yako</i>	<i>yake</i>	<i>yetu</i>	<i>yenu</i>	<i>yao</i>
CL2	<i>wangu</i>	<i>wako</i>	<i>wake</i>	<i>wetu</i>	<i>wenu</i>	<i>wao</i>
CL3	<i>wangu</i>	<i>wako</i>	<i>wake</i>	<i>wetu</i>	<i>wenu</i>	<i>wao</i>
CL4	<i>yangu</i>	<i>yako</i>	<i>yake</i>	<i>yetu</i>	<i>yenu</i>	<i>yao</i>
CL5	<i>lyangu</i>	<i>lyako</i>	<i>lyake</i>	<i>lyetu</i>	<i>lyenu</i>	<i>lyao</i>
CL6	<i>yangu</i>	<i>yako</i>	<i>yake</i>	<i>yetu</i>	<i>yenu</i>	<i>yao</i>
CL7	<i>changu</i>	<i>chako</i>	<i>chake</i>	<i>chetu</i>	<i>chenu</i>	<i>chao</i>
CL8	<i>vyangu</i>	<i>vyako</i>	<i>vyake</i>	<i>vyetu</i>	<i>vyenu</i>	<i>vyao</i>
CL9	<i>yangu</i>	<i>yako</i>	<i>yake</i>	<i>yetu</i>	<i>yenu</i>	<i>yao</i>
CL10	<i>zangu</i>	<i>zako</i>	<i>zake</i>	<i>zetu</i>	<i>zenu</i>	<i>zao</i>
CL15	<i>kwangu</i>	<i>kwako</i>	<i>kwake</i>	<i>kwetu</i>	<i>kwenu</i>	<i>kwao</i>
CL16	<i>ḡangu</i>	<i>ḡako</i>	<i>ḡake</i>	<i>ḡetu</i>	<i>ḡenu</i>	<i>ḡao</i>
CL18	<i>mwangu</i>	<i>mwako</i>	<i>mwake</i>	<i>mwetu</i>	<i>mwenu</i>	<i>mwao</i>

所有詞は、名詞を修飾するだけでなく、単独で項の位置に現れることができる。(3-65)は、そのことを示す例である。(3-65)では、最初に所有詞 *yangu* 「私の」を含む名詞句 *simu yangu* 「私の携帯電話」が現れており、代名詞 *weye* 「あなた」からはじまる疑問文では、所有詞 *yako* 「あなたの」が単独で現れている。

(3-65) *simu yangu N-nunuu mji-ni weye yako ku-nunuu wapi*
 phone(CL9) my.CL9 1SG.SM-buy.PFV town-LOC 2SG.PRO your.CL9 2SG.SM-buy.PFV where
 「私の携帯電話は街で買った、あなたのはどこで買った？」

所有者が2人称単数、または3人称単数の場合、親族関係を表す名詞の多くは((3-5)参照)、(3-66)に示すような縮約した形式の所有詞で修飾されうる。

(3-66) 所有詞の縮約形

- a. =wo/=yo/=lyo (所有者：2人称単数、所有物：単数)
- b. =we/=ye/=lye (所有者：3人称単数、所有物：単数)
- c. =zo (所有者：2人称単数、所有物：複数)
- d. =ze (所有者：3人称単数、所有物：複数)

(3-66)に示した通り、所有物が単数の場合、縮約した所有詞にいくつかのバリエーションがある。この違いは、所有物を表す名詞の接頭辞の有無に対応している。*m-/wa-*という1/2クラスの名詞接頭辞をもつ名詞の単数形を修飾する場合、所有詞は、=wo/=weとなる(例：*m-ke=we* 「彼の妻(単数)」)。接頭辞を持たない名詞や、9/10クラスの名詞接頭辞をもつ名詞が単数を指示対象とする場合、所有詞は、=yo/=yeという形式で現れる(例：*ndugu=ye* 「彼の兄弟(単数)」)。ただし、接頭辞をもたない名詞 *dumbu* 「(男からみた)姉妹」は、=lyo, =lyeでマークされる。また、複数を指示対象とする名詞は、接頭辞の形や有無にかかわらず、=zo, =zeという形式の所有詞で修飾される(例：*wake=ze* 「彼の妻たち(複数)」、*ndugu=ze* 「彼の兄弟たち(複数)」)。

(3-67)に、この縮約した所有詞が修飾することのできる名詞を提示する。(3-67)は、単数形を修飾する所有詞の形式に応じて、名詞を三つに分類している。

(3-67) a. =wo/=weで修飾される名詞

mjukuu 「孫」、*mjomba* 「母方のおじ」、*mkwe* 「夫や妻の親」、*mume* 「夫」、*mke* 「妻」、*mwezi* 「友達」

b. =yo/=ye で修飾される名詞

babu 「祖父」、*bibi* 「祖母」、*ndugu* 「弟妹」、*shengazi* 「父方のおば」、
shemegi 「夫の兄弟姉妹」、*wifi* 「妻の兄弟姉妹」、*rafiki* 「友人」

c. =lyo/=lye で修飾される名詞

dumbu 「(男からみた) 姉妹」

kaka 「兄」、*dada* 「姉」、*baba* 「父」、*mama* 「母」の所有者はこの縮約形ではなく、通常の所有詞で表される。

また親族名詞の語末の母音が *a* となる場合、3 人称複数所有詞以外には、通常形式に加えて、初頭の子音 *y* が脱落した *-angu/-ako/-ake/-etu/-enu* という形式も観察される (例: *mjomba-angu* 「私のおじ」)³⁸。この *y* の脱落は、*kaka* 「兄」、*dada* 「姉」、*baba* 「父」、*mama* 「母」を修飾する所有詞でも観察される (例: *kaka-angu* 「私の兄」)。

mwana/wana 「子供」と *mwezi/wezi* 「友達」は、(3-68) に示す通り、所有詞とより融合した形式で現れる。

(3-68) a. *mwana* 「子供」

mwanangu 「私の子供」、*mwenetu* 「私たちの子供」、
mwenenu 「あなたたちの子供」

b. *mwezi* 「友達」

mwezangu 「私の友達」、*mwezako*(~*mweziwo*) 「あなたの友達」、
mwezake(~*mweziwe*) 「彼の友達」、*mwezetu* 「私たちの友達」、
mwezenu 「あなたたちの友達」、*mwezao* 「彼らの友達」

15, 16, 18 クラスの所有詞が単独で用いられた場合、「所有者が存在する場所」という意味が表される。(3-69) では 15 クラスの所有詞 *kwao* 「彼らの」によって場所が表されている。なお、15, 16, 18 クラスの属辞で名詞句がマークされる場合も、同様に「名詞句の指示対象が存在する場所」という意味になる。(3-70) では、15 クラスの属辞 *kwa*=によって、*babu mmoja* 「あるおじいさん」がマークされている。

³⁸ 自然発話では、親族名詞以外でも名詞の語末の母音が *a* であれば、所有詞の初頭の *y* の脱落が観察されるが、聞き出しで *y* の脱落が容認されるのは親族名詞に限られる。

(3-69) *a-k-enenda kwa*
3SG.SM-CONS-go their.CL15
「彼は彼らのところに行った」

(3-70) *a-k-enda kwa=babu mmoja*
3SG.SM-CONS-go of.CL15=grandfather (CL1) one.CL1
「彼女はあるおじいさんのところに行った」

3.6 属辞でマークされる名詞句

属辞でマークされる名詞句は、基本的に先行する名詞を修飾する。属辞の形式は修飾する名詞の名詞クラスによって異なる（表 3-1 参照）。

属辞でマークされる名詞句を A、属辞マークされる名詞句によって修飾される名詞句を B とすると、A と B はスワヒリ語と同様に「A の B」と訳すことができるような意味関係になることが多い (cf. 中島 2000: 110)。最も分かりやすい例は、(3-71) のように A が B の所有者となるものだが、A に入る名詞句は、所有者を表すものに限らない。以下に、属辞を用いた例をいくつか提示する。なお、本論文では、属辞に *of* というグロスを付している。

(3-71) *nguo za=mke-we*
wife (CL10) of.CL10=wife-his
「彼の妻の服」

(3-72) *jiziwa lya=pilipili*
milk:AUG (CL5) of.CL5=cayenne
「唐辛子の汁」

(3-73) *shuguli za=nyumba-ni*
duty (CL10) of.cl10=house-LOC
「家の雑事」

(3-74) *wakati wa=harusi*
time (CL3) of.CL3=wedding
「結婚式の時」

- (3-75) *juu ya=ujiti*
 above (CL9) of.CL9=tree
 「木の上」
- (3-76) *ṁt^hu ya=kae*
 person (CL1) of.CL1=PN
 「カエ (地名) の人」
- (3-77) *jumba lya=rushani*
 house:AUG (CL5) of.CL5=Russia
 「ロシア風の御殿」
- (3-78) *ṁkono wa=soto*
 hand (CL3) of.CL3=left
 「左手」
- (3-79) *mwanak^hele ya=pili*
 child (CL1) of.CL1=second
 「二番目の子供 (第二子)」
- (3-80) *kidonge cha=chuvi*
 mass:DIM (CL7) of.CL7=salt
 「一つかみの塩」
- (3-81) *ṁsukaji wa=makuti³⁹*
 plaiter (CL1) of.CL2=cocount_leaf
 「ココナツの葉を編む人」

³⁹ (3-81) では修飾される名詞 *ṁsukaji* 「編む人 (1 クラス)」が 1 クラスであるが、修飾する属辞は 2 クラスのものとなっている。修飾される名詞が 1 クラスにもかかわらず、属辞が 2 クラスとなる現象は、修飾される名詞が動詞から派生した場合によく観察される。*ṁsukaji* も動詞-*suka* 「編む」から派生した名詞である (3.1.1 節参照)。

また、(3-82) に示す通り、属辞でマークされた名詞句は、目的を表すこともある。

- (3-82) *ku-na-ki-chaka* *cha=nini*
2SG.SM-IPFV-CL7.OM-want of.CL7=what
「あなたは何のためにそれが欲しいの？」

(3-83) に示す通り、属辞でマークされる名詞句は、修飾される主名詞なしで項の位置に現れることもある。

- (3-83) *ya=kwaza* *ka-fu*
of.CL1=first 3SG.SM-die.PFV
「最初の（子）は死んだ」

15 クラスの *kwa=* は、前述の通り、属辞に後続する名詞句の属する場所を表すために用いられることもあるが、それ以外に、道具や死因、対価を表すために用いられることもある。(3-84) は道具を、(3-85) は死因を、(3-86) は対価を表す例である。これらの用法では、属辞でマークされる名詞句によって修飾される名詞はない。なお、道具や死因、対価を表す *kwa=* は現れないこともある (9.1.6.2 節参照)。また、対価や死因を表す名詞句は、関係節の先行詞となるが、道具は、関係節の先行詞となることができない (10.2.2.3 節参照)。

- (3-84) *tw-ende* *kwa=honda*
1PL.SM-go.SUBJ of.CL15=motor_bike
「(ホンダのカブタイプの) バイクで行こう」 (道具)

- (3-85) *juma* *ka-fu* *kwa=malaria*
PN 3SG.SM-die.PFV of.CL15=malaria
「ジュマはマラリアで死んだ」 (死因)

- (3-86) *ny-uzu* *gari yangu* *kwa=pesa* *zino*
1SG.SM-sell.PFVcar my.CL9 of.CL15=money DEM.PROX.CL10
「私は、この金で私の車を売った」

3.7 疑問詞

代表的な疑問詞は、名詞を修飾することがないタイプと、修飾することができるタイプに分けることができる。前者のタイプの疑問詞には *nini* 「何」、*nani* 「誰」、*wapi* 「どこ」、*lini* 「いつ」がある⁴⁰。以下にこれらの疑問詞を用いた例を提示する。

まず、(3-87)(3-88) では、*nini* 「何」と *nani* 「誰」が節中の目的語の位置に現れている⁴¹。

(3-87) *ka-na-chaka nini*
3SG.SM-IPFV-want what
「彼は何が欲しいの」

(3-88) *jana ku-m-kut^hu nani*
yesterday 2SG.SM-3SG.OM-meet.PFV who
「昨日、あなたは誰に会ったの」

なお、*nani* 「誰」の典型的な用法の一つとして、名前を尋ねるものもある。名前を尋ねる際は、(3-89) のようにコピュラ動詞が用いられることもあれば、(3-90) のような *-ita* 「呼ぶ」から派生した受動動詞 *-itwa* 「呼ばれる」を用いられることもある。

(3-89) *jina lyake nani*
name his.CL5 who
「彼の名前は何？」

(3-90) *ka-na-kwitwa nani*
3SG.SM-IPFV-call.PASS who
「彼はなんと呼ばれている？」

⁴⁰ *βiko* 「どこ」という疑問詞もあるが、おそらくこれは古語であり、ほとんど使われることがない。なお、この *βiko* 「どこ」は、話者がより伝統的な形で話そうとした場合に、意識的に用いられる語の一つである。

⁴¹ *nini* は節中の名詞と同じ位置に現れることが一般的だが、動詞活用形中の動詞語幹の位置や、名詞中の語幹の位置に現れ、接頭辞でマークされることもある。次の a. は前者の例、b. は後者の例である。

例：a. *ka-na-nini ka-na-zalilishwa*
3SG.SM-IPFV-what 3SG.SM-IPFV-force.PASS
「彼がなんだった？彼は強制された」(動詞語幹)
b. *m-nini* 「なんていう木？(3クラス)」

次の二つの例は、それぞれ *wapi* 「どこ」と *lini* 「いつ」を用いたものである。

(3-91) *k-enda wapi*
 3SG.SM-go:IPFV where
 「彼はどこに行くの？」

(3-92) *kw-evu kw-ende lini kwa=jaha*
 2SG.SM-COP.PST 2SG.SM-go.PFV when of.CL15=PN
 「あなたはいつジャハ（人名）のところに行ったの？」

名詞を修飾することができるタイプの疑問詞としては、*gani* 「どんな」、*-ngafi* 「いくつの」、*-bi* 「どの」が挙げられる。

gani は修飾する名詞に応じて形を変えることはないが、*-ngafi* と *-bi* は一致する名詞の名詞クラスに応じて、異なる接頭辞をとる。まず、表 3-6 に *-ngafi* の各クラスの形式を列挙する。

表 3-6 : *-ngafi* 「いくつの」の形式

CL2	CL4	CL6	CL8	CL10
<i>wa-ngafi~we-ngafi</i>	<i>mi-ngafi</i>	<i>ma-ngafi~me-ngafi</i>	<i>vi-ngafi</i>	<i>ngafi</i>

-ngafi の接頭辞は形容詞と同様に名詞接頭辞と同形となるが、*-ngafi* をマークできる接頭辞は、複数形のクラスである 2, 4, 6, 8, 10 クラスのものに限られる。また、*-ngafi* をマークする 2 クラスと 6 クラスの接頭辞の形は *wa~we-*、*ma~me-* と揺れがみられる。

表 3-7 には、*-bi* 「どの」のそれぞれのクラスの形を挙げる。*-bi* の接頭辞は 1 クラスを除いて、動詞をマークする主語接頭辞と同形である (4.1.4 節参照)。1 クラスは *yu-bi* という形式になる。なお、*-bi* をマークする 2 クラスの接頭辞は *wa-* でなく *we-*、6 クラスの接頭辞は *ya-* でなく *ye-*、16 クラスの接頭辞は *βa-* でなく *βe-* となる。

表 3-7 : *-bi* 「どれ」の形式

CL1	CL2	CL3	CL4	CL5	CL6	CL7	CL8	CL9	CL10	CL15	CL16	CL17
<i>yu-bi</i>	<i>we-bi</i>	<i>u-bi</i>	<i>i-bi</i>	<i>li-bi</i>	<i>ye-bi</i>	<i>ki-bi</i>	<i>vi-bi</i>	<i>i-bi</i>	<i>zi-bi</i>	<i>ku-bi</i>	<i>βe-bi</i>	<i>mu-bi</i>

以下にこの三つの疑問詞を用いた例を提示する。まず、(3-93) (3-94) は、*gani* 「どん

な」を用いた例である。

- (3-93) *ku-gu* *kit^hu gani*
CL15.SM-drop.PFV thing what_kind
「そこでどんなもの（何）が落ちたの？」

- (3-94) *nda-m-kut^ha* *m^ht^hu gani mie*
go:1SG.SM:IPFV-3SG.OM-meet person what_kind 1SG.PRO
「私はどんな人（誰）に会いに行けばいいの？」

gani は、(3-93) の *kit^hu* 「物」や (3-94) の *m^ht^hu* 「人」のような一般的な種を表す名詞と共起して、他の疑問詞 *nini* 「何」や *nani* 「誰」などで置き換えられるような名詞句を形成することがしばしばある。*gani* が共起しやすい名詞として、これ以外に *wakati* 「時」や *mahaa* 「場所」が挙げられる。*gani* はこれらの名詞と共起した際は、時間や場所を尋ねるために用いられる。

次に、*-ngafi* 「いくつの」を用いた例を提示する。(3-95) では、2 クラスの *wengafi* が、数量詞と同様に修飾する名詞 *nyambo* 「タコ」から遊離した位置に現れている (3.2.3 節参照)。

- (3-95) *leo nyambo ku-βata wengafi*
today octopus 2SG.SM-get.PFV how_many.CL2
「今日は、タコを何匹捕まえた？」

(3-96) は、*-βi* 「どれ」を用いた例である。この例では、7 クラスの *kifi* で修飾された名詞 *kisu* 「ナイフ」のあとに、関係節化された動詞が現れている。

- (3-96) *kisu kifi u-na-cho-chaka*
knife which.CL7 2SG.SM-IPFV-CL7.REL-want
「どのナイフがあなたはほしいの？」

ここまで挙げたもの以外に、*=je, jaje, kwani, mbona* といった疑問詞もある。これらの意味ないし機能について、断定的に述べることは難しい。以下でこれらについて、順に説明していく。

=je は自立語ではなく、前接語で、名詞や指示詞や疑問詞、動詞をホストとする。*=je*

がよく使われる場面の一つとして、挨拶が挙げられる。(3-97) ではコピー動詞の完結形が、(3-98) では、15 クラスの指示詞中称が=je でマークされているが、どちらもよく使われる典型的な挨拶表現である。

(3-97) *mu-wa=je*

2PL.SM-COP.PFV=Q

「あなたたちどう？」

(3-98) *uko=je*

DEM.MED.CL15=Q

「そちら（あなたたちのところ）はどう？」

=je が挨拶表現以外で用いられる場合、単にその発話が疑問であることを示すために用いられることと、「何」と訳すことができるような意味を表すために用いられることがある。次の (3-99) は、=je が単に発話が疑問であることを示す標識として現れる例である。この例で=je は疑問詞 *gani* 「どんな」と共起としており、=je 自体が何かしらの WH 疑問を表しているとは考えにくい。

(3-99) *iyo uchamu gani=nye*⁴²

DEM.MED.CL9 sweetness what_kind=Q

「それはどんなすばらしいものですか？」

(3-100) は、=je が「何」という意味を表すために用いられている例である。この例では、=je でマークされた動詞の直後で、その答えが述べられている。

(3-100) *kaka ka-ny-ambii=je ka-na-chaka jando*

brother 3SG.SM-1SG.OM-tell.PFV=Q 3SG.SM-IPFV-want circumcision

「お兄さんが私に何と言ったかって？彼は割礼をしたって」

次に、*jaje* について述べる。*jaje* はその形態的特徴から、=je と様態標識 *ja* 「ように」という二つの語が複合して形成されている可能性が考えられる。この *jaje* も、典型的な

⁴² この例は、民話中の小鬼のセリフである。インフォーマントの Zainabu 氏の民話に現れる小鬼の発話では口蓋化や鼻音化が生じる。この例では、*utam* 「甘さ」が *uchamu* に、=je が =nye になっている。

用法として挨拶が挙げられる。挨拶で用いられる際は単独で用いられる。挨拶表現以外で用いられる際は、様子を尋ねたり、「どう」というような意味で用いられたりする。(3-101) は、シゴンベという人の様子を尋ねるために *jaje* が用いられている例である。

(3-101) *sigombe u-ø-vyo-kwenda jaje*
 PN 2SG.SM-PFV-CL8.REL-go how
 「シゴンベは、あなたが行ったとき、どんな様子だった？」

(3-102) は、民話から得られた例である。この文の前段階で、人間が赤ん坊をへびを産んだ様子が描写されており、そのへびの扱いをどうすればいいのかということがこの例では表されている。

(3-102) *kino ki-joka jaje*
 DEM.PRO.CL7 DIM-snake how
 「この小へびをどうしろって？」

次に、*kwani* について説明する。スワヒリ語の記述において、*kwani* は、15 クラスの属辞 *kwa*=と疑問詞 *nini* 「何」から成る *kwa=nini* と同様に「なぜ」を表すと記述されているが (Johnson 1939: 235, Ashton 1947: 154)、マクンドゥチ方言では、*kwani* が「なぜ」を表す標識とは考えられない。例えば、(3-103) は *kwani* を用いた疑問文と、それに対する答えからなる例だが、その答えから、疑問文は単なる Yes/No 疑問文であることが分かる。こうした例から、*kwani* が「なぜ」という意味をもっていないことが分かる⁴³。

(3-103) A: *kwani kw-evu kw-ende jambiani*
 why 2SG.SM-COP.PST 2SG.SM-go.PFV PN
 「昨日ジャンビアーニに行ったの？」

B: *ee ny-evu ny-ende*
 yes 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-go.PFV
 「はい、行きました」

kwani は確信度が低い場合に用いられている可能性がある。(3-104) は、どちらも過去に雨が降ったかを尋ねているが、*kwani* は、雨が降った痕跡がある場合、用いることがで

⁴³ ウングジャ方言でも、「なぜ」を意味しない *kwani* は観察されている。

きない。

(3-104) a. *kwani vua y-evu i-ka-nya*
why rain CL9.SM-COP.PST CL9.SM-CONS-rain
「それで、(先週) 雨が降ったの？」

b. *vua y-evu i-ka-nya*
rain CL9.SM-COP.PST CL9.SM-CONS-rain
「雨が降ったの？」(地面に残る雨水や泥をみて)

mbona は、スワヒリ語で「なぜ」と訳が付される疑問詞だが、*mbona* を用いたマクンドゥチ方言の用例をみると、(3-105) の通り、その答えとなる文で理由が説明されることもあるが、(3-106) の通り、答えとなる文で理由が説明されないこともある。

(3-105) A: *mbona ku-kaa βano*
why 2SG.SM-take_a_sheet.PFV DEM.PROX.CL16
「なぜ、あなたはここに座っているの？」

B: *na-ŋ-ngoja=βa makoto*
IPFV:1SG.SM-3SG.OM-wait=DEM.PROX.CL16 PN
「私は、ここでマコトを待っている」

(3-106) A: *mbona makoto ha-ja-ja*
why PN 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-come
「なぜマコトはまだ来ていないの」

B: *ha-ja-ja bali ka-cha-kuja*
3SG.SM:NEG-PRF.NEG-come but 3SG.SM-FUT-come
「彼はまだ来ていないけど、来るだろう」

スワヒリ語において、「なぜ」という疑問は、属辞の *kwa=* と *nini* 「なに」を組み合わせた、複合的な形式 *kwa=nini* を用いて表されることもあるが、*mbona* は、*kwa=nini* と異なり、疑問文の内容が話し手の予期しないものであるという含意がある場合に用いられるとされる (Ashton 1947: 154)。 *kwa=nini* はマクンドゥチ方言でも用いられるが、スワヒリ語の記述における *mbona* と *kwa=nini* に対する説明が、マクンドゥチ方言にもあて

はまるのかについては、まだよく分かっていない。

3.8 名詞と修飾語の語順

名詞修飾語は、名詞の後ろに現れる。二つの異なる修飾語の可能な組み合わせとして、これまでに以下のものを確認している。

(3-107) 所有詞＋指示詞

nyi-m-kut^{hu} *rafiki* *yako* *yuno*
1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV friend (CL1) your.CL1 DEM.PROX.CL1
「私はこのあなたの友達に会った」

(3-108) 所有詞＋属辞でマークされる名詞句

nyi-m-kut^{hu} *rafiki* *yako* *ya=skuli*
1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV friend(CL1) your.CL1 of.CL1=school
「私は、あなたの学校の友達に会った」

(3-109) 形容詞＋指示詞

nyi-m-kut^{hu} *mwalimu* *ṁnene* *yuno*
1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV teacher (CL1) fat.CL1 DEM.PROX.CL1
「私はこの太った先生に会った」

(3-110) 形容詞＋属辞でマークされる名詞句

na-chaka *kisu* *kikali* *cha=sigombe*
IPFV:1SG.SM-want knife (CL7) sharp.CL7 of.CL7=PN
「私は、シゴンベの鋭いナイフが欲しい」

(3-111) 指示詞＋属辞でマークされる名詞句

na-chaka *ṁkoba* *uno* *wa=karatasi*
IPFV:1SG.SM-want bag (CL3) DEM.PROX.CL3 of.CL3=paper
「私はこの紙のかばんが欲しい」

上記の修飾語の語順は入れ替えることができない。この組み合わせから、修飾される名

詞に近い順に並べると所有詞、形容詞、指示詞、属辞でマークされる名詞句となっていることが分かる。ただし、三つ以上の修飾語を同時に用いた例は、ほとんど観察されず、聞き出し調査でも容認されないことが多い。

なお、所有詞と形容詞の組み合わせは容認されないが ((3-47) 参照)、他の修飾語との組み合わせから、所有詞の方がより名詞に近い位置にあると考えられる。この主張は、数量詞と所有詞の組み合わせからも支持される。(3-112) に示す通り、所有詞と数量詞は組み合わせ可能で、所有詞の方がより名詞に近い位置に現れる。この語順も入れ替えることはできない。数量詞は形態的に形容詞と同じ特徴を有するが (3.2.3 節参照)、統語的にも形容詞と同じ特徴をもつ考えるのであれば、この数量詞と所有詞の組み合わせからも、形容詞と所有詞を比べた場合、所有詞の方がより名詞に近い位置にあるといえる。なお、(3-113) に示す通り、形容詞と数量詞は組み合わせ可能だが、この語順は入れ替えることができる。

(3-112) 所有詞+数詞

na-chaka *visu* *vyako* *viwili*
IPFV:1SG.SM-want knives (CL8) your.CL8 two.CL8
「私はあなたのナイフが 2 本欲しい」

(3-113) 形容詞+数詞

na-chaka *visu* *viwili* *vidogo*
IPFV:1SG.SM-want knives (CL8) two.CL8 small.CL8
「私は、小さいナイフが 2 本欲しい」

4章 動詞類の概要

主語接頭辞でマークされる語形をもつものを動詞類と呼ぶことにすると⁴⁴、動詞類は、必ず他の動詞類とともに現れるものと、そうではないものに分けることができる。本論文では、前者を助動詞、後者を動詞と呼ぶ。(4-1) の *-evu* は、コピュラ動詞過去形に由来する助動詞で、必ず別の動詞類の後続を必要とする。一方、後続する *ka-na-umwa* 「彼は痛い」は動詞の定形で、単独でも現れうる。

(4-1) *k-evu* *ka-na-umwa*
3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-hurt.PASS
「彼は痛かった」

本章では、動詞と助動詞の概要を述べる。4.1 節では動詞活用形について、形態的特徴を中心に記述を行う。4.2 節では、特殊な屈折パラダイムをもつ動詞について説明する。4.3 節では、二つの動詞の語幹の連続によって形成される動詞連続の説明をする。4.4 節では、受動や使役を表す派生動詞について述べる。4.5 節では、助動詞の概要をまとめる。なお、コピュラ動詞や関係節中に現れる活用形の特徴については、本章内でも説明するが、詳しくは、8 章や 10 章を参照されたい。

4.1 動詞活用形

動詞活用形は、動詞語幹に主語、目的語、関係節の先行詞との一致や、TAM (テンス・アスペクト・ムード/モダリティ) を表す接頭辞、否定極性を表す接頭辞が付加されることにより形成される。例えば、(4-2) では、動詞語幹 *-ua* 「殺す」の前に、否定を表す接頭辞 *ha-*、3 人称複数の主語との一致を示す接頭辞 *wa-*、完結 (否定) を表す接頭辞 *li-*、3 人称単数の目的語との一致を示す接頭辞 *mu-* が現れて、動詞活用形が形成されている。

⁴⁴ この基準を厳密に適用した場合、疑問詞の *-bi* 「どれ」や全称数量詞 *-ot^{hi}-opya* 「すべての」、更に挨拶表現で用いられる *jambo* 「こと」も動詞類に含まれるが、本章でこれらについては説明しない。なお、*-jambo* を用いた挨拶表現は、次の例に示す通りの形である。

例：A: *ha-ŋ-jambo* B: *ha-tu-jambo*
 NEG-2PL.SM-matter NEG-1PL.SM-matter
 「あなたたち元気？」 「私たちは元気」

(4-2) *ha-wa-li-mu-ua*

NEG-3PL.SM-PFV.NEG-3PL.OM-kill

「彼らはいつを殺さなかった」

活用形は、大きく定形と非定形に分けることができる。まず、(4-3) に定形のテンプレートを提示する。なお、テンプレートの右側には、本論文で用いるそれぞれの活用形の呼び名を記している。特に呼び名がない場合は、何も記していない。

(4-3) 定形

- a. (否定 1) – 主語 – TAM – (目的語) – 基本語幹
- b. (否定 1) – 主語 – (目的語) – 完結語幹 / 基本語幹 完結形
- c. *hu* – (目的語) – 基本語幹

(4-3) に三つのテンプレートを提示したが、これらのテンプレートの違いを簡単に説明する。(4-3a) の活用形は、TAM と書かれたスロットがあるという点で他の二つとは異なる。このスロットには TAM (テンス・アスペクト・ムード / モダリティ) を表す接頭辞が現れる。具体的に、どのような TAM 接頭辞が現れるかについては、4.1.2 節で説明する。(4-3b) の活用形は、(4-3a) とは異なり、TAM のスロットを欠いている。また、この活用形は語幹のスロットには、他の活用形と異なり完結語幹と記してあるが、この活用形には、特殊な形の語幹が現れることがある。具体的にどのような形の語幹が現れるかについては、4.1.1.1 節、及び 6 章で説明する。(4-3c) の *hu*-は「習慣」の TAM 接頭辞だが、この活用形にしか現れない。この活用形は、他の二つの活用形と異なり、主語と一致する主語接頭辞を欠いている。

(4-4) には、非定形のテンプレートを提示する。

(4-4) 非定形

- a. 主語 – *ka* – (目的語) – 基本語幹
- b. 主語 – (否定 2) – *nge*- (目的語) – 基本語幹
- c. 主語 – (否定 2) – (*ka*) – (目的語) – 接続語幹 接続形
- d. (*ka*) – (目的語) – 基本語幹 / 接続語幹 / 命令語幹 命令形
- e. *ku* – (否定 2) – (目的語) – 基本語幹 不定形
- f. 主語関係節 – (否定 2) – (TAM) – (目的語) – 基本語幹 (関係節)
- g. 主語 – (否定 2) – (TAM) – 関係節 – (目的語) – 基本語幹 (関係節)

定形と非定形の違いの一つとして、否定接頭辞が挙げられる。定形のテンプレートには「否定1」、非定形のテンプレートには「否定2」というスロットを設定したが、この二つの否定接頭辞は、現れる位置だけでなく、形式も異なる。この否定接頭辞については、4.1.3 節で説明する。また、(4-4a, c, d) のスロットには *ka-*、(4-4b) のスロットには *nge-* という接頭辞が含まれているが、これらは非定形特有の TAM 接頭辞で、定形には現れない。この二つの TAM 接頭辞については、4.1.2 節で説明する。(4-4c, d) の接続形や命令形の語幹のスロットには、接続語幹、命令語幹と書いてあるが、これらの活用形の語幹は、他の活用形には現れない形式をとることがある。この活用形の語幹の形式については、4.1.1.1 節、及び 6 章で言及する。(4-4e) の不定形は、名詞化された動詞活用形で、既に 3.1.6 節で言及している。(4-4f, g) の主語関係節接頭辞や関係節接頭辞でマークされる活用形については、10 章を参照されたい。

上記のテンプレートからは分からない定形と非定形の形式面での違いとして、主語接頭辞の形式の違いが挙げられる。この点については、4.1.4.1 節で説明する。

なお、定形と非定形は、単独で話者に提示した際に、完結した発話として判断されるかどうか異なる。定形を述語とする節は、他の節がなくとも一つのまとまった発話として容認されるのに対して、非定形節は、まとまった発話とするために、ほかの節が要求される傾向がある。この話者の判断の違いは、定形が単独で文をなすことができるのに対して、非定形が単独で文をなさないことを反映しているのかもしれない。

4.1.1 動詞語幹

本節では、各動詞活用形の最後のスロットに現れる語幹について説明する。

4.1.1.1 三つの語幹

マクンドゥチ方言の多くの動詞は、三種類の形式的に異なる語幹をもつ。本論文では、この三つを基本語幹、完結語幹、接続語幹と呼ぶことにする。(4-5) に、動詞-*soma*「勉強する」のそれぞれの語幹が現れる例を提示する。(4-5) では、動詞語幹末の母音部分(末母音)の違いに着目されたい⁴⁵。

(4-5) a. *ka-na-som-a*

3SG.SM-IPFV-read-FV

「彼は勉強している」(基本語幹)

⁴⁵ 本論文では、例示の際、必要がある場合に限り、末母音と語基の間にハイフンを付す。

b. *u-ka-som-e*

2SG.SM-ITV-read-FV (SUBJ)

「勉強しにいけ」(接続語幹)

c. *ka-som-o*

3SG.SM-read-FV (PFV)

「彼は勉強した」(完結語幹)

(4-5a)(4-5b) は、それぞれ、基本語幹と接続語幹を用いた例である。この例に示す通り、基本語幹の末母音は *a*、接続語幹の末母音は *e* となる⁴⁶。完結語幹の形式にはいくつかのヴァリエーションがあるが、最も典型的な形式の完結語幹では、語幹の次末音節の母音と同じ母音が末母音として現れる。*-soma*「勉強する」の場合は、(4-5c) に示す通り、下線を付した次末音節の *o* と同じ母音が末母音となっている⁴⁷。

この三つの語幹のうち、もっとも多くの活用形の現れるのは基本語幹で、接続語幹と完結語幹は一部の活用形にしか現れない。三つの語幹の分布は、概ね、(4-6) のようにまとめることができる。

(4-6) 語幹の分布

- a. 基本語幹： 完結形と接続形を除く活用形
- b. 完結語幹： 完結形
- c. 接続語幹： 接続形

しかしながら、なかには (4-6) の一般化に当てはまらない場合もある。例えば、*-ijua*「知る」や後述する受動動詞は、完結語幹を欠いており、これらの動詞の完結形には、基本語幹が現れる。(4-7) は *-ijua*「知る」の例、(4-8) は受動動詞 *-pigwa*「打たれる」の完結形の例である。ともに、語幹の次末音節の母音は *a* ではないが、末母音が *a* となっている⁴⁸。

⁴⁶ 本論文では、語幹の交替を示す動詞については、末母音が *a* となる基本語幹を見出し形式として提示している。

⁴⁷ このパターンに当てはまらない完結語幹の形式については、6章を参照されたい。

⁴⁸ 語幹末に *ua* という母音の連続がある場合でも、*-ijua*「知る」以外の動詞では、語幹末に語幹の次末音節のものと同じ母音が現れる。次の例は *-fua*「洗う」の完結形を用いた例である。語幹末に、次末音節と同じ *u* という母音が現れていることに着目されたい。

例：*ka-fuu* *nguo* *zake*
3SG.SM-wash.PFV clothes (CL10) his.CL10
「彼は自分の服を洗った」

(4-7) *ka-k-iju-a* *kikae*
3SG.SM-CL7.OM-know-FV *Kae_dialect*
「彼はカエ方言を知っている」

(4-8) *ka-pigw-a* *N=kaka*
3SG.SM-hit.PASS.-FV *by=brother*
「彼はお兄さんに殴られた」

また、接続語幹は、接続形だけでなく、命令形にも現れることがある。そのことを示すために、以下で命令形の形態的特徴について、語幹に着目しながら説明する。まず、次の例に示す通り、接頭辞を何ももたない命令形と、1人称単数の目的語接頭辞だけでマークされる命令形では、基本語幹が用いられる。次の二つの例の動詞末母音がともに *a* となっていることに注目されたい。

(4-9) *law-a* *nje*
get_out-FV *outside*
「外に出ていけ」(語幹: *-law-a*)

(4-10) *N-gaiy-a* *maji*
1SG.OM-share-FV *water*
「私に水をわけて」(語幹: *-gaiy-a*)

それに対して、命令形が、TAM 接頭辞 *ka-*「行程」⁴⁹や1人称単数以外の目的語接頭辞でマークされる場合は、末母音が *e* となる接続語幹が用いられる⁵⁰。(4-11) は、*ka-*「行程」でマークされた命令形の例、(4-12) は1人称複数の目的語接頭辞 *tu-*でマークされた命令形の例である。ともに、この二つの例の末母音は、ともに *e* となっている。

(4-11) *ka-tend-e* *kazi*
ITV-do-FV *work*
「仕事をしにいけ」

⁴⁹ TAM 接頭辞 *ka-*「行程」については、4.1.2 節で説明する。

⁵⁰ *-leta*「もたらす」は例外的に、接頭辞のない命令形でも、接続語幹 *-lete* が現れる。

(4-12) *tu-k^he* *pesa*
 1PL.OM-give-FV money
 「我々に金をよこせ」

ちなみに、命令形と接続形は、TAM 接頭辞 *ka-*「行程」でマークされる点や、接続語幹を用いる点、更には聞き手への命令を表すことができるという点で類似しているが、聞き手の標示方法や、法副詞⁵¹との共起の可否が異なる。まず、(4-13) に示す通り、聞き手が複数の場合、命令形では聞き手が複数であることを示す接語の=*ni* が用いられるが、接続形では 2 人称複数の主語接頭辞の *m-* が用いられる⁵²。

(4-13) a. *ka-tende=ni* *kazi*
 ITV-do.IMP=AL.PL work (命令形)
 b. *m-ka-tende* *kazi*
 2PL.SM-ITV-do.SUBJ work (接続形)
 c. **u-ka-tende=ni* *kazi*
 2SG.SM-ITV-do.IMP=AL.PL work (接続形)
 「あなたたち仕事をしにいきなさい」

(4-14) は、義務を表す法副詞 *lazima* との共起の可否を示す例である。接続形は *lazima* と共起できる一方、命令形は *lazima* と共起できない。なお、(4-12) で示した通り、*lazima* がなければ、(4-14a) の命令形は問題なく使用することができる。

(4-14) a. **lazima* *tu-k^he* *pesa*
 obligatorily 1PL.OM-give.IMP money (命令形)
 b. *lazima* *u-tu-k^he* *pesa*
 obligatorily 2SG.SM-1PL.OM-give.SUBJ money (接続形)
 「あなたは、我々に金を与えなければならない」

本論文では、PFV「完結」や SUBJ「接続」というグロスを用いることがあるが、この

⁵¹ 接続形と法副詞の共起については、7.5 節で再度説明する。

⁵² 接続形は、勧誘を表すために用いられることもあるが、勧誘を表す際は、=*ni* と共起できる。この場合、主語接頭辞は 1 人称複数となる。

例：*tw-ende=ni*

1PL.SM-go.SUBJ=AL.PL

「行きましょう」

二つのグロスは、完結語幹や接続語幹ではなく、完結形や接続形に付す。つまり、基本語幹であっても、完結形に現れる場合は、語幹の下に PFV というグロスを付し、接続語幹であっても、命令形に現れる場合は、語幹の下に IMP というグロスが付す。

-*ja*「来る」は例外的に、基本語幹、接続語幹、完結語幹に加えて、命令語幹 *njo* をもつ。また、ほとんどの借用語動詞の語幹は、上記のような交替をすることなく、どの活用形でも同じ形の語幹が現れる (6.2.3 節参照)。

4.1.1.2 語幹の初頭母音の「融合」

母音ではじまる動詞語幹の中には、その語幹初頭の母音が、直前の接頭辞の末音節と一つの音節を成すものがある (Racine-Issa 2002: 24–27, 47–48, 79–91)。本論文では、動詞に限らず、語幹の初頭母音が、直前の接頭辞の末音節と一つの音節を成す現象を「融合」、また、融合が生じる動詞語幹を「融合母音語幹」と呼んでいる。(4-15) に、融合母音語幹と、直前に現れる形態素の融合のパターンを示す。融合のパターンは、動詞や、語幹の直前に現れる形態素によらず一定となる。

(4-15) 母音の融合パターン

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| a. $a + a \rightarrow a$ | d. $nyi + a \rightarrow nya$ |
| $a + e \rightarrow e$ | $nyi + e \rightarrow nye$ |
| $a + i \rightarrow e$ | $nyi + i \rightarrow nyi$ |
| $a + o \rightarrow o$ | $nyi + o \rightarrow nyo$ |
| $a + u \rightarrow o$ | $nyi + u \rightarrow nyu$ |
| b. $i + a \rightarrow ya$ | e. $m + a \rightarrow mwa$ |
| $i + e \rightarrow ye$ | $m + e \rightarrow mwe$ |
| $i + i \rightarrow i$ | $m + i \rightarrow mwi$ |
| $i + o \rightarrow yo$ | $m + o \rightarrow mo$ |
| $i + u \rightarrow yu$ | $m + u \rightarrow mu$ |
| c. $u + a \rightarrow wa$ | f. $ki + a \rightarrow cha$ |
| $u + e \rightarrow we$ | $ki + e \rightarrow che$ |
| $u + i \rightarrow wi$ | $ki + i \rightarrow ki$ |
| $u + o \rightarrow o$ | $ki + o \rightarrow cho$ |
| $u + u \rightarrow u$ | $ki + u \rightarrow chu$ |

ちなみに、*zi-* (10 クラス主語接頭辞・目的語接頭辞)、*ji-* (再帰接頭辞)、*si-* (1 人称単数主語接頭辞否定、否定接頭辞) が、*o, u* で始まる語幹と融合する場合、*zyo, zyu, jyo, jyu, syo, syu* ではなく、*zo, zu, jo, ju, so, su* という形になる。この実現には音配列に関する制約が関わっていると考えられる。

(4-16) に、(4-15a, b, c) に挙げた融合の具体例を提示する。なお、融合が生じた例を提示する際は、便宜的に融合の結果生じた母音の直前に、形態素境界を示すハイフンを付す。例えば、(4-16a) のように、3 人称単数の主語接頭辞 *ka-* が、「書く」を意味する動詞の完結語幹 *-andiki* の直前に現れる場合、その語形は *kandiki* となる。この語形の最初の母音 *a* は、主語接頭辞と語幹の双方に由来するものと考えられるが、ハイフンは最初の *k* の直後に付す。また、(4-16h) の *ivu* 「それは熟した」のように、融合の結果、接頭辞として提示可能な形態がない場合もある、こうした形態にグロスを付す際は、最初に語幹の意味や機能を示して、そのあとに、コロンで区切って接頭辞の機能を示す。

- (4-16) a. *ka-* (3 人称単数主語) + *-andiki* (「書く」完結) → *k-andiki* 「彼は書いた」
 b. *ka-* (3 人称単数主語) + *-ende* (「行く」完結) → *k-ende* 「彼は行った」
 c. *ka-* (3 人称単数主語) + *-imbi* (「歌う」完結) → *k-emb* 「彼は歌った」
 d. *ka-* (3 人称単数主語) + *-ogo* (「沐浴する」完結) → *k-ogo* 「彼は沐浴した」
 e. *ka-* (3 人称単数主語) + *-uzu* (「売る」完結) → *k-uzu* 「彼は売った」
 f. *i-* (9 クラス主語) + *-aga* (「失せる」完結) → *y-aga* 「それは失せた」
 g. *i-* (9 クラス主語) + *-ende* (「行く」完結) → *y-ende* 「それは行った」
 h. *i-* (9 クラス主語) + *-ivu* (「熟す」完結) → *ivu* 「それは熟した」
 i. *i-* (9 クラス主語) + *-onjwa* (「味見する」完結・受動)
 → *y-onjwa* 「それは味見された」
 j. *i-* (9 クラス主語) + *-uzwa* (「売る」完結・受動) → *y-uzwa* 「それは売られた」
 k. *ku-* (2 人称単数主語) + *-aga* (「失せる」完結)
 → *kw-aga* 「あなたは迷子になった」
 l. *ku-* (2 人称単数主語) + *-ende* (「行く」完結) → *kw-ende* 「あなたは行った」
 m. *ku-* (2 人称単数主語) + *-ibi* (「盗む」完結) → *kw-ibi* 「あなたは盗んだ」
 n. *ku-* (2 人称単数主語) + *-ogo* (「沐浴する」完結) → *k-ogo* 「あなたは沐浴した」
 o. *ku-* (2 人称単数主語) + *-uzu* (「売る」完結) → *k-uzu* 「あなたは売った」

(4-17) には、融合母音語幹をもつ動詞を提示する。なお、融合母音語幹をもつ動詞は他にもあるが、(4-17) には、本論文で用いる例文中に現れるもののみを示す。他の動詞

については Racine-Issa (2002: 47–48) を参照されたい。

(4-17) 融合母音語幹をもつ動詞の例

-aga 「失う、迷子になる」、-andika 「書く」、-aza 「始める」、-ebu 「いらぬ」、
-egemea 「寄りかかる」、-enda 「行く」、-enenda 「行く」、-endesha 「運転する」、
-evu 「コピュラ動詞過去形」、-iba 「盗む」、-ijua 「知る」、-ima 「止まる」、
-imba 「歌う」、-isa 「終える」、-ivwa 「熟す」、-oga 「沐浴する」、-ogolea 「泳ぐ」、
-ona 「見る」、-onja 「味見する」、-uza 「売る」

なお、前述の通り、接頭辞でマークされない命令形では、原則として、基本語幹が単独で現れるが ((4-9) 参照)、初頭母音が *a, i, e* となる融合母音語幹を持つ動詞は、接頭辞を伴わない命令形で、初頭に *w* を伴う (例: *w-andika* 「書け」、*w-enda* 「行け」、*w-imba* 「歌え」)。この *w* は、語幹の初頭音が *u, o* の場合現れない (例: *uza* 「売れ」、*oga* 「沐浴しろ」)。これらの動詞語幹が融合を引き起こすタイプのものであることを考慮にいと、命令形に現れる *w* は、基底で *u* という形で、表層で *w* となったり、現れないのは融合の結果であるとも考えることもできるだろう。

なお、母音ではじまる動詞語幹のなかには、融合を引き起こさないものも存在する。(4-18) に、こうした動詞の例を挙げる。他の動詞については、Racine-Issa (2002: 47) を参照されたい。

(4-18) 非融合母音語幹をもつ動詞の例

-oa 「結婚する」、-okota 「拾う」、-omba 「求める」、-ongoa 「見せる」、-ua 「殺す」、
-uka 「発つ」、-umwa 「痛む」、-uza 「尋ねる」、

4.1.1.3 無意味形態 *ku-*について

動詞のなかには、無意味形態 *ku-* を伴った語幹をもつものがある。この *ku-* は、(4-19) に示す通り、1 音節語幹と融合母音語幹の直前に現れる。(4-19a) は、1 音節語幹 *-ja* 「来る」が *ku-* でマークされている。また、(4-19b) では、融合母音語幹 *-enda* 「行く」と融合した接頭辞 *kw-* が、TAM 接頭辞 *me-* 「完了」と語幹 *-enda* の間に現れている。

(4-19) a. *ke-me-ku-ja*

3SG.SM-PRF-KU-come

「彼は来た」

b. *ke-me-kw-enda*

3SG.SM-PRF-KU-go

「彼は行った」

この無意味形態 *ku-*は、常に現れるわけではない。(4-20) は、TAM 接頭辞 *ja-* 「完了否定」でマークされた動詞を用いた例だが、この例に現れる *-ja* 「来る」、*-enda* 「行く」は無意味形態 *ku-*でマークされていない。なお、(4-20b) では *-enda* と TAM 接頭辞 *ja-*の間に融合が生じている。

(4-20) a. *ha-ja-ja*

3SG.SM:NEG-PRF.NEG-come

「彼はまだ来ていない」

b. *ha-j-enda*

3SG.SM:NEG-PRF.NEG-go

「彼はまだ行っていない」

この無意味形態 *ku-*は、以下の二つの条件が満たされた場合に現れる。

(4-21) 無意味形態 *ku-*が現れる条件

- a. 目的語接頭辞がない。
- b. 語幹の直前に特定の接頭辞が現れる。(TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」、*na-* 「未完結」、*me-* 「完了」、*mena-* 「起動」、*li-* 「完結否定」、*nge-* 「反実仮想」、*a-* 「完結 (関係節)」、関係節接頭辞)

ただし、(4-21) の条件が満たされても、1 音節語幹の動詞、及び *-enda* 「行く」、*-isa* 「終える、終わる」、*-aza* 「始める、始まる」は、*ku-*を伴わずに現れることもある⁵³。この場合、*ku-*は脱落していると考えられるが (5.3.2 節参照)、*ku-*の脱落には、(4-22) のような特徴がある。

⁵³ この *ku-*の脱落は、先行研究において、コンピュータ動詞を除き明示的に説明はなされていない (cf. Racine-Issa 2002: 120)。ただし、*ku-*が脱落している例自体は、語彙集の用例の中にみつけることができる。

例 : *kitu ka-na-lya koa*
wildcat 3SG.SM-IPFV-eat snail
「ヤマネコがカタツムリを食べている」 (Chum 1994: 33)

(4-22) 無意味形態 *ku-*の脱落の特徴

- a. 動詞に別の語が後続する場合に *ku-*は脱落する。
- b. *ku-*の脱落は随意的である（別の語が後続しても脱落しない場合がある）。
- c. 後続する語の統語機能にかかわらず、脱落は生じる。
- d. ただし、動詞と後続する語は一つの節をなしている必要がある。

次の (4-23)(4-24) では、*-lya*「食べる」が TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされている。(4-23) に示す通り、この活用形が節末に現れる場合、*ku-*は脱落することができない。一方、(4-24) に示す通り、目的語 *samaki*「魚」が動詞に後続する場合は、*ku-*が随意的に脱落する。

(4-23) a. *ka-na-ku-lya*

3SG.SM-IPFV-KU-eat

b. **ka-na-lya*

3SG.SM-IPFV-eat

「彼は食べている」

(4-24) a. *ka-na-ku-lya* *samaki*

3SG.SM-IPFV-KU-eat fish

b. *ka-na-lya* *samaki*

3SG.SM-IPFV- eat fish

「彼は魚を食べている」

(4-25) に示す通り、無意味形態 *ku-*の脱落は、後続する語の統語機能によらず生じる。次の例では、それぞれ、主語、場所名詞句、副詞が、動詞に後続しているが、これらが動詞に後続する場合も、目的語が後続する場合と同様に、*ku-*の脱落が随意的に生じる。

(4-25) a. *ka-na-ku-lya* *ba-sigombe*

3SG.SM-IPFV-KU-eat Mr.-PN

b. *ka-na-lya* *ba-sigombe*

3SG.SM-IPFV-eat Mr.-PN

「シゴンベおじさんが食べている」(主語が後続する例)

c. *ka-cha-ku-ja* *βano*
3SG.SM-FUT-KU-come DEM.PROX.CL16

d. *ka-cha-ja* *βano*
3SG.SM-FUT-come DEM.PROX.CL16

「彼はここに来るだろう」(場所を表す名詞句が後続する例)

e. *ka-na-ku-lya* *weka*
3SG.SM-IPFV-KU-eat alone

f. *ka-na-lya* *weka*
3SG.SM-IPFV-eat alone

「彼は一人で食べている」(副詞が後続する例)

(4-26) は、動詞に後続する語が、同一節内の項であるかによって *ku*-の脱落の可否が異なることを示している。*a-nge-lya* 「彼が食べていれば」という *ku*-を欠いた語形は、(4-26a) の通り、目的語 *vyakulya* 「食事」が後続する場合、用いることができるが、(4-26b) のように、別の節が後続する場合は用いることができない。(4-26b, c) の *a-si-nge-na* 「彼が持っていれば」は、*a-nge-lya* とは別の節に属している。

(4-26) a. *a-nge-lya* *vyakulya* *a-si-nge-na* *njaa*
3SG.SM-CF-eat food 3SG.SM-NEG-CF-POSS hunger

「彼は食事を摂っていれば、空腹にならなかつただろうに」

b. **a-nge-lya* *a-si-nge-na* *njaa*
3SG.SM-CF-eat 3SG.SM-NEG-CF-POSS hunger

c. *a-nge-ku-lya* *a-si-nge-na* *njaa*
3SG.SM-CF-KU-eat 3SG.SM-NEG-CF-POSS hunger

「彼は食べていれば、空腹にならなかつただろうに」

この *ku*-の脱落が生じやすさは、接頭辞と動詞語幹の組み合わせによって異なるようである。例えば、*na*- 「未完結」と *-lya* 「食べる」の間では脱落が生じやすいが、*me*- 「完了」と *-fwa* 「死ぬ」の間では生じにくい。また、コピュラ動詞-*wa* は、例外的に無意味形態 *ku*-でマークされることがない。

4.1.2 TAM 接頭辞

多くの活用形は、表す TAM (テンス・アスペクト・ムード／モダリティ) に応じて異なる TAM 接頭辞でマークされる。例えば、(4-27) の *-tenda* 「する」という動詞は *na-* という接頭辞でマークされ、進行や習慣といった「未完結」と呼ぶべき事態を表している。

(4-27) *ka-na-tenda* *kazi*
3SG.SM-IPFV-do work
「彼は仕事をしている／彼は仕事をする」

(4-28) に、TAM (テンス・アスペクト・ムード／モダリティ) 接頭辞を列挙する⁵⁴。

(4-28) マクンドゥチ方言の TAM 接頭辞

- a. *cha-* 「未来 (FUT)」
- b. *na-* 「未完結 (IPFV)」
- c. *me--ne-* 「完了 (PRF)」
- d. *mena--nena-* 「起動 (INCH)」
- e. *li-* 「完結否定 (PFV.NEG)」
- f. *ja-* 「完了否定 (PRF.NEG)」
- g. *a-* 「完結 (PFV)」 (関係節)
- h. \emptyset 「完結 (PFV)」 (関係節)
- i. *hu-* 「習慣 (HAB)」
- j. *ka-* 「継起 (CONS)」 「条件 (COND)」 「行程 (ITV)」
- k. *nge-* 「反実仮想 (CF)」

(4-3a) の定形の活用のテンプレートの中の TAM と書かれたスロットには、(4-28) に挙げたもののうち、*cha-* 「未来」、*na-* 「未完結」、*me-* 「完了」、*mena-* 「起動」、*li-* 「完結否定」、*ja-* 「完了否定」が現れる。これらの TAM 接頭辞でマークされた活用形が表す事態については、7 章で詳しく説明する。(4-4f, g) の、主語関係節接頭辞、及び関係節接頭辞でマークされた活用形の TAM というスロットには、*cha-* 「未来」、*na-* 「未完結」、*me--ne-* 「完了」、*nena-* 「起動」、*a-*、 \emptyset 「完結」が現れる。

⁵⁴ 本論文では、スワヒリ語研究でテンス (tense) という用語が用いられることを考慮に入れて (cf. Ashton 1947)、このスロットに現れる接頭辞を TAM 接頭辞と呼んでいるが、純粋にテンスの標識とみなしうる接頭辞があるかについては、一考の余地がある。この点については、7.3 節で説明する。

なお、次の例に示す通り、完結を表す活用形は、定形（完結形）でも、関係節接頭辞で動詞がマークされる場合も、TAM 接頭辞を欠いているように見える。(4-29a) は、完結形の動詞を用いた例である。また、(4-29b) は、関係節接頭辞でマークされ完結を表す動詞活用形を用いた例である。

(4-29) a. *nyi-m-kut^hu* *pandu*
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV PN
 「私はパンドゥ（人名）に会った」（完結形の例）

b. *nyi-ø-e-m-kut^ha* *pandu*
 1SG.SM-PFV-CL1.REL-3SG.OM-meet PN
 「私があったのは、パンドゥだ」（関係節接頭辞でマークされた動詞の例）

本論文では、関係節接頭辞でマークされる活用形に限って音形を持たない TAM 接頭辞 *ø-*「完結」を提示する。詳しくは 10.1.1 節で説明するが、関係節接頭辞でマークされた形式が TAM 接頭辞を欠いているように見える場合、完結というアスペクトが標示されていると考えられる活用形と、特に TAM に関する情報が標示されていないと考えられる活用形とがある。

(4-30) には、*hu-*「習慣」でマークされた動詞を用いた例を提示する。この TAM 接頭辞でマークされた活用形は、主語接頭辞でマークされない。なお、習慣を表す形式は、これ以外にもあるが、こうした習慣を表す形式については、7.4.3 節で取り上げる。

(4-30) *wat^hu* *wengi* *hu-sema* *sufuria*
 people many HAB-say pot
 「多くの人（鍋のことを）“sufuria”という」

ka-「継起」「条件」「行程」や *nge-*は、非定形に現れる TAM 接頭辞である。TAM 接頭辞 *ka-*でマークされる活用形が表す事態は、共起する語幹が基本語幹か接続語幹かによって異なる。語幹が基本語幹となる場合、*ka-*でマークされる活用形は、「条件」か「継起」を表す。(4-31) では、*ka-*と *-chewa*「遅れる」が共起して条件が表されている⁵⁵。

(4-31) *u-ka-chewa* *ku-na-ja-N-kut^ha* *N-lala*
 2SG.SM-COND-be_late 2SG.SM-IPFV-come-1SG.OM-meet 1SG.SM-fall_asleep.PFV
 「あなたが遅れたら、私が寝ているところを見るだろう」

⁵⁵ (4-31) の *-ja*「来る」と *-kut^ha*「会う」の連続については、4.3 節で説明する。

*ka-*が「継起」の標識として機能する際は、*ka-*でマークされた動詞の表す事態が、先行する動詞が表す事態よりもあとに生じることを表す。*ka-*でマークされた動詞が表す事態は、完結のこともあれば、未完結のこともある。(4-32)の*ka-*でマークされた動詞は、*na-*「未完結」でマークされた活用形に後続して、習慣（未完結）の事態を表している。また、(4-33)では、*ka-*でマークされた動詞が、完結形に後続して、事象の完結を表している。

(4-32) *jua li-na-lawa ulejua li-k-enda na=uchwejua*⁵⁶
 sun CL5.SM-IPFV-come_from east CL5.SM-CONS-go COM=west
 「太陽は東からでて、西へと沈む」(未完結)

(4-33) *ya=kwaza ka-fu ya=pili a-ka-fwa*
 of.CL1=first 3SG.SM-die.PFV of.CL1=second 3SG.SM-CONS-die
 「最初にうまれたの(子供)は死んだ。二番目のも死んだ」(完結)

*ka-*でマークされ「継起」を表す活用形は、昔話のような「語りの談話」のなかでよく観察される。語りの談話のなかでは、必ずしも動詞の定形が、先行するわけではない。(4-34)は、物語のなかから得られた例だが、8クラスの関係節接頭辞でマークされ時を表す動詞活用形が、*ka-*でマークされる動詞に先行している。

(4-34) *a-ø-vyo-oa a-ka-vyaa wana ishirini*
 3SG.SM-PFV-REL.CL8-marry 3SG.SM-CONS-bear children twenty
 「結婚して、彼は20人の子供をもうけました」

この活用形は、助動詞と共起することも多いが、助動詞と共起する場合、未完結の事態を表すことが多い。この特徴については、4.5節で説明する。

⁵⁶ *-enda*「行く」と*-ja*「来る」と共起する場所名詞句は共格標識の*na=*でマークされることがある。他の動詞の項や、移動動詞と共起する場所名詞句がこの*na=*と共起した場合、この*na=*の付加により「～も」という意味が生じるが、*-enda*と*-ja*は*na=*が付加されてもこうした意味にはならない。次の例では、場所を表す名詞 *matazi*「マタズィ(地名)」、*mjini*「街に」はともに*na=*でマークされているが、*-ja*を用いた a. はただマタズィ(地名)に来たことを表す一方、b. は街以外のところにも着いたということを含意する。

例： a. *ka-ja na=matazi* b. *ka-fiki na=mji-ni*
 3SG.SM-come.PFV COM=PN 3SG.SM-arrive.PFV COM=town-LOC
 「彼はマタズィ(地名)に来た」 「彼は街にも着いた」

*ka-*が接続語幹と共に起して、接続形や命令形をマークする場合は、「行って～する」というような意味が表される。本論文では、この事態のことを「行程」と呼ぶ (cf. 中島 2000: 172)。(4-35) の *a-k-oge* 「水浴びをしに行かせて」は、*ka-*「行程」でマークされた接続形である。

(4-35) *yuno* *mwanamke ka-cha-kw-ambia* *ende* *a-k-oge*
 DEM.PROX.CL1 woman 3SG.SM-FUT-2SG.OM-tell go.SUBJ:3SG.SM 3SG.SM-ITV-bathe.SUBJ
 「この女性は、あなたに、水浴びをしに行かせてと言うでしょう」

ka-「行程」でマークされる活用形は、(4-35) でも示したように、*-enda* 「行く」という動詞が直前に現れることが多いが、*-enda* なしでも用いることができる。(4-36)(4-37) は接続形と命令形の例で、ともに命令表現で用いられているが、*-enda* の命令形 *wenda* の有無が異なる。

(4-36) a. *wenda* *u-ka-lye*
 go.IMP 2SG.SM-ITV-eat.SUBJ (接続形)
 b. *wenda* *ka-lye*
 go.IMP ITV-eat.IMP (命令形)
 「食べに行け」

(4-37) a. *u-ka-lie* *uko*
 2SG.SM-ITV-cry.SUBJ DEM.MED.CL15 (接続形)
 b. *ka-lie* *uko*
 ITV-cry.IMP DEM.MED.CL15 (命令形)
 「そこ (外) に行って泣け」

本論文では、*ka-*でマークされる活用形に対しては、表す事態に応じて、COND「条件」、CONS「継起」、ITV「行程」というグロスを付す。なお、「条件」「継起」「行程」という機能に応じて三つの形態素を認めるのか、それとも *ka-* という音形を持った多義的な形態素を一つだけ認めるのかという問題には、本論文では立ち入らない。

(4-38) は *nge-*「反実仮想」でマークされる活用形の例である。この例は、*nge-*でマークされる活用形を二つ含むが、それぞれが独立した節を成している。反実仮想を表す際は、(4-38a) に示す通り、この活用形を二つ連続させることもできるが、(4-38b) に示す通り、「～していれば」という日本語訳が付される節を、*kama* 「もし」と定形を用いて

言い換えることもできる。

- (4-38) a. *a-nge-kuja* *a-nge-vata* *pesa*
3SG.SM-CF-come 3SG.SM-CF-get money
b. *kama ka-ja* *a-nge-vata* *pesa*
if 3SG.SM-come.PFV 3SG.SM-CF-get money
「彼は来ていれば、お金を得たろう」

基本的に TAM 接頭辞が連続して現れることはないが、TAM 接頭辞 *ka-*「継起」の直後には *na-*「未完結」が、*nge-*「反実仮想」の直後には *na-*「未完結」や *me-*「完了」が現れることが確認されている。(4-39) は *ka-*のあとに *na-*が現れる例、(4-40) は、*nge-*のあとに *na-*が現れる例である。

- (4-39) *bwana yulya* *a-ka-na-ji-tia* *maji*
sir DEM.DIST.CL1 3SG.SM-CONS-IPFV-REFL-put water
「あのご主人は、自分に水をかけていて」

- (4-40) *a-nge-na-soma* *kitabu kama ka-wa-βo*
3SG.SM-CF-IPFV-read book if 3SG.SM-COP.PFV-CL16.PRO
「もしいれば彼は本をよんでいるだろうに」

なお、TAM 接頭辞 *mena-*「起動」も、形態的には *me-*「完了」と *na-*「未完結」から形成されているように見えるが、*mena-*は *me-*から予測される意味をもたない。このことは、7.2.3 節で詳しく説明する。

4.1.3 否定接頭辞

否定極性は、否定接頭辞で表される。どのような否定接頭辞が現れるかは、定形と非定形で異なる。以下で、この定形と非定形をマークする否定接頭辞について、順に説明する。

まず、定形では、語頭の否定 1 のスロットに、(4-41) に示す通り、否定接頭辞 *ha-*が現れる。

(4-41) *ha-wa-na-choea* *kikae*
 NEG-3PL.SM-IPFV-speak *Kae_dialect*
 「彼らはカエ方言を話さない」

主語が1人称単数、2人称単数、3人称単数の場合、主語接頭辞と、否定接頭辞1はかばん形態を成す。かばん形態の形式は、それぞれ *si-*, *hu-*, *ha-* となる。(4-42) では、否定接頭辞1と1人称単数の主語接頭辞がかばん形態 *si-* を成している。

(4-42) *si-na-kunywa*
 1SG.SM:NEG-IPFV-drink
 「私はのみません」

na- 「未完結」、*cha-* 「未来」、完結語幹はこの否定接頭辞1と共起することができる。一方、*me-* 「起動」、*mena-* 「起動進行」は否定接頭辞1と共起できない。また、*li-* 「完結否定」、*ja-* 「完了否定」は義務的に否定接頭辞1と共起する。完結形に否定接頭辞1が現れることもあるが、この活用形は「～しなかった」「まだ～していない」ではなく、「(これから)～しない」ということを表し⁵⁷、意味的には肯定の完結形に対応しない。そのことは、(4-43) に示す通り、否定接頭辞1でマークされる完結形も、否定接頭辞1と TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」を用いた活用形と同様に、*cha-* 「未来」でマークされる動詞活用形を用いた疑問文に対する適切な答えとなることから分かる。

(4-43) A: *ka-cha-βika*
 3SG.SM-FUT-cook
 「彼は料理するだろうか？」

B: *ha-βiki* / *ha-cha-βika*
 3SG.SM:NEG-cook.PFV 3SG.SM:NEG-FUT-cook
 「彼は料理をしない」

⁵⁷ *-goma* 「できる」と *-ijua* 「知る」の否定完結形は、例外的に、対応する肯定形が、それぞれ *na-* 形と完結形になる。以下の例では、それぞれ、A の疑問文に *na-* 形、あるいは、完結形が現れ、B の答えに否定完結形が現れている。

例：A: *ka-na-goma* *kw-endesha* *baskeli* B: *ha-gomo*
 3SG.SM-IPFV-be_able INF-drive bicycle 3SG.SM:NEG-be_able
 「彼は自転車に乗ることができる？」 「彼はできない」

A: *ka-v-ijua*
 3SG.SM-CL8.OM-know.PFV
 「彼は知ってる？」

B: *ha-v-iji*
 3SG.SM:NEG-CL8.OM-know.PFV
 「彼は知らない」

肯定の完結形に、意味的に対応するのは、*li-*「完結否定」でマークされる活用形である。(4-44) は、*li-*「完結否定」でマークされる活用形が、*-lya*「食べる」の肯定の完結形に対応する否定形となることを示している。

(4-44) A: *ka-li*

3SG.SM-eat.PFV

「彼は食べた？」

B: *ha-li-kulya*

3SG.SM:NEG-PFV.NEG-eat

「彼は食べていない」

非定形の否定極性は *si-* という接頭辞で表される。この接頭辞は、(4-4) のテンプレートの否定 2 のスロットに現れる。まず、(4-45) に、接続形がこの否定接頭辞 *si-* でマークされる例を挙げる。ちなみに、接続形で TAM 接頭辞 *ka-*「行程」と否定接頭辞 *si-* が共起することはない。

(4-45) *ka-na-tenda hadithi N-si-lale*

3SG.SM-IPFV-do story 1SG.SM-NEG-fall_asleep.SUBJ

「彼（父）は私が寝ないように話をしてくれたものだ」

si- は接続形以外に、TAM 接頭辞 *nge-*「反実仮想」と共起したり、不定形に現れたりすることができる。(4-46) は、*si-* が *nge-* と共起することを示す例である。なお、この例は、自然談話のなかで用いられたものだが、対となるべき、もう一つの *nge-* でマークされた節（「～だろうに」と訳せる節）を欠いている。

(4-46) *u-si-nge-wa-tupa*

2SG.SM-NEG-CF-throw_away

「あなたが彼ら（子供たち）を捨てていなければ」

(4-47) では、不定形の *-ijua*「知っている」が *si-* でマークされている⁵⁸。

⁵⁸ (4-47) では、動詞不定形 *ku-soma*「学ぶこと（15 クラス）」が、*-ijua*「知る」に後続しているが、目的語接頭辞は 8 クラスとなっており、動詞の目的語接頭辞と、一致すべき項の間に齟齬が生じている。

(4-47) *ku-si-v-ijua* *ku-soma*
 INF-NEG-CL8.OM-know INF-read
 「読むことを知らないこと」

4.1.4 人称接頭辞

動詞活用形に現れる人称接頭辞として、主語接頭辞、目的語接頭辞、関係節接頭辞がある。それぞれ、主語、目的語、関係節の先行詞との一致を示す標識として機能する。表 4-1 に、それぞれの接頭辞を示す。ただし、融合母音語幹の前に現れて融合が生じた場合の異形態は、表 4-1 に挙げない。

表 4-1：主語接頭辞・目的語接頭辞・関係節接頭辞

	主語	目的語	関係節
1SG	<i>nyi-~N-</i>	<i>nyi-~N-</i>	——
1PL	<i>tu-</i>	<i>tu-</i>	——
2SG	<i>ku-~u-</i>	<i>ku-</i>	——
2PL	<i>ᵐ-~mu-</i>	<i>ku-~ᵐ-~wa-</i>	——
3SG/CL1 ⁵⁹	<i>ka-ke-~a-</i>	<i>ᵐ-~mu-</i>	<i>e-~ye~yo-</i>
3PL/CL2	<i>wa-~we-</i>	<i>wa-</i>	<i>o-</i>
CL3	<i>u-</i>	<i>u-</i>	<i>o-</i>
CL4	<i>i-</i>	<i>i-</i>	<i>yo-</i>
CL5	<i>li-</i>	<i>li-</i>	<i>lyo-</i>
CL6	<i>ya-~ye-</i>	<i>ya-</i>	<i>yo-</i>
CL7	<i>ki-</i>	<i>ki-</i>	<i>cho-</i>
CL8	<i>vi-</i>	<i>vi-</i>	<i>vyo-</i>
CL9	<i>i-</i>	<i>i-</i>	<i>yo-</i>
CL10	<i>zi-</i>	<i>zi-</i>	<i>zo-</i>
CL15	<i>ku-</i>	<i>ku-</i>	<i>ko-</i>
CL16	<i>βa-βe-</i>	<i>βa-</i>	<i>βo-</i>
CL18	<i>ᵐ-~mu-</i>	<i>ᵐ-~mu-</i>	<i>mo-</i>
再帰	——	<i>ji-</i>	——

⁵⁹ *ka-ke-a*, *ᵐ-mu*, *e-ye-yo* は 3 人称単数及び、1 クラス名詞との一致を、*wa-we*, *wa*, *o* は 3 人称複数及び、2 クラス名詞との一致を示す標識である。本論文では、主語接頭辞と目的語接頭辞には 3 人称を示すグロスを、関係節接頭辞には名詞クラスを示すグロスを付す。

なお、これらの接頭辞と一致する名詞句は必ずしも現れるわけではない（9.1.1 節参照）。このことから、これらの人称接頭辞は、一致を示す機能だけでなく、代名詞的な機能も有しているとみなすこともできるかもしれない。

4.1.4.1 人称接頭辞の異形態について

2 人称単数と 3 人称単数の主語接頭辞は、定形ではそれぞれ *ku-*, *ka-*、非定形では *u-*, *a-* となる。(4-48) では、*-chaka* 「欲しい」、*-tulwa* 「置かれる」が、ともに 3 人称単数の主語接頭辞でマークされているが、定形の *-chaka* 「欲しい」をマークする主語接頭辞は *ka-* という形で、非定形（接続形）の *-tulwa* 「置かれる」をマークする主語接頭辞は、*a-* という形になっている。

(4-48) *yulya mwanak^hele ka-na-chaka a-tulwe kitako*
 DEM.DIST.CL1 child (CL1) 3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-put.PASS.SUBJ buttock
 「あの子供は、椅子に座らされたい（割礼されたい）」

主語接頭辞のうち、3 人称単数 *ka-*、3 人称複数 *wa-*、6 クラス *ya-*、16 クラス *βa-* には、それぞれ *ke-*, *we-*, *ye-*, *βe-* という異形態が存在するが、これらの異形態は TAM 接頭辞が *me-* 「完了」、*mena-* 「起動」のときに現れる。(4-49) は *-tapika* 「吐く」という動詞が *mena-* 「起動」でマークされる例だが、3 人称単数の主語接頭辞が *ke-* となっている。

(4-49) *ke-mena-tapika yake*
 3SG.SM-INCH-vomit his.CL1
 「彼の（妻）が吐き始めている」

1 人称単数の主語接頭辞、及び目的語接頭辞には、*nyi-* と *N-* という異形態がある⁶⁰。*nyi-* から *N-* への縮約が生じていると考えるならば、これらの形態素が、半母音を除く子音で始まる形態素の前に現れる場合に、この縮約が生じるということになる⁶¹。ただし、この縮約が義務的か随意的であるかは、形態素や現れる位置によって異なる。

まず、1 人称単数の主語接頭辞は、子音で始まる語幹や目的語接頭辞、否定接頭辞 *si-* が後続する場合、*N* へ弱化しやすいが、この弱化は随意的である。(4-50) に 1 人称単数

⁶⁰ 本論文では、*nyi~N* という異形態をもつ 1 人称単数の主語接頭辞及び目的語接頭辞、行為者標識に言及する際、特に必要がない限り *nyi* を見出し形式として提示する。

⁶¹ 半母音 *w, y* の前で *N* という異形態を用いることは容認こそされるものの、自然発話では観察されない。

の主語接頭辞に 8 クラスの目的語接頭辞 *vi-* が後続する例を提示する。(4-50a) では、主語接頭辞に縮約が生じていないが、(4-50b) では縮約が生じている。

(4-50) a. *nyi-v-ijua*

1SG.SM-CL8.OM-know.PFV

b. *N-v-ijua*

1SG.SM-CL8.OM-know.PFV

「私は知っている」

TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」、*me-* 「完了」、*mena-* 「起動」、*ka-* 「継起」「条件」「行程」が後続する場合、1 人称単数の主語接頭辞は義務的に *N-* となる。なお、1 人称単数の主語接頭辞は、TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」、*ka-* 「継起」「条件」「行程」と、それぞれかばん形態 *ch^ha-*、*ha-* を形成することもある。(4-51) に *cha-* 「未来」が 1 人称単数の主語接頭辞に後続する例と、この二つの接頭辞がかばん形態 *cha-* を形成する例を提示する。

(4-51) a. *N-cha-kwenda paje*

1SG.SM-FUT-go PN

b. *ch^ha-kwenda paje*

FUT:1SG.SM-go PN

「私はパジェに行くだろう」

(4-52) には、*ka-* 「行程」が 1 人称単数の主語接頭辞 *N-* に後続する例と、この二つの接頭辞がかばん形態 *ha-* を形成する例を提示する。

(4-52) a. *N-ka-chukue nini*

1SG.SM-ITV-take.SUBJ what

b. *ha-chukue nini*

ITV:1SG.SM-take.SUBJ what

「私は何を取りにいけばいい？」

(4-53) のように、1 人称単数の主語接頭辞の直後に成節鼻音が現れる場合、主語接頭辞の縮約は生じない。この環境で縮約が妨げられるのは、成節鼻音が連続することが許されないためであると考えられる。

(4-53) *nyi-m-kut^hu* *ba-nyachia*
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV Mr.-PN
 「私は、ニャチアおじさんに会った」

1 人称単数の目的語接頭辞の縮約はより単純である。1 人称単数の目的語接頭辞は、半母音以外の子音で始まる語幹が後続する場合、義務的に *N-* となる。(4-54) に 1 人称単数の目的語接頭辞が現れる例を提示する。

(4-54) *ka-N-dumbu*
 3SG.SM-1SG.OM-agree.PFV
 「彼は私に同意した」

なお、受動文において、行為者をマークする行為者標識も、*nyi=, N=* という異形態をもつが、行為者標識は半母音を除く子音の前で随意的に縮約する。(4-55) はともに、行為者標識が *nyoka* 「ヘビ」をマークしている。

(4-55) a. *k-enda-ligwa* *nyi=nyoka*
 3SG.SM-go:IPFV-eat.PASS by=snake
 b. *k-enda-ligwa* *N=nyoka*
 3SG.SM-go:IPFV-eat.PASS by=snake
 「彼は、ヘビに食べられに行く」

1 人称単数の主語接頭辞と目的語接頭辞、及び行為者標識は、*ng* で始まる形態素が後続する場合現れない。以下に、まず主語接頭辞がこの環境で現れないことを示す例を提示する。まず、次の三つの例は、主語接頭辞がこの環境で現れないことを示している。(4-56) ではコンピュータ動詞の持続形-*ngali* の前に、(4-57) では TAM 接頭辞 *nge-* 「反実仮想」の前に、(4-58) では「待つ」を意味する動詞の完結語幹-*ngii* の前に 1 人称単数の主語接頭辞が現れることが予想されるが、実際には現れていない。

(4-56) *ngali* *kae*
 COP.PER:1SG.SM PN
 「私はまだカエにいる」(コンピュータ動詞持続形-*ngali*)

(4-57) *nge-kaa baraza-ni kama ku-wa-βo*
 CF:1SG.SM-take_a_seat stone_seat-LOC if 2SG.SM-COP.PFV-CL16.PRO
 「あなたがいるのなら、縁側に座ったのに」(TAM 接頭辞 *nge-* 「反実仮想」)

(4-58) *mie ngii gari-ni*
 1SG.PRO go_in.PFV:1SG.SM car-LOC
 「私は車に乗った」(*-ngia* 「入る」)

(4-59) は目的語接頭辞が現れないことを示す例である。4.1.4.2 節で述べる通り、目的語が 1 人称単数の場合、目的語接頭辞は義務的に現れるはずだが、動詞が *ng* で始まる *-ngoja* 「待つ」の場合、目的語接頭辞が現れない。

(4-59) *ka-na-ngoja mie*
 3SG.SM-IPFV-wait:1SG.OM 1SG.PRO
 「彼は私を待っている」(*-ngoja* 「待つ」)

次に行為者標識が現れないことを示す例を提示する。*-kazwa* は *-kaza* 「好む」から派生した受動動詞である。好まれる対象は、*-kaza* では主語として現れ、対応する受動動詞 *-kazwa* を用いた受動文では行為者標識でマークされて現れるはずだが、(4-60) に示す通り、*ngondo* 「暴力」が好まれる対象の場合、行為者標識が現れない。

(4-60) *ka-kazwa ngondo*
 3SG.SM-please.PASS.PFV violence:by
 「彼は暴力を好む」(*ngondo* 「暴力」)

1 人称単数の主語接頭辞と目的語接頭辞、及び行為者標識の不在は、後続する形態素や語の初頭音が *ng* でありさえすれば、後続する形態素がなんであれ生じる。このことから、この形態素の不在は、*N* という異形態をもつ形態素のこの環境における自動的な脱落であると考えられる。なお、動詞の定形が TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」でマークされる場合も、1 人称単数の主語接頭辞は現れない。一見すると、直後の形態素の初頭音が鼻音の場合に、*nyi-N* という音形をもつ形態素が現れないという規則があるようにも思われるが、こうした一般化はできない。(4-61)(4-62) に示す通り、TAM 接頭辞が *na-* の場合、定形では、1 人称単数の主語接頭辞が現れないが、関係節接頭辞で動詞がマークされた形式では、1 人称単数の主語接頭辞が義務的に出現する。このことから、1 人称

単数の主語接頭辞の TAM 接頭辞 *na-*の直前における脱落は、音韻論的に動機づけられているわけではないと考えられる。

(4-61) *na-chaka pesa*
 IPFV:1SG.SM-want money
 「私は金が欲しい」

(4-62) a. [*N-na-yo-i-chaka*] *si=iyo*
 1SG.SM-IPFV-CL9.REL-CL9.OM-want NEG=DEM.MED.CL9
 b. **[na-yo-i-chaka]* *si=iyo*
 IPFV:1SG.SM-CL9.SM-CL9.OM-want NEG=DEM.MED.CL9
 「私がほしいのはそれではない」

2 人称複数主語接頭辞、18 クラス主語接頭辞、1 クラス目的語接頭辞は、*m~mu-*という異形態をもつ。このうち、2 人称複数主語接頭辞と 18 クラス主語接頭辞は、非融合母音語幹の前では *mu-*となり、初頭音が子音の形態素の直前では、*m-*と *mu-*が自由交替する。(4-63) では、動詞が、場所名詞 *msikiti-ni* 「モスクに」との一致を示す 18 クラスの主語接頭辞でマークされている。この例の 18 クラスの主語接頭辞は *mu-*となっているが、これは *m-*に置き換えることもできる⁶²。

(4-63) *msikiti-ni mu-na-ngia wat^hu*
 mosque-LOC CL18.SM-IPFV-come_in people
 「モスクに人が入っている」

1 クラスの目的語接頭辞は、非融合母音語幹の前では *mu-*となり、初頭音が子音の形態素の直前では、義務的に *m-*となる。(4-64a) は、3 人称単数の目的語接頭辞 *mu-*が、非融合母音語幹 *-uza* 「尋ねる」の前に現れることを示している。(4-64b) は、同じように 3 人称単数の目的語接頭辞を用いた例だが、語幹の初頭音が子音で、3 人称単数の目的語接頭辞の形は *m-*となる。

⁶² マクンドゥッチ方言では、(4-63) のように、場所名詞が主語となることもある。こうした構文については、4.2.2 節、及び 9.2.3 節で説明する。

(4-64) a. *nyi-mu-uzu*

1SG.SM-3SG.OM-ask.PFV

「私は彼に尋ねた」

b. *nyi-m-jibu*

1SG.SM-3SG.OM-answer.PFV

「私は彼に答えた」

1 人称単数の主語接頭辞の *nyi-* から *N-* への縮約について説明した際に、成節鼻音の連続を許さない制約があることを述べたが、その制約は、2 人称複数や 18 クラスの主語接頭辞に対しても働く。(4-65) のように、目的語接頭辞のスロットに成節鼻音が現れる場合、2 人称複数や 18 クラスは *m-* ではなく、*mu-* となる。

(4-65) *mu-N-sumku*

2PL.SM-1SG.OM-escape.PFV

「あなたたちは私から逃げた」

4.1.4.2 目的語接頭辞の出現について

主語接頭辞は、上で述べたような例外的なケースを除き義務的に現れる。それに対して、目的語接頭辞は、現れないことも多い。目的語接頭辞が義務的に現れるか、あるいは現れやすいかどうかは、目的語の意味的な特性や、目的語の現れる位置によって異なる。以下で、目的語接頭辞がどのような場合に現れ、どのような場合に現れないのかを簡単に説明する。

まず、目的語接頭辞は、目的語が有生物の場合、現れやすい。(4-66)(4-67) では、目的語が、1,2 人称単数の代名詞となっているが、これらの例では、目的語接頭辞が義務的に現れる。

(4-66) a. *pandu ka-N-pigi mie*

PN 3SG.SM-1SG.OM-hit.PFV 1SG.PRO

b. **pandu ka-pigi mie*

PN 3SG.SM-hit.PFV 1SG.PRO

「パンドゥは私を殴った」(目的語が 1 人称単数の代名詞)

(4-67) a. *pandu ka-ku-pigi weye*
 PN 3SG.SM-2SG.OM-hit.PFV 2SG.PRO

b. **pandu ka-pigi weye*
 PN 3SG.SM-hit.PFV 2SG.PRO

「パンドゥはあなたを殴った」(目的語 2 人称単数の代名詞)

以下の例に示す通り、目的語が 1,2 人称以外の有生物を指示対象とする場合は、目的語接頭辞でマークされない動詞活用形の使用の容認性が少し変わる。(4-68) は人名を表す名詞が目的語となる例、(4-69) は複数の人名を表す名詞が目的語となる例、(4-70) は動物を表す名詞が目的語となる例、(4-71) は有生物を指示対象とする 1 クラス以外の名詞が目的語となる例である。これらの例は、目的語接頭辞があるほうがより自然な形となるが、ない形も容認される。

(4-68) a. *juma ka-m-pigi asani*
 PN 3SG.SM-3SG.OM-hit.PFV PN

b. ?*juma ka-pigi asani*
 PN 3SG.SM-hit.PFV PN

「ジュマはアサニを殴った」(目的語が人名の例)

(4-69) a. *pandu ka-wa-pigi haji na=ali*
 PN 3SG.SM-3PL.OM-hit.PFV PN COM=PN

b. ?*pandu ka-pigi haji na=ali*
 PN 3SG.SM-hit.PFV PN COM=PN

「ジュマはハジとアリを殴った」(目的語が複数の人名の例)

(4-70) a. *juma ka-m-pigi nguruwe*
 PN 3SG.SM-3SG.OM-hit.PFV hog (CL1)

b. ?*juma ka-pigi nguruwe*
 PN 3SG.SM-hit.PFV hog (CL1)

「ジュマはイノシシを殴った」(目的語が 1 クラスの動物の例)

(4-71) a. *pandu ka-ki-pigi kitu*
PN 3SG.SM-CL7.OM-hit.PFV wildcat (CL7)

b. *?pandu ka-pigi kitu*
PN 3SG.SM-hit.PFV wildcat (CL7)

「パンドゥは山猫を殴った」(目的語が7クラスの動物の例)

目的語が有生物を指示対象とする場合、目的語接頭辞は用いられやすいという傾向はあるが、自然発話のなかには、(4-72) に示す通り、目的語が有生物でも目的語接頭辞が現れない例もみられる。

(4-72) *ke-mena-ua wat^{hu}*
3SG.SM-INCH-kill people

「彼は人々を殺し始めた」(目的語が有生物だが目的語接頭辞のない例)

目的語が無生物を表す名詞句の場合は、有生物の場合と異なり、目的語接頭辞の現れやすさが、目的語の位置に左右される。まず、(4-73) に示す通り、目的語が、動詞のあとに現れる場合は、目的語接頭辞の出現が随意的となる。

(4-73) a. *pandu ka-ki-pigi kit^{hu}*
PN 3SG.SM-CL7.OM-hit.PFV thing (CL7)

b. *pandu ka-pigi kit^{hu}*
PN 3SG.SM-hit.PFV thing (CL7)

「パンドゥはモノを殴った」(目的語が7クラスのモノの例)

一方、次の二つの例に示す通り、目的語が、述語のあとではなく、前に現れる場合、目的語接頭辞が必要になることがある。(4-74a)(4-75a) では、目的語が動詞のあとに、(4-74b, c)(4-75b, c) では、目的語が動詞の前に現れている。目的語接頭辞の有無に着目しながら、これらの例を観察されたい。

- (4-74) a. *ka-cha-futa* *maji*
 3SG.SM-FUT-delete water (CL6)
 b. *maji* *ka-cha-ya-futa*
 water (CL6) 3SG.SM-FUT-CL6.OM-delete
 c. **maji* *ka-cha-futa*
 water (CL6) 3SG.SM-FUT-delete
 「彼は水を取り除いた」(目的語：*maji*「水」)

- (4-75) a. *ka-cha-finika* *dishi*
 3SG.SM-FUT-cover cooking_pot (CL5)
 b. *dishi* *ka-cha-li-finika*
 cooking_pot (CL5) 3SG.SM-FUT-CL5.OM-cover
 c. **dishi* *ka-cha-finika*
 cooking_pot (CL5) 3SG.SM-FUT-cover
 「彼は鍋に蓋をするだろう」(目的語：*dishi*「鍋」)

ただし、目的語が述語の前に現れれば、目的語接頭辞が現れるという一般化も成り立たない。(4-76)(4-77)では、目的語が述語の前に現れているが、動詞は目的語接頭辞でマークされていない。

- (4-76) *pandu nyumba* *ka-jenge* *hea i-bomoko*
 PN house (CL9) 3SG.SM-build.PFV but CL9.SM-break.NEU.PFV
 「パンドゥは家を建てたが、壊れた」(目的語：*nyumba*「家」)

- (4-77) *zilya* *nazi* *ke-mena-kuna*
 DEM.DIST.CL10 coconut (CL10) 3SG.SM-INCH-scratch
 「あのココナツは彼が削り始めている」(目的語：*zilya nazi*「あのココナツ」)

なお、目的語接頭辞は、共起できる疑問詞にも制限がある。(4-78)に示す通り、目的語接頭辞は、目的語が *nini*「何」の場合、現れることができないが、*-βi*「どれ」の場合は、現れることができる。

(4-78) a. **ka-na-ki-chaka* *nini*
 3SG.SM-IPFV-CL7.OM-want what
 「彼は何がほしいの？」

b. *ka-na-ki-chaka* *kiβi*
 3SG.SM-IPFV-CL7.OM-want which:CL7
 「彼はどれが欲しいの？」

この例から、目的語となるものの指示対象が特定されていなくても、その指示対象が属する集合が分かっているならば、目的語接頭辞は用いることができると考えられる。

4.1.4.3 目的語接頭辞のその他の特徴

目的語接頭辞に関しては、留意すべき点が他に二つある。一つは、目的語が2人称複数となる場合の形式である。目的語が2人称複数の場合、目的語接頭辞のロットには、2人称単数の目的語接頭辞と同形の *ku-*、3人称単数の目的語接頭辞と同形の *m-*、3人称複数の目的語接頭辞と同形の *wa-* のいずれかが現れ、それに加えて、語幹の後ろに聞き手が複数であることを表す接語=*ni* が現れる。(4-79) は目的語が2人称複数で、目的語接頭辞として *ku-*、*m-* が現れる例、(4-80) は、目的語が2人称複数で目的語接頭辞として *wa-* が現れる例である。

(4-79) a. *nyi-ku-kut^hu=ni*
 1SG.SM-2SG.OM-meet.PFV=AL.PL
 b. *nyi-m-kut^hu=ni*
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV=AL.PL
 「私はあなたたちに会った」

(4-80) *nyuwe ka-wa-uzu=ni*
 2PL.PRO 3SG.SM-3PL.OM-ask=AL.PL
 「あなたたちに、彼は尋ねた」

目的語接頭辞に関して、留意すべきもう一つの点は、再帰接頭辞 *ji-* についてである。動詞活用形の目的語接頭辞のロットには、主語と同一の対象を指す再帰接頭辞 *ji-* が現れることがある。(4-81) では、*-tia* 「入れる」が *ji-* でマークされている。また、

(4-82) では、*-ficha*「隠す」が *ji-* でマークされ、全体で「隠れる」という意味を表している。

(4-81) *wa-ø-vyo-fika* *wazee wa-ka-ji-tia* *mivungu-ni*
3PL.SM-PFV-CL8.REL-arrive elders 3PL.SM-CONS-REFL-put under_the_bed-LOC
「彼ら（鬼と子供）が着いたとき、老夫婦は、ベッドの下に潜りこんだ（自分たちを入れた）」

(4-82) *ka-ji-fichi*
3SG.SM-REFL-hide.PFV
「彼が隠れた」

4.2 特殊な形式的特徴をもつ動詞

本節では、形態的、あるいは統語的に他の多くの動詞とは異なる特徴をもつ動詞の記述を行う。なお、コピュラ動詞も、特殊な形式的特徴をもつ動詞の一つだが、コピュラ動詞については、8.1 節で説明する。

4.2.1 欠損動詞

-ijua「知る」、*-kaza*「好む」、*-chukia*「嫌う」は、TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされる活用形を欠いている。これは、これらの動詞に内在するアスペクト特性と関連する特徴の一つと考えられる（7.1 節参照）。

また、*-ebu*「要る」は、否定接頭辞 *ha-*、主語接頭辞、及び目的語接頭辞でマークされる活用形しかもたない⁶³。ただし、*-ebu* に対応する *-ebugwa* という受動動詞は存在する。なお、受動動詞については後述する。(4-83a) は *-ebu* の例、(4-83b) は、*-ebu* の受動動詞 *-ebugwa* を用いた例である。

⁶³ Chum (1963: 54) には、*-ebu* が 1 人称単数の否定接頭辞だけでマークされた *sebu* という形式が記されている。しかし、筆者のインフォーマントによれば、この形式は、マクンドウチではなく、マクンドウチの北に位置するパジェで使われるものとのことである。

(4-83) a. *N-choko* *ṁhogo* *si-w-ebu*⁶⁴
 1SG.SM-get_tired_PFV cassava (CL3) 1SG.SM:NEG-CL3.OM-want
 「キャッサバには飽きたよ、私は要らない」

b. *u-ka-wa* *ṁkongwe* *hw-ebugwa*
 2SG.SM-COND-COP old.CL1 2SG.SM:NEG-want.PASS
 「あなたが年老いたら、求められない」 (-*ebu* が受動動詞となる例)

4.2.2 -*na* 「所有」

所有を表す動詞-*na* は *na*- 「未完結」、*mena*- 「起動進行」、*a*-, *ø*- 「完結 (関係節)」でマークされる形式をもたない⁶⁵。また、(4-84) に示す通り、現在あるものを所有していること (または所有していないこと) を表す場合、-*na* は主語接頭辞だけでマークされるが、この主語接頭辞と-*na* のみからなる活用形も、特殊な形式であると考えられる。

(4-84) *ka-na* *pesa*
 3SG.SM-POSS money
 「彼は金を持っている」

主語接頭辞と-*na* のみからなる活用形が特殊な形式であると考えられる理由については少し説明が必要となる。まず、(4-85) に示す通り、コピュラ動詞の完結形は、基本語幹と同形の完結語幹と主語接頭辞から成ることを確認されたい。

(4-85) *ka-wa* *mwalimu*
 3SG.SM-COP.PFV teacher
 「彼は教師である」

このコピュラ動詞のように、-*Ca* という音形の基本語幹をもつ 1 音節語幹の動詞の完結形が、基本語幹と同形の完結語幹と主語接頭辞から形成されることや (6.2.4 節参照)、コピュラ動詞をはじめとする状態動詞が完結形で現在の状態を表すことを考慮に入れると (7.1.1 節、8.2 節参照)、現在所有していることを表す (4-84) の主語接頭辞と語幹-*na* のみからなる *ka-na* という形式は、動詞の完結形のようにもみえる。

⁶⁴ ちなみに、(4-83) の *ṁhogo* 「キャッサバ」は-*choka* 「飽きる」の目的語ではない。

⁶⁵ 話者によっては *na*- 「未完結」 *mena*- 「起動」で所有の-*na* をマークする形式を容認するが、実際に使われることはないと考えられる。

しかし、この活用形は完結形ではない。そのことは、主語関係節接頭辞 *m-* でマークされた活用形をみると分かる⁶⁶。(4-86) に示す通り、*-na* は、主語関係節接頭辞 *m-* でマークされた場合、TAM 接頭辞なしで現在あるものを所有していることを表せる。

(4-86) *m-na* *ng'ombe*
CL1.SM.REL-POSS cow
「牛をもつ者（所有している者）」

それに対して、状態動詞は、主語関係節接頭辞 *m-* でマークされる活用形で現在の状態を表す際、TAM 接頭辞 *a-* 「完結」でマークされる。(4-87) はコピュラ動詞を用いた例である。

(4-87) *mw-a-wa* *mwali mu nani*
CL1.SM.REL-PFV-COP teacher who
「教師であるのは誰？」

主語関係節接頭辞 *m-* でマークされた際に TAM 接頭辞 *a-* 「完結」でマークされないという事実から、*-na* は完結を表す形式に活用することなく（完結という標示なしで）、現在所有していることを表せる動詞であることが分かる。こうした、関係節接頭辞 *m-* でマークされた場合の形式的特徴を考慮にいと、(4-84) の主語接頭辞と語幹のみからなる *ka-na* という形式は、完結形ではなく、TAM に関する標示のない活用形であると考えられる。他の動詞に、こうした TAM に関する標示のない活用形はない。

所有を表す動詞 *-na* の特殊な点として、コピュラ動詞に後続する際の形式も挙げられる。後述する通り、コピュラ動詞は、TAM に関する情報を表す助動詞として用いられることもある（4.5 節、8.6 節参照）。このコピュラ動詞に後続する動詞は、主語接頭辞でマークされるはずだが、(4-88) に示す通り、*-na* は、必ずしも主語接頭辞を必要としない。なお、(4-88c) に示す通り、*-na* が TAM 接頭辞で直接マークされることもある⁶⁷。

⁶⁶ 主語関係節接頭辞 *m-* でマークされた活用形については、10.1.1 節で説明する。

⁶⁷ *-na* を用いた同様の所有表現はスワヒリ語にもあるが、スワヒリ語の *-na* は TAM 接頭辞でマークされない。

- (4-88) a. *ka-cha-wa ka-na shida*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-POSS difficulty
- b. *ka-cha-wa na shida*
 3SG.SM-FUT-COP POSS difficulty
- c. *ka-cha-na shida*
 3SG.SM-FUT-POSS difficulty
- 「彼は困難を抱えるだろう (彼は困るだろう)」⁶⁸

所有を表す動詞-*na* は、他の動詞と異なり、目的語接頭辞でマークされることもない。その代わり、-*na* は所有物を示す拘束代名詞でマークされる。次の (4-89a) の-*na* は、拘束代名詞でマークされていないが、(4-89b, c) の-*na* は拘束対名詞でマークされている。(4-89b, c) は、拘束代名詞と呼応する名詞 *kisu* 「ナイフ」が、述語の前後どちらに現れるかが異なる。

- (4-89) a. *ka-na kisu*
 3SG.SM-POSS knife (CL7)
- b. *kisu ka-na-cho*
 knife (CL7) 3SG.SM-POSS-CL7.PRO
- c. *ka-na-cho kisu*
 3SG.SM-POSS-CL7.PRO knife (CL7)
- 「彼はナイフを持っている」

この拘束代名詞は、所有されるものを表す名詞が、述語の前に位置する際は義務的に現れるが、述語の後に位置する場合は、随意的に現れる。4.1.4.2 節で述べた通り、目的語接頭辞は、目的語が述語に先行する場合現れやすく、目的語が述語の後に現れる場合は出現が随意的になる。-*na* をマークする拘束代名詞と動詞をマークする目的語接頭辞は、一致する名詞句の位置に応じて出現するかが変わるという点で類似している。

-*na* のそれ以外の特殊な点として、節中で現れることのできる位置というのもあげることができる。他のほとんどの動詞は、節末に現れることができるが、(4-90a) に示す通り、所有を表す-*na* の肯定形は節末に現れることができない。ただし、(4-89b) で示し

⁶⁸ 所有の-*na* には、状態を表す名詞が後続して、主語の指示対象の状態が表されることがある。-*na* に後続している名詞として、次のようなものを確認している。*kiu* 「渇き」、*homa* 「熱」、*njaa* 「空腹」、*mimba* 「妊娠」、*oga* 「恐れ」、*shongo* 「急ぎ」、*usindizi* 「眠気」、*wasiwasi* 「心配」、*wivu* 「妬み」

た通り、*-na* が拘束代名詞でマークされる場合は、節末に現れることができる。また、(4-91) に示す通り、*-na* の否定形は節末に現れうる。

- (4-90) a. **sasa simu ka-na*
now phone 3SG.SM-POSS
b. *sasa ka-na simu*
now 3SG.SM-POSS phone
「今彼は、携帯電話を持っている」

- (4-91) *sasa simu ha-na*
now phone 3SG.SM-POSS
「今、彼は携帯電話を持っていない」

また、(4-92) に示す通り、*-na* と所有物を表す名詞との間には、時間副詞などほかの自立語を挿入することができない。(4-90b) で示した通り、*-na* の直後には、所有物を表す名詞句が現れなければならない、時間副詞は、*-na* の前か所有物を表す名詞の後に現れなければならない。

- (4-92) **ka-na sasa simu*
3SG.SM-POSS now phone
「彼は今携帯電話を持っている」

なお、所有を表す*-na* は、(4-93) に示す通り、15, 16, 18 クラスの主語接頭辞でマークされ、*-na* に後続する名詞の指示対象が存在することを表すために用いられることもある。(4-93) では、*-na* が 15 クラスの主語接頭辞 *ku-* でマークされているが、存在する位置によっては、16 クラスの *βa-* や 18 クラスの *mu-* で *-na* がマークされることもある。

- (4-93) *uko ku-na ki-bibi kikongwe*
DEM.MED.CL15 CL15.SM-POSS DIM-grandmother (CL7) old.CL7
「そこには、小さな老婆がいる」

ちなみに、他の動詞も、「倒置構文」と呼ばれる構文で、場所を主語にとることがあるが、*-na* が主語接頭辞でマークされる構文は、こうした倒置構文とは異なる統語的性質をもつ (9.2.3 節参照)。

4.2.3 -enda 「行く」

-enda 「行く」には、語幹の形が基本語幹であるにもかかわらず、TAM 接頭辞が現れない活用形がある。この活用形は、TAM 接頭辞 *na*- 「未完結」でマークされた活用形と同じように、進行（これから行くこと）や習慣を表す。(4-94)(4-95) は、*na*-の有無にかかわらず、同じ事態を表すことを示している。(4-94) は-*enda* が進行を、(4-95) は-*enda* が習慣を表す例である。

- (4-94) a. *m^hu yuno ka-na-kwenda wapi*
person DEM.PROX.CL1 3SG.SM-IPFV-go where
b. *m^hu yuno k-enda wapi*
person DEM.PROX.CL1 3SG.SM-go:IPFV where
「この人はどこに行くの？」

- (4-95) a. *kila jumapili ka-na-kwenda p^hwa-ni*
every Sunday 3SG.SM-IPFV-go sea-LOC
b. *kila jumapili k-enda p^hwa-ni*
every Sunday 3SG.SM-go:IPFV sea-LOC
「日曜日にいつも、彼は海に行く」

この TAM 接頭辞 *na*-なしで未完結を表す-*enda* 「行く」の活用形の特徴として、以下の三点を挙げることができる。

- 主語が 1 人称単数の場合、主語接頭辞は現れず、語幹も初頭母音を欠いた *nda* という形になる。
- 動詞語幹か、*ka*- 「継起」でマークされた動詞活用形が後続することが多い。
- *na*-を伴う場合と異なり、必ず別の語が後続する。

(4-96) は一つ目の特徴を示す例である。この文の主語は 1 人称単数だが、-*enda* の主語接頭辞が脱落した形式 *nda* が用いられている。

- (4-96) *nda-tafuta maji*
go:IPFV:1SG.SM-search water
「私は水を探しに行く」

なお、主語が1人称単数の際の、主語接頭辞と語幹の初頭母音 *e* の脱落は、(4-97) に示す通り、完結形や接続形でも観察される。この完結形や接続形における主語接頭辞と語幹の初頭母音の脱落は、随意的に生じることが確認されている。(4-97a) は、*-enda* 「行く」の完結形を用いた例で、主語接頭辞が脱落した形式 *nde* と、脱落していない形式 *nyende* が現れている。また、(4-97b) は、*-enda* の接続形を用いた例で、主語接頭辞が脱落した形式 *nde* と、脱落していない形式 *nyende* が現れている。

- (4-97) a. *ny-evu* {*nde/ny-ende*} *skuli*
 1SG.SM-COP.PST go.PFV:1SG.SM/1SG.SM-go.PFV school
 「私は学校に行った」(完結形で1人称単数の主語接頭辞が脱落する例)
- b. *na-chaka* *N-je* {*nde/ny-ende*} *nji-ni*
 IPFV:1SG.SM-want 1SG.SM-come.SUBJ go.SUBJ:1SG.SM/1SG.SM-go.SUBJ town-LOC
 「私は街に行きたい」(接続形で1人称単数の主語接頭辞が脱落する例)

二つ目の、後続する要素に関する特徴は、自然談話の観察から分かる。(4-94) (4-95) で示した通り、TAM 接頭辞 *na-* を欠く未完結の *-enda* には、場所を表す語も後続することができるが、自然談話でこの語形が用いられる際、ほとんどの場合、場所を表す語ではなく他の動詞が後続する。計約 40 分の Zainabu 氏の自然談話(物語)の中に出てくる用例をみると、*na-* のない *-enda* 「行く」は、24 例あるが、そのうち 22 例では、動詞の基本語幹か *ka-* 「継起」でマークされた動詞活用形が後続している。例えば、先に提示した (4-96) では、*-enda* に動詞語幹が後続している。また、(4-98) では、*-enda* に *ka-* でマークされる動詞が後続している。

- (4-98) *k-enda* *a-ka-bana* *ndege*
 3SG.SM-go:IPFV 3SG.SM-CONS-press birds
 「彼は鳥を挟みに(捕まえに)行く」

(4-99) は、三つ目の特徴を示す例である。*-enda* が TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」を欠く場合、場所を表す名詞 *skuli* 「学校」は、必ず *-enda* の後に現れなければならない。

- (4-99) a. **fatuma skuli k-enda*
 PN school 3SG.SM-go:IPFV
 b. *fatuma k-enda skuli*
 PN 3SG.SM-go:IPFV school
 「ファトマは学校に行く」

これとは対照的に、*-enda* が TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされる場合、場所を表す名詞句は、*-enda* の前にも現れる。(4-100a) では、*p^hwa-ni*「海に」が*-enda* の前に、(4-100b) では、*p^hwa-ni*「海に」が*-enda* の後に現れている。

- (4-100) a. *p^hwa-ni ka-na-kwenda*
 sea-LOC 3SG.SM-IPFV-go
 b. *ka-na-kwenda p^hwa-ni*
 3SG.SM-IPFV-go sea-LOC
 「海に彼は行く」

なお、この TAM 接頭辞 *na-*を欠く *-enda* は、別の語の後続を義務的に要求するという点で、所有を表す動詞 *-na* と似ているが、所有の *-na* とは異なり、弱化した *-enda* と場所を表す名詞句の間には、時間副詞を挿入できる。(4-101) では、弱化した *-enda* と場所名詞 *nyumba-ni*「家に」の間に、時間副詞 *kesho*「明日」が現れている。

- (4-101) *k-enda kesho nyumba-ni*
 3SG.SM-go:IPFV tomorrow house-LOC
 「彼は明日家に行く」

4.2.4 *-chaka*「欲する」

-chaka「欲する」は、現在あるものが欲しいことを表す際、TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされるが、主語が 1 人称単数の場合に限り、TAM 接頭辞 *na-*なしで用いられることがある。(4-102) の一つ目の *-chaka* は TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされているが、二つ目の *-chaka* は主語接頭辞だけでマークされている。

- (4-102) *a-ka-mw-ambia* *baba na-chaka* *mchumba N-chaka* *ṁke ṁpya*
 3SG.SM-CONS-3SG.OM-tell father IPFV:1SG.SM-want lover 1SG.SM-want:IPFV wife new.CL1
 「彼は（父親に）言いました『お父さん、私は恋人がほしいです、私は新しい妻がほしいです』」

N-chaka という 1 人称単数の主語接頭辞と語幹だけからなる活用形は、一見すると完結形のようにもみえるが、完結形ではなく、*na-*「未完結」でマークされた活用形と同等の事態を表す形式であることは、次の例からも分かる。

- (4-103) a. *kesho* *N-chaka* *nde* *ṁji-ni*
 tomorrow 1SG.SM-want go.SUBJ:1SG.SM town-LOC
 b. *kesho* *na-chaka* *nde* *ṁji-ni*
 tomorrow IPFV:1SG.SM-want go.SUBJ:1SG.SM town-LOC
 「明日私は街に行きたい」

(4-103) では、*-chaka* に *-enda* 「行く」の接続形が後続して「行きたい」という意味が表されている。(4-103a) に示す通り、1 人称単数の主語接頭辞でマークされ、*na-*「未完結」を欠いた *-chaka* は、(4-103b) の *na-* でマークされた *-chaka* と同様に *kesho* 「明日」と共起することができる。仮に、1 人称単数の主語接頭辞でマークされ、*na-*「未完結」を欠いた *-chaka* が、完結形であるとするならば、*kesho* 「明日」との共起は許されることが予想される。実際、(4-104b) に示す通り、*-chaka* が、3 人称単数の主語接頭辞でマークされ、*na-*「未完結」を欠く場合は、*kesho* 「明日」と共起することができない。(4-104b) が容認されないのは、この例の *-chaka* が完結形で、基準時時以降の事態を表すことができないためであると考えられる。

- (4-104) a. *kesho* *ka-na-chaka* *ende* *ṁji-ni*
 tomorrow 3SG.SM-IPFV-want go.SUBJ:3SG.SM town-LOC
 b. **kesho* *ka-chaka* *ende* *ṁji-ni*
 tomorrow 3SG.SM-want.PFV go.SUBJ:3SG.SM town-LOC
 「明日、彼は街に行きたい」

4.3 動詞連続

-ja「来る」、*-enda*「行く」、*-isa*「終わる」、*-aza*「始まる」には、別の動詞の基本語幹、あるいは目的語接頭辞でマークされた基本語幹が後続する。(4-105) には、*-ja*「来る」の完結形に、*-tenda*「する」の基本語幹が後続する例を提示する。

(4-105) *ku-ja-tenda=je*

2SG.SM-come.PFV-do=Q

「あなたは何をしに来たのですか」

この動詞連続の間には、自立語を挿入することができない。挿入できるのは、接語の=*ga*⁶⁹くらいである。TAM 接頭辞と語幹の間にも、自立語を挿入することはできないが、=*ga*を挿入することはできる。このことから、この動詞連続における二つの動詞語幹のつながりは、TAM 接頭辞と語幹と同程度のもと考えられる。次の(4-106a)では、TAM 接頭辞 *cha-*「未来」のあとに=*ga*が現れている。また、(4-106b)では、*-ja*「来る」のあとに=*ga*が現れている。

(4-106) a. *ka-cha=ga-soma*

3SG.SM-FUT=GA-study

「彼はちょっと勉強するだろう」

b. *ka-ja=ga-soma*

3SG.SM-COME.PFV=GA-study

「彼はちょっと勉強しに来た」

-ja「来る」は1音節語幹、*-enda*「行く」、*-isa*「終わる」、*-aza*は融合母音語幹である。これらの語幹をもつ動詞が、特定の TAM 接頭辞や関係節接頭辞でマークされる場合、前述の通り、語幹は無意味形態 *ku-*を伴った異形態の形で現れうる。しかし、*-ja*と*-enda*が動詞連続の前部要素となる場合は、次の例に示す通り、無意味形態 *ku-*の出現が予想される環境でも *ku-*を伴わずに現れることがほとんどである。(4-107) は、*-enda*に別の動詞の語幹が後続する例、(4-108) は *-ja*「来る」に別の動詞の語幹が後続する例である。他の動詞の語幹が後続する場合、*-ja*「来る」や*-enda*「行く」が無意味形態 *ku-*を伴った

⁶⁹ Chum (1994: 21) は、=*ga*に対して、intensifying adverb, instantly, just a little という説明や訳をつけているが、=*ga*の詳細な機能は現段階で不明である。

形で現れることは、容認こそされるものの、自然談話では観察されない。

- (4-107) *N-ch-enda-kaa uko*
1SG.SM-FUT-go-live DEM.MED.CL15
「私はそこに住みに行くだろう」

- (4-108) *ke-me-ja-βika*
3SG.SM-PRF-come-cook
「彼は料理をするために来た」

また、*-isa, -aza* では、後続する動詞語幹が不定形と交替しやすいが、*-ja, -enda* では交替しにくいということも指摘できる。(4-109)(4-110)(4-111)(4-112) は、それぞれの動詞の完結形に、他の動詞の不定形が後続できるかどうかを示している。*-isa, -aza* の完結形には他の動詞の不定形が後続するが、*-ja, -enda* の完結形には他の動詞の不定形が後続しない。なお、(4-109c)(4-110c) に示す通り、*-ja, -enda* と後続する動詞との間に、別の自立語が現れる場合は、不定形が後続する。

- (4-109) a. *ka-ja-lala*
3SG.SM-come.PFV-sleep
b. **ka-ja ku-lala*
3SG.SM-come.PFV INF-sleep
「彼は寝に来た」
c. *ka-ja sasa ku-lala*
3SG.SM-come.PFV now INF-sleep
「彼は今寝に来た」

- (4-110) a. *k-ende-lala*
3SG.SM-go.PFV-sleep
b. **k-ende ku-lala*
3SG.SM-go.PFV INF-sleep
「彼は寝に行った」
c. *k-ende sasa ku-lala*
3SG.SM-go.PFV now INF-sleep
「彼は今寝に行った」

- (4-111) a. *k-esi-zungumza*
 3SG.SM-finish.PFV-chat
 b. *k-esi* *ku-zungumza*
 3SG.SM-finish.PFV INF-chat
 「彼は話し終えた」

- (4-112) a. *k-aza-zungumza*
 3SG.SM-begin.PFV-chat
 b. *k-aza* *ku-zungumza*
 3SG.SM-begin.PFV INF-chat
 「彼は話し始めた」

-isa「終わる」が、動詞連続の前部要素となる場合、(4-113) に示す通り、主語が1人称単数となる際の完結形が *nyisi* ではなく、*Nsi* となることがある。

- (4-113) a. *ny-isi-zungumza*
 1SG.SM-finish.PFV-chat
 b. *N-si-zungumza*
 1SG.SM-finish.PFV-chat
 「私は話し終えた」

この *Nsi* という形式は、再分析が生じて形成されていると考えられる。想定される具体的プロセスは以下の通りである。

1. 1人称単数の主語接頭辞 *nyi-*と *-isa*「終わる」の完結語幹 *-isi* が融合して *nyisi* という完結形を形成する。
2. *nyisi* の *nyi* の部分が1人称単数の主語接頭辞として再分析される。
3. 再分析された結果生じた1人称単数の主語接頭辞 *nyi-*が *N-*へと縮約する。

この *nyisi* から *Nsi* への形式の変化は、*-isa*「終わる」に由来する部分が TAM 接頭辞として解釈されつつあるために生じていると考えられる。(4-113) の *-isa*「終わる」の完結形に他の動詞の語幹が後続する形式を用いた例と、(4-114) の TAM 接頭辞 *me-*「完了」でマークされた活用形を用いた例を対比させると、*-isa* の完結語幹にあたる *isi~si* という部分は、TAM 接頭辞のようにもみえる。

(4-114) *N-me-tenda*

1SG.SM-PRF-do

「私は（その話しは）やった」

また、動詞連続が関連する文法化は、*-ja* が前部に現れる動詞連続でも観察される。こうした*-ja*「来る」の文法化については7.4.1節で詳しく論じる。

4.4 派生動詞

マクンドゥチ方言にも、他の多くのバントゥ諸語や、スワヒリ語の他の変種と同様に、受動や適用、使役などを表す派生動詞が存在する。元の動詞の動詞語幹の末母音以外の部分を語根と呼ぶことにすると、派生動詞は、語根と末母音の間に派生接尾辞を含む形式と分析することができる。(4-115)には、派生動詞の語幹の形式を一般化したテンプレートを示す。(4-116)には、*-βik-a*「料理する」と、対応する受動を表す派生動詞*-βik-w-a*「料理される」を用いた例を挙げる。なお、本節では、派生動詞の語幹の形式を示す際は、語根、派生接尾辞、末母音の間にハイフンを付す。

(4-115) [語根－派生接尾辞－末母音]

(4-116) a. *ka-na-βik-a* *vyakulya*

3SG.SM-IPFV-cook-FV food (CL8)

「彼は食事を作っている」

b. *vyakulya* *vi-na-βik-w-a*

food (CL8) CL8.SM-IPFV-cook-PASS-FV

「食事は作られている」

(4-117) に派生接尾辞を挙げる。なお、本論文では、それぞれの接尾辞が付された動詞を、その接尾辞にちなんだ名で呼ぶことがある。例えば、受動の接尾辞が付された動詞は受動動詞となる。

(4-117) 派生接尾辞の形式 (Racine-Issa 2002: 92–102)

受動 (passive) : *-w, -lw, -ligw, -legw, -igw, -egw*

適用 (applicative) : *-i, -e, -li, -le*

使役 (causative) : *-z, -iz, -ez, -s, -es, -ish, -esh*

中立 (neutral) : *-k, -ik, -ek*

反転 (reversive) : *-u*

相互 (reciprocal) : *-an*

まず、派生接尾辞の形態的特徴について簡単に説明する。派生接尾辞のなかには、*l*を伴った異形態をもつものがあるが(受動、適用)、この異形態は、語根末が母音の場合に現れる。(4-116) の *-fik-a* 「料理する」で示した通り、語根末に子音が現れる動詞に付加される受動の派生接尾辞は *l* を含まないが、(4-118) に示す通り、語根末が母音となる動詞 *-chuku-a* 「連れて行く」に付加される受動の派生接尾辞は、*l* を含む⁷⁰。

(4-118) a. *wa-ka-ŋ-chuku-a*

3PL.SM-CONS-3SG.OM-take-FV

「彼らは彼女を連れて行く」

b. *a-ka-chuku-lw-a*

3SG.SM-CONS-take-PASS-FV

「彼は連れて行かれる」

派生接尾辞中のなかには、母音 *i* を含むものと *e* を含むものがあるが、この交替(受動、適用、使役、中立)は、語根に含まれる母音が *i, u, a* か *e, o* に対応する。次の二つは、ともに適用動詞を用いた例だが、(4-119) に示す通り、語根に *e* を含む *-leta* に対応する適用動詞には、派生接尾辞として、*e* が現れている。一方、(4-120) に示す通り、語根に *a* が含まれる *-kat^a* 「切る」の適用動詞には、派生接尾辞として *i* が現れている。

(4-119) a. *ka-let-e*

buku

3SG.SM-bring-FV(PFV) notebook (CL5)

「彼はノートをもってきた」(派生前の動詞の例)

⁷⁰ 適用動詞の末母音を除いた部分の最後にも母音が現れるが、適用動詞から受動動詞を派生させる場合、派生接尾辞は *l* を含まない (Racine-Issa 2002: 102)。

b. *ka-m-let-e-e*⁷¹ *buku* *fatuma*
 3SG.SM-bring-FV(PFV) notebook (CL5) PN (CL1)
 「彼はファトマ (人名) のためにノートをもってきた」 (適用動詞の例)

(4-120) a. *ka-kat^h-a* *kamba*⁷²
 3SG.SM-cut-FV (PFV) rope
 「彼はロープを切った」 (派生前の動詞の例)

b. *nyi-m-kat^h-i-i* *kamba* *mwanangu*
 1SG.SM-3SG.OM-cut-APPL-FV (PFV) rope child:my
 「私は、自分の子供のためにロープを切った」 (適用動詞 : 受益者)

これ以外の、派生接尾辞の形式的ヴァリエーションについては、(Racine-Issa 2002: 92–102) を参照されたい。なお、どの形式の派生接尾辞がどのような場合に現れるのかを一般化して予想することは難しい。

次に、派生動詞でどのような意味が表されるのかを説明する。基本的に、受動動詞や使役動詞では、その名の通り、受動や使役が表される。(4-121a) は派生していない動詞の *-piga* 「殴る」を用いた例、(4-121b) は、その *-piga* に対応する受動動詞 *-pigwa* を用いた例である。(4-121a) で目的語として現れる *asani* 「アサニ (人名)」が、(4-121b) では主語となり、(4-121a) で主語となっている *juma* 「ジュマ (人名)」が、(4-121b) では行為者標識 *nyi=* でマークされて現れている。

(4-121) a. *juma ka-m-pig-i* *asani*
 PN 3SG.SM-3SG.OM-hit-FV (PFV) PN
 「ジュマ (人名) はアサニ (人名) を殴った」 (派生前の動詞の例)

b. *asani ka-pig-w-a* *nyi=juma*
 PN 3SG.SM-hit-PASS-FV (PFV) by=PN
 「アサニは、ジュマによって殴られた」 (受動動詞の例)

⁷¹ *-leta* 「もってくる」に対応する適用動詞の基本語幹の形式は *-leteya* となり末母音の直前に *y* を含む。この *y* は完結語幹では現れない。完結語幹で現れない半母音 *y* を含む動詞として他に *-kweya* 「登る」、*-guiya* 「つかむ」が挙げられる。

⁷² Racine-Issa (2002) は「切る」という動詞を *-k^hata* と表記しているが、実際の発音は *-kat^ha* となる。筆者のこの観察は、BAKIZA (2012) の表記とも一致する。

(4-122)(4-123) は使役動詞の例である。使役動詞への派生では、被使役者を表す名詞句が項として追加される。(4-122)(4-123) はともに、使役動詞の派生によって「私」が項として追加されている。

(4-122) a. *u-lamk-e*

2SG.SM-wake-FV (SUBJ)

「起きろ」(派生前の動詞の例)

b. *u-si-N-lam-s-e*

2SG.SM-NEG-1SG.OM-wake-CAUS- FV (SUBJ)

「私を起こすな」(使役動詞の例)

(4-123) a. *ka-na-kunyw-a* *maji*

3SG.SM-IPFV-drink-FV water

「彼は水を飲んでいる」(派生前の動詞の例)

b. *ka-na-N-nyw-es-a* *maji*⁷³

3SG.SM-IPFV-1SG.OM-drink-CAUS-FV water

「彼は私に水を飲ませている」(使役動詞の例)

適用動詞への派生では、受益者(や被害者⁷⁴)や、道具を表す名詞句が項として追加されることが多い。非派生動詞を用いた(4-124a)と、適用動詞を用いた(4-124b, c)と比べてみると、(4-124b)では受益者が、(4-124c)では道具を表す名詞句が、項として追加されている。

⁷³ Racine-Issa (2002: 99) は、*-nyw-a*「飲む」に対応する使役動詞として、*-nyw-esh-a*を挙げているが、筆者のインフォーマントは、*-nyw-es-a*という形式を用いる。

⁷⁴ 次の例に示す通り、適用動詞の項として被害者を表す名詞が現れることもある。次の a. では被害者が、b. では受益者が適用動詞*-fungia*「閉める」の項として現れている。

例 : a. *ka-N-fungii* *mlango mie* *N-si-lawe*
3SG.SM-1SG.OM-close.APPL.PFV door 1SG.PRO 1SG.SM-NEG-get_out.SUBJ
「彼は私が出ていかにようにドアを閉めた」

b. *ka-N-fungii* *mlango wa-si-ngie* *k^huku*
3SG.SM-1SG.OM-close.APPL.PFV door 3PL.SM-NEG-come_in.SUBJ chickens
「彼は、鶏が入ってこないように、私のためにドアを閉めた」

- (4-124) a. *ka-kat^h-a* *kamba*
 3SG.SM-cut-FV (PFV) rope (CL9)
 「彼はロープを切った」(派生前の動詞の例)
- b. *nyi-m-kat^h-i-i* *kamba* *mwanangu*
 1SG.SM-3SG.OM-cut-APPL-FV (PFV) rope (CL9) child:my (CL1)
 「私は、自分の子供のためにロープを切った」(適用動詞: 受益者)
- c. *juma ka-k^hat-i-i* *kamba* *kisu* *kino*
 PN 3SG.SM-cut-APPL-FV (PFV) rope (CL9) knife (CL7) DEM.PROX.CL7
 「ジュマはこのナイフでロープを切った」(適用動詞: 道具)

中立動詞への派生では、ある変化の結果生じた状態か、潜在的な可能性が表されるようになる (Racine-Issa 2002: 100–101)。どちらを表すかは動詞によって異なる。(4-125) は状態を表す中立動詞の例で、(4-126) は可能性を表す中立動詞の例である。(4-125) に示す通り、中立動詞が状態を表す際は、完結形になる。また、状態を表す中立動詞には、破壊に関する意味を表すものが多い (7.1.1 節参照)。

- (4-125) a. *ka-chan-a* *k^hazu* *yangu*
 3SG.SM-slit-FV (PFV) dress (CL9) my.CL9
 「彼は私のカンズ (服) を破いた」(派生前の動詞の例)
- b. *k^hazu* *yangu* *i-ngali* *i-chan-ik-i*
 dress (CL9) my.CL9 CL9-COP.PER CL9.SM-slit-NEU-FV (PFV)
 「私のカンズはまだ破れている」(中立動詞: 状態)

- (4-126) a. *mbona ka-na-βit-a* *βano*
 why 3SG.SM-pass-IPFV-FV DEM.PROX.CL16
 「なぜ彼はここを通るの？」(派生前の動詞の例)
- b. *njia* *ino* *i-na-βit-ik-a*
 road (CL9) DEM.PROX.CL9 CL9.SM-IPFV-pass-NEU-FV
 「この道は通ることができる」(中立動詞: 可能)

反転動詞は、(4-127) に示す通り、派生前の動詞と反対の意味を表す。反転動詞はそれほど多くないとみられる。なお、(4-127) の *-funga* 「閉める」(非派生動詞) と *-fugua* 「開

ける」(反転動詞)は、語根の形も異なる。派生前の動詞語根は-*fung-*だが、派生動詞の語根は-*fug-*となっている。

(4-127) a. *ka-fung-u* *mlango*
3SG.SM-close-FV(PFV) door
「彼はドアを閉めた」(派生前の動詞の例)

b. *ka-fug-u-u* *mlango*
3SG.SM-close-REV-FV(PFV) door
「彼はドアを開けた」(反転動詞)

相互動詞は、複数の行為者が互いにその動作を行っていることを表す。(4-128b)では、相互動詞-*pigana*によって殴り合っている様子が表されている。

(4-128) a. *juma ka-m-pig-i* *asani*
PN 3SG.SM-3SG.OM-hit-FV (PFV) PN
「ジュマはアサニを殴った」(派生前の動詞の例)

b. *tu-ø-vyo-fika* *uwanja-ni* *we-mena-pig-an-a*
1PL.SM-PFV-CL8.REL-arrive ground-LOC 3PL.SM-INCH-hit-REC-FV
「グラウンドに着いたとき、彼らは殴りあい始めていた」(相互動詞)

派生接尾辞を複数伴う動詞もある。派生接尾辞が二つ現れるパターンとしては、適用+受動、適用+相互、使役+適用、使役+相互、反転+受動、反転+適用、反転+使役、反転+相互、反転+中立、相互+使役、相互+適用、中立+相互 を挙げることができる (Racine-Issa 2002: 102–105)。

なお、派生動詞のなかには、その形から予測できない意味をもつ動詞もある。(4-129)にそうした動詞を提示する。

(4-129) 形式と意味が一致しない派生動詞 (一部 Racine-Issa 2002: 97 も参照)

a. <i>-kosa</i> 「間違える」	<i>-koswa</i> 「怒る、すねる」 (受動)
b. <i>-lola</i> 「見る」	<i>-lolwa</i> 「(女性が) 結婚する」 (受動)
c. <i>-chuch^hama</i> 「しゃがむ」	<i>-chuch^hamia</i> 「つま先立ちする」 (適用)
d. <i>-chapa</i> 「(棒で) 叩く」	<i>-chapia</i> 「飛び越える」 (適用)
e. <i>-eleka</i> 「背負う」	<i>-elekea</i> 「(～へ) 向かう」 (適用)
f. <i>-dawa</i> 「朝早くに出かける」	<i>-dawia</i> 「挨拶する」 (適用)
g. <i>-lamka</i> 「目覚める」	<i>-lamkia</i> 「挨拶する」 (適用)
h. <i>-poa</i> 「治る」	<i>-polea</i> 「ぬるくなる」 (適用)
i. <i>-tua</i> 「置く」	<i>-tulia</i> 「落ち着く」 (適用)
j. <i>-tuma</i> 「(手紙を) 送る、使いにやる」	<i>-tumia</i> 「使う」 (適用)
k. <i>-enda</i> 「行く」	<i>-endesha</i> 「運転する」 (使役)

4.5 助動詞

マクンドゥッチ方言には、動詞と同様に、主語接頭辞でマークされるものの、語彙的な情報は表さず、もっぱら TAM の標示のために用いられる語が存在する。本論文では、こうした語を助動詞と呼ぶ。まず、以下に助動詞に分類されるものが共有する四つの特徴を挙げる。

- 主語接頭辞でマークされる。
- 別の動詞が義務的に後続する。
- TAM の標識として機能する。
- それ自体は語彙的な情報を表さない。

(4-130) は、コピュラ動詞の過去形に由来する助動詞 *-evu* を用いた例である。この例で *-evu* は、3 人称単数の主語接頭辞でマークされ過去を表している。また、*-evu* のあとには、TAM 接頭辞 *ka-* 「継起」でマークされた動詞活用形が後続している。

(4-130) *k-evu* *a-ka-N-lea*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-CONS-1SG.OM-bring_up
 「彼女が私を育てた」

助動詞は、後続する動詞の形や、TAM に応じた活用の有無が、それぞれ異なる。こうした助動詞の多様性は、助動詞が、他の動詞や TAM 接頭辞に由来しているためであると考えられる。表 4-2 に、後続する動詞の形に応じて、助動詞を分類して提示する。

表 4-2 : 助動詞

助動詞	後続する 動詞活用形
a. コピュラ動詞- <i>wa</i>	定形
b. コピュラ動詞の過去形- <i>evu</i> 、持続形- <i>ngali</i>	定形、 <i>ka</i> -形 ⁷⁵
c. - <i>mena</i> 「起動」、- <i>tenda</i> 「習慣 (する)」	<i>ka</i> -形
d. - <i>lija</i> 「過去否定 (来る)」、- <i>aja</i> -/ <i>oja</i> 「過去 (来る) (関係節)」	<i>ka</i> -形、語幹
e. - <i>chaka</i> 「将然 (欲する)」	接続形、不定形

以下で、それぞれの助動詞について簡単に説明する。まず、コピュラ動詞語幹-*wa* は TAM 接頭辞でマークされたり接続形に活用したりする。このコピュラ動詞語幹はそれ自体で意味や機能をもたず、TAM の情報を表すための下支えとして現れる。また、コピュラ動詞の過去形-*evu* と持続形-*ngali* は、それぞれ過去、持続の標識として機能する。コピュラ動詞の過去形-*evu* が現れる例は、(4-130) に提示した。(4-131) は *cha*- 「未来」でコピュラ動詞語幹-*wa* がマークされる助動詞が現れる例、(4-132) はコピュラ動詞持続形-*ngali* が助動詞として機能する例である。こうしたコピュラ動詞に由来する助動詞については、8.6 節で詳しく論じる。

(4-131) *ka-cha-wa* *ka-malizi* *kazi yake juzi*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-finish.PFV work his.CL9 the_other_day
 「彼は先日仕事を終えているだろう」

(4-132) *a-ngali* *a-ka-jenga* *nyumba*
 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-CONS-build house
 「彼はまだ家を建てている」

⁷⁵ 本論文では、マークされる TAM 接頭辞にちなんだ呼び名を用いることがある。例えば、TAM 接頭辞 *ka*- でマークされる活用形は *ka*-形と呼ばれる。

-*tenda*「習慣」と-*chaka*「将然」は、それぞれ「する」「欲する」を意味する動詞に由来する。この二つの動詞語幹が助動詞として機能する場合、TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされることが一般的だが、他の TAM 接頭辞でもマークされうる。ただし、これらの助動詞をマークできる TAM 接頭辞は、その表す事態が「習慣」や「将然」と矛盾をきたさないものでなければならない。(4-133) には-*tenda* が習慣を表す助動詞として機能している例を、(4-134) には-*chaka* が将然を表す例を提示する。この二つの助動詞については、7.4.2 節、7.4.3 節で説明する。

(4-133) *pandu ka-na-tenda a-ka-cheza mpira kia a-k-enda uwanja-ni*
 PN 3SG.SM-IPFV-do 3SG.SM-CONS-play football every 3SG.SM-CONS-go ground-LOC
 「パンドゥはグラウンドに行くといつもサッカーをする」

(4-134) *gari i-na-chaka i-uke*
 car CL9.SM-IPFV-want CL9.SM-leave.SUBJ
 「車が出発しそうだ」(エンジンがかけられた様をみて)

lija-/aja-/øja-「過去」は、「完結(否定)」の TAM 接頭辞 *li, a-, ø-*と動詞-*ja*「来る」に由来する。(4-135) に-*lija* を用いた例を挙げる。

(4-135) a. *ha-li-ja a-ka-kaa kajengwa hea sasa ka-na-kaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come 3SG.SM-CONS-live PN but now 3SG.SM-IPFV-live
 「彼はカジェングワ(地名)で(かつて)暮らしていなかったが、現在は暮らしている」

b. *ha-li-ja-kaa baraza-ni hea sasa ka-kaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come-take_a_seat living-LOC but now 3SG.SM-take_a_seat.PFV
 「彼は、居間に(座って)いなかったが、今はいる」

(4-135) に示す通り、-*ja* に由来するこれら助動詞には、*ka-*形だけでなく、動詞語幹が後続するが、後続する動詞の形の違いは、表される事態の違いに対応している。-*ja* 由来の助動詞に、*ka-*形が後続する場合は未完結の事態が表され、動詞語幹が後続する場合は、完結の事態が表される。-*kaa* は、「座る」と「住む」を意味する多義的な動詞だが、未完結の標示を受けると「住んでいる」を、完結の標示を受けると「座っている」という意味になりやすい。(4-135a) では、*lija-*に TAM 接頭辞の *ka-*でマークされた-*kaa* が後続して「住んでいなかった」という事態を表している。また、(4-135b) では、*lija-*に-*kaa*

の基本語幹が後続して、「座っていなかった」という事態を表している。なお、この-*ja*「来る」は過去だけでなく、未来を表すこともある。こうした-*ja*「来る」の文法化については、7.4.1 節で論じる

(4-136) に-*mena*「起動」が助動詞として機能する例を示す。なお、-*mena* は、TAM 接頭辞としても用いられるものであるが、-*mena* が TAM 接頭辞と機能する場合と、助動詞として機能する場合とで表される事態に違いはない。また、(4-136) に示す通り、-*mena* が助動詞として用いられる場合、主語接頭辞でマークされた-*mena* に、他の動詞の *ka*-形が後続しているが、主語接頭辞でマークされた他の TAM 接頭辞に *ka*-形の動詞が後続することはない。

(4-136) *ke-mena* *a-ka-ua* *wat^hu*
 3SG.SM-INCH 3SG.SM-CONS-kill people
 「彼は人々を殺し始めている」

この他に助動詞に関して特筆すべき点として、*ka*-形が後続する際のアスペクトが挙げられる。(4-137)(4-138) に示す通り、*ka*-「継起」でマークされた動詞が完結を表すか未完結を表すかは、先行する動詞が表す事態によって異なる。しかし、(4-132)(4-133)(4-135a)(4-136) で示した通り、助動詞に後続する *ka*-形は、未完結を表すことが多い。なお、コピュラ動詞過去形に *ka*-形が後続する場合に、表される事態が必ず未完結となるかは、現段階では確認できていない。

(4-137) *jua li-na-lawa* *ulejua li-k-enda* *na=uchwejua*
 sun CL5.SM-IPFV-come_from east CL5.SM-CONS-go COM=west
 「太陽は東からでて、西へと沈む」(*ka*-形が未完結を表す例：(4-32) の再掲)

(4-138) *ya=kwaza* *ka-fu* *ya=pili* *a-ka-fwa*
 of.CL1=first 3SG.SM-die.PFV of.CL1=second 3SG.SM-CONS-die
 「最初にうまれたの(子供)は死んで、二番目のも死んだ」
 (*ka*-形が完結を表す例：(4-33) の再掲)

5章 名詞と動詞不定形の音調実現

マクンドゥッチ方言は、スワヒリ語と異なるプロソディ特徴をもつことが比較的古くから報告されている (Werner 1916)。そして、スワヒリ語とは異なり、トーン (語声調) が存在する可能性もいくつかの研究で指摘されている (Whiteley 1959, Philipsson 1993, Racine-Issa 2002)。本章では、こうした先行研究を踏まえたうえで、マクンドゥッチ方言のプロソディに関して記述を行い、以下の二点を主張する⁷⁶。

- 先行研究で記述されているトーンは確認できない。
- スワヒリ語他変種と異なり、語の次末音節に義務的なストレスが現れない。

5.1 先行研究の記述と実際の音調実現

Whiteley (1959: 47) と Racine-Issa (2002: 27) では、具体的なピッチ実現が示された名詞が挙げられている。以下に、その例を提示する。なお、以下に提示する例に付したアクセント記号は、先行研究で H とされる音節を示すものであって、実際の音声実現とは必ずしも一致しないことに留意されたい。

(5-1) a. *ipú* (LH) 「おでき」 b. *ipu* (LL) 「灰」 (Whiteley 1959: 47)

(5-2) a. *mthú* (LH) 「人」 b. *njiá* (LH) 「道」
c. *moyó* (LH) 「心臓」 d. *ndegé* (LH) 「鳥」
e. *kití* (LH) 「椅子」 f. *chungú* (LH) 「鍋」
g. *tumbó* (LH) 「腹」 h. *p^hémbé* (HH) 「角」
i. *físi* (HH) 「ハイエナ」 j. *máji* (HH) 「水」
k. *mafúta* (LHH) 「油」 l. *kisímá* (LHH) 「井戸」
m. *mkiá* (LHH) 「尾」 n. *upépo* (LHH) 「風」
o. *m^kónó* (LHH) 「腕」 p. *míguú* (HLH) 「足 (複数)」
q. *kídevú* (HLH) 「顎鬚」 r. *mgení* (LLH) 「客」
s. *bwé* (H) 「石」 t. *ch^hi* (H) 「地」 (Racine-Issa 2002: 27)

⁷⁶ 本章で提示する各語の基本周波数 (F0) は、Praat (Boersma & Weenink 2017) 及び、Praat用のスクリプトである ProsodyPro (Xu 2013) を用いて計測している。また、音響データの分析とそれに基づく表や図の作成は、高橋康德氏 (神戸大学) の協力を受けた。

(5-1) は、*ipu* という名詞の2音節目が、HかLかで、語の意味の違いが生じる最小対の例として提示されている。しかし、筆者が聞く限りでは、この二つの名詞のピッチ実現に違いは認められない。話者たち自身も、この二つの間の発音に違いがあるとは認識していない。(5-1) の *ipu* は、どちらも、二つの音節目に明瞭なピッチの違いはなく、平坦に聞こえる。同様のことは、(5-2) の例についても当てはまる。(5-2) に挙げた、2音節名詞、3音節名詞も、筆者が聞く限り、音節目に明瞭なピッチの違いは観察されない。以下に、(5-2) に挙げた名詞のうち、*kití* (LH) 「椅子」と *kisímá* (LHH) 「井戸」の単独発話5トークンの基本周波数 (F0) 曲線を示すが、この二つの図からも、音節目にはっきりとしたピッチの差がないように見える。

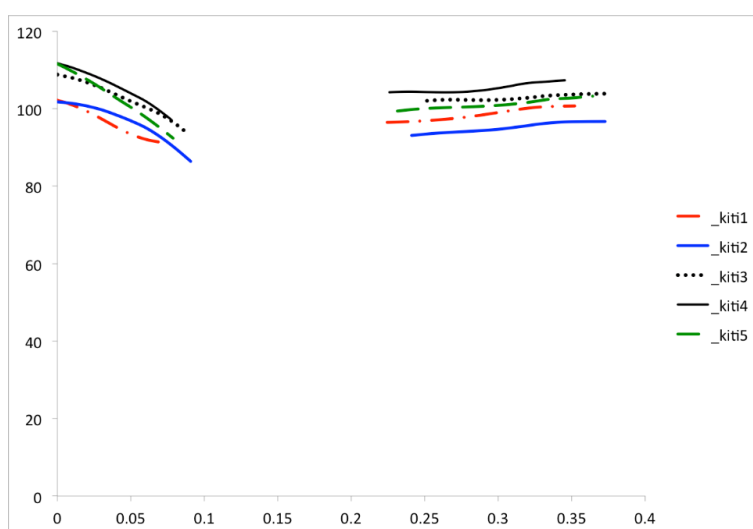


図 5-1 : *kití* (LH) 「椅子」の F0 曲線 (X 軸 : 秒、Y 軸 : Hz)

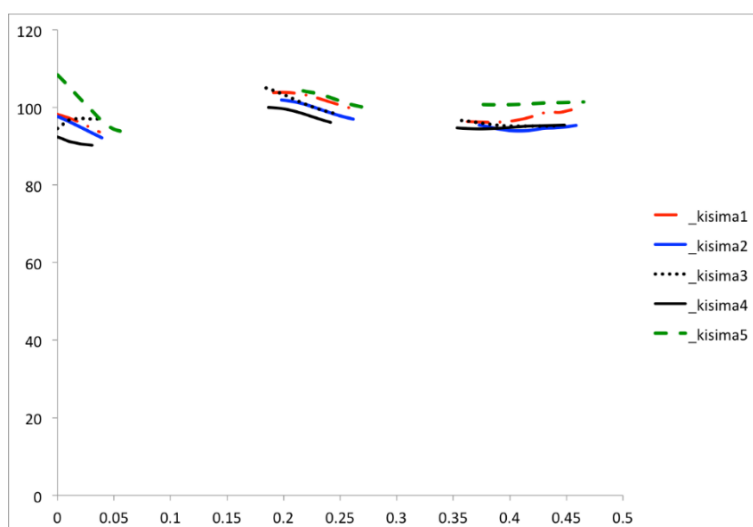


図 5-2 : *kisímá* (LHH) 「井戸」の F0 曲線 (X 軸 : 秒、Y 軸 : Hz)

5.2 「抑揚のない」名詞と動詞不定形

前節では、トーンの対立を示す例として提示されてきた名詞に、音節間で明瞭なピッチの違いがなく、先行研究の記述通りのトーンが確認できないことを述べた。音節間で明瞭なピッチの差がないことは、他の2音節名詞や3音節名詞、また動詞不定形でも同様に観察される。

本節では、単独発話された、2音節名詞83語、3音節名詞58語、動詞不定形(2音節語:3語、3音節語:37語)の各音節のピッチを計測した結果を提示する。計測した名詞と動詞不定形については、付録1を参照されたい。動詞不定形については、語幹だけでなく不定形接頭辞 *ku-*を含めて2音節、あるいは3音節となっている。各語とも5トークンを計測に利用している。計測方法としては、各音節の母音の声帯振動が安定している区間を計測区間と定め、その区間の0%から90%時点の基本周波数(F0)を10%ごとに求めた。(つまり、各音節につき10点のF0の値を求めた)。なお、計測の都合上、成節鼻音 *m* を含む名詞、前鼻音化閉鎖音 *mb, nd, nj, ng* を含む名詞、母音始まりの名詞、流音を含む名詞、母音連続や半母音を含むものは計測の対象としていないが、筆者が聞く限りでは、計測対象から除外した語の中に、計測した語と大きく異なる音調実現を示すものはない。

以下に、2音節名詞、3音節名詞、動詞不定形の計測結果を提示する。表5-1, 5-3, 5-5, 5-6は、それぞれの音節内の十個の時点におけるF0値の平均を示したものである。例えば、表5-1の1st σ 、2nd σ はそれぞれ、第1音節、第2音節を意味しており、縦軸1st σ 、横軸0%に該当するコラムの101.4という数字は、計測した2音節名詞の初頭母音の冒頭時点における、F0値の平均である。また、表5-2, 5-4, 5-7, 5-8は、標準偏差の値で、平均を基準として、各データにどの程度のばらつきがあるのかを示す。データの分布が正規分布を取る場合、標準偏差 ± 1 つ分に全体のデータの約68%、 ± 2 つ分に約95%が含まれる。図5-3, 5-4, 5-5は、表5-1, 5-3, 5-5, 5-6をグラフにしたものである。

表 5-1 : 2音節名詞の平均F0値 (値: Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	101.4	100.6	99.7	98.8	97.8	96.8	95.9	94.8	93.7	92.6
2nd σ	95.2	95.1	94.8	94.5	94.4	94.4	94.7	95.0	95.0	95.3

表 5-2 : 2 音節名詞の標準偏差 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	8.4	7.9	7.6	7.3	7.1	7.0	6.8	6.6	6.4	6.1
2nd σ	7.3	6.8	6.4	6.2	6.1	6.2	6.3	6.4	6.5	6.6

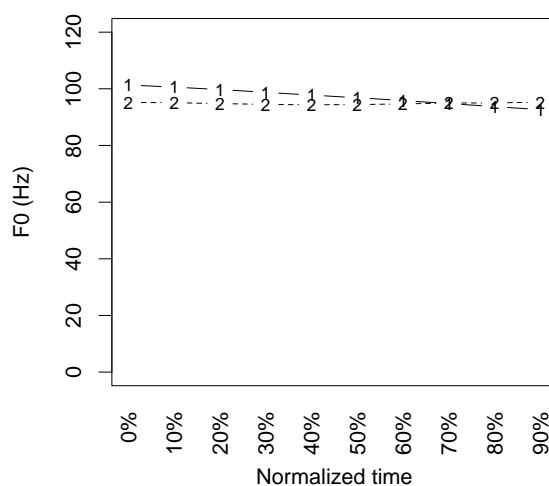


図 5-3 : 2 音節名詞の平均 F0 曲線

(X 軸 : 母音部の相対時点、Y 軸 : Hz, 1 : 第 1 音節、2 : 第 2 音節)

表 5-3 : 3 音節名詞の平均 F0 値 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	98.7	98.2	97.6	96.9	96.2	95.4	94.5	93.7	93.0	92.3
2nd σ	98.5	98.4	98.0	97.4	96.8	96.1	95.4	94.5	93.6	92.7
3rd σ	95.0	94.9	94.6	94.4	94.3	94.4	94.6	94.9	94.9	95.2

表 5-4 : 3 音節名詞の標準偏差 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	7.4	7.0	6.8	6.5	6.3	6.2	6.1	6.1	6.0	6.0
2nd σ	8.1	8.0	8.0	7.7	7.6	7.3	7.0	6.6	6.3	6.0
3rd σ	7.1	6.7	6.4	6.1	6.0	6.0	6.2	6.4	6.5	6.6

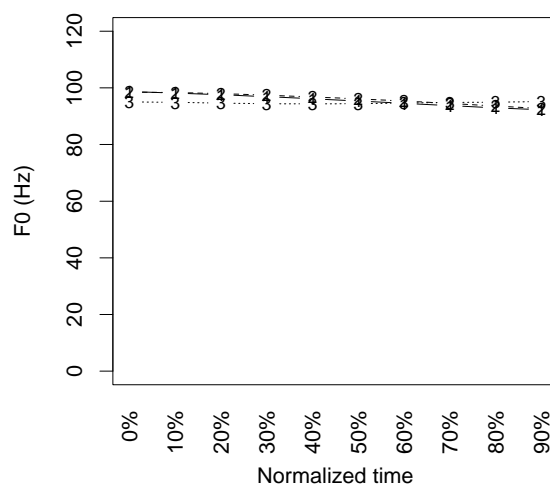


図 5-4 : 3 音節名詞の平均 F0 曲線

(X 軸 : 母音部の相対時点、Y 軸 : Hz、1 : 第 1 音節、2 : 第 2 音節、3 : 第 3 音節)

表 5-5 : 動詞不定形 (2 音節) 平均 F0 値 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	95.9	94.4	92.5	90.5	88.9	87.6	86.7	85.9	85.0	83.9
2nd σ	85.7	86.0	86.1	86.1	86.1	86.2	86.4	86.6	86.7	86.9

表 5-6 : 動詞不定形 (3 音節) 平均 F0 値 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	98.5	97.9	97.3	96.5	95.6	94.7	93.7	92.8	91.9	91.1
2nd σ	95.7	95.3	94.4	93.2	91.8	90.5	89.3	88.3	87.5	88.8
3rd σ	91.2	91.1	90.8	90.4	90.2	90.2	90.4	90.6	90.6	90.8

表 5-7 : 動詞不定形 (2 音節) の標準偏差 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	4.4	4.0	3.9	3.8	3.8	3.8	3.9	4.0	4.0	3.7
2nd σ	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.1

表 5-8 : 動詞不定形 (3 音節) の標準偏差 (値 : Hz)

時点	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%
1st σ	5.9	5.7	5.4	5.3	5.1	5.0	4.8	4.8	4.7	4.6
2nd σ	6.6	6.1	5.6	5.3	5.1	5.0	4.8	4.7	4.7	4.7
3rd σ	5.3	5.0	4.7	4.5	4.3	4.3	4.3	4.4	4.5	4.6

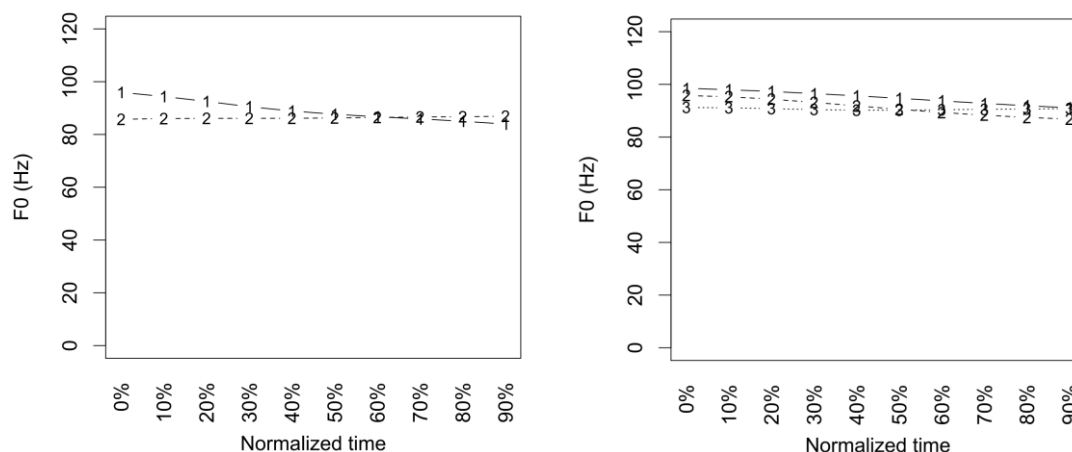


図 5-5 : 動詞不定形の平均 F0 曲線 (左 : 2 音節語、右図 : 3 音節語)

(X 軸 : 母音部の相対時点、Y 軸 : Hz、1 : 第 1 音節、2 : 第 2 音節、3 : 第 3 音節)

上記のデータを見ると、2 音節名詞、3 音節名詞、動詞不定形の語内における音節間のピッチの差は小さいだけではなく、多くの箇所ではピッチ曲線が重なることが分かる。また、ピッチ曲線は全体的に平坦な形で実現されている。これらの結果は、筆者の聴覚印象とも合致する。

Werner (1916: 358) は、具体的な例こそ提示していないものの、抑揚のない音調が、マクンドゥチ方言の挨拶に観察されることを記している⁷⁷。少なくとも、本論文で音響分析をおこなった名詞や動詞不定形の音調実現を見る限り、先行研究のなかでは、Werner が、最も正確にマクンドゥチ方言の音調実現の実態を捉えているように見える。

⁷⁷ 原文は以下の通りである。なお、原文中の“the Wahadimu”というのはマクンドゥチの人々のことを指していると考えられる。“Most of the Wahadimu now speak Swahili, though with a peculiar accent, especially noticeable in the “curious singsong” intonation of their greetings.” (Werner 1916: 358) (下線部筆者)。

5.3 ストレスの不在

スワヒリ語では、変種の別を問わず、ストレスと呼ばれる語の次末音節卓立が観察されることがよく知られる⁷⁸ (Nurse 1984: 231, Philipson 1993: 248)。このストレスは、高ピッチを伴って実現する⁷⁹ (Maw & Kelly 1975: 3)。

5.1 節、及び 5.2 節で提示したデータから、マクンドゥチ方言では、語の次末音節に義務的なピッチの卓立が現れないということがいえる。この事実は、他のスワヒリ語の諸変種とは異なり、マクンドゥチ方言が「ストレスのない」言語であることを示唆する。

マクンドゥチ方言にストレスがないことは、次の二つの形態的特徴からも支持される。以下ではこの二点について詳しく説明する。

- 「9/10」クラスの 1 音節名詞
- 動詞活用形中の無意味形態 *ku-*の随意的「脱落」

5.3.1 「9/10」クラスの 1 音節名詞

スワヒリ語では、語幹が 2 音節以上の「9/10」クラス名詞⁸⁰の接頭辞は、成節鼻音とならないが、語幹が 1 音節の場合、成節鼻音となる。この鼻音の成節性は、次末音節にストレスが割り当てられるという、プロソディ上の要請によって生じると仮定されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 167)。一方、マクンドゥチ方言では、語幹が 1 音節の「9/10」クラス名詞であっても、多くの場合、成節的な鼻音が接頭辞として現われることはなく、1 音節の音韻語が形成されている (3.1.5 節参照)。表の 5-9 に、そうした名詞のスワヒリ語とマクンドゥチ方言の音形を提示する。

⁷⁸ こうした次末音節のストレスは、他の多くのバントゥ諸語でも観察される (Kissbearth and Odden 2003: 59)。

⁷⁹ Ashton (1947: 5) は、スワヒリ語のストレスの実現として下降調と長さが観察されることを記述している。

⁸⁰ 3.1 節で述べた通り、本論文では、名詞接頭辞ではなく、名詞と一致する語や形態素の形を基準として名詞クラスを認定している。この基準では、*mbu*「蚊」、*mbwa*「犬」、*nge*「サソリ」、*zi*「蠅」は 9/10 クラスではなく、1/2 クラス名詞となる。本章で、名詞接頭辞を基準にした名詞クラス番号を提示する際は、名詞クラスの番号に鍵括弧を付して記す。

表 5-9 : 1 音節語幹の「9/10」クラス名詞と形容詞

意味	スワヒリ語	マクンドゥチ方言
「蚊」	<i>ṁbu</i> ⁸¹	<i>mbu</i>
「犬」	<i>ṁbwa</i>	<i>mbwa</i>
「小石」	—	<i>mbwe</i>
「先端」	<i>ṁcha</i>	<i>ch^ha</i>
「地、国」	<i>ṁchi</i>	<i>ch^hi ~ nch^hi</i> ⁸²
「サソリ」	<i>ṁge</i>	<i>nge</i>
「外」	<i>ṁje</i>	<i>nje</i>
「蠟」	<i>ṁta</i>	<i>t^ha ~ nt^ha</i>
「蠅」	<i>ṁzi</i>	<i>zi</i>
「新しい」	<i>ṁpya</i>	<i>p^hya</i>

(9/10 クラス)

マクンドゥチ方言の語幹が1音節の「9/10」クラスの名詞が、成節的な鼻音の接頭辞をもたないという事実は、マクンドゥチ方言には、この接頭辞を成節鼻音にするような、次末音節のストレスが存在しないことを示唆していると考えられる。

5.3.2 無意味形態 *ku*-の随意的脱落

スワヒリ語の定形の動詞活用形は、(5-3) に示す通り一般化することができる。この一般化はマクンドゥチ方言の動詞活用形にも当てはまる。

(5-3) (否定接頭辞) — 主語接頭辞 — (TAM 接頭辞) — (目的語接頭辞) — 語幹

スワヒリ語の動詞活用形では、目的語接頭辞が現れない場合、特定の TAM 接頭辞 (及び関係節接頭辞) と1音節語幹の間に、無意味形態 *ku*-が現われる (Ashton 1947: 35)。TAM 接頭辞は、動詞が文法化したものであり、かつては、本動詞+不定形という連続

⁸¹ スワヒリ語の正書法では、鼻音の成節性が表記に反映されないが、表 5-9 では、スワヒリ語とマクンドゥチ方言の違いを明示するために、鼻音の成節性を表記する。

⁸² *ch^hi*「国、地」と *t^ha*「蠟」は、先行研究 (Chum 1994, BAKIZA 2012a) では、1音節語として記録されている。筆者の調査では、前者については、80代の話者が一貫して *ch^hi* と発音するのに対して、60代の話者が、*ch^hi*「地」 *nch^hi*「国」と意味に応じて発音し分けることが確認されている。また後者については、どちらの話者も *nt^ha* と鼻音が初頭に現れる。先行研究の記録と、実際の話者の発音の間に差がみられる理由の一つとして、スワヒリ語からの影響が考えられる。

があったと考えられている。無意味形態の *ku-* は不定形接頭辞の *ku-* に由来しており、本動詞の TAM 接頭辞への文法化に従って、脱落していったが、後続する動詞の語幹が 1 音節の場合、次末音節にある *ku-* はストレスが置かれるために脱落が妨げられたと考えられている (Meinhof 1932: 131, Nurse & Hinnebusch 1993: 335, cf. Marten 2002)。

(5-3) 時制標識 (TAM 接頭辞) の文法化と後続する動詞の形式の変化

a. verb + *ku-verbal stem* → TAM + verbal stem (非 1 音節語幹)

b. verb + *ku-monosyllabic verbal stem* → TAM + *ku-monosyllabic verbal stem* (1 音節語幹)

マクンドゥチ方言でも、スワヒリ語と同様に、1 音節の動詞語幹は特定の接頭辞に後続する際、この無意味形態 *ku-* を伴って現れるが、動詞活用形に、別の語が後続する場合、*ku-* が随意的に脱落する⁸³。語の次末音節にストレスが現れないと仮定した場合、マクンドゥチ方言における *ku-* の随意的脱落は、脱落を阻害する要因がないために生じていると説明できる。(5-4) は *ku-* の脱落を示す例である。(5-4a) では *ku-* が現れているのに対して、(5-4b) では *ku-* が脱落している。

(5-4) a. *ka-na-ku-lya* *samaki*

3SG.SM-IPFV-KU-eat fish

b. *ka-na-lya* *samaki*

3SG.SM-IPFV-eat fish

「彼は魚を食べている」

なお、*ku-* の脱落が生じるのは、動詞活用形に別の自立語が後続する場合だけで、動詞活用形が節末に現れる場合、*ku-* は脱落できない。動詞活用形が節末に現れる場合に *ku-* の脱落を妨げる要因が何なのかは、今のところ分かっていない⁸⁴。

5.4 5章のまとめ

本章では、まず、音響データを提示しながら、先行研究で記述されているトーンが確認できないことを述べた。先行研究でトーンの対立を示す例として提示されている名詞

⁸³ この *ku-* の詳細については、4.1.1.3 節を参照されたい。

⁸⁴ 無意味形態 *ku-* の脱落の可否から、節末の語の次末音節にストレスが現れることが予想されるが、実際の音声実現としてそのようなストレスは確認できない。

は、音節間に明らかなピッチの違いがなく、平坦に聞こえる。このことは、他の語にも当てはまるが、こうした聴覚印象に基づく観察は、単独で発音された2,3音節名詞や動詞不定形の音響分析の結果とも合致する。

スワヒリ語他変種では、ストレスと呼ばれる音声的卓立が、高ピッチを伴って語の次末音節の位置に現れる。マクンドゥチ方言の2,3音節名詞や動詞不定形の音節間に明瞭なピッチの違いが観察されないことの帰結として、マクンドゥチ方言は、こうしたストレスをもたない言語であることが推測される。

マクンドゥチ方言がストレスをもたない言語であるという主張は、上述のような音声的な事実だけでなく、「9/10」クラスの1音節名詞の存在や、動詞活用形中の無意味形態 *ku-* の随意的脱落からも支持される。

6章 動詞末母音の形態素らしさ

言語記述を行う際は、形態素分析を明確に行い、例示をすることが基本原則となるが (cf. 下地 2011, Dixon 2012a)、形態素境界がどこにあるのかが、判然としないこともしばしばある。

バントゥ諸語研究において、動詞語幹末に現れる末母音 (Final Vowel) は、形態素と分析されることが一般的である (Nurse 2008: 37–38, Hyman 2009: 178–179, cf. Meeussen 1967: 11)。マクンドゥチ方言の末母音も、アスペクトやムードに応じて交替することから、動詞に付加される接頭辞と同様に、形態素とみなしても特に問題はないようにも思われる。しかし語幹の形や、表されるアスペクトやムードとの対応を子細に検討すると、末母音の「形態素」としての性質は、接頭辞とは明らかに違うことが分かる。

本章は、マクンドゥチ方言の記述において、末母音を形態素とみなす分析の問題を指摘することと、その問題を踏まえたうえで、従来とは異なるアプローチから語幹形成や動詞活用形形成を説明することを目的としている。

まず、6.1 節では、語幹の基本的な形態的特徴について説明する。6.2 節では、末母音を形態素とみなす分析の問題点を指摘する。そして、6.3 節では、語基盤モデルと PFM という理論的枠組みを導入して、語幹や動詞活用形の形成の説明を行う。

6.1 末母音の基本的性質

6.1.1 末母音の形態的特徴と語幹の分布

マクンドゥチ方言のそれぞれの動詞は、末母音の形から、基本語幹、完結語幹、接続語幹という三種類の形式の語幹をもつといえる。それぞれの語幹の形式を表 6-1 に提示する。表 6-1 に示す通り、受動動詞を除く派生動詞も、この三つの語幹を有している。なお、本節では、説明のため便宜上、語幹を、末母音とそれ以外の部分である語基に分けて提示することがある。非派生動詞の語基は、語根単独で形成されている (表 6-1 の a-e 参照)。一方、派生動詞の語基は、語根と派生接尾辞から成る (表 6-1 の f-i 参照)。

表 6-1 : マクンドゥチ方言の三つの語幹

語基	基本語幹	完結語幹	接続語幹
	...CV ₁ (C)- a	...CV ₁ (C)- V₁	...CV ₁ (C)- e
a. -kat ^h - ‘cut’	-kat ^h - a	-kat ^h - a	-kat ^h - e
b. -tend- ‘do’	-tend- a	-tend- e	-tend- e
c. -βik- ‘cook’	-βik- a	-βik- i	-βik- e
d. -som- ‘read’	-som- a	-som- o	-som- e
e. -kut ^h - ‘meet’	-kut ^h - a	-kut ^h - u	-kut ^h - e
f. -pig-i- ‘hit + applicative’	-pig-i- a	-pig-i- i	-pig-i- e
g. -kat ^h -ish- ‘cut + causative’	-kat ^h -ish- a	-kat ^h -ish- i	-kat ^h -ish- e
h. -kat ^h -ik- ‘cut + neutral’	-kat ^h -ik- a	-kat ^h -ik- i	-kat ^h -ik- e
i. -fug-u- ⁸⁵ ‘close + reversive (open)’	-fug-u- a	-fug-u- u	-fug-u- e

基本語幹と接続語幹の末母音は、それぞれ、*a*, *e* となる。完結語幹では、語基の最終母音と同じ母音が末母音として現れる。こうした語幹形成は母音複写 (vowel copy) と呼ばれ、他のバントゥ諸語でも観察される (Nurse 2008: 318)。それぞれの語幹の分布は以下の通りである。完結語幹と接続語幹が現れるのは一部の活用形に限られ、多くの活用形では基本語幹が現れる。なお、一部の動詞の完結形では、基本語幹が完結形に現れることもあるが、このことは、後で詳しく述べる。また、(6-1) の一般化にあてはまらない他のケースについては、4.1.1.1 節を参照されたい。

(6-1) 語幹の分布

- a. 基本語幹： 完結形と接続形を除く活用形
- b. 完結語幹： 完結形
- c. 接続語幹： 接続形

(6-2) には、-βika 「料理する」という動詞のそれぞれの語幹が現れる例を挙げる。(6-2a) には基本語幹が、(6-2b) には完結語幹が、(6-2c) には接続語幹が現れている。

⁸⁵ -fug- という語根は、非派生動詞において -fung- という形式で実現する。

(6-2) *-βika* 「料理する」の活用形

a. *ka-cha-βik-a*

3SG.SM-FUT-cook-FV

「彼は料理をするだろう」(基本語幹)

b. *ka-βik-i*

3SG.SM-cook-FV (PFV)

「彼は料理をした」(完結語幹)

c. *ka-na-chaka* *a-βik-e*

3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-cook-FV (SUBJ)

「彼は料理をしたい／料理をしようとしている」(接続語幹)

6.1.2 語基と末母音の形態的な結びつき

マクンドウチ方言の動詞活用形は、語幹部分が一つの形態的なまとまりを成したうえで、そこに接頭辞が付加され形成されていると考えられる。

そのように考えられる一つ目の理由として、動詞活用形形成の際、語幹形成は接頭辞付加よりも先になされることが挙げられる。そのことは、融合母音語幹をもつ動詞の完結形形成から分かる。*-iba*「盗む」は、語幹が融合母音語幹となる動詞だが、主語が3人称単数の場合、完結形は *kebi* となる。(6-3) に示す通り、この完結形形成では、母音複写が生じて末母音の形が決定されたのちに、主語接頭辞と語幹の間で融合が生じていると考えられる。

(6-3) *kebi* 「彼は盗んだ」の形成過程

ka- 「3人称単数主語」+ *-ib-a* 「盗む」→ *ka-* + *-ib-i* → *kebi*

また、動詞活用形中の末母音まで含んだ語幹部分は疑問詞に置き換えることができる。(6-4) では、「強制される」を意味する動詞の語幹 *-zalilishwa* が、疑問詞=*je*「どう」や、*nini*「何」で置き換えられている。この例から、末母音まで含んだ語幹が動詞の語彙的な意味を担う部分として分析され、そこに接頭辞が付加され活用形が形成されていることが分かる。

(6-4) *wa-na-je* *wa-na-zalilishwa* *wa-na-nini* *wa-na-zalilishwa*
 3PL.SM-IPFV-Q 3PL.SM-IPFV-force.PASS 3PL.SM-IPFV-what 3PL.SM-IPFV-force.PASS

「彼らはどうした？彼らは強制された。彼らがなんだった？彼らは強制された。」

なお、末母音と語基が形態的により緊密な関係にあることは、従来の研究でも指摘されている (Nurse 2008: 42)。

6.2 末母音の「形態素」としての特徴

マクンドゥチ方言の動詞活用形のうち、完結形で表されるのは、概ね、基準時以前の事象の完結や結果状態である (7.1 節、7.2 節参照)。また、接続形はいくつかの事態を表すことがあるが、聞き手に対する命令や勧誘など、特定の事態を表す活用形であるということは言えそうである (7.5 節参照)。こうした活用形の形式と表される事態の対応をみる限りでは、末母音も、アスペクトやムードに応じて規則的に交替しており、末母音を形態素と分析することが妥当なようにも思われる。しかし、表される事態と形の対応や、形のヴァリエーションを詳しく検討してみると、末母音は、同じように動詞が表す TAM によって交替する TAM 接頭辞とは異なる性質を有しているように見える。以下では、TAM 接頭辞との違いに着目しながら、末母音の特徴を記述する。

6.2.1 末母音 *a* の機能

TAM 接頭辞は、その接頭辞でマークされた活用形が表す事態の違いから、それぞれの接頭辞が、TAM に関する何らかの機能を有していると考えられる。それに対して、末母音の中には、TAM に関して特定の機能を担わないものがある。

完結語幹の末母音は「完結」という機能を、接続語幹の末母音は「接続」という機能を担っていると考えられることができるかもしれない。しかし、基本語幹の末母音 *a* についてはその機能が判然としない。

スワヒリ語をはじめとする他の多くのバントゥ諸語にも、マクンドゥチ方言と同様に *a* という末母音が存在する (Nurse 2008: 261)。スワヒリ語において、この末母音 *a* は、しばしば直説法を表すとされる (Vitale 1981: 21, Contini-Morava 1989: 13, cf. Nurse 2008: 37, 75)。マクンドゥチ方言においても、接続語幹との対比だけを見れば、末母音 *a* は直説法というムードを表しているといえるかもしれない。しかし、マクンドゥチ方言では、末母音の交替によってムードだけでなく「完結」というアスペクトも表される。また、

ka-「継起」「条件」、*nge-*「反実仮想」で動詞がマークされる場合は、末母音 *a* をもつ基本語幹が現れる。こうしたことから、末母音 *a* を直説法標識として分析することはできない。末母音 *a* でマークされた動詞が表す事態を考慮にいと、末母音 *a* は TAM に関する特定の機能を担わないと考えるのが妥当であろう。

6.2.2 末母音の形式と表される事態の不一致

定形の動詞活用形によって表される事態と、TAM 接頭辞には、基本的に 1 対 1 の対応がみられ、ある特定の TAM 接頭辞で表される事態が他の TAM 接頭辞でも表されるということはない。それに対して末母音は、動詞活用形が表す事態からは予測されない形式で現れることがある。

-ijua「知る」という動詞の肯定と、受動動詞は、完結形でも末母音が *a* となる。これらの動詞は、母音複写によって形成される「完結」の末母音を用いることなく、完結という事態を表すことができるということになる。なお、*-ijua*「知る」の否定完結形に現れる完結語幹 *-iji* から予想される **-ija* という基本語幹は存在しない。表 6-2 に、受動動詞 *-pigwa*「打たれる」と *-ijua*「知る」の語幹の形式を提示する。

表 6-2 : *-ijua*「知る」と受動動詞の語幹の形式

	その他活用形 基本語幹	完結形 基本語幹	接続形 接続語幹
a. <i>-pig-w-</i> 'hit + PASSive'	<i>-pig-w-a</i>	<i>-pig-w-a</i>	<i>-pig-w-e</i>
b. <i>-iju-</i> 'know'	<i>-iju-a</i>	<i>-iju-a/-ij-i</i> (negative)	<i>-iju-e</i>

以下には、受動動詞 *-pigwa*「打たれる」と *-ijua*「知る」の具体例を示す。(6-5b)(6-6b) に示す通り、どちらの動詞も完結形に完結語幹ではなく、基本語幹が現れている。そのことは、二つの動詞の語基の最終母音が *a* でないにもかかわらず、末母音が *a* となっていることから分かる。

(6-5) *-pigwa*「打たれる」の活用形

- a. *mw-a-pigw-a* *N=ba-sigombe nani*
 CL1.SM.REL-PFV-hit.PASS-FV *by=Mr.-PN* *who*
 「シゴンベおじさんに殴られたのは誰？」

b. *ka-pigw-a* *N=kaka*
 3SG.SM-hit.PASS-FV (PFV) by=brother
 「彼はお兄さんに殴られた」(基本語幹をもつ完結形)

c. *ka-na-chaka a-pigw-e*
 3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-hit.PASS-FV (SUBJ)
 「彼は殴られたい」(接続形)

(6-6) *-ijua* 「知る」の活用形

a. *u-ka-soma ku-cha-v-iju-a*
 2SG.SM-COND-study 2SG.SM-FUT-CL8.OM-know-FV
 「あなたが勉強すれば、理解するだろう」

b. *ka-k-iju-a kikaē*
 3SG.SM-CL7.OM-know-FV (PFV) Kae_dialect
 「彼はカエ方言を知っている」(基本語幹をもつ完結形)

c. *si-k-ij-i ki-li-ko kibiriti*
 1SG.SM:NEG-CL7.OM-know-FV (PFV) CL7.SM-COP-CL15.REL match
 「マッチの在処を私は知らない」(否定完結形)

d. *ka-na-chaka a-v-iju-e*
 3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-CL8.OM-know-FV (SUBJ)
 「彼は知りたい」(接続形)

6.2.3 末母音の欠如

TAM 接頭辞は、一部の欠損動詞を除いてどんな動詞にも付加される。しかし、末母音は、動詞によって付加されないことがある。

多くの借用語動詞の語幹の形式は、以下に挙げる通り、完結形でも接続形でも、それ以外の活用形でも変わらず、末母音として分析可能な部分が存在しない。本論文ではこうした語幹を借用語語幹と呼ぶ。

表 6-3 : 借用語語幹の形式

	その他の活用形 借用語語幹	完結形 借用語語幹	接続形 借用語語幹
a. - <i>rudi</i> ‘return’	- <i>rudi</i>	- <i>rudi</i>	- <i>rudi</i>
b. - <i>sahau</i> ‘forget’	- <i>sahau</i>	- <i>sahau</i>	- <i>sahau</i>

なお、借用語の動詞の中には、借用語語幹ではなく、基本語幹、完結語幹、接続語幹をもつものもある。こうした動詞については後述する。

(6-7) は-*rudi*「戻る」の具体例である。(6-7b) の完結形と、(6-7c) の接続形に現れる語幹の形式が、(6-7a) と変わらないことに着目されたい。

(6-7) -*rudi*「戻る」の活用形

a. *ka-cha-rudi* *wapi*
 3SG.SM-FUT-get_back where
 「彼はどこに戻る？」

b. *pandu ka-rudi=βa*
 PN 3SG.SM-get_back.PFV=DEM.PROX.CL16
 「パンドゥはここに戻ってきた」(完結形)

c. *ka-na-chaka* *a-rudi* *jioni*
 3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-get_back.SUBJ evening
 「彼は夕方に戻りたい」(接続形)

6.2.4 不規則な形式の完結語幹

多くの動詞の完結語幹の形成は、母音複写という規則を仮定すれば説明できる。しかし、なかにはこの規則を仮定するだけでは、語幹形成を説明できないものが存在する。

まず問題となるのは、以下の語基の最終音節が成節鼻音 *m* となる語幹と 1 音節語幹である。表 6-4 に、そうした動詞を挙げる。なお、語幹に成節鼻音 *m* を持つ動詞は他にも存在するが、1 音節語幹については、当てはまる例はほぼすべて網羅されていると考えられる。

表 6-4 : 語基の最終音節が成節鼻音となる動詞と 1 音節語幹の動詞の語幹の形式

語基	基本語幹	完結語幹	接続語幹	他の動詞
a. <i>-laṃk-</i> ‘wake up’	<i>-laṃk-a</i>	<i>-laṃk-u</i>	<i>-laṃk-e</i>	<i>-cheṃka</i> “boil”, <i>-deṃka</i> “dance” <i>-suṃka</i> “run”, <i>-zunguṃza</i> “chat”
b. <i>-ly-</i> ‘eat’	<i>-ly-a</i>	<i>-l-i</i>	<i>-ly-e</i>	<i>-nya</i> “rain, defecate”
c. <i>-fw-</i> ‘die’	<i>-fw-a</i>	<i>-f-u</i>	<i>-fw-e</i>	<i>-gwa</i> “fall”, <i>-pwa</i> “ebb”, <i>-ivwa</i> “get ripe”
d. <i>-j-</i> ‘come’	<i>-j-a</i>	<i>-j-a</i>	<i>-j-e</i>	<i>-kʰa</i> “give”, <i>-wa</i> “Copula”

表 6-4a に示す通り、語基の最終音節が成節鼻音 *m* となる動詞の完結語幹の末母音は *u* となる。また、1 音節語幹の動詞の完結語幹の末母音は、動詞によって異なる。表 6-4b, c に示す通り、基本語幹や接続語幹に半母音 *y, w* が現れる動詞の場合、完結語幹の末母音はそれぞれ *i, u* となる。表 6-4d に示す通り、基本語幹や接続語幹に半母音が含まれない動詞の場合、完結語幹の末母音も基本語幹と同様に *a* となる。なお、*-ivwa* 「熟す」は、1 音節語幹ではないが、表 6-4 の c の 1 音節語幹の動詞と同じように、基本語幹や接続語幹には半母音 *w* が現れ、完結語幹では、その *w* が現れず末母音が *u* となる。(6-8) (6-9) (6-10) (6-11) には、語基の最終音節が成節鼻音 *m* となる動詞と 1 音節語幹の動詞のそれぞれの語幹を含む具体例を提示する。

(6-8) *-laṃka* 「目覚める」の活用形

a. *ke-me-laṃk-a*

3SG.SM-PRF-wake_up-FV

「彼は目覚めた」(基本語幹)

b. *sigombe k-evu ka-laṃk-u*

PN 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-wake_up-FV (PFV)

「シゴンベは目覚めた」(完結語幹)

c. *njo=kw-aza u-laṃk-e*⁸⁶

BGR=INF-begin 2SG.SM-wake_up-FV (SUBJ)

「あなたちちょうど今起きたところ？」(接続語幹)

⁸⁶ 背景標識 *njo* と *-aza* 「始める」の不定形 *kwaza* の組み合わせに、別の動詞の活用形が後続することにより、「ちょうど～したところ？」という慣用表現が形成される。

(6-9) *-lya* 「食べる」の活用形

a. *ke-me-kuly-a fenesi mara t^hatu*

3SG.SM-PRF-eat-FV jackfruit times three

「彼はジャックフルーツを三回食べたことがある」(基本語幹)

b. *ka-l-i vyakulya*

3SG.SM-eat-FV (PFV) food

「彼は食事をとった」(完結語幹)

c. *karibu u-je u-ly-e*

welcome 2SG.SM-come.SUBJ 2SG.SM-eat-FV (SUBJ)

「どうぞ、来て召し上がりなさい」(接続語幹)

(6-10) *-fwa* 「死ぬ」の活用形

a. *baba-angu ke-me-kufw-a*

father-my 3SG.SM-PRF-die-FV

「私の父は死んだ」(基本語幹)

b. *ka-f-u m^thu*

3SG.SM-die-FV (PFV) person

「人が死んだ」(完結語幹)

c. *ny-evu ha-m-piga mende a-vate a-fw-e*

1SG.SM-COP.PST CONS:1SG.SM-3SG.OM-hit cockroach 3SG.SM-get.SUBJ 3SG.SM-die-FV (SUBJ)

「私はゴキブリが死ぬように叩いた」(接続語幹)

(6-11) *-ja* 「来る」の活用形

a. *a-ka-j-a mw-ite*

3SG.SM-COND-come-FV 3SG.OM-call.IMP

「彼が来たら呼んで」(基本語幹)

b. *ka-j-a kale kweli*

3SG.SM-come-FV (PFV) previously really

「彼はとても昔に来た」(完結語幹)

c. *ka-na-chaka* *a-j-e* *kuno*
 3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-come-FV (SUBJ) DEM.PROX.CL15

「彼はこちらに來たい」(接続語幹)

こうした動詞の完結語幹形成は、(そのように説明することが妥当であるかは別にして) 母音複写規則の修正によって説明できるかもしれない。例えば、成節鼻音 *m* に対しては、サバキ祖語⁸⁷の段階で **mu* という形式が再建されているが (Nurse & Hinnebusch 1993: 181)、そのことをヒントにして、成節鼻音 *m* は、基底では *mu* という形で、母音複写が生じたのちに、その母音 *u* が脱落すると考えることができるだろう。

また、1音節語幹は、基本語幹や接続語幹に現れる半母音が完結語幹の末母音の音価を決定する役割を果たしているが、成節性と結びついておらず、半母音として実現すると考えれば、完結語幹形成が説明できる。なお、この説明において、完結語幹で半母音が現れないのは、*wu, yi* という音連続がマクンドゥチ方言では許されないためであると考えられる⁸⁸。

(6-12) *-fwa* 「死ぬ」の基本語幹と完結語幹の形成

a. $-fu- + \overset{\sigma}{|} a \rightarrow -fu- \overset{\sigma}{|} a \rightarrow -fwa$ (基本語幹) b. $-fu- + \overset{\sigma}{|} VC \rightarrow -fu- \overset{\sigma}{|} u \rightarrow -fwu$ (*fu*) (完結語幹)

しかし、中には、母音複写規則の修正をもってしても形成を説明しがたい完結語幹をもつ動詞も存在する。表 6-5 にそうした動詞を挙げる。なお、*-nywa* 「飲む」は、一見すると表 6-4 の b の動詞と似た完結語幹をもつようにみえるが、語基の最後に半母音 *w* が現れるという点で異なる。

表 6-5 : 不規則な完結語幹をもつ動詞の語幹の形式

語基	基本語幹	完結語幹	接続語幹
a. <i>-ch-</i> “dawn”	<i>-ch-a</i>	<i>-ch-e</i>	<i>-ch-e</i>
b. <i>-chw-</i> “set (of the sun)”	<i>-chw-a</i>	<i>-chw-e</i>	<i>-chw-e</i>
c. <i>-t-</i> “lay eggs”	<i>-t-a</i>	<i>-t-i</i>	<i>-t-e</i>
d. <i>-nyw-</i> “drink”	<i>-nyw-a</i>	<i>-nyw-i</i>	<i>-nyw-e</i>
e. <i>-langanz-</i> “repair”	<i>-langanz-a</i>	<i>-langanz-i</i>	<i>-langanz-e</i>

⁸⁷ Nurse & Hinnebusch (1993) は東アフリカ沿岸部で話される六つのバントゥ系の言語に対して、サバキ祖語を再建している。

⁸⁸ *-nya* 「雨が降る、糞をする」という動詞の完結語幹は *nyi* という形式で、例外的に、完結語幹でも口蓋化音が実現される。

以下は、表 6-5 に挙げた動詞を用いた具体例である。

(6-13) *-cha* 「夜が明ける」の活用形

a. *usiku u-me-kuch-a*⁸⁹

night CL3.SM-PRF-dawn-FV

「夜が明けた」(基本語幹)

b. *usiku u-ch-e*

night CL3.SM-dawn-FV (PFV)

「夜が明けた」(接続語幹)

c. *usiku u-na-chaka u-ch-e*

night CL3.SM-IPFV-want CL3.SM-dawn-FV (SUBJ)

「夜が明けようとしている」(接続語幹)

(6-14) *-ta* 「卵を産む」の活用形

a. *k^huku ka-cha-kut-a*

chicken 3SG.SM-FUT-lay_eggs-FV

「ニワトリは卵を産むだろう」(基本語幹)

b. *k^huku wa-t-i*

chicken 3PL.SM-lay_eggs-FV (PFV)

「ニワトリは卵を産んだ」(完結語幹)

c. *k^huku ka-na-chaka a-t-e*

chicken 3SG.SM-IPFV-want 3SG.SM-lay_eggs-FV (SUBJ)

「ニワトリは卵を産もうとしている」(接続語幹)

⁸⁹ 「夜が明けた」を意味する *umekucha* と *uche* は、挨拶でよく使われる表現である。どちらも挨拶で使われるが、より一般的なのは *umekucha* の方である。*uche* の方は、古風な印象を与えるようである。

(6-15) *-nywa* 「飲む」の活用形

a. *ka-na-nyw-a* *maji*
3SG.SM-IPFV-drink-FV water
「彼は水を飲んでいる」(基本語幹)

b. *ka-nyw-i* *maji*
3SG.SM-drink-FV (PFV) water
「彼は水を飲んだ」(完結語幹)

c. *ka-nyw-e* *maji*
ITV-drink-FV (SUBJ)⁹⁰ drink
「水を飲みに行け」(接続語幹)

(6-16) *-langanza* 「修理する」の活用形

a. *ka-na-langanz-a* *baskeli*
3SG.SM-IPFV-repair bicycle
「彼は自転車を直している」

b. *ka-langanz-i* *baskeli*
3SG.SM-repair-FV (PFV) bicycle
「彼は自転車を直した」

c. *ka-langanz-e* *baskeli*
ITV-repair-FV (SUBJ) bicycle
「自転車を直しにいけ」

表 6-5 のような動詞については、それぞれ、完結語幹の末母音がどのようなものであるか、あらかじめ語彙的に指定されていると考えられる。

⁹⁰ (6-15c) (6-16c) は、命令形だが、ここでは語幹が接続語幹であることを示すことを目的としているため、SUBJ というグロスを付す。

6.2.5 小括

末母音には、以下の四つの特徴があるといえる。

- 末母音の中には、TAM を標示する機能を有している（ように見える）ものと、そうでないものがある。
- 表される TAM と末母音の形が対応しないことがある。
- 表される TAM が同じでも、動詞によって、末母音が現れることと、現れないことがある。
- 末母音のなかには、規則的に形成されている（ように見える）ものと、例外的／不規則な形態論的プロセスを経て形成されているものがある。

6.3 語基盤モデルと PFM に基づく説明

前節では、末母音部分に着目すると、語幹のなかには、形が表される TAM と対応するものとそうでないものがあることや、規則的に形成されているものとその規則から逸脱した形をもつものがあることなどを示した。語幹形成、あるいは活用形形成に対する説明は、こうした相反する^{あいはん}ような言語事実を網羅できるものでなければならない。本節では、語基盤モデルと PFM という理論的枠組みを援用して、語幹形成、更には語幹を含む動詞活用形形成の説明を試みる。

6.3.1 形態素基盤モデルと語基盤モデル

形態論において、対立する二つのコンセプトとして、形態素基盤モデル (morpheme-based model) と語基盤モデル (word-based model) がある。末母音を形態素とする従来の分析は、形態素基盤モデルに則ったものである。本節では、末母音を形態素とする形態素基盤モデルからの分析を放棄し、語基盤モデルの立場から末母音の交替を説明する。

6.3.1.1 形態素基盤モデル

形態素基盤モデルでは、意味をもつ最小の単位として形態素が仮定され、その形態素が規則により連結されることで語形が形成されると説明される (Bochner 1993: 21, 25, Haspelmath & Sims 2010: 41–43, 335)。英語の *bags* という語を例にとると、レキシコンに

は (6-17) のような形態素が語彙項目 (lexical entry) として登録されているとされる⁹¹。

(6-17) a. *bag* [/bæg/ N ‘bag’] b. *-s* [/z/ N_ ‘plural’] (Haspelmath & Sims 2010: 43)

6.3.1.2 語基盤モデル

語基盤モデルでは、形態素ではなく、語形自体が語彙項目としてレキシコンに登録されていると仮定される (Bochner 1993: 39, Haspelmath & Sims 2010: 66)。レキシコンには、(6-18b) のように、派生や屈折によって形成された語 (形) も語彙項目として登録されている。

(6-18) a. *bag* [/bæg/ N ‘bag’] b. *bags* [/bægz/ N ‘bags’] (Haspelmath & Sims 2010: 46, 47)

本論文では、これに加えて、語をもとに再帰的な部分を抜き出し、抽象化した形態パターン (morphological pattern) も語彙項目と仮定する立場をとる (Haspelmath & Sims 2010: 70)。*/z/* で終わる英語の名詞が複数性を表すという形態パターンは (6-19) のように語スキーマ (word-schema)⁹² を用いて表される。(屈折や派生による) 語同士の関係は、規則によって表される (Bochner 1993: 39, Haspelmath & Sims 2010: 47)。(6-19) の双方向矢印は、二つの語スキーマが規則によって関係づけられることを示す。

(6-19) [/X/ N ‘x’] ↔ [/Xz/ N ‘plurality of xs’] (Haspelmath & Sims 2010: 47)

語基盤モデルでは、まず語形そのものが語彙項目とされる。これにより、不規則な形式や意味を持つ語の派生規則を仮定する必要がなくなる。そして、形態パターンは副次的な役割を果たしているとされる (Haspelmath & Sims 2010: 70)。レキシコンにない語形は、形態パターンを参照することにより形成される。また、形態パターンを仮定することにより、借用語や、内部の形態構造を参照しているようにみえる語幹形成も説明できるようになる。

規則的に形成される語形まで、語彙項目としてレキシコンに登録されていると仮定した場合、レキシコンに登録されている語形が膨大な数に上ることになる。このため、形態パターンに即した規則的な語形については、実際の語形がレキシコンに登録されてい

⁹¹ (6-17) (6-18) (6-19) では、[] 内が語彙項目に含まれる情報で、// 内は発音、大文字は品詞、‘ ’ 内は意味や機能を表す。

⁹² Bochner (1993) も語スキーマ (word-schema) に準ずるものは用いているが、word-schema という用語は用いていない。

ないと考えるほうが合理的なようにも思われる。なぜなら、レキシコンに抽象的な形態パターンがあれば、その形態パターンと規則から、それぞれの語幹の形式は予測可能だからである。しかし、形態パターンというのは、実際の語形があつてはじめて得られるものである。規則的な形式の語幹をレキシコンから除外して、不規則な形式の語幹だけがレキシコンに登録されていると考えると、規則的な語幹を形成するために用いられる抽象的なパターンが、何を一般化した結果得られたものであるかは説明できない (Bochner 1993: 59)。つまり、抽象的な形態パターンも語彙項目として仮定するのであれば、規則的な形式の語幹も語彙項目としてレキシコンに登録されていると考える必要がある。なお、こうした仮定は、レキシコンは最大限経済的であるべきという原則に反するが、語基盤モデルでは、レキシコンはそもそも冗長な情報を含むものと考えられており、問題とはならない (Bochner 1993: 65, Haspelmath & Sims 2010: 70–71)。レキシコンにどれだけ規則的な語が登録されているかは明らかではないが、規則性を一般化するのに足るだけの語彙項目がレキシコンにあると考えるのが妥当であろう (Bochner 1993: 49)。以下では、この語基盤モデルの考え方を援用して、語幹形成の説明を試みる。

6.3.2 語基盤モデルを用いた語幹形成の説明

6.3.2.1 想定される形態パターン

完結語幹の形式に基づき、マクンドゥチ方言の動詞を七つの活用クラスに分け、語幹の形式を一般化したそれぞれのクラスの形態パターンを、以下に示す。なお、ここでは、表 6-5 に挙げた母音複写規則を修正しても完結語幹の形成を説明することが難しい動詞を抽象化した形態パターンは除いている。その理由については後述する。

(6-20) 七つの活用パターン

- a. [XV₁(C)a/ default] ↔ [XV₁(C)V₁/ PFV] ↔ [XV₁(C)e/ SUBJ]
- b. [X_mCa/ default] ↔ [X_mCu/ PFV] ↔ [X_mCe/ SUBJ]
- c. [Cya/ default] ↔ [Ci/ PFV] ↔ [Cye/ SUBJ]
- d. [Cwa/ default] ↔ [Cu/ PFV] ↔ [Cwe/ SUBJ]
- e. [Ca/ default] ↔ [Ca/ PFV] ↔ [Ce/ SUBJ]
- f. [Xwa/ default] ↔ [Xwe/ SUBJ]
- g. [X/ default]

(6-20a) は完結語幹が典型的な母音複写によって形成される動詞のスキーマである。(6-20b) は語基の最後の音節主音が成節鼻音 *m* となる動詞のスキーマである。(6-20c, d, e) は語幹が 1 音節の動詞のスキーマである。(6-20f) は受動動詞のスキーマである。(6-20g) は借用語動詞のスキーマである。なお、それぞれのパターンに付した、default「未指定」、PFV (perfective)「完結」、SUBJ (SUBJunctive)「接続」は、こうした屈折機能をそれぞれの語幹が担っているということを示しているわけではなく、あくまでそれぞれの語幹を見分けるために付したインデックスであるということに留意されたい。この点については後述する。

なお、(6-20) には、七つの形態パターンを挙げたが、これらすべてが語彙項目としてレキシコンに登録されているかは考える余地があるだろう。例えば、1 音節語幹の動詞のように、当てはまる動詞が少ない形態パターンを語彙項目と仮定する必要があるかは、少なくとも現段階では分からない。ただし、完全に不規則な形式の語幹については、抽象化された形態パターンを仮定する必要はないと考えられる。形態パターンは、類推による新たな語幹形成と、語形に関する情報がレキシコンから失われた際の語幹形成を説明するために仮定される。不規則な形式の語幹に合わせて語形が新たに作り出されるということは現実的にはあり得ない。また、一語しかない不規則な語形をもつ動詞の情報が失われるということは、それに対応する形態パターンも同時に失われることを意味する。つまり、完全に不規則な形式の語幹を抽象化した形態パターンが語幹形成のために用いられることは起こり得ない。このことを考慮すると、完全に不規則な形式の語幹の形態パターンはレキシコンにないと考えても特に問題とはならない。

(6-20) の形態パターンが語彙項目として仮定され、それぞれの語幹が規則で関係づけられていれば、ある一つの語幹の形式から、ある動詞の語幹がそれぞれどのような形式であるのか、あるいは三つの語幹すべてそろっているのかは予測可能である。例えば、語基の最後の音節主音が成節鼻音 *m* となる語幹の場合、残る二つの語幹は (6-20b) のスキーマに準じた形式となる。1 音節の語幹は、語基の最後に現れる半母音の音価や末母音の音価をみれば、残りの語幹の形式が (6-20c, d, e) のスキーマに基づき予測できる。また、受動動詞の語幹であれば、(6-20f) のスキーマから、その動詞には基本語幹と接続語幹の二つしかないことが分かる。

つまり、(6-20) の形態パターンとそれぞれの語幹を関係づける規則を仮定すれば、アスペクトやムードといった形態統語素性ではなく、形態パターンだけを参照することにより⁹³、ある動詞の語幹を同じ動詞の他の語幹から演繹的に導き出すことができる。な

⁹³ ただし、受動動詞については、語幹末が *-wa* となる非受動動詞があることを考慮にいと (例: *-lewa*「酔う」)、形式だけでなく、その動詞が受動動詞であるという素性まで参照されていると仮定する必要があるかもしれない。

お、あとで、語幹交替と接頭辞付加を説明するために、Paradigm Function Morphology (PFM) という理論的枠組みを導入するが、以下に示す通り、PFM を提唱している Stump (2001) も語幹形成について類似した説明を与えている。

STEM-FORMATION RULES, whose job is to express generalizations of the type ‘if such-and-such member of lexeme L’s stem inventory has the phonological form X, then such-and-such other member of L’s inventory has the phonological form Y’. (Stump 2001: 183)

A stem-formation rule allows the phonological form of a stem to be deduced from that of some other stem of the same lexeme. (Stump 2001: 199)

6.3.2.2 形態パターンに基づく語幹の形成

表 6-6 に示す通り、バントゥ祖語の段階ではもともと動詞でなかった要素や、借用語の一部も基本語幹、完結語幹、接続語幹をもつ。

表 6-6：新たに形成された語幹

	基本語幹	完結語幹	接続語幹
a. <i>-na</i> “Possession”	<i>-n-a</i>	—— ⁹⁴	<i>-n-e</i>
b. <i>-tafuta</i> “search” (borrowed from Arabic)	<i>-tafut-a</i>	<i>-tafut-u</i>	<i>-tafut-e</i>
c. <i>-penda</i> “like” (borrowed from Swahili)	未確認	<i>-pend-e</i>	未確認

末母音 *a* と *e* はバントゥ祖語まで遡るとされる (Meeussen 1967: 110)。一方、所有を表す *-na* は、バントゥ祖語の conjunction/associative の **na* に由来すると考えられている (Nurse 2008: 251, Meeussen 1967: 115)。つまり *-ne* という接続語幹の形式は、少なくともバントゥ祖語の段階では存在していなかったと考えられる。なお、*-na* を用いた所有表現と接続語幹は、スワヒリ語にもあるが、*-na* が *-ne* という接続語幹をもつという報告は筆者の知る限りなされていない。(6-21) は、*-na* の基本語幹が現れる例と、接続語幹が現れる例である。

⁹⁴ 所有を表す動詞 *-na* は、完結形、及び完結語幹を持たない動詞であると考えられる (4.2.2 節参照)。

(6-21) a. *ka-na* *wasiwasi*
 3SG.SM-POSS worry
 「彼は心配している」(基本語幹)

b. *u-si-ne* *wasiwasi*
 2SG.SM-NEG-POSS.SUBJ worry
 「心配するな」(接続語幹)⁹⁵

-tafuta 「探す」はアラビア語からの借用語である⁹⁶。アラビア語ではもともと *taffattāṣ* という語形で、借用されたのちに語末の *ṣ* で転写された無声後部歯茎摩擦音が使役を形成する派生接尾辞と異分析され、そこから逆成が生じて *-tafuta* という形式が形成されたとされる (Johnson 1939: 445, Nurse & Hinnebusch 1993: 317)。次の (6-22) は *-tafuta* のそれぞれの語幹が現れる例である。

(6-22) a. *nda-tafut-a* *maji*
 go:1SG.SM-go-search-FV water
 「私は水を探しに行く」(基本語幹)

b. *ka-tafut-u* *embe*
 3SG.SM-search-FV (PFV) mango(es)
 「彼はマンゴーを探した」(完結語幹)

c. *u-tafut-e* *baskeli*
 2SG.SM-search-FV (SUBJ) bicycle
 「自転車を探せ」(接続語幹)

末母音を形態素とみなした場合、これらの動詞の語幹形成は、祖語の末母音に遡らない *-na* や *-tafuta* の語幹末の母音が、末母音として異分析され、残りの部分が語基としてレキシコンに登録され、そののちに完結語幹や接続語幹の末母音が付加されたと考える

⁹⁵ (6-21b) は、次の例に示す通り、コピュラ動詞の接続形を介す表現に言い換えることもできる。

例: *u-si-we* *na* *wasiwasi*
 2SG.SM-NEG-COP.SUBJ POSS worry
 「心配するな」

⁹⁶ *-tafuta* 「探す」以外の借用語動詞でも、語幹末の母音が *a* であれば、この母音部分は変化することがある。例えば、*-hara* 「腹を下す」、*-kaba* 「絞める」というアラビア語からの借用語動詞は、それぞれ、*-har-e*, *-kab-e* という語幹をもつ。

必要がある。それに対して、末母音を形態素とみなさない語基盤モデルに則った分析では、形態パターンから、これらの語の完結語幹や接続語幹が形成されたと考えることができる。

-penda 「好む」という動詞は、スワヒリ語からの借用であることが強く疑われる。スワヒリ語に基本語幹や接続語幹はある一方、完結語幹がないことを踏まえると、基本語幹の形式を借用したのちに、形態パターンに則って *-pende* という完結語幹が形成されたと考えられる。(6-23) は、*-penda* が完結形に活用している例である。

(6-23) *ka-N-pende* *yulya* *mama-angu*
3SG.SM-1SG.OM-like.PFV DEM.DIST.CL1 mother-my
「あの私のお母さん（育ての親）は私のことを好んだ」

6.3.2.3 *-langanza* ~ *-langanza* 「修理する」の完結語幹

-langanza 「修理する」という動詞の基本語幹には *-langanza* だけでなく、*-langanza* という異形態も存在する⁹⁷(BAKIZA 2012: 85)。それぞれの異形態に対応する完結語幹は、*-langanz-u*, *-langanz-i* となる。成節鼻音 *m* を語幹に含む動詞は他にもあるが、成節鼻音 *n* を語幹に含む動詞は他にないことを考慮にいれると、*m* から *n* への変化が生じていると考えられるが⁹⁸、成節鼻音 *m* の基底形として *mu* を仮定して、その母音 *u* が「複写」されるという説明では、なぜ成節鼻音が *m* から *n* になるのに伴って、完結語幹の末母音が *u* から *i* になるのかが説明できない。

Clements (1991) は、通言語的な立場から、子音と同じ調音位置に関する素性を用いて、母音の特徴も描き出すことができると主張している。この主張に従えば、*u* は [-coronal, +labial]、*i* は [+coronal, -labial] という素性をもつことになる (Clements 1991: 79, 80)。こうした母音の素性を考慮にいれると、新たな完結語幹は、語幹中の成節鼻音が *m* から *n* になるのに伴って、末母音も同じように素性を変えることにより生み出されたと考えられる。

語基の最後の音節主音の音価そのものではなく、そのなかの一部の素性によって、完結語幹の末母音が決定されれば、末母音が付加されるというプロセスを仮定しても、語基末の音節主音が *m* や *n* のときは、それぞれ *u*, *i* が末母音として現れることが予測できるようにも思われる。しかし、[+coronal, -labial] という素性をもつ母音としては、*i* 以外に *e* もあり、上述のように母音複写規則に修正を施すだけでは、なぜ成節鼻

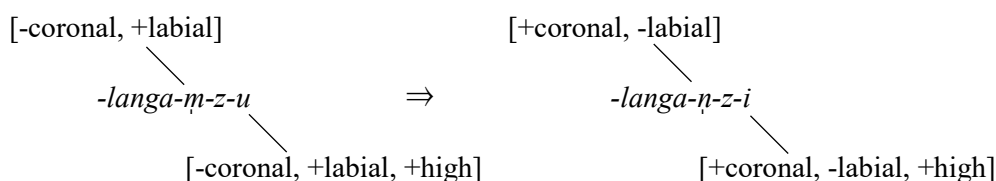
⁹⁷ どちらの異形態を用いるかは、話者によって異なる。

⁹⁸ 成節鼻音 *m* が後続する子音に調音点同化する変化は他のバントゥ諸語でも観察されている (Hyman 2003: 52–53)。

音 η に対応する末母音が e ではなく i になるのかが説明できない。

「語基の最後の音節主音が m のとき、完結語幹の末母音は u である」というような、成節鼻音 m と末母音 u を関連付ける形態パターンがあらかじめあり、その形態パターンをもとに新たな完結語幹が演繹的に形成されていると仮定すれば、 η に対応する末母音 i は u に由来するもので、成節鼻音の変化に合わせて母音の舌頂性や唇音性に変化が生じているものの、もともと有していた母音の高段性は保持されていると説明することができる。(6-24) はこの変化を示している。

(6-24) *-langamza/-langanza* 「修理する」の完結語幹



6.3.3 PFM について

その形式が、規則的か不規則かにかかわらず、すべての語幹がレキシコンに登録されており、レキシコンにない語幹は形態パターンに基づいて形成されたと考えた場合、語幹形成は、不規則な形式を含めて説明できるようになる。しかしながら、末母音の不在や語幹の形式と活用形の表す事態の間の不一致は、依然、問題として残る。また、接頭辞は、語幹と比して形式と機能の間に、より直接的な関係があるようにみえるが、接頭辞付加が、どのような規則に従っているのかということも説明する必要がある。仮に、語幹形成と異なる規則が働いているとするならば、その規則は語幹形成の規則と矛盾のないものでなければならない。

本節では上述の問題を解決するために、推論的・具現的 (inferential-realizational) な形態論のアプローチである Paradigm Function Morphology (PFM) (Stump 2001) を援用して、動詞の活用形形成の説明を試みる。

6.3.3.1 「推論的」かつ「具現的」アプローチ

PFM の特徴として、語形成は推論的、かつ具現的になされると考えている点が挙げられる。

「推論的 (inferential)」というのは、特定の形態統語素性と特定の形態論的操作 (例：接辞付加) を関係づける規則によって、屈折形式が語根ないしは語幹から推論的に形成されるということを意味する。これは、屈折機能を有する形態素を仮定する「語彙的

(lexical)」な考えと対立する。

「具現的 (realizational)」というのは、形態統語素性が具現化された結果、屈折形式が実現されるということを意味する。これは、具現形（例：形態素）の付加によって、屈折形式が形態統語素性を獲得すると仮定する「付加的 (incremental)」な考えと対立する。

この二つをまとめると、PFM では、屈折機能をもつ形態素を組み合わせることでではなく、形態統語素性が指定された結果、その形態統語素性と屈折形式とを関係づける規則によって、具体的な実現形が形成されるということを前提にしている (Stump 2001: 1–3, Stewart & Stump 2007: 386–387)。

6.3.3.2 PFM で仮定される二つの規則

PFM では、屈折形式を形成する二つの異なる規則が仮定される (Stump 2001: 44, 60, 184)。

- Morphomic rules: the rules of stem formation and stem indexing – no reference to the morphosyntactic properties.
- Realization rules: the rules of exponents, including stem selection – the individual rules of morphology realizing the language's morphosyntactic properties.

前者の規則 (Morphomic rules) は、語幹形成と語幹へのインデックス付与を説明する規則である。この規則では、形態統語素性は参照されない。後者 (Realization rules) は、形態統語素性を参照することで決定される屈折形式の形成を説明する規則である。この規則には、接辞付加や語幹選択が含まれる。

マクンドゥチ方言の動詞活用形形成もこの二つの規則を仮定すれば説明することができる。前者の規則は、6.3.2 節で説明した語幹形成規則に対応する。既に述べた通り、PFM でも語幹は演繹的に形成されていると仮定される⁹⁹ (Stump 2001: 183, 199)。後者はマクンドゥチ方言の、動詞活用形形成における語幹選択規則と接頭辞付加規則に対応する。なんらかの形態統語素性が指定されれば、この規則に従って、どの語幹が選択されるかや、どの接頭辞が語幹に付加されるかは自動的に決まる。

⁹⁹ ただし、PFM の背景に「余剰性は廃されるべき」という直観があり、規則的に活用した語はレキシコンに登録されていないと考えられているようである (Blevins 2006: 537)。PFM は、規則的に形成された語幹であってもレキシコンに登録されていると考える本論文の立場と、この点で異なる。

6.3.4 PFM による語幹交替の説明

6.3.4.1 語幹の実現プロセス

語幹が実現されるプロセスは以下のように示すことができる。

(6-25) 語幹の形成プロセス

a. Stem formation → b. Stem indexing → c. Stem selection

まず、ある語幹の形式が、レキシコンに登録されていない場合、(6-20) に示した形態パターンから、その語幹が形成される。次に、それぞれの語幹に対して「未指定 (default)」(基本語幹)、「完結 (perfective)」(完結語幹)、「接続 (SUBJunctive)」(接続語幹) というインデックスがふられる。そしてインデックスが付与された後、形態統語素性が与えられると、それぞれの語幹のインデックスから適切な語幹が選択される (Stump 2001: 199–200)。

語幹選択の規則は以下のように規定できる。なお、以下の規則は、命令形にも接続語幹が現れるという事実は無視して簡略化していることに留意されたい。

(6-26) 語幹選択規則

- a. 基本語幹と借用語語幹はいずれの活用形でも選択肢となる。(デフォルト規則)
- b. 完結アスペクトが与えられた場合、その動詞に完結語幹があれば完結語幹が選択される。
- c. 接続ムードが与えられた場合、その動詞に接続語幹があれば接続語幹が選択される。

(6-26a) はデフォルトの規則となる。基本語幹は、完結形と接続形でも選択肢となりうる。しかし、(6-26b, c) という (6-26a) に優先する規則が存在するため、最も特定の規則が適用されるという非該当条件 (elsewhere condition) により、完結形や接続形では、基本語幹は選択されない。こうした規則を仮定すれば、三つの語幹の交替だけでなく、受動動詞のように完結語幹を欠いた動詞や、借用語語幹をもつ動詞の語幹選択も容易に説明することができるようになる。以下で具体例を挙げて説明する。

例えば、*-soma*「読む」は以下のような三つの語幹をもつ。この動詞に対して、完結というアスペクトが与えられた場合、完結語幹だけでなく、基本語幹も選択肢となるが、非該当条件によって、完結語幹が選択される。

(6-27) *-soma* 「読む」の三つの語幹

a. [/soma/ default] b. [/somo/ PFV] c. [/some/ SUBJ]

次に、受動動詞の*-pigwa* 「打たれる (打つ+受動)」についてみる。完結アスペクトが与えられた場合、*-pigwa* は完結語幹をもたないため、基本語幹と競合する選択肢がなく、基本語幹が選ばれる。

(6-28) *-pigwa* 「打たれる」の二つの語幹

a. [/pigwa/ default] b. [/pigwe/ SUBJ]

最後は、借用語語幹 *sahau* 「忘れる」である。*sahau* に語幹は一種類しかない。完結形でも接続形でも、この唯一の語幹と競合する選択肢はない。そのため、どんな活用形でも語幹の形式は同じになる。

(6-29) *-sahau* 「忘れる」の語幹

[/sahau/ default]

インデックスが付与されるというプロセスは、特に完結語幹と接続語幹の形式が一致する場合を踏まえると必要になると考えられる。語基の最後の母音が *a* となる動詞では、基本語幹と完結語幹の形式が一致する。この場合、その動詞が、基本語幹と接続語幹しかもたないと考えても、受動動詞と同じように語幹選択がなされれば、正しい活用形が予測される。しかし、語基の最後の母音が *e* となり、完結語幹と接続語幹の形式が一致する動詞では、完結語幹と接続語幹を区別するプロセスがなければ、末母音の形式から、その動詞は基本語幹と接続語幹しかもたないことになり、完結形でも基本語幹が実現することが予測されてしまう。

なお、Hyman et al. (2008: 278–280) は、明示的に述べていないものの、バントゥ系言語の一つであるンデベレ語の末母音付加を推論的かつ具現的な立場から説明しようとしている。Hyman et al. (2008) は、「接続」や「否定」、「完結」といった形態統語素性が実現される場合、それぞれに対応する末母音が選択されるが、こうした素性の指定がない場合は、*a* という末母音が選択されるとしている。この説明は、本論文の説明と類似しているが、仮に末母音付加のプロセスを仮定するのであれば、不規則な形式の語幹形成や、末母音を欠いた借用語語幹を含む活用形形成については、別に説明する必要がある。

6.3.4.2 接頭辞の付加

本章の主な分析対象ではないが、接頭辞の付加についても簡単に述べる。接頭辞では、主語や目的語との一致や、TAM、否定極性が表される（4.1 節参照）。それぞれの接頭辞がどの位置に現れるかは決まっている。その位置をスロットと呼ぶことにすると、PFM では、それぞれのスロットが、別個の規則の集合である規則ブロックに一致しているとされる。例えば、ある一つのブロックの中には、TAM を表す接頭辞を実現する規則が含まれる。語幹選択規則と同様に、ある形態統語素性が指定された場合、その素性に合致する規則により、それぞれの接頭辞が実現される (Stump 2001: 44–46)。なお、完結形ではアスペクトを表す接頭辞が付加されない。これは、完結というアスペクトが与えられた場合にそれに対応する TAM 接頭辞を実現する規則が存在しないためであると考えられる (cf. Zwicky 1985: 377)。

6.4 6章のまとめ

本章では、まず、マクンドゥチ方言の末母音が必ずしも動詞活用形が表す事態と対応しているわけではないことや、末母音付加という形態論的プロセスを仮定した場合に、例外を認める必要や、規則で説明できないものがあることを示した。そして、これを問題の端緒として、従来とは異なるアプローチで、語幹形成、更には活用形形成を説明することを試みた。

本章の記述的な意義として、末母音を形態素と分析する上での問題を提示したという点が挙げられる。特に、例外的、あるいは不規則な形式のデータはこれまでの記述に欠けていた。マクンドゥチ方言の動詞の、語幹形成や活用形形成については、他のアプローチによる説明もあり得るかもしれないが、どのようなアプローチであれ、少なくとも本論文で示した言語事実を説明できるものでなければならない。

マクンドゥチ方言は、他のスワヒリ語諸変種や、他の多くのバントゥ諸語と同様に膠着的な言語であるという一般化は成り立つかもしれない。しかしながら、それと同時に動詞に付加される接頭辞のように機能(や意味)と形の間に対応がはっきりしている「形態素」と、末母音のように機能と形の関係がそれほど明確でない「形態素」があるということも指摘できる。言語を記述する際は、この二つを峻別したうえで、それぞれに対して適切な説明を与えることが求められるだろう。

7章 テンス・アスペクト・ムード／モダリティ

本章では、マクンドゥチ方言の TAM (テンス・アスペクト・ムード／モダリティ) の標示について、次の 5 点を中心に記述を行う。

- 動詞に内在する語彙アスペクト
- 完結 (perfective) と完了 (perfect) の形式的な区別
- テンス (時制) を表す活用形の不在
- 文法化の過程にある動詞による TAM の標示
- 接続形の用法

7.1 節では、マクンドゥチ方言の動詞が、動詞に内在するアスペクトに関する特性に応じて六つに分類できることを示す。7.2 節では、完結形と TAM 接頭辞 *me-*「完了」でマークされる *me-*形の記述を行い、完結形が、典型的な「完結」に近い事態を表す活用形であるのに対して、*me-*形が、典型的な「完了」に近い事態を表す活用形であることを示す。この節では、この二つに対応する否定形、*mena-*「起動」でマークされる活用形が表す事態の記述も行う。7.3 節では、TAM 接頭辞や語幹の交替といった活用によって、テンス (時制) が標示されないことを述べる。7.4 節では、文法化の結果生じた形式と、それによって表される事態の記述を行う。7.5 節では、接続形の用法を記述する。

なお、TAM に関する情報は、コピュラ動詞を介した複合時制構文でも表されうる。複合時制構文については、8.6 節で詳しく説明する。

7.1 動詞の語彙的な特性とアスペクトの関連

マクンドゥチ方言において、完結形や TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされる *na-*形¹⁰⁰がどのような事態を表すかは、動詞によって異なる。例えば、動詞の中には、完結形で基準時以前の事象の完結を表すものと、状態や結果状態を表すものがある。また、*na-*形で進行と習慣を表す動詞がある一方、習慣しか表さない動詞もある。こうしたことから、特にこの二つの活用形では、活用だけでなく、動詞の語彙的な特性も、動詞活

¹⁰⁰ 本論文では、特定の TAM 接頭辞でマークされる活用形に言及する際、その TAM 接頭辞の形に基づいた呼び名をつけることがある。例えば、TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされる活用形は *na-*形となる。

用形が表す事態の決定に関与していると考えられる。以下で、この二つの活用形が表す事態を観察しながら、動詞に内在する語彙アスペクトについて考察する。

7.1.1 状態動詞

本論文では、完結形で状態、及び結果状態を表す動詞のことを状態動詞と呼ぶことにする。状態動詞と同じような動詞は、他のバントゥ諸語にも存在しており、その数は、非状態動詞と比べると少ないことが指摘されている (Nurse 2008: 97)¹⁰¹。完結形に活用した際に、時間副詞 *bado* 「まだ」や持続を表すコピュラ-*ngali* と共起できることを基準とすると¹⁰²、マクンドゥチ方言では、表 7-1 のような動詞を状態動詞として列挙することができる。表 7-1 の状態動詞は、*na*-形の有無や、*na*-形で進行を表すことができるかどうかによって、更に三つに分類される。

¹⁰¹ Nurse (2008) は、状態動詞が状態を表す活用形のことを「完結」(perfective)ではなく、「完了」(perfect/anterior)と呼んでいる。後述する通り、本論文では、「完了」というラベルは他の活用形に対して付す。

¹⁰² Nedjalkov & Jaxontov (1988: 15) は、「まだ」を意味する副詞が、現在の状態を表す結果相とは自由に共起する一方、現在と関連のある過去の事態を表す完了相とは共起しないことを指摘している (cf. Bybee et al. 1994: 65)。また、Nedjalkov & Jaxontov は、不可逆的な状態 ('to know', 'to remember', 'to love') や不変的な状態 ('to be ripe', 'to be broken', 'to be cooked') は、「まだ」と共起しないと述べているが、マクンドゥチ方言において「知る」「好む」「壊れる」を意味する動詞の完結形は「まだ」を意味する語と共起する。

表 7-1 : マクンドゥチ方言の状態動詞の例

<i>na</i> -形が表す事態	例
A. <i>na</i> -形無 (非動作)	- <i>ijua</i> 「知っている」、- <i>kaza</i> 「好ましい」、- <i>chukia</i> 「嫌っている」
B. 習慣 (非動作)	- <i>chaga</i> 「痛む」、- <i>choka</i> 「疲れる」、- <i>dumba</i> 「同意する」、- <i>fwana</i> 「お洒落する」、- <i>fanana</i> 「似ている」 ¹⁰³ 、- <i>furahi</i> 「喜ぶ」、- <i>lewa</i> 「酔う」、- <i>kacha</i> 「固まる」、- <i>koswa</i> 「腹を立てる」、- <i>sahau</i> 「忘れる」、- <i>shangaa</i> 「驚く」、- <i>shiba</i> 「満腹になる」、- <i>shugulika</i> 「忙しい」、- <i>tulia</i> 「落ち着く」、- <i>umia</i> 「痛む」、- <i>vyeza</i> 「元気になる」 ¹⁰⁴ 、- <i>wa</i> 「コピュラ」
C. 習慣・進行 (動作)	- <i>aga</i> 「迷子になる、失せる」、- <i>baki</i> 「残る」、- <i>chanua</i> 「咲く」、- <i>chuch^hama</i> 「しゃがむ」、- <i>chuch^hamia</i> 「つま先立ちをする」、- <i>egemea</i> 「寄りかかる」、- <i>enda</i> 「行く」、- <i>funga</i> 「閉める、縛る」、- <i>jaa</i> 「満ちる」、- <i>ima</i> 「止まる」、- <i>kaa</i> 「座る」 ¹⁰⁵ 、- <i>lala</i> 「寝る」、- <i>tua</i> 「置く」、- <i>uka</i> 「発つ」、- <i>uka wima</i> 「立つ」、- <i>vwaa</i> 「着る」

(7-1) では、表 7-1 に挙げた A, B, C の動詞の完結形が時間副詞 *bado* 「まだ」やコピュラ動詞持続形 *-ngali* と共起することを示す。(7-2) は、非状態動詞 *-imba* 「歌う」の完結形が *-ngali* や *bado* と共起できないことを示している。なお、*-ngali* は、コピュラ動詞に由来する助動詞で *ka-* 「継起」マークされる活用形と共起できる。

¹⁰³ *-fanana* 「似ている」は、*na*-形でも「似ている」という状態を表す。こうした *na*-形の使用は、ウングジャ方言からの影響であると考えられる。

¹⁰⁴ *-vyeza* 「元気になる」は、もっぱら次のような挨拶表現で観察される。10代や20代の話者の中には、この語彙の知識をもたないものもみられる。

例 : A: *ku-vyeze*

2SG.SM-get_well.PFV

「元気？」

B: *N-vyeze*

1SG.SM-get_well.PFV

「元気」

¹⁰⁵ *-kaa* は「座る」と「住む」を表すことがあるが、完結形では、「座る」としての解釈が自然となる。

(7-1) 状態動詞の完結形が *bado, -ngali* と共起することを示す例

a. *bado N-mw-ijua*

still 1SG.SM-3SG.OM-know.PFV

「まだ私は彼を知っている」(Aの動詞の例)

b. *bado ka-choko*

still 3SG.SM-get_tired.PFV

「彼はまだ疲れている」(Bの動詞の例)

c. *bado a-ngali k-ende skuli*

still 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-go.PFV school

「彼はまだ学校に行っている」(Cの動詞の例)

(7-2) a. **bado a-ngali k-embi*

still 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-sing.PFV

b. *bado a-ngali a-k-emba*

still 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-CONS-sing

「彼はまだ歌っている」(非状態動詞の例)

(7-3)(7-4) には、B, Cの動詞が *na-*「未完結」でマークされる例を提示する。(7-3) は、*na-*形で習慣を表す例となる。

(7-3) *na-*形で習慣を表す例

a. *kila a-ka-lya ka-na-shiba*

every 3SG.SM-COND-eat 3SG.SM-IPFV-satisfy

「彼は食事をしたら、いつも満腹になる」(Bの動詞の例)

b. *kila siku ka-na-lala saa tano*

every day 3SG.SM-IPFV-fall_asleep hour five

「毎日彼は11時に寝る¹⁰⁶」(Cの動詞の例)

¹⁰⁶ 時間は *saa* 「時」に数字が後続することによって表されるが、ザンジバルで使われる時間表現と、日本で使われる時間表現との間には6時間の差がある。このため、*tano* 「5」を用いた(7-3)の時間表現は、(昼か晩の)11時と訳される。

(7-4) は *na*-形で、進行を表すことができるかどうかを示す例である。(7-4a) に示す通り、B の動詞-*shiba* 「満腹になる」は、*na*-でマークされた際に、現在腹が満ちつつあることを示すことはできない。そのことを示すためには、(7-4b, c) に示す通り、TAM 接頭辞 *mena*- 「起動」を用いるか、別の動詞-*karibia* 「近づく」を用いる必要がある。

(7-4) *na*-形で進行中の動作を表す例

a. #*ka-na-shiba*

3SG.SM-IPFV-satisfy

b. *ke-mena-shiba*

3SG.SM-INCH-satisfy

c. *ka-na-karibia* *ku-shiba*

3SG.SM-IPFV-reach INF-satisfy

「彼は満腹になりつつある」(B の動詞の例)

d. *ka-na-lala* *kidogo~dogo*

3SG.SM-IPFV-fall_asleep small.CL7~RED

「彼は少しずつ寝ている(横になっている)」(C の動詞の例)

上記の例で示した A, B, C の動詞の特徴を簡単にまとめる。まず、A の動詞は *na*-形を欠いている。これに対して、B, C には、*na*-形がある。B は *na*-形で習慣を、C は習慣と進行を表す。また、C の動詞はその結果状態に至る具体的な動作を伴うという点で A, B の動詞と異なる。

A の動詞は、*na*-形を欠いているという点で、他の動詞とは異なるが、このことは、A の動詞と *na*-形の間にある意味的な不整合性の文法への反映とみなすことができる。Nedjalkov & Jaxontov (1983: 4) は、「知っている」「好む」といった不変的な状態を、その状態への遷移が繰り返し起こるような一時的な状態と区別している。A の動詞は、不変的な状態を表す動詞である。他の状態動詞は、*na*-形に活用して習慣を表す場合、ある状態への変化が繰り返し起こることを表す。A の動詞が *na*-形を欠いているのは、そもそも不変的な状態への遷移が、繰り返し生じにくいことに起因していると考えられる。

繰り返しある事物を知ることや、好きまたは嫌いになったりすることはあまりない¹⁰⁷。

Cの動詞の完結形は結果状態以外に基準時以前に完結した事態も表す。(7-5)と(7-6)は、ともに*-lala*「寝る」が完結形に活用している例だが、(7-5)では結果状態が、(7-6)では、基準時以前の事態の完結が表されている¹⁰⁸。

(7-5) *bado ka-lala*

still 3SG.SM-fall_asleep.PFV

「まだ彼は寝ている」(結果状態の例)

(7-6) A: *jana usiku ku-lala saa ngaβi*

yesterday night 2SG.SM-fall_asleep.PFV hour how_many

「昨日、夜何時に寝た？」

B: *N-lala saa tano*

1SG.SM-fall_asleep.PFV hour five

「11時に寝た」(完結の例)

Cの動詞の中には、その意味から一見すると非状態動詞のように思われるものもある。こうした動詞と非状態動詞の違いは、*bado*「まだ」やコピュラ動詞の継続形*-ngali*との共起の可否だけでなく、コピュラ動詞*-evu*の使用にも見出すことができる。(7-7)(7-8)に示す通り、Cの動詞の完結形によって表される事態から生じる状態がキャンセルされたことを表す文が後続する際は、コピュラ動詞の過去形*-evu*が義務的に用いられるが、非状態動詞では、*-evu*の使用が随意的となる。コピュラ動詞過去形*-evu*は、過去に生じた事態が現在と関わりをもたないことを示すために用いられていると考えられる。なお、以下の例では、問題となる動詞を太字で表記し、訳の横に付した()内に、どの動詞が問題となるか、その動詞が状態動詞であるか非状態動詞であることを示す。また、動詞

¹⁰⁷ *-ijua*「知る」の*na*-形が聞き出しで容認されたこともあったが、これは決して自然な例ではない。次の例では、*na*-でマークされた*-ijua*は*-tambua*「理解する」と同じ意味を表すものと解釈される。

例: *ka-na-v-ijua*

tu-na-vyo-soma

3SG.SM-IPFV-CL8.OM-know 1PL.SM-IPFV-CL8.REL-study

「彼は、我々が学んでいることをすべて知る(理解する)」

¹⁰⁸ *-ima*「止まる」、*-kaa*「座る」、*-vwaa*「着る」の完結形が過去の時点を表す要素と共起する際は、「以来」を意味する要素とともに用いることが好まれる。このことから、少なくともこれらの動詞は、完結形に活用した場合、適切な文脈が与えられない限り、結果状態の方がより自然な解釈になると考えられる。

完結形によって表される事態から生じる状態がキャンセルされたことを表す文が後続する際に-*evu* との共起が義務的であるかについては、ほかの動詞を用いても確認しているが、そうした例については付録を参照されたい。

- (7-7) a. *k-evu* *k-ende* *mji-ni* *jana* *hea sasa ke-me-rudi*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-go.PFV town-LOC yesterday but now 3SG.SM-PRF-come_back
 b. **k-ende* *mji-ni* *jana* *hea sasa ke-me-rudi*
 3SG.SM-go.PFV town-LOC yesterday but now 3SG.SM-PRF-come_back
 「彼は昨日街に行ったが、今は戻ってきた」(状態動詞-*enda* 「行く」)

- (7-8) a. *k-evu* *ka-ngii* *chumba-ni* *hea ke-si-lawa*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-go_in.PFV room-LOC but 3SG.SM-finish.PFV-come_out
 b. *ka-ngii* *chumba-ni* *hea ke-si-lawa*
 3SG.SM-go_in.PFV room-LOC but 3SG.SM-finish.PFV-come_out
 「彼は部屋に入ったが、出た」(非状態動詞-*ngia* 「入る」)

いくつかの動詞は、中立動詞と受動動詞に派生した場合、完結形で結果状態を表すようになる。言い換えると、これらの動詞は派生によって、状態動詞としての特性を得る。表 7-2 に、状態動詞となる派生動詞を列挙する。ここに示す通り、派生によって形成される状態動詞のほとんどが、破壊に関する意味をもつものである¹⁰⁹。

表 7-2 : 派生によって形成される状態動詞の例

非派生動詞	中立動詞	受動動詞
- <i>bomoa</i> 「壊す」	- <i>bomoka</i> 「壊れている」	- <i>bomolwa</i> 「壊される」
- <i>chana</i> 「破る」	- <i>chanika</i> 「破れている」	- <i>chanwa</i> 「破られる」
- <i>kunja</i> 「(紙などを) 折る」	- <i>kunjika</i> 「折れている」	- <i>kunjwa</i> 「折られる」
- <i>panda</i> 「植える」	- <i>pandika</i> 「植えられている」	- <i>pandwa</i> 「植えられる」
- <i>toboa</i> 「穴を開ける」	- <i>toboka</i> 「穴が開いている」	- <i>tobolwa</i> 「穴を開けられる」
- <i>vunja</i> 「壊す、(骨を) 折る」	- <i>vunjika</i> 「壊れている」	- <i>vunjwa</i> 「壊される」

¹⁰⁹ 破壊に関する動詞が多いということから、非派生動詞の目的語、中立動詞や受動動詞の主語となる名詞の状態に変化が生じることを表す動詞が、状態動詞としての特性をもつ中立動詞となることが推測される。

(7-9) は、*-bomoa*「壊す」が、中立動詞-*bomoka*、受動動詞-*bomolwa* に派生して、状態動詞としての特性を得ることを示している。非派生動詞-*bomoa* の完結形はコピュラ動詞の持続形-*ngali* と共起できないが、中立動詞や受動動詞に派生すると-*ngali* と共起できるようになる。

(7-9) a. **tu-ngali* *tu-bomoo* *nyumba iyo*
 1PL.SM-COP.PER 1PL.SM-break.PFV house DEM.MED.CL9

「我々はまだその家を壊した」(非派生動詞)

b. *nyumba iyo* *i-ngali* *i-bomoko*
 house DEM.MED.CL9 CL9.SM-COP.PER CL9.SM-break.NEU.PFV

「その家はまだ壊れている」(中立動詞)

c. *nyumba iyo* *i-ngali* *i-bomolwa*
 house DEM.MED.CL9 CL9.SM-COP.PER CL9.SM-break.PASS.PFV

「その家はまだ壊されている」(受動動詞)

なお、動詞の中には中立動詞に派生して、潜在的な可能性を表すようになるものもあるが (Racine-Issa 2002: 100, cf. Ashton 1947: 227–228)、こうした動詞は、完結形に活用しても状態を表さない。(7-10) は、*-bika*「料理する」に対応する中立動詞-*bikika* や受動動詞-*bikwa* が、状態動詞とならないことを示している。中立動詞-*bikika* や受動動詞-*bikwa* の完結形は、コピュラ動詞の持続形-*ngali* と共起することができない。

(7-10) a. *mikate i-ngali* *i-na-bikika*
 bread CL4.SM-COP.PER CL4.SM-IPFV-cook.NEU

b. **mikate i-ngali* *i-bikiki*
 bread CL4.SM-COP.PER CL4.SM-IPFV-cook.NEU.PFV

「パンはまだ作れる」(中立動詞)

c. *mikate i-ngali* *i-na-bikwa*
 bread CL4.SM-COP.PER CL4.SM-IPFV-cook.PASS

d. **mikate i-ngali* *i-bikwa*
 bread CL4.SM-COP.PER CL4.SM-IPFV-cook.PASS.PFV

「パンはまだ作られている」(受動動詞)

7.1.2 非状態動詞

表 7-3 に、完結形で、状態や結果状態ではなく基準時以前に生じた事象の完結を表す非状態動詞を挙げる。非状態動詞も、*na*-形が表す事態に応じて、更に細かく分類することができる。なお、非状態動詞のなかには、*na*-形で進行や習慣ではなく、状態を表すものもある。また、D の動詞は、義務的な終点の有無に応じて二つに分けている。

表 7-3：非状態動詞の例

<i>na</i> -形が表す事態	例
D1. 進行・習慣 (義務的な終点無)	<i>-lya</i> 「食べる」、 <i>-sizia</i> 「ウトウトする」、 <i>-tembea</i> 「歩く」、 <i>-βika</i> 「料理する」
D2. 進行・習慣 (義務的な終点有)	<i>-fwa</i> 「死ぬ」、 <i>-ja</i> 「来る」、 <i>-maliza</i> 「終える」
E. 習慣	<i>-dat^ha</i> 「割ける」、 <i>-fika</i> 「到着する、至る」、 <i>-shinda</i> 「勝つ」
F. 状態	<i>-chaka</i> 「欲する」、 <i>-faa</i> 「合う」、 <i>-goma</i> 「できる」、 <i>-kumbuka</i> 「覚えている」

(7-11) (7-12) (7-13) は、*na*-形の非状態動詞の例である。

(7-11) *na*-形で習慣を表す例

a. *kila siku ka-na-βika*

every day 3SG.SM-IPFV-cook

「彼（女）は毎日料理する」（D1 の動詞）

b. *kale wat^hu wengi w-evu wa-na-fwa malaria*

previously people many.CL2 3PL.SM-COP.PST 3PL.SM-IPFV-die malaria

「かつては、マラリアで多くの人が死んだものだった」（D2 の動詞）

c. *kia¹¹⁰ h-enda mabwe-ni ŋpira wangu u-na-dat^ha*

every 1SG.SM-COND-go stone-LOC tire(CL3) my.CL3 CL3.SM-IPFV-crackle

「石場（石のある山）に行くといつも、私の（自転車の）タイヤは割ける」

(E の動詞)

¹¹⁰ *kila* 「あらゆる」は *kia* という異形態をもつ。

(7-12) *na*-形で状態を表す例

k-evu ka-na-goma k-ogolea bali sasa ha-gomo
3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-be_able INF-swim but now 3SG.SM:NEG-be_able.PFV
「彼は (かつて) 泳ぐことができたが、今はできない」 (F の動詞)

(7-13) *na*-形で進行を表す例

a. *N-∅-vyo-fika nyumba-ni fatuma ka-na-βika*
1SG.SM-PFV-REL.CL8-reach house-LOC PN 3SG.SM-IPFV-cook
「私が家に着いたとき、ファトマは料理をしていた」 (D1 の動詞)

b. *N-∅-vyo-fika nyumba-ni baba=angu k-evu ka-na-kufwa*
1SG.SM-PFV-REL.CL8-reach house-LOC father=my 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-die
「私が家に着いたとき、私の父は死にかけていた」 (D2 の動詞)

c. **N-∅-vyo-m-pigia simu pandu ka-na-fika nyumba-ni*
1SG.SM-PFV-CL8.REL-3SG.OM-hit.APPL phone PN 3SG.SM-IPFV-reach house-LOC
「私が電話をかけたとき、パンドゥは家に着きつつあった」 (E の動詞)

D2 の動詞が表す事態は、義務的な終点を含むという特徴を、E の動詞と共有している。しかし、D2 の動詞では、その終点に至るまでの過程が *na*-形で表されうるのに対して、E の動詞ではそのような事態は表されない。上の (7-13b, c) はそのことを示している。*na*-形に活用した場合、*-fwa*「死ぬ」は、進行として終点に至るまでの過程を表すことができるが、*-fika*「至る」は終点に至るまでの過程を表すことができない。なお、(7-13b, c) の例は、ともに過去の時点の事態だが、コピュラ動詞過去形-*evu* の有無に違いがある。一見するとこのコピュラ動詞の有無が容認性の違いに影響を及ぼしているようにもみえるが、コピュラ動詞の無い (7-13a) が言えることから、コピュラ動詞の不在は、容認性の違いに関係しているとは考えにくい。

習慣と進行は *na*-形自体に内在する多義性であると考えられる。このことは、D の動詞が、*na*-形に活用した場合、進行と習慣のどちらも表すことができることから分かる。それに対して、F の動詞の *na*-形が表す状態は、動詞の語彙的な特性によるものと考えられる。

7.1.3 小括

完結形と-na-形が表す事態から、動詞は、内在するアスペクト特性に応じて六つに分類することができる。表 7-4 にこの分類を示す。

表 7-4 : 完結形と na-形が表す事態に基づく動詞の分類

	完結形	na-形 (未完結)
A	状態	——
B	結果状態	習慣
C	結果状態／完結	習慣／進行
D	完結	習慣／進行
E	完結	習慣
F	完結	状態

完結形で、基準時以前の事象の完結を表すか、その事象の完結に起因する結果状態を表すか、それとも単なる状態を表すかに関する情報は、そのまま語彙的に指定されていると考えられる。C の動詞は、基準時以前にある事象が生じたことも結果状態も表すことのできる多義性を有しており、動詞に内在する意味的な特性や、動詞の活用以外の要因によって、どちらを表すかが決定されていると考えられる。

一方、na-形で、習慣と進行を表すことができるか、それとも習慣しか表すことができないかは、継続性の有無によって説明できそうである。Sasse (1992: 37) は、動詞の語彙的な意味と活用の双方が動詞活用形の表す事態の決定に関わるタイプの言語では、それぞれの動詞が潜在的に表しうる事態の一部が、活用によって選びだされるという考え方を提示している。この考え方に従うのであれば、C, D, F の動詞は、継続性を有しているために、na-形がその継続部分を選び出して動作の進行や、終点へ向かう動き、結果状態への遷移、状態を表すことができるのに対して、B, E の動詞には、継続性がなく、終点へ向かう動きや結果状態への遷移部分を切り取ることができないために、na-形で、複数の場面で繰り返し起きる習慣的な事態は表しうるものの、ある一つの場面で生じている進行のような事態を表すことができないと考えられる。

なお、na-形は、動詞が潜在的に表すことのできる事態しか表すことができないが、TAM 接頭辞 *mena-*「起動」でマークされた *mena-*形は、動詞に内在しないアスペクトの意味を付加することがある。まず、(7-14) に示す通り、継続性のある動詞が *mena-*形に活用した場合、その動作が開始され、現在も続いていることが表される。こうした動詞では、動詞に内在する始点から過程へと至る部分が、*mena-*形に活用することにより選出されていると考えられる。

(7-14) *fatuma ke-mena-βika*

PN 3SG.SM-INCH-cook

「ファトマは料理をし始めている」

一方、継続性をもたない動詞が *mena*-形に活用した場合は、動詞に内在しないはずの事態が表される。(7-15) (7-16) では、*mena*-形に活用した B, E の動詞が、結果状態への移行や、終点へ向かう動きを表している。(7-4a) (7-13c) で示した通り、両方とも *na*-形では表すことができない事態である。この二つの例では、*mena*-形に活用することにより、始点から過程へと至る継続性が付加されている。

(7-15) a. *ke-mena-shiba*

3SG.SM-INCH-satisfy

b. *#ka-na-shiba*

3SG.SM-IPFV-satisfy

「満腹になりつつある」(食事をしている最中)

(7-16) a. *ke-mena-fika* *kae*

3SG.SM-INCH-reach PN

b. *#ka-na-fika* *kae*

3SG.SM-IPFV-reach PN

「彼はカエ (マクンドゥチ) に至りつつある」(カエに至る道中で)

7.2 「完結」と「完了」

本節では、完結形と TAM 接頭辞 *me*-「完了」でマークされる *me*-形を中心に議論を行う。7.2.1 節では、この二つの活用形が表す事態を記述する。7.2.2 節では、完結形と *me*-形に対応する否定形の記述を行う、7.2.3 節では *me*-形と *mena*-形が表す事態から同定される *me*-の機能に齟齬があることを示す。

7.2.1 完結形と *me*-「完了」でマークされた活用形が表す事態

完結形と *me*-形は、基準時以前にある事態が生じたことを表すという点では同じである。しかし、この二つの活用形が表す事態は、詳しくみると異なる。この二つの活用形

の特徴や違いは、以下のようにまとめることができる。

- 完結形と *me*-形は、「過去」という時制を表す活用形ではない。
- 完結形は典型的な「完結」(perfective) を表す活用に、*me*-形は典型的な「完了」(perfect) を表す活用に近似した特徴をもつ。
- 完結形は基準時以前の事象の完結と結果状態を表す活用形である。
- 完結形と *me*-形によって表される事態は、基準時（現在）との関連の有無、基準時の結果状態が明示的に表されるかどうか異なる。

7.2.1.1 「過去」形ではない完結形と *me*-形

Racine-Issa (2002: 112) は、本論文で完結形と呼ぶ活用形のことを、*passé affirmative* (過去肯定) としている。確かに、(7-17) に示す通り、完結形では、状態や結果状態が表される場合を除いて、発話時以前に生じた過去の出来事が表されることが多い。(7-17) は B の話者の子供時代について話す談話から得られた例である。

(7-17) A: *ku-somo*

2SG.SM-study.PFV

「(子供の頃学校で) 勉強したの？」

B: *si-li-soma*

1SG.SM:NEG-PFV.NEG-study

「勉強しなかった」

しかし、完結形は、常に発話時以前の事態を表すわけではない。(7-18a) では、*-poa*「治る」という動詞の完結形が用いられているが、「治る」という出来事は、発話時の時点では生じていない。また、(7-18b) に示す通り、*me*-形の *-poa*「治る」が表す事象も、発話時以前に生じているとは限らない。こうした例から、完結形と *me*-形は、発話時以外の時点も基準時とする場合があることが分かる。

- (7-18) a. *hata mwakani*¹¹¹ *ka-poo*
 even next_year 3SG.SM-cure.PFV
 b. *hata mwakani ke-me-poa*
 even next_year 3SG.SM-PRF-cure
 「来年には、彼は治った（治っている）」

7.2.1.2 「完結」的特徴と「完了」的特徴

完結形と *me*-形は、特定の過去の時点を表す表現との共起の可否と、経験を表す用法の有無が異なる。(7-19a) に示す通り、完結形は特定の過去の時点を表す表現 *jana* 「昨日」と共起できるが、(7-19b) に示す通り、*me*-形はこうした表現と共起することができない。この共起の可否は *jana* 「昨日」の部分を、*saa mbili* 「8時」や *mwaka jana*¹¹² 「去年」に変えても変わらない。特定の過去の時点を表す表現と共起できないという特徴は、典型的な「完了」がもつ特徴で、典型的な「完結」にはみられない (Dahl 1985: 139, Bybee et al. 1994: 61–62)。

- (7-19) a. *ka-nunuu baskeli jana*
 3SG.SM-buy.PFV bicycle yesterday
 b. **ke-me-nunua baskeli jana*
 3SG.SM-PRF-buy bicycle yesterday
 「彼は昨日自転車を買った」

また、経験を表す際は、完結形ではなく、*me*-形が用いられる。そのことは、回数を表す表現との共起の可否からも分かる (cf. Dahl 1985¹¹³)。 (7-20a) に示す通り、完結形は、回数を表す表現と共起しにくい、(7-20b) に示す通り、*me*-形は回数を表す表現と問題なく共起できる。経験は、通言語的にみて、完了相を表す活用形で表されやすいことが知られる (Comrie 1976: 58–60, Bybee et al. 1994: 62)。

¹¹¹ *mwakani* は、*mwaka-ni* (year-LOC) と分析することができるが、「来年」という意味は、これらの形態素からは予測できない。

¹¹² *mwaka* は「年」*jana* 「昨日」という意味だが、この二つを組み合わせると「昨年」という意味になる。

¹¹³ Dahl (1985: 140) は回数を表す表現と共起できるかどうかを、経験を表す表現を導出する質問として挙げている。

(7-20) a. ?*k-ende* *pemba mara t^hatu*
 3SG.SM-go.PFV PN time(s) three

b. *ke-me-kwenda pemba mara t^hatu*
 3SG.SM-PRF-go PN time(s) three

「彼は三回ペンバ島に行ったことがある」

上記二つの点に着目すると、完結形が典型的な「完結」を表す活用の特徴をもつものに対して、*me*-形が典型的な「完了」を表す活用の特徴をもっていると言える。

7.2.1.3 現在との関連

現在（基準時）の状況との関連は、*me*-形では含意されているが、完結形で基準時以前の事象の完結が表される場合は、含意されていないと考えられる。(7-21)(7-22)はそのことを示す例である。(7-21)では、完結形と *me*-形ともに使用することができるが、(7-22)では、完結形しか用いることができない。

(7-21) a. *simu yangu ku-i-fichi* *wapi*
 phone my.CL9 2SG.SM-CL9.OM-hide.PFV where

b. *simu yangu ku-me-i-ficha* *wapi*
 phone my.CL9 2SG.SM-PRF-CL9.OM-hide where

「私の携帯をどこに隠したの？」

(7-22) a. *simu ino* *ku-i-vata* *wapi*
 phone DEM.PROX.CL9 2SG.SM-CL9.OM-get.PFV where

b. **simu ino* *ku-me-i-vata* *wapi*
 phone DEM.PROX.CL9 2SG.SM-PRF-CL9.OM-get where

「この携帯をどこで手に入れた？（見つけた？）」

(7-21) で尋ねているのは現在携帯電話がある場所である。それに対して、(7-22) では、現在でなく、過去に携帯電話があった場所を尋ねている。*me*-形で表される過去の出来事は、必ず現在の状況と関連をもつが、完結形が表す過去の出来事は必ずしも現在の状況との関連をもたないと考えると、(7-21) は、現在の状況を尋ねているため、*me*-形も完結形も容認される一方、(7-22) で尋ねているのは現在の状況ではなく、過去の状況であるために、完結形しか容認されないと説明することができる。

現在（基準時）の状況との関連は、「完了」の核となる意味と一般にみなされている

(Comrie 1976: 52, Bybee et al. 1994: 54, 61, Lindstedt 2000: 368)。 (7-21) (7-22) の例文を用いたテストからは、*me*-形がその「完了」の核となる意味を備えているのに対して、完結形はその核となる意味をもたないことが分かる。既に、過去の時点を表す表現との共起の可否や、経験を表す用法の有無から、マクンドゥチ方言の完結形が典型的な「完結」に近い活用で、*me*-形が典型的な「完了」に近い活用であることを指摘したが、こうした主張は、現在（基準時）の状況との関連を調べるテストの結果からも裏付けられる。

なお、このテストは英語の *have* と過去分詞からなる現在完了が結果状態 (*resultative*) を表すことを示すために用いられているものを参考にしているが (Michaelis 1994: 145, Kiparsky 2002: 132)、英語の現在完了は “still” 「まだ」と共起することができないことを考慮に入れると (Bybee et al. 1994: 63, Lindstedt 2000: 367)、英語の現在完了によって表される「結果状態」と、マクンドゥチ方言の完結形によって表される「結果状態」は性質を異にするものであると考えられる。7.1.1 節で示した通り、マクンドゥチ方言の完結形によって表される「結果状態」は、「まだ」を意味する *bado* やコピュラ動詞の持続形-*ngali* と共起することができる。

マクンドゥチ方言の *me*-形の状態動詞は、その動詞によって表される結果状態にあることを含意はするものの、そのことを明示的に表しはしない。まず、状態動詞が *me*-形に活用した場合、その動詞によって表される結果状態にあるという含意があることは、(7-23) に示す通り、*me*-形のあとに、その結果状態をキャンセルする文が後続できないことから分かる。

(7-23) **ke-me-lala* *hea sasa ka-wa* *macho*
 3SG.SM-PRF-fall_asleep but now 3SG.SM-COP.PFV awake
 「彼は寝たが、今は目が覚めている」

また、*me*-形の状態動詞が結果状態を明示的に表さないことは、(7-24) に示す通り、*me*-形に活用した状態動詞が、*bado* 「まだ」と共起できないことから分かる。

(7-24) **bado ke-me-lala*
 still 3SG.SM-PRF-fall_asleep
 「まだ彼は寝ている」(意図した解釈)

7.2.1.4 完結と結果状態を表す完結形

完結形は基準時以前の事象の完結だけでなく、結果状態も表す。この結果状態の用法の有無にも、完結形と *me*-形の違いを見出すことができる。(7-21) (7-22) のテストで示

した通り、完結形で基準時以前の事象の完結が表される場合、その過去の出来事は、基準時の状況とは必ずしも関連をもたない。一方、完結形が表す結果状態は、基準時の状態であって、いわずもがな基準時との関連をもつ。完結形で、完結を表すか結果状態を表すか、どちらか一方しか表すことができないか、両方を表すことができるかは、動詞によって異なる（7.1 節参照）。

7.2.1.5 完結形と *me*-形で表される事態の違い

本論文では、完結形と *me*-形が表す事態について、基準時の状況を含むかどうか、基準時における結果状態が明示されているかどうかという点から分類することを提案する。なお、完結形については、基準時以前に生じた出来事を表す用法（完結）と結果状態を表す用法を分けて整理する。

表 7-5：完結形と *me*-形が表す事態の違い

	基準時を含むか	結果状態
完結（完結形）	含まない ¹¹⁴	——
結果状態（完結形）	含む	明示
<i>me</i> -形	含む	非明示

以下に、完結形と *me*-形が表す事態を図で表す。濃い色がついて黒い太線で囲われている部分は明示的に表される事態、薄い色がついている部分は非明示的に含意される事態である。結果状態は、出来事の終点そのものを含まないため、出来事の終点の部分は点線にしている。

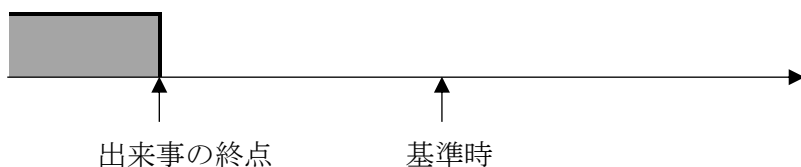


図 7-1：完結（完結形）が表す事態

¹¹⁴ *-ja*「来る」は、非状態動詞だが、完結形に活用した場合、その内容をキャンセルする節が後続すると、コンピュータの過去形を用いたほうが好ましいという判断をされることがある。また、非状態動詞でも、時間副詞と共起する際に、随意的ではあるが、*tangu*「以来」が用いられることがある。これらのことを踏まえると、完結形が結果状態を表さない場合でも、現在の状況との関連を含意する場合もあるかもしれない。

例： *ka-fiki* *βano* *tangu saa sita hea ke-me-uka*
 3SG.SM-reach.PFV DEM.PROX.CL16 since hour six but 3SG.SM-PRF-leave
 「彼はここに 12 時に着いたが発った」。

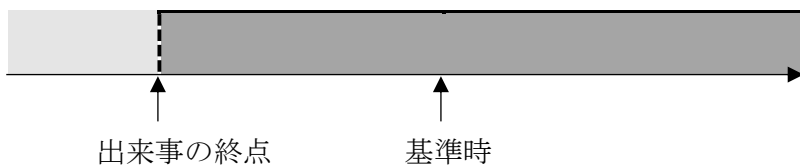


図 7-2 : 結果状態 (完結形) が表す事態



図 7-3 : *me*-形が表す事態

このように整理した場合、基準時を発話時（現在）とすると、特定の過去の時点を表す時間表現との共起は、完結形が発話時と関わりのない過去の出来事を表すために許されるのに対して、*me*-形は、単なる過去に起きた出来事ではなく、現在の状況も含む事態を表すために（現在を含む事態であるために）、許されないと考えることができる。

7.2.2 対応する否定形

7.2.2.1 完結形に対応する否定形と *me*-形に対応する否定形

完結形に対応する否定形は TAM 接頭辞 *li*-「完結否定」でマークされた *li*-形である。また、*me*-形に対応する否定形は TAM 接頭辞 *ja*-「完了否定」でマークされた *ja*-形である。それぞれが、完結形と *me*-形に対応していることは、完結形と *me*-形を用いた疑問文に対する適切な答えを調べることによって分かる。(7-25) は、*-lya*「食べる」の完結形を用いた疑問文の答えで *-lya* が *ja*-形ではなく *li*-形となることを示している。(7-26) は、*me*-形の *-lya*「食べる」を用いた疑問文の答えで *-lya* が *li*-形でなく *ja*-形となることを示している。こうした肯定と否定の対応関係は、動詞の語彙アスペクトによって変わることはない。

(7-25) A: *ka-li*

3SG.SM-eat.PFV

「彼は食べた？」

B: *ha-li-kulya* / #*ha-ja-lya*

3SG.SM:NEG-PFV.NEG-eat 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-eat

「彼は食べなかった」

(7-26) A: *ke-me-kulya*

3SG.SM-PRF-eat

「彼は食べた？」

B: #*ha-li-kulya* / *ha-ja-lya*

3SG.SM:NEG-PFV.NEG-eat 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-eat

「彼は（まだ）食べていない」

なお、完結語幹と否定接頭辞からなる活用形（否定完結形）も存在するが、この活用形は、ある出来事が生じなかったことではなく、ある出来事がこれから生じないことを表す（4.1.3 節参照）。そのため、否定完結形は、(7-27) に示す通り、*cha-*「未来」でマークされた動詞を用いた疑問文に対する応答文で用いられうる。

(7-27) A: *ka-cha-βika*

3SG.SM-FUT-cook

「彼は料理するだろうか？」

B: *ha-βiki* / *ha-cha-βika*

3SG.SM:NEG-cook.PFV 3SG.SM:NEG-FUT-cook

「彼は料理をしない」

7.2.2.2 二つの否定形の違い

*li-*形と *ja-*形は、基準時以前にその動詞が表す事態が成立していないという点は同じである。また、状態動詞がこれらの活用形に活用した場合、その動詞によって表される状態が基準時の段階で生じていないという点も共通している¹¹⁵。しかし、この二つの活用形は、基準時の段階で、その事態が成立していないことを明示的に表すかどうか異なる。

まず、(7-28a) (7-29a) に示す通り、*li-*形に活用した状態動詞の後に、基準時の段階でその状態になっていることを表す節は後続できない。

¹¹⁵ ウングジャ方言を母語として、マクンドゥチ方言も理解する話者が、マクンドゥチ方言の *li-*形の訳として、ウングジャ方言の *ja-*形をあげたという事実も、*li-*形と *ja-*形の表す事態が似ていることを示しているだろう。ウングジャ方言に *ja-*形はあるが *li-*形はない。また、ウングジャ方言の *ja-*形が表す事態は、マクンドゥチ方言の *ja-*形とほぼ同じであると考えられる。

- (7-28) a. **ha-li-shiba* *hea sasa ka-shibi*
3SG.SM:NEG-PFV.NEG-satisfy but now 3SG.SM-satisfy.PFV
b. *k-evu* *ha-li-shiba* *hea sasa ka-shibi*
3SG.SM-COP.PST 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-satisfy but now 3SG.SM-satisfy.PFV
「彼は満腹にならなかったが、今は満腹だ」

- (7-29) a. **ha-li-vwaa* *nguo hea sasa ka-vwaa*
3SG.SM:NEG-PFV.NEG-wear clothes but now 3SG.SM-wear.PFV
b. *k-evu* *ha-li-vwaa* *nguo hea sasa ka-vwaa*
3SG.SM-COP.PST 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-wear clothes but now 3SG.SM-wear.PFV
「彼は服を着なかったが、今は着ている」

これらの例から、状態動詞によって表される状態への変化は、基準時以前に生じていないだけでなく、基準時の段階でも成立していないことが分かる。なお、基準時の段階で、すでにその状態になっている場合は、(7-28b)(7-29b)に示す通り、コピュラ動詞の過去形-*evu*を*li*-形の前に挿入する必要があるが¹¹⁶、このコピュラ動詞過去形-*evu*は、基準時を過去として*li*-形の動詞によって表される事態が現在と関わりをもたないことを示すために用いられていると考えられる。

ただし、*li*-形に活用した状態動詞は、基準時の段階で、その状態にないことを含意はするものの、その状態への変化が生じていないことを表しているわけではないと考えられる。そのことは、(7-30)(7-31)に示す通り、*bado*「まだ」と共起することができないことからわかる。

- (7-30) **bado ha-li-shiba*
still 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-satisfy
「彼はまだ満腹でない」(意図した解釈)

- (7-31) **bado a-ngali ha-li-lala*
still 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-fall_asleep
「彼はまだ寝ていない」(意図した解釈)

それに対して、*ja*-形の状態動詞は、(7-32)(7-33)に示す通り、*bado*「まだ」やコピュ

¹¹⁶ (7-28b)(7-29b)は、コピュラ動詞過去形を用いずに、-*ja*「来る」を*li*-と動詞語幹の間に挿入した形式で言い換えることもできる。この-*ja*については、7.4.1節で説明する。

ラ動詞の持続形-*ngali* と共起することができる。このことから、*ja*-形の状態動詞は、基準時の段階でその状態への変化が生じていないことを表していると考えられる。

(7-32) *bado ha-ja-shiba*

still 3SG.SM-PRF.NEG-satisfy

「まだ彼は満腹になっていない」

(7-33) *bado a-ngali ha-ja-lala*

still 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-fall_asleep

「まだ彼は寝ていない」

ちなみに、(7-34) に示す通り、*ja*-形の非状態動詞も、その動詞によって表される事態が、基準時の段階で生じていないことを明示的に表す。

(7-34) a. *bado ha-ja-βika*

still 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-cook

「彼はまだ料理をしていない」

b. **bado ha-li-βika*

still 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-cook

7.2.2.3 二つの否定形とテンスの関係

Racine-Issa (2002: 168) は *li*-形によって表される事態を *passé négatif* (過去否定) と呼んでいるが、*li*-形は、完結形と同じように発話時以外を基準時として、その基準時以前に、動詞の表す事態が生じていないことを表す場合もある。(7-35) は *li*-形が、発話時以外を基準時とする例である。(7-35) で「学校に行く」という事態が成立しないことが問題となるのは、発話時ではなく、未来(明日)になってからである¹¹⁷。

¹¹⁷ TAM 接頭辞 *li*-と同形の形態素は、ウングジャ方言などのスワヒリ語他変種において、過去肯定の TAM 標識として用いられている。Nurse & Hinnebusch (1993: 412) は、ウングジャ方言とマクンドゥチ方言の TAM 接頭辞 *li*-をどちらも、コピュラ動詞から過去の標識へと文法化した結果形成されたものとして提示しているが、マクンドゥチ方言の *li*-でマークされた活用形が、過去ではなく完結否定の標識と機能するという事実は、*li*-の通時的な機能の変化について、再考を促す事実となるだろう。

(7-35) *kesho hu-li-kwenda chuo-ni anu βano mikwaju*
 tomorrow 2SG.SM:NEG-PFV.NEG-go school-LOC PN DEM.PROX.CL16 fist
 「アヌ、明日（コーラン）学校に行かなかったら、ここでげんこつだよ」

ja-形も同じように、発話時以外を基準時とすることがある。(7-36) では、*-aza* 「始まる」という動詞が *ja*- 「完了否定」でマークされているが、この動詞が表す事態は、「私が発つ頃」という未来の時点を基準時としている。

(7-36) *N-cha-vyo-uka ha-i-j-aza ligi*
 1SG.SM-FUT-CL8.REL-leave NEG-CL9.SM-PRF.NEG-start league
 「私が発つ頃には、リーグ（サッカーのリーグ戦）はまだ始まっていない」

7.2.3 *me*- 「完了」と *mena*- 「起動」の間の機能的な不一致

TAM 接頭辞の一つとして、*mena*- 「起動」がある。この *mena*- は、その形から TAM 接頭辞の *me*- 「完了」と *na*- 「未完結」から構成されているように見える。しかしながら、機能面に着目してみると、*me*- と *na*- を組み合わせることによって、*mena*- が形成されているとは考えられない。

7.1 節で述べた通り、動詞の中には *na*- 形に活用して、進行と習慣を表すものがあるが、*mena*- でマークされた動詞も進行と習慣を表すことができる。(7-37) では、*-kat^ha* 「切る」が *mena*- でマークされている。この動詞活用形は、現在薪を切っている人はいないものの、薪がいくばくか切られ減り始めている様子を目撃した場合と、現在薪を切る音が聞こえる場合のどちらでも用いることができる。前者は複数の場面で繰り返し起きる習慣的な事態ととらえることができる。また、後者はある一つの場面で生じている事態で進行と呼ぶべきものである。

(7-37) *ke-mena-kat^ha khuni*
 3SG.SM-INCH-cut firewood
 「彼は薪を切り始めている」

この例から、TAM 接頭辞 *mena*- は、形式面だけでなく、機能面でも *na*- に対応していると考えられる。

一方、*me*- 形が表す事態から同定される *me*- の機能と、*mena*- 形が表す事態から同定される *me*- の機能の間には不一致がみられる。まず、(7-38) に、*mena*- 「起動」でマークさ

れた-*lya*「食べる」を用いた例を提示する。

(7-38) *ke-mena-kulya*

3SG.SM-INCH-eat

「彼は食べ始めている」

この例では、「食べる」という行為が開始され現在も継続していることが表されている。出来事の継続が *na-* で表されているとするならば、*me-* は出来事の開始を表していると考えられる。次に、*me-* 「完了」でマークされた-*lya*「食べる」が現れる例を提示する。

(7-39) A: *mbona ha-na-kulya*

why 3SG.SM-IPFV-eat

「なぜ彼は食べていないの」

B: *ke-me-kulya*

3SG.SM-PRF-eat

「彼は食べた」

(7-39) は、-*lya*「食べる」が *me-* だけでマークされている例だが、「食べる」という行為は、開始されているだけでなく終了している。つまり、この例から、単独で用いられた *me-* は出来事の終了を表すことが推測される。

以上のことをまとめると、*me-* 「完了」と *na-* 「未完結」から成り立っているようにみえる *mena-* 「起動」は、*na-* 「未完結」と同様に習慣や進行を表すため、*na-* に対応する機能を有しているものの、出来事の終了ではなく、出来事の開始を表すため *me-* に対応する機能はもっていないと考えられる。

7.3 テンスの不在

7.2 節でも述べた通り、Racine-Issa (2002: 112, 168) は、完結形、及び TAM 接頭辞 *li-* 「完結否定」でマークされる活用形によって表される事態を、*passé affirmatif* (過去肯定)、*passé négatif* (過去否定) と呼んでいる。また、マクンドゥチ方言の *na-* 「未完結」や *cha-* 「未来」でマークされた動詞によって表される事態は、スワヒリ語の *na-* や *ta-* でマークされた動詞が表す事態に類似しているが、スワヒリ語でこれらの TAM 接頭辞にはそれぞれ、「現在」「未来」と呼ばれる (cf. 中島 2000: 182)。こうした先行研究の記述

や、TAM 接頭辞に対するラベリングだけみると、マクンドゥチ方言では活用によって発話時を基準としたテンス(時制)が標示されるようにも思われるが、厳密に見た場合、マクンドゥチ方言にテンスを表す活用があるかは疑わしい。

既に述べた通り、完結形、及び TAM 接頭辞 *li-*「完結否定」でマークされる活用形は、どちらも未来の時点を基準時とした事態を表すことがある。例えば、(7-40) は、*-poa*「治る」の完結形を用いた例だが、この例では未来の「来年」が基準時となる。

(7-40) *hata mwakani ka-poo*

even next_year 3SG.SM-cure.PFV

「来年になったら、彼は治っている」((7-18a) の再掲)

また、(7-41) では、*-enda*「行く」が *li-*「完結否定」によってマークされているが、基準時は「明日」である。

(7-41) *kesho hu-li-kwenda chuo-ni anu βano mikwaju*

tomorrow 2SG.SM:NEG-PFV.NEG-go school-LOC PN DEM.PROX.CL16 fist

「アヌ、明日(コーラン)学校に行かなかったら、ここでげんこつだよ」

((7-35) の再掲)

na-「未完結」でマークされる活用形は、現在進行中の事態や、習慣を表すことが多いが、(7-42) に示す通り、現在ではなく、過去の時点を基準時とした事態を表すこともあるため、*na-*を現在の標識とみなすこともできない。(7-42) は、この話者の子供の頃の様子を語ったものである¹¹⁸。

(7-42) *wakati uo vua zi-na-kunya*

time DEM.MED.CL3 rain (CL10) CL10.SM-IPFV-rain

「その頃、雨がふったものだった」

cha-「未来」でマークされた活用形は、(7-43) に示す通り、発話時以降に起きる事態を表すことが多い。

¹¹⁸ Ashton (1947: 37) は、スワヒリ語の TAM 接頭辞 *na-*でマークされた動詞活用形が表す事態が、“Present Definite”と呼ばれることを述べたうえで、この活用形によって現在の事態が表されるのが、文脈に過去や未来の時点を示すものがない場合に限られることを指摘している。

(7-43) *vua i-cha-kunya*

rain (CL9) CL9.SM-FUT-rain

「雨が降るだろう」(朝、昼頃雨が降るというニュースを聞いて)

しかしながら、*cha-*でマークされた動詞は、過去の出来事を語る際や、現実には起こらない事態を表すために用いられることもある。(7-44) は、話し手の子供時代の思い出を語る際に出てきたもので、*cha-*でマークされた *-sizia* 「うとうとする」という事態は、発話時以降に起こるものではない。

(7-44) *ka-na-tenda hadithi N-si-lale maana ch'a-sizia*

3SG.SM-IPFV-do story 1SG.SM-NEG- fall_asleep.SUBJ because FUT:1SG.SM-doze

「彼女(お母さん)は私が寝ないように、お話をしてくれたものです、だって私がウトウトするだろうから」

次の(7-45) は、男性から女性に向けて発せられたもの(つまり「あなた」の指示対象は女性)で、この例文の「(男としての生活を) 行う」という事態は起こり得ない。なお、*-goma* 「できる」をマークする6クラスの目的語接頭辞 *ya-* は、*maisha* 「生活(6クラス)」と一致している。

(7-45) *ku-cha-ya-goma ama ku-umbwa mwanamume*

2SG.SM-FUT-CL6.OM-be_able if 2SG.SM-create.PASS.PFV male

「もし、男として創りだされていたなら、あなたは(男としての生活)ができるだろう」

本論文では、便宜上 *cha-*に「未来」というラベル付けをしているものの、これらの例をみると *cha-*が単なる発話時以降の事態を表すための標識ではないことがうかがえる¹¹⁹。

ちなみに、コピュラ動詞だけは、他の動詞と異なり、過去形 *-evu* をもつ(8.1.2.2 節参照)。この *-evu* は、(7-46A) に示す通り、助動詞として、動詞の表す事態が、過去を基準時とすることを明示するためにも用いられる。この例では2人称主語接頭辞でマークされる *-evu* に *na-*形の動詞が後続している。

¹¹⁹ Contini-Morava (1983: 6) は、マクンドゥチ方言の *cha-* 「未来」と同源のスワヒリ語 TAM 接頭辞 *ta-* 「未来」でマークされた動詞活用形が、未来を表す活用形でないことを指摘している。また、中島 (2000: 185) は、スワヒリ語の *ta-* でマークされた活用形によって、推量や話者の意志が表される場合があることを指摘している。

(7-46) A: *uko tunguu mw-evu m-na-tenda nini*
 DEM.MED.CL15 PN 2PL.SM-COP.PST 2PL.SM-IPFV-do what
 「そちら、トゥングウ（地名）であなたたちは何をしていたの？」

B: *tu-na-hangaika tu maisha*
 1PL.SM-IPFV-be busy just life
 「私たちは苦勞しながら、暮らしていただけ」

ただし、基準時が過去であることが、文脈から明らかであったり、他の表現で明示されている場合、*-evu* は用いられない。例えば、(7-46B) は、過去の事態を表しているにもかかわらず、*-evu* が用いられていない。この文で *-evu* が現れないのは、対応する (7-46A) の質問から、過去を基準時としていることが明らかであると考えられる。また、(7-42) でも、過去の事態が表されているにもかかわらず、*-evu* が用いられていない。この例では、*wakati uo* 「その時」という表現が、過去が基準時であることを明示する機能を果たしていると考えられる。

なお、過去や未来といったテンスは、文法化の過程にある *-ja* 「来る」を用いて表されることもある。この *-ja* については、次節で扱う。

7.4 文法化した動詞による TAM の標示

本節では、マクンドゥチ方言において、いくつかの文法化の過程にある動詞が、TAM の標示のために用いられていることを示す。7.4.1 節では、文法化した *-ja* 「来る」によって、未来と過去の両方の事態が表されることを記述する。7.4.2 節では、*-chaka* 「欲する」という動詞によって、将然 (prospective) が表されることを記述する。7.4.3 節では、どのような形式で習慣が表されるのかを記述する。習慣は TAM 接頭辞の *na-* 「未完結」や *hu-* 「習慣」でマークされる活用形でも表されるが、それ以外に、動詞 *-tenda* 「する」を介して表されることもある。

7.4.1 *-ja* 「来る」の文法化

マクンドゥチ方言では、TAM 接頭辞や語幹の交替といった活用によってテンスが表されないことを前節で指摘したが、こうしたテンスを表す活用の不在を埋める手段の一つとして、*-ja* 「来る」の使用が挙げられる。この *-ja* は、形の上では他の動詞と同じような活用をしているように見えるが、機能的には「過去」や「未来」の標示と関連して

いると考えられる。

7.4.1.1 移動を表さない-ja「来る」

-ja「来る」は、一部の活用形で移動を表さないことがある。(7-47) (7-48) (7-49) の主語は、*nyumba ino*「この家」となるため、これらの例の *na-*「未完結」、*cha-*「未来」、*ka-*「条件」、*li-*「完結否定」でマークされる-ja「来る」が、移動を表しているとは考えられない¹²⁰。

- (7-47) a. *nyumba ino i-na-ja-bomoka*
house (CL9) DEM.PROX.CL9 CL9.SM-IPFV-come-break.NEU
b. *nyumba ino i-cha-ja-bomoka*
house (CL9) DEM.PROX.CL9 CL9.SM-FUT-come-break.NEU
「この家は、倒壊するだろう」(未来)

- (7-48) *nyumba ino i-ka-ja-bomoka*
house (CL9) DEM.PROX.CL9 CL9.SM-COND-come-break.NEU
hebu u-je u-ngie
PROH 2SG.SM-come.SUBJ 2SG.SM-go_in.SUBJ
「この家が倒壊したら、入ってはいけない」(未来)

- (7-49) *nyumba ino ha-i-li-ja-bomoka*
house (CL9) DEM.PROX.CL9 NEG-CL9.SM-PFV.NEG-come-break.NEU
「この家は、倒壊しなかった」(過去)

Racine-Issa (2002: 127–137) は、上の例にみられるような移動を表さない-jaを、概ねモダリティ標識として扱い、「きっと (*sûrement*)」「おそらく (*probablement*)」という訳を当てている。しかし、一部の動詞活用形が表す事態を、-jaの有無に着目しながら比べてみると、-jaがある場合は、未来や過去の事態が表されるようになっている。このことから、-jaはモダリティに関する標識というよりも時制に関する標識と分析するほうが適切であると考えられる。以下で、-jaを用いて未来の事態が表される例と、過去

¹²⁰ (7-47) (7-48) (7-49) から分かるのは、これらの-jaと別の動詞の語幹が連続する活用形で、移動を表さないことがあるということである。これらの活用形が常に移動を表さないかを確認する手立ては現段階では見つかっていない。ただし、観察される用例をみたり、話者の説明を聞く限り、この形式で、移動は表されていないと考えられる。

の事態が表される例を順にみていく。

7.4.1.2 未来を表す -ja

(7-47)(7-48) でも示した通り、-ja を前部要素とする動詞連続が、TAM 接頭辞 *na-*「未完結」、*cha-*「未来」、*ka-*「条件」でマークされる場合、未来の事態を表す。まず、(7-50) に、*na-*「未完結」でマークされた -ja が未来を表す例を提示する。

(7-50) a. *walimu wa-na-cheza mpira*
teachers 3PL.SM-IPFV-play football
「先生たちはサッカーをしている」

b. *walimu wa-na-ja-cheza mpira*
teachers 3PL.SM-IPFV-come-play football
「先生たちは、サッカーをするだろう」

-ja のない (7-50a) は、発話時の時点でサッカーをしていると解釈されうるが、-ja が付加された (7-50b) では、サッカーをしているのは必ず発話時以降となる。また、(7-51) に示す通り、過去から続く習慣を表す際には、-ja を用いることができない。

(7-51) a. *ka-na-soma kikae tauka mwaka jana*
3SG.SM-IPFV-study Kae_dialect since year yesterday
b. **ka-na-ja-soma kikae tauka mwaka jana*
3SG.SM-IPFV-come-study Kae_dialect since year yesterday
「彼は、昨年からカエ方言を勉強している」

*na-*のあとに -ja が挿入されることにより、未来の事態が表されるようになると考えれば、(7-51b) は過去から続く習慣であるため容認されないと説明することができる。

(7-52) は、*ka-*「条件」でマークされた -ja を用いた例である。この例では、-ja に後続する動詞によって表される事態が、未来に生じることが表されている。

(7-52) a. *ka-ja-vata pesa ka-cha-ja-m-nunulia nguo mchumba*
3SG.SM-COND-come-get money 3SG.SM-FUT-come-3SG.OM-buy.APPL clothes girlfriend
「彼が金を得たら、彼女に服を買ってやるだろう」

ka-「条件」が -ja と共起することにより、未来の事態を表すようになることは、過去か

ら続く習慣が生じる条件を表す場合に、*-ja* を使えないことから分かる。(7-53a) に示す通り、動詞が *ka-*のみでマークされる場合、過去から続く習慣が生じる条件を表すことができるが、(7-53b) に示す通り、*ka-*と動詞語幹の間に *-ja* を挿入すると、この条件を表すことができなくなる。

- (7-53) a. *tauka udogoni*¹²¹ *kwake kila a-ka-lala ka-na-weweseka*
 since childhood his.CL15 every 3SG.SM-COND-sleep 3SG.SM-IPFV-talk_in_his_sleep
 b. **tauka udogoni kwake kila a-ka-ja-lala ka-na-weweseka*
 since childhood his.CL15 every 3SG.SM-COND-sleep 3SG.SM-IPFV-talk_in_his_sleep
 「小さな頃から、彼は寝るといつも、寝言を言う」

ここまで挙げた活用形については、*-ja* によって未来の事態が表されようになっているということが、ある程度明確に分かる。しかしながら、*cha-*「未来」でマークされる場合、*-ja* の有無でどのような違いがあるかは、はっきりとしない。以下の (7-54) では、*-ja* の有無にかかわらず、未来の事態が表されている。

- (7-54) a. *walimu wa-cha-ja-cheza mpira*
 teachers 3PL.SM-FUT-come-play football
 b. *walimu wa-cha-cheza mpira*
 teachers 3PL.SM-FUT-play football
 「先生たちはサッカーをするだろう」

*cha-*と *cha-ja-*の本質的な違いを指摘するのは難しいが、この二つは、未来の時点を表す表現との共起のしやすさが異なる。(7-55) に示す通り、未来を表す時間副詞を用いる際は、*cha-*よりも *cha-ja-*の使用が好まれる。

- (7-55) a. *ka-cha-ja-cheka kesho*
 3SG.SM-FUT-come-laugh tomorrw
 b. ?*ka-cha-cheka kesho*
 3SG.SM-FUT-laugh tomorrw
 「彼は明日笑うだろう」

¹²¹ *udogoni* は *udogo-ni* (smallness-LOC) と形態素分析できるが、場所ではなく時間を表す。

前節で述べた通り、*cha-*は発話時以降に起きた事態を表す標識でない可能性がある。未来を表す時間副詞との共起のしやすさの違いは、*cha-*がテンスの標識でないことや、*-ja*が*cha-*と共起した場合に、テンスの標識として機能することを反映しているのかもしれない。

上記三つの TAM 接頭辞でマークされる活用形以外に、接続形でも、*-ja*が未来の事態を表すために用いられることがある。(7-56) にそのことを示す例を提示する。

- (7-56) a. *u-si-pige* *makelele*
 2SG.SM-NEG-hit.SUBJ noise
 「黙れ」(発話時の時点で騒いでいる)
- b. *u-si-je-piga* *makelele*
 2SG.SM-NEG-come.SUBJ-hit noise
 「騒ぐな」(発話時の時点では騒いでいない)

*-ja*のない(7-56a)と*-ja*のある(7-56b)は、聞き手が発話時の時点で騒いでいるかどうか異なる。*-ja*のない(7-56a)は、現在聞き手が騒いでいる場合に用いられるが、(7-56b)の*-ja*が付加された形式は、まだ騒いでいないがこれから騒ぐ可能性のある聞き手に命じる際に用いられる。

なお、ここまで提示した例では、*-ja*の直後に語彙的な意味を表す動詞の基本語幹が後続していたが、*-ja*が肯定の接続形に活用した場合、後続する動詞も接続形となる。(7-57)では、未来を表す*-ja*が接続形に活用して*N-je*という形になっているが、*-ja*だけでなく、*-ja*に後続する動詞*-nunua*「買う」も接続形*N-nunue*となっている。

- (7-57) *ha-ja-wa* *mkubwa*
 COND:1SG.SM-come-COP big.CL1
na-chaka *N-je* *N-nunue* *nyumba* *khubwa*
 IPFV:1SG.SM-want 1SG.SM-come.SUBJ 1SG.SM-buy.SUBJ house(CL9) big.CL9
 「大きくなったら、私は大きな家を買いたい」

7.4.1.3 過去を表す*-ja*

完結を表す TAM 接頭辞 *li-*, *a-*, *ø-*と*-ja*でマークされた動詞が、過去の事態を表すために用いられていることは、状態動詞との共起を観察すると顕著に分かる。まず、(7-58)に、*-ja*が*li-*「完結否定」と共起する動詞を用いた例を示す。

- (7-58) a. *ha-li-ja-vwaa* *nguo hea sasa ka-vwaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come-wear clothes but now 3SG.SM-wear.PFV
- b. **ha-li-vwaa* *nguo hea sasa ka-vwaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-wear clothes but now 3SG.SM-wear.PFV
- 「彼は服を着ていなかったが、今は着ている」

状態動詞-*vwaa*「着る」が *li-*のみでマークされた場合、基準時の段階で「着ていない」という状態にあることが含意される。基準時の段階で「着ている」ことを表すためには、コピュラ動詞の過去形を用いるか ((7-29) 参照)、*li-*と語幹の間に *-ja* を挿入する必要がある。

次の (7-59) は、関係節内の *-ja* が完結の TAM 接頭辞 *a-*, *∅-* でマークされた場合、過去の事態が表されるようになることを示している。

- (7-59) a. *yulya* [*mw-a-ja-kaa* *βano*] *nani*
 DEM.DIST.CL1 CL1.SM.REL-PFV-come-sit DEM.PROX.CL16 who
- b. **yulya* [*mw-a-kaa* *βano*] *nani*
 DEM.DIST.CL1 CL1.SM.REL-PFV-sit DEM.PROX.CL16 who
- c. *yulya* [*a-∅-e-ja-kaa* *βano*] *nani*
 DEM.DIST.CL1 3SG.SM-PFV-CL1.REL-come-sit DEM.PROX.CL16 who
- d. **yulya* [*a-∅-e-kaa* *βano*] *nani*
 DEM.DIST.CL1 3SG.SM-PFV-CL1.REL-sit DEM.PROX.CL16 who
- 「ここに座っていたあの人は誰？」

(7-59) の 1 クラスの遠称指示詞 *yulya* の指示対象は、既に立ち去った人である¹²²。また、関係節内の動詞-*kaa*「座る」は、完結に活用した場合、ある人が現在座っていることを表す動詞である。まず、(7-59a, c) が容認されることから、*-kaa*「座る」が完結の接頭辞と *-ja* でマークされた場合、関係節は現在ではなく過去に座っていた人を指し示していると考えられる。一方、(7-59b, d) が容認されないのは、*-ja* を欠いた関係節の指示対象（現在座っている人）と遠称の指示対象（既に立ち去った人）との間に矛盾が生じているためであると考えられる。

(7-58) (7-59) から、*li-*, *a-*, *∅-*に加えて、*-ja* でマークされた状態動詞は、*-ja* を欠いた状態動詞とは異なり、過去の状態を表すことが分かる。

¹²² マクンドゥチ方言の指示詞遠称は、現在視界にあるものを指し示さない (3.4.3 節参照)。

(7-60) は、*-ja* が *nge-*「反実仮想」と共起して、過去の事態が表される例である。(7-61) に示す通り、*-ja* がない場合も似たような事態が表されていることから、*nge-*と *-ja* の共起は随意的であると考えられる。

(7-60) *a-nge-kuja jana a-nge-ja-vata pesa*
 3SG.SM-CF-come yesterday 3SG.SM-CF-come-get money
 「彼は昨日来ていれば、お金を手に入れたのに」

(7-61) *kama kw-evu ku-ja jana*
 if 2SG.SM-COP.PST 2SG.SM-come.PFV yesterday
ba-sigombe a-nge-ku-k^ha pesa
 Mr.-PN 3SG.SM-CF-2SG.OM-give money
 「もし昨日来ていれば、シゴンベおじさんがお金をあげたのに」

-ja が過去の事態を表す際に、特筆すべき点として、完結と未完結というアスペクトの対立が形式面に反映されるということが挙げられる。まず、(7-62) にそのことを示す例を提示する。

(7-62) a. *ha-li-ja a-ka-kaa kajengwa hea sasa ka-na-kaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come 3SG.SM-CONS-live PN but now 3SG.SM-IPFV-live
 b. **ha-li-ja-kaa kajengwa hea sasa ka-na-kaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come-live PN but now 3SG.SM-IPFV-live
 「彼はカジェングワに住んでいなかったが、今は住んでいる」
 c. *ha-li-ja-kaa baraza-ni hea sasa ka-kaa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come-take_a_seat living-LOC but now 3SG.SM-take_a_seat.PFV
 「彼は、居間に（座って）いなかったが、今はいる」

既に述べた通り、*-kaa* は多義的な動詞で、完結に活用した場合は「座っている」という解釈がなされ、未完結に活用した場合は「住んでいる」という解釈がなされる。(7-62a, b) に示す通り、「過去にある場所に住んでいなかった」ということを表すためには、*-ja* の直後に動詞語幹 *-kaa* が後続する形ではなく、*-ja* の直後に *ka-*「継起」でマークされた動詞 *-kaa* が後続する形が用いられる。*-ja* の直後に基本語幹の *-kaa* が現れる場合は、(7-62c) に示す通り、「過去にある場所に座っていなかった」という意味になる。こうした

-*kaa* の意味の違いから、*li-*「完結否定」に、基本語幹の動詞が後続する場合は完結が表され、*ka-*「継起」でマークされた動詞が後続する場合は未完結が表されるということが分かる。同様の形式的区別は、(7-63) に示す通り、関係節中の *-ja* が TAM 接頭辞 *a-*, *ø-*「完結」でマークされる場合にもなされる。

- (7-63) a. *[mw-a-ja* *a-ka-kaa* *kwa=bi-kei]* *nani*
 CL1.SM.REL-PFV-come 3SG.SM-CONS-live of.CL15=Mrs.-PN who
- b. **[mw-a-ja-kaa* *kwa=bi-kei]* *nani*
 CL1.SM.REL-PFV-come-live of.CL15=Mrs.-PN who
- c. *[a-ø-e-ja* *a-ka-kaa* *kwa=bi-kei]* *nani*
 3SG.SM-PFV-CL1.REL-come 3SG.SM-CONS-live of.CL15=Mrs.-PN who
- d. **[a-ø-e-ja-kaa* *kwa=bi-kei]* *nani*
 3SG.SM-PFV-CL1.REL-come-live of.CL15=Mrs.-PN who
 「ケイおばさんのところ（家）に住んでいたのは誰」

(7-63b, d) は、動詞に場所を表す名詞句 *kwa=bi-kei* 「ケイおばさんのところ（家）」が後続することから、*-kaa* が「住む」を意味することが期待されるにもかかわらず、その活用形式から「座る」と解釈されるために容認されなくなっていると考えられる。

なお、次の二つの例に示す通り、*na-ja-*や *cha-ja-*のあとにも、*ka-*でマークされた動詞が後続することができるが、この場合、*-ja* は「来る」という意味になる。次の例はどちらも、習慣的な行為を表す。

- (7-64) a. *ka-na-ja* *a-ka-soma*
 3SG.SM-IPFV-come 3SG.SM-CONS-study
 「彼は来て、勉強する」
- b. *ka-cha-ja* *a-ka-soma*
 3SG.SM-FUT-come 3SG.SM-CONS-study
 「彼は来て、勉強するだろう」

7.4.1.4 文法化した *-ja* の形態的特徴

まず、(7-65) に示す通り、関係節接頭辞でマークされる場合、TAM 接頭辞は関係節接頭辞の前に現れるのに対して、*-ja* は他の動詞語幹と同様に、関係節接頭辞の後に現れる。つまり、少なくとも関係節形成を見る限り、文法化した *-ja* は動詞と同じ形態的特徴をもつといえる。

- (7-65) a. [*a-cha-e-ja-tenda* *kazi*] *nani*
 3SG.SM-FUT-CL1.REL-come-do work who
- b. **[a-cha-ja-e-tenda* *kazi*] *nani*
 3SG.SM-FUT-CL1.REL-come-do work who
- c. [*a-cha-e-tenda* *kazi*] *nani*
 3SG.SM-FUT-CL1.REL-do work who
- 「仕事をするのは誰？」

次に、無意味形態 *ku-* と不定形接頭辞 *ku-* の脱落について述べる。*-ja* 「来る」が、TAM 接頭辞 *me-* でマークされ移動を表し、なおかつそのあとに別の動詞が後続する場合、(7-66) に示す通り、形態的には、三つのパターンがありうる。この三つのパターンは1音節語幹の直前に現れる無意味形態 *ku-* の有無と、後続する動詞語幹が不定形接頭辞でマークされるかどうかの違いがある。

- (7-66) a. *ke-me-ja-tenda* *kazi*
 3SG.SM-PRF-come-do work
- b. *ke-me-ku-ja-tenda* *kazi*
 3SG.SM-PRF-KU-come-do work
- c. *ke-me-ku-ja* *ku-tenda* *kazi*
 3SG.SM-PRF-KU-come INF-do work
- d. **ke-me-ja* *ku-tenda* *kazi*
 3SG.SM-PRF-come INF-do work
- 「彼は仕事をしに来た」

(7-66a) では、TAM 接頭辞と *-ja* の間に無意味形態 *ku-* がなく、後続する動詞語幹 *-tenda* も不定形接頭辞 *ku-* でマークされていない。(7-66b) では、無意味形態 *ku-* があるが、不定形接頭辞 *ku-* が欠けている。(7-66c) は、無意味形態 *ku-* と、不定形接頭辞 *ku-* がともに現れうることを示している。なお、(7-66d) に示す通り、無意味形態 *ku-* がなく、不定形接頭辞 *ku-* があるというパターンは容認されない。

ここまで挙げた *-ja* が文法化している例は、すべて (7-66a) のパターンに当てはまる。つまり、*-ja* が移動ではなく、未来や過去を表す場合、1音節の動詞語幹の直前に現れる無意味形態 *ku-* の脱落と、後続する動詞の不定形接頭辞 *ku-* の脱落が観察される。この二つの脱落現象については、以下の二点が指摘できる。

- 無意味形態 *ku-*と不定形接頭辞 *ku-*の脱落は*-ja* の意味変化を引き金として生じているわけではない。
- *-ja* は、無意味形態 *ku-*の有無にかかわらず時間に関する情報を表すことができる。一方、不定形接頭辞 *ku-*については、時間に関する情報が表されるのは、この接頭辞がない場合に限られる。

まず、無意味形態 *ku-*の脱落は、他の1音節語幹や融合母音語幹の動詞でも ((7-67) 及び、4.1.1 節参照)、*-ja* が「来る」という意味を表す場合にも観察される現象で ((7-66a) 参照)、動詞の意味変化とは直接関係がない。不定形接頭辞 *ku-*の不在も、これを脱落ととらえるのであれば¹²³、(7-66a) に示す通り、*-ja* が「来る」を意味する場合や、(7-67) に示す通り、他の動詞 (*-enda* 「行く」) が動詞連続の前部要素として現れる場合も生じていることから、意味の変化に誘発されて生じているとは考えにくい。

(7-67) *N-ch-enda-kaa uko*
 1SG.SM-FUT-go-live DEM.MED.CL15
 「私はそこに住みにいくだろう」

一般に、文法化が生じる際は、意味や機能の変化に伴って、形態面や音韻面での弱化が起こることが知られている (cf. Heine & Kuteva 2007: 40–44)。しかし、マクンドウチ方言の*-ja* の文法化では、二つの *ku-*の脱落という形態的弱化が、意味の変化によって引き起こされているとは言えない。特に、不定形接頭辞 *ku-*の脱落については、動詞が連続する構文があらかじめあって、その一部に意味の変化が生じているようにみえる。つまり、不定形接頭辞 *ku-*の脱落と*-ja* の意味の変化については、通言語的な立場から唱えられている文法化の傾向に反して、先に形式面での変化が生じている可能性が高い。

次に、無意味形態 *ku-*や不定形接頭辞 *ku-*の不在と表される事態の関係について述べる。*-ja* の意味の変化は、無意味形態 *ku-*の脱落にかかわらず観察される。それに対して、不定形接頭辞 *ku-*がない場合、*-ja* は移動ではなく時間を表すが、不定形接頭辞 *ku-*がある場合、*-ja* は移動を表すと考えられる。(7-68) はそのことを示す例である。

¹²³ スワヒリ語の TAM 接頭辞の多くは、動詞に由来するとされる。この文法化では、まず、本動詞+動詞不定形という連続があり、変化の進行とともに、不定形接頭辞が脱落したと考えられている。*-ja* の文法化における不定形接頭辞が脱落したという仮定はこうした変化を念頭においている。なお、1音節語幹の直前に現れる無意味形態素 *ku-*はその文法化の残滓で、不定形接頭辞に由来するとされる (Meinhof 1932: 131, cf. Marten 2002: 6)。

(7-68) a.	<i>juisi</i>	<i>ino</i>	<i>i-na-ja-polea</i>
	juice (CL9)	DEM.PROX.CL9	CL9.SM-IPFV-come-turn_tepid
b.	<i>juisi</i>	<i>ino</i>	<i>i-na-ku-ja-polea</i>
	juice (CL9)	DEM.PROX.CL9	CL9.SM-IPFV-KU-come-turn_tepid
c.	* <i>juisi</i>	<i>ino</i>	<i>i-na-ku-ja</i> <i>ku-polea</i>
	juice (CL9)	DEM.PROX.CL9	CL9.SM-IPFV-KU-come INF-turn_tepid

「このジュースはぬるくなるだろう」

(7-68) は、目の前にある冷たいジュースが常温になることを表している。無意味形態 *ku-* も、不定形接頭辞 *ku-* も欠いた (7-68a) に加えて、無意味形態 *ku-* が脱落していない (7-68b) も容認される。(7-68b) から、無意味形態の脱落は、*-ja* の意味変化とは関係ないことが分かる。一方、不定形接頭辞で後続する動詞がマークされる (7-68c) は容認されない。(7-68c) が容認されないのは、後続する動詞が不定形接頭辞でマークされる場合は、*-ja* が移動を表すが、その主語の指示対象「このジュース」は移動することが想起しにくいためであると考えられる。

7.4.1.5 文法化した*-ja*の機能

文法化した*-ja*「来る」の機能の分析では、以下の二点が問題となる。

- *-ja* は、未来の標識か、過去の標識か、あるいはそれ以外の機能を担う標識か。
- *-ja* が過去の未完結を表す際の意味的構成性。

まず、最初の問題として、*-ja* でマークされた動詞が、未来と過去という時間的に逆の二つの事態を表すことが挙げられる。未来と過去を表す場合を区別して、同じ音形をもつ二つの標識（形態素）があるという分析もありえるだろう。しかし、本論文では、未来を表す*-ja* と過去を表す*-ja* が異なる環境に現れることに着目して、文法化した*-ja* が *-PRESENT* という機能を担うという分析を提案する。この提案は、特に TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」、*li-* 「完結否定」でマークされた動詞が、多くの場合、現在（発話時）を含む事態を表すのに対して、これらの活用形に*-ja* が付加されると、現在を含まない事態を表すようになるという観察に基づく。*-ja* でマークされた際に、未来を表すか過去を表すかは、その活用形のもつ時間的指向性が、未来であるか過去であるかに依存する。*cha-* 「未来」や *li-* 「完結否定」でマークされる活用形が、それぞれ未来、あるいは過去への指向性をもつということに大きな異論はないだろう。次の (7-69) は、*na-* でマークされた動詞が、近い未来の事態を表している。

(7-69) *tu-na-cheza mpira {kesho/*mwakani}*
 1PL.SM-IPFV-play football tomorrow/*next_year
 「我々は明日／*来年、サッカーをする」

この例から、*-ja* が *na-* でマークされた場合に、未来を表すのは、*na-* によって表される事態が未来への指向性をもっているためであると説明される。

-ja の文法化に関するもう一つの問題は、意味の構成性についてである。問題を示すために、(7-62a) の一部を (7-70) に再掲する。

(7-70) *ha-li-ja a-ka-kaa kajengwa*
 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-come 3SG.SM-CONS-live PN
 「彼はカジェングワに住んでいなかった」

この例文には、完結を表すはずの *li-* が動詞活用形中に含まれるにもかかわらず、未完結の事態が表されている。完結の接頭辞で *-ja* がマークされ、そのあとに *ka-* でマークされた動詞活用形が後続する構文では、TAM 接頭辞 *li-* の完結を表すというもとのアスペクトに関する特性は失われており、TAM 接頭辞 *li-* と *-ja* がひとまとまりで、過去というテンスに関する情報を表す標識として機能するようになっていると考えられる。文法化が生じる際は、意味的な構成性が失われうるということが指摘されているが (Brinton & Traugott 2005: 145)、マクンドウチ方言の *-ja* が過去の未完結の事態を表すようになっている例もそれに準じたものであるといえる。

7.4.2 *-chaka* 「欲する」の文法化

マクンドウチ方言では、*-chaka* 「欲する」が、今まさにある事態が生じようとしている様子 (将然 (prospective)) を表すために用いられることがある¹²⁴。(7-71) では、*na-* 「未完結」でマークされた *-chaka* に、接続形または不定形に活用した動詞 *-uka* 「発つ」が後続しており、車がまさに出発しそうであることを表す。*-chaka* と動詞の接続形、もしくは不定形の連続は、「～したい」という欲求を表すこともあるが、(7-71) の主語は、「車」という意思をもたない無生物であるため、この例における *-chaka* は欲求を表していないことが分かる。

¹²⁴ スワヒリ語でも *-chaka* と同源の *-taka* を用いて、将然が表されることが記述されている (Ashton 1947: 36)。

(7-71) *gari i-na-chaka* *{i-uke/ku-uka}*
 car CL9.SM-IPFV-want CL9.SM-leave.SUBJ/INF-leave
 「車が出発しそうだ」(エンジンがかけられた様をみて)

-chaka は、*na-*「未完結」以外に、*cha-*「未来」、*ja-*「完了否定」、*mena-*「起動」でマークされる場合も、将然を表すことができることが確認されている。しかし、*-chaka* が完結形に活用したり、*me-*「完了」でマークされた場合、将然は表されない。このことは、(7-72) に示す通り、*gari*「車」が主語となる場合、*-chaka* が完結形や *me-*形にならないことから分かる。(7-72) が容認されないのは、将然というアスペクトが、完結や完了と相いれないことによると考えられる。(7-73)(7-74) に示す通り、主語の指示対象が人で、*-chaka* が欲求を表しているという解釈が許されれば、*-chaka* をこれらの活用形で用いることは容認される。

(7-72) a. **gari i-chaka* *i-uke*
 car CL9.SM-want.PFV CL9.SM-leave.SUBJ
 b. **gari i-me-chaka* *i-uke*
 car CL9.SM-PRF-want CL9.SM-leave.SUBJ

(7-73) *ka-chaka* *a-uke=βa*
 3SG.SM-want.PFV 3SG.SM-leave.SUBJ=DEM.PROX.CL16
 「彼はここを発ちたかった」

(7-74) *mgonjwa ke-me-chaka ku-lya*
 sick_person 3SG.SM-PRF-want INF-eat
 「病人は、食べたかった」

この *-chaka* は、TAM 接頭辞 *cha-*「未来」と同源と考えられるが (Nurse & Hinnebusch 1993: 412)、表すことのできる事態は異なる。*-chaka* は、必ずある事態が起こりそうだというはっきりとした兆候がある場合に限り用いられる。そのため、(7-75) に示す通り、朝の時点で、昼頃に雨が降りそうだというニュースを聞いた場合は、*cha-*や、*cha-ja-*や *na-ja-*を用いることができるが、*-chaka* を用いることができない。

(7-75) a. *vua i-cha-kunya*

rain CL9.SM-FUT-rain

b. *vua i-cha-ja-kunya*

rain CL9.SM-FUT-come-rain

c. *vua i-na-ja-kunya*

rain CL9.SM-IPFV-come-rain

d. #*vua i-na-chaka ku-nya*

rain CL9.SM-IPFV-want INF-rain

「雨が降るだろう」(朝、昼頃雨が降るというニュースを聞いて)

なお、*-ja* を伴わない *cha-*は、(7-75) のような場合でも容認されるが、将然と呼ぶことができそうな事態も表しうる。*-ja* を用いた (7-76) は、子供が薪の上で遊んでいるものの、差し迫った危険がない状態にある際に用いられる。それに対して *cha-*や*-chaka* を用いた (7-77) では、既に子供が危険な状態にあることを表す。

(7-76) a. *ka-na-ja-kugwa*

3SG.SM-IPFV-come-fall

b. *ka-cha-ja-kugwa*

3SG.SM-FUT-come-fall

「彼は、(いずれ薪の上から) 落ちるだろう」

(7-77) a. *ka-na-chaka ku-gwa*

3SG.SM-IPFV-want INF-fall

b. *ka-cha-kugwa*

3SG.SM-FUT-fall

「彼は(薪の上から) 落ちそうだ」

7.4.3 習慣を表す四つの形式

マクンドゥチ方言には、習慣を表す形式が複数ある。(7-78) にそれらの形式を列挙する。(7-78a) に示す通り、TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされる *na-*形でも表されるが、これとは別に、習慣を表すことに特化した接頭辞 *hu-*でマークされる習慣形も存在する。(7-78b) は習慣形の例である。また、(7-78c) に挙げるコピュラ動詞-*wa* が *na-*でマークされる助動詞(複合時制構文)や、(7-78d) の-*tenda*「する」を介した迂言的な形式

でも習慣は表されうる。(7-78d) に示す通り、*-tenda* を用いる場合は、語彙的な意味を表す動詞は、*ka-*「継起」でマークされて*-tenda* に後続する。

- (7-78) a. *pandu ka-na-cheza mpira kia a-k-enda uwanja-ni*
 PN 3SG.SM-IPFV-play football every 3SG.SM-CONS-go ground-LOC
- b. *pandu hu-cheza mpira kia a-k-enda uwanja-ni*
 PN HAB-play football every 3SG.SM-CONS-go ground-LOC
- c. *pandu ka-na-wa ka-na-cheza mpira kia a-k-enda uwanja-ni*
 PN 3SG.SM-IPFV-COP 3SG.SM-IPFV-play football every 3SG.SM-CONS-go ground-LOC
- d. *pandu ka-na-tenda a-ka-cheza mpira kia a-k-enda uwanja-ni*
 PN 3SG.SM-IPFV-do 3SG.SM-CONS-play football every 3SG.SM-CONS-go ground-LOC
 「パンドゥはグラウンドに行くといつもサッカーをする」

これらの異なる形式の間に、意味的な違いがあるのか、あるいはどのような使い分けがなされているのかは、現段階では分かっていない。なお、上の (7-78) は特定の人物の習慣的な行動を表すものだが、(7-79) のように、恒常的に起こる自然現象も三つの表現が可能なが確認されている¹²⁵。

- (7-79) a. *jua li-na-lawa ulejua*
 sun CL5.SM-IPFV-come_from east
- b. *jua hu-lawa ulejua*
 sun HAB-come_from east
- c. *jua li-na-tenda li-ka-lawa ulejua*
 sun CL5.SM-IPFV-do CL5.SM-CONS-come_from east
 「太陽は東から出る」

ただし、習慣を表す際は、*na-*形が自発的に用いられやすい。また、(7-80) に示す通り、*hu-*でマークされる活用形は、コピュラ動詞の過去形と共起して、過去の習慣を表すことができない。習慣を表す際に、コピュラの過去形に後続するのは、*na-*形か、*ka-*形である。

¹²⁵ 恒常的に起こる現象を表すために、*na-*でマークされたコピュラ動詞を用いることができるかどうかについては未確認である。

- (7-80) a. *k-evu* *a-ka-lya* *mhogo kia* *a-k-enda* *kae*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-CONS-eat cassava every 3SG.SM-CONS-go PN
 b. *k-evu* *ka-na-lya* *mhogo kia* *a-k-enda* *kae*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-eat cassava every 3SG.SM-CONS-go PN
 c. **k-evu* *hu-lya* *mhogo kia* *a-k-enda* *kae*
 3SG.SM-COP.PST HAB-eat cassava every 3SG.SM-CONS-go PN
 「カエに行ったらいつも、彼はキャッサバを食べていた」

-tenda を介して習慣を表す場合、後続する動詞は必ず *ka-*「継起」でマークされている必要があるが、*-tenda* 自体は、*-tenda* によって表される習慣というアスペクトと、活用によって表されるアスペクトの間に矛盾がなければ、他の活用形にもなりうる。*-tenda* の可能な活用形として、*na-*以外にも *cha-*「未来」や *nge-*「反実仮想」、*hu-*「習慣」でマークされる活用形が挙げられる。TAM 接頭辞 *me-*「完了」でマークされたり、完結形に活用することはできない。

7.5 接続形の用法

接続形は、その機能を一般化して説明することが難しい。本節では、接続形がどのような用法をもつのかを紹介しながら、その特徴を記述する。

まず、接続形は、必然、義務、推奨、命令、勧誘、意向といったモダリティを表すために用いられることが多い。(7-81) は、接続形が必然を表す例である。

- (7-81) *mt^hu* *a-fwe* *njaa*
 person 3SG.SM-die.SUBJ hunger
 「人は空腹で死ぬに違いない」

(7-82)(7-83) は、接続形が、義務、命令ないしは推奨を表すことを示す例である。

- (7-82) *u-k-ona* *umande* *u-ji-finike* *nguo* *zito*
 2SG.SM-COND-see coldness 2SG.SM-REFL-cover.SUBJ clothes heavy
 「寒さを感じたら、厚手の服を羽織った方がよい／羽織るべきだ」

(7-83) *u-ka-kaa* *ṃno* *u-nyamaze*
 2SG.SM-COND-take_a_sheet DEM.PROX.CL18 2SG.SM-be_quiet.SUBJ
 「ここ（中）にいるなら、静かにしろ」

接続形は、義務や推奨を表す際、(7-82)(7-83) のように単独で用いられるだけでなく、それらを明示する法副詞と共起することもある。(7-84) には、法副詞 *lazima* 「義務」と接続形が共起する例を挙げる。

(7-84) *lazima* *u-tu-k^he* *pesa*
 obligatorily 2SG.SM -1PL.OM-give.SUBJ money
 「あなたは、我々に金を与えなければならない」

法副詞としては、*lazima* 以外に、*sheti* 「義務」、*bora* 「推奨」、*hebu* 「禁止」を挙げることができる。また、モーダルを表すものとして、法副詞以外に *-chaka* 「欲する」という動詞の活用形が、接続形の前に現れることもある。ちなみに、禁止は、(7-85a) の通り、法副詞の *hebu* を使っても表すことができるが、(7-85b) の通り、否定接頭辞 *si-* で接続形をマークすることでも表せる。*hebu* を用いた場合、動詞に否定接頭辞は現れない。

(7-85) a. *hebu u-lye*
 PROH 2SG.SM-eat.SUBJ
 b. *u-si-lye*
 2SG.SM-NEG-eat.SUBJ
 「食べるな」

(7-86) は、接続形が勧誘を表すために用いられることを示す例である。勧誘を表す際は、この例に示す通り、1人称単数複数の主語接頭辞 *tu-* でマークされる。

(7-86) *tu-ngoje* *ise*
 1PL.SM-wait.subj finish.SUBJ:CL9.SM
 「(電話が) 終わるのを待ちましょう
 (／待たなくてはいけない／待った方がよい)」

(7-87) は、1 人称単数の主語接頭辞 *N-* でマークされた接続形が意向を表すことを示す例である。

(7-87) *u-ka-wa* *hu-li-shiba* *N-kongeze*
2SG.SM-COND-COP 2SG.SM-PFV.NEG-satisfy 1SG.SM-add.SUBJ
「あなたが満腹にならなければ、(食事を) 追加します」

接続形は、上記のようなモダリティだけでなく、他の動詞と共に起して目的や結果を表すこともある。(7-88) では、*-tenda* 「作る」の接続形が目的を表している。また、(7-89) では、*-ivwa* 「熟す (出来上がる)」の接続形が結果を表している。

(7-88) *ka-nunuu* *unga* *a-tende* *mikate*
3SG.SM-BUY.PFV powder 3SG.SM-do.SUBJ bread
「彼はパンを作る (焼く) ために (小麦) 粉を買った」

(7-89) *na-ngoja* *vyakulya* *v-ivwe*
IPFV:1SG.SM-wait food (CL8) CL8.SM-ripen.SUBJ
「私はご飯が出来上がるのを待っていた」

接続形には、*mpaka* 「まで」と共に起して時限を表す用法もある。(7-90) では、接続形に活用した動詞が二つ現れているが、最初の *-zungumza* 「話す」は勧誘を表し、次の *-choka* 「疲れる」は、*mpaka* と共に起して時限を表している。

(7-90) *tu-zungumze* *mpaka* *tu-choke*
1PL.SM-chat.SUBJ till 1PL.SM-get_tired.SUBJ
「疲れるまで話そう」

接続形に関して、他に特筆すべき点として、否定接頭辞 *si-* を虚辞として用いる用法が挙げられる。(7-91) では、接続形が否定接頭辞でマークされているが、その意味するところをみると、接続形自体は否定を表していないように見える。

(7-91) *k-evu ka-na oga a-si-je-shindwa*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-POSS fear 3SG.SM-NEG-come.SUBJ-beat.PASS
 「彼は負けるのではないかと恐れていた」

類似した現象は、(7-92a) に挙げる通り、*-kataza* 「禁止する」という動詞でも確認できる。なお、次の例の*-kataza* に続く接続形の部分は、(7-92b) に示す通り、不定形で言い換えることもできるが、不定形は、否定接頭辞 *si-* でマークされない。なお、マクンドゥチ方言の不定形は、否定接頭辞 *si-* でマークすること自体はできる (4.1.3 節参照)。

(7-92) a. *ka-tu-kataza tu-si-tende zogo*
 3SG.SM-1PL.OM-prohibit.PFV 1PL.SM-NEG-do.SUBJ noise
 b. *ka-tu-kataza ku-(*si-)tenda zogo*
 3SG.SM-1PL.OM-prohibit.PFV INF-NEG-do noise
 「彼は我々に、騒ぐことを禁じた」

7.6 7章のまとめ

本章では、マクンドゥチ方言で表されうるテンスやアスペクトについて記述を行った。先行研究では、形態的な特徴に関する記述は一定程度なされてきたが、表す事態に関しては、恣意的なラベルが付されているだけで、そのラベル付けに対する裏付けはとくになかった。本章全体の意義としては、言語事実を根拠として機能に関する記述を行ったという点が挙げられる。

7.1 節では、完結形で状態や結果状態を表すかどうかに応じて、動詞が状態動詞と非状態動詞の二つに分けられること、更に状態動詞、非状態動詞ともに、TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」でマークされる *na-* 形で進行と習慣を表すことができるか、習慣しか表すことができないかで細分化できることを示した。

Sasse (1992) は、アスペクトに関する情報が、動詞の語彙的な特性 (語彙アスペクト) と活用のどちらに依存しているかは、言語によって異なることを指摘している。マクンドゥチ方言がこの類型論的な指標のなかでどのように位置づけられるかは、今後詳しく検討する必要があるが、マクンドゥチ方言で、動詞の語彙的な特性が大きく関わっているのは、完結形と *na-* 形だけのようにみえる。*mena-* 「起動」でマークされた *mena-* 形が、動詞の語彙的な特性にかかわらず、ある事態が開始されていることを表していることは 7.1 節の最後で述べた。また状態動詞の変化に至るポイントを終点とみなせば、状態動

詞でも非状態動詞でも、*me*-「完了」でマークされた *me*-形は、ある事象の終了を表しているように見える。この観察の通りであれば、マクンドゥチ方言は、混在型のアスペクト体系を有しており、動詞の語彙的な特性が表す事態の決定に関わる活用と、そうでない活用をもつことになる。

7.2 節では、基準時以前に生じた事態を表すという点で類似している完結形と *me*-形を対照させることにより、この二つの活用形が表す事態を記述した。これにより、完結形が典型的な完結相に近い事態を表すこと、*me*-形が典型的な完了相に近い事態を表すことが明らかになった。この事実から、共時的な分析の問題として、以下の二点が浮かび上がってくる。

- マクンドゥチ方言で、結果状態を表す活用形（完結形）と経験を表す活用形（*me*-形）が異なるのは、この言語固有の特徴か、それとも結果状態と経験の間に存在する普遍的な意味の違いの形式への反映か。
- マクンドゥチ方言で、結果状態が現在の状況と関連しない過去の出来事を表す活用形によって表され、経験が現在の状況と関連する過去の出来事を表す活用形によって表されるのはなぜか。複数の用法を説明できるような核となる機能（意味）を、それぞれの活用形に対して仮定することができるのか。

なお、本論文では、この二つの活用形の違いを調べるために、過去の時点を表す表現との共起の可否、経験を表す用法の有無、現在との関連の有無といったテストを用いたが、これらのテストをあてはめてみると、ウングジャ方言の TAM 接頭辞 *me*-は、マクンドゥチ方言の *me*-と異なり、完了というより完結の標識として機能していると考えられる。完了から完結という機能の変化が通言語的にみられることを考慮にいと (Bybee et al. 1994: 81-87, Heine & Kuteva 2002: 231-232)、スワヒリ語の *me*-でも同様の変化が生じている可能性がある。

7.3 節では、マクンドゥチ方言が、テンスを表す活用を欠いていることを指摘した。この節では、基準時が過去である場合、コピュラ動詞過去形 *-evu* が用いられる場合と用いられない場合があることもあわせて述べたが、*-evu* の使用を決定する要因や、*-evu* がない場合、どのように「文脈」から基準時が過去であることが導き出されるのかといったことは、まだよく分かっていない。

7.4 節では、文法化の過程にある動詞による TAM の標示について記述を行った。まず、7.4.1 節では、*-ja* 「来る」を用いたテンスの標示について論じた。ここで扱ったマクンドゥチ方言の *-ja* の文法化は通言語的にみても興味深いものであるといえる。「来る」を意味する動詞の未来の標識への文法化、あるいは過去の標識への文法化は、スワヒリ語他

変種やバントゥ系言語に限らず、通言語的にみられるが (Ashton 1947: 273–274, Nurse 1982b: 111, Bybee et al. 1994: 56, Heine & Kuteva 2002: 75–78, Batibo 2005, Nurse 2008: 85, 306–307)、一つの言語内で、「来る」が未来と過去、どちらも表すようになっている例は、筆者の知る限り他にない。続く、7.4.2 節では、*-chaka* 「欲する」が、将然 (prospective) の標識になっていることを記述した。ちなみに、TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」は、この *-chaka* が文法化した結果形成されたと考えられているが、マクンドゥチ方言では、*-chaka* の文法化が再度生じているように見える。7.4.3 節では、TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」や *hu-* 「習慣」などに加えて、動詞 *-tenda* も習慣の標識として用いられることを述べた。「する」を意味する動詞の文法化は、筆者の知る限り、他のスワヒリ語変種でもこれまでに報告されていない。

7.5 節では、接続形の記述を行った。接続形については、モダリティを表す形式ということはいえそうだが、現段階で用例の列挙にとどまっており、その中心的な意味ないしは機能の解明が今後の課題となる。

8章 コピュラ動詞とコピュラ文

本章では、マクンドゥチ方言のコピュラ動詞とコピュラ文について記述する。コピュラ動詞及び、コピュラ文については、先行研究でも言及がなされているが (cf. Whiteley 1959: 66, Chum 1963: 66, Racine-Issa 2002: 110, 170–174)、コピュラ動詞がどのような活用パラダイムを有しており、どのような点で他の動詞と異なるのか、コピュラ動詞の使用の可否はどのような条件に左右されるのかなどに関する十分な記述はない。また、コピュラ動詞は、コピュラ文だけでなく、助動詞として TAM を標示するためにも用いられるが、二つの用法におけるコピュラ動詞の違いに対する十分な観察もなされていない。

本章の構成は以下の通りである。8.1 節では、コピュラ動詞の形態統語的特徴について説明する。8.2 節では、コピュラ動詞の aspekto に関する特性を記述して、コピュラ動詞が、状態動詞の一つであることを示す。8.3 節では、コピュラ動詞を用いることなく、コピュラ主語とコピュラ補語を並置するだけでも、コピュラ文が成立しうることを示す。なお、本論文では、Dixon (2012b: 159) に倣って、コピュラ文の二つの必須項を、それぞれコピュラ主語、コピュラ補語と呼んでいる。8.4 節では、コピュラ動詞を用いるタイプのコピュラ文とコピュラ主語とコピュラ補語を並置するタイプのコピュラ文の使い分けを、コピュラ補語の意味的な特性に着目して記述する。8.5 節では、通言語的な言語変化の傾向を踏まえて、コピュラ動詞完結形のもともとの用法が場所を表すもので、そこから用法の拡大が生じている可能性について検討する。8.6 節では、コピュラ動詞を助動詞として TAM の標示に用いる複合時制構文の記述を行う。

8.1 コピュラ動詞の形態統語的特徴

コピュラ動詞は、主語接頭辞や TAM 接頭辞でマークされるという点は他の動詞と変わらないが、形式面で以下に挙げるような特殊な特徴をもつ。本節では、こうした特徴について詳しくみていく。

- 位置を表す拘束代名詞によってマークされうる。
- 補充形がある。
- コピュラ補語が義務的に後続する。

8.1.1 コピュラ動詞と拘束代名詞の共起について

コピュラ動詞は、位置を表す拘束代名詞-*ko*, -*βo*, -*mo* でマークされうるという点で、他の動詞と異なる。他の動詞にも、*ko*, *βo*, *mo* という音形の拘束形態素が後続することがあるが、他の動詞に後続するこれらの拘束形態素は、拘束代名詞ではなく、拘束代名詞と同形の 15, 17, 18 クラス中称の指示詞縮約形である。コピュラ動詞の直後の-*ko*, -*βo*, -*mo* が、指示詞縮約形ではなく、拘束代名詞であると考えられる理由を以下で説明する。

まず、(8-1a) に示す通り、*ko* という拘束形態素はコピュラ動詞に後続するが、(8-1b) (8-1c) に示す通り、15 クラスの指示詞近称縮約形 *ku* や、1 クラスの指示詞中称縮約形 *yo* は、コピュラ動詞に後続しない。

(8-1) a. *ka-cha-wa-ko*

3SG.SM-FUT-COP-CL15.PRO

「彼はそこにいるだろう」

b. **ka-cha-wa-ku*

3SG.SM-FUT-COP-CL15.DEM.PROX

c. **ka-cha-wa-yo*

3SG.SM-FUT-COP-CL1.DEM.MED

この例で示す通り、コピュラ動詞の直後に現れうるのは *ko*, *βo*, *mo* のみである。仮に、これらが指示詞縮約形であるならば、他の動詞と同じように、15, 17, 18 クラスの近称の指示詞縮約形 *ku*, *βa*, *mu* や、他の名詞クラスの指示詞縮約形もコピュラ動詞に後続するはずだが、実際には現れえない。(8-2) に示す通り、-*ja* 「来る」や-*enda* 「行く」には、*ko* だけでなく、*ku*, *yo* という形の拘束形態素（指示詞縮約形）も後続する。

(8-2) a. *ka-cha-kuja=ku*

3SG.SM-FUT-come=DEM.PROX.CL15

「彼はこちらに来るだろう」

b. *ka-cha-kuja=yo*

3SG.SM-FUT-come=DEM.MED.CL1

「彼は来るだろう」

c. *paje ka-cha-kwenda=ko*

PN 3SG.SM-FUT-go=DEM.MED.CL15

「パジェには彼は行くだろう」

コピュラ動詞の直後に現れる形態素が、拘束代名詞であると考えられる二つ目の理由として、同形の形態素の連続が挙げられる。(8-3a) に示す通り、コピュラ動詞に後続する拘束代名詞 *ko* のあとには、同形の拘束形態素が後続しうる。仮に、コピュラ動詞の直後に現れるのが指示詞縮約形であるならば、(8-3b) に示す通り、指示詞縮約形は連続して二つ現れることができないという制限があるため、別の指示詞縮約形の後続は許されないはずである。(8-3b) は、*-ja* 「来る」という動詞に拘束形態素 *ko* が二つ後続しないことを示している。

(8-3) a. *ka-wa-ko=ko*

3SG.SM-COP.PFV-CL15.PRO=CL15.DEM.MED

「そこには、彼はいる」

b. **ka-ja=ko=ko*

3SG.SM-come.PFV=CL15.DEM.MED=CL15.DEM.MED

なお、後述する通り、コピュラ動詞は、ほとんどの場合、コピュラ補語の後続を義務的に要求する (8.1.3 節参照)。しかしながら、この拘束代名詞でマークされる場合は、コピュラ補語の後続が必須ではなくなる。また、コピュラ動詞の完結形に代名詞が後続する形に対応する否定形は、[否定接頭辞－主語接頭辞－拘束代名詞] という語幹のない形になる。(8-4) にその具体例を挙げる。

(8-4) *ha-i-ko*

NEG-CL9.SM-CL15.PRO

「それ (結婚式) は (そこに) ない」

8.1.2 コピュラ動詞の補充形

コピュラ動詞の完結形に対応する否定形は、補充法によって実現される。また、コピュラ動詞は、他の動詞とは異なる特殊な活用パラダイムを有しており、過去と持続を表す形式も存在する。この二つの形式も補充形となる。以下で、それぞれの形式について説明する。

8.1.2.1 否定形

コピュラ動詞の完結形は〔主語接頭辞-*wa*〕という形式である。この完結形の形は、基本語幹の形が-*Ca*となる他の動詞と変わらない¹²⁶ (6.2.4 節参照)。しかし、完結形に、意味的に対応する否定形は、不規則な形となる。他の動詞の完結形に意味的に対応する否定形は、TAM 接頭辞 *li*-「完結否定」でマークされた活用形だが、コピュラ動詞は、この TAM 接頭辞でマークされた活用形をもたない。コピュラ動詞完結形に対応する否定形では、語幹が-*li* という形になり、活用形全体は〔否定接頭辞-主語接頭辞-*li*〕という形になる。なお、この-*li* という形式のコピュラ動詞語幹は、関係節でも用いられる¹²⁷。(8-5) は、コピュラ動詞の肯定の完結形が現れる例、(8-6) は、その肯定形に対応する否定形が現れる例である。

(8-5) *ka-wa nyumba-ni*
3SG.SM-COP.PFV house-LOC
「彼は家にいる」(完結形肯定：規則的な形)

(8-6) *ha-li nyumba-ni*
3SG.SM:NEG-COP house-LOC
「彼は家にいない」(完結形否定：補充形)

8.1.2.2 過去形と持続形

コピュラ動詞は、語幹が-*evu*, -*ngali* という不規則な形式になる補充形をもつ。これらは、それぞれ過去と持続を表す。この二つの補充形は、主語接頭辞のみでマークされ、TAM 接頭辞でマークされることはない。主語が 2, 3 人称単数の場合、-*evu* をマークする主語接頭辞は、動詞の定形に現れる *ku-*, *ka-* となり、-*ngali* をマークする主語接頭辞は非定形の *u-*, *a-* となる。また主語が 1 人称単数の場合、-*ngali* をマークする主語接頭辞は現れない。これは、初頭音が *ng* の形態素が主語接頭辞の次のスロットに現れる場合に共通してみられる人称接頭辞の脱落とみなすことができる¹²⁸。

¹²⁶ Racine-Issa (2002: 110) は、コピュラ動詞完結形を「分割不可能な形式」としているが、6.2.4 節で示した通り、-*Ca* という形式をもつ他の 1 音節語幹動詞と対照から、その分析は誤りであると考えられる。なお、主語接頭辞が 3 人称単数 *ka-*、3 人称複数 *wa-* となる場合、コピュラ動詞語幹-*wa* の *w* は脱落して *ka-a* (<< *ka-wa*)、*wa-a* (<< *wa-wa*) となることがある。

¹²⁷ この-*li* はサバキ祖語の**li* “be”、更にはバントゥ祖語の**di* まで遡るとされている (Nurse & Hinnebusch 1993: 649)。また、このコピュラ動詞語幹の-*li* と TAM 接頭辞 *li*-「完結否定」は同源であると考えられている (Nurse & Hinnebusch 1993: 413)。

¹²⁸ 主語接頭辞の形式については、4.1.4.1 節を参照されたい。

具体的な例は、8.6 節で提示するが、*-evu* や *-ngali* は、他の動詞活用形の前に現れて、その動詞の表す事態が、過去に起きたことや持続していることを表すことがある。他の動詞に、過去や持続を表す活用形がないことや¹²⁹、8.3 節で述べる通り、コピュラ文はコピュラ動詞なしでも成立しうることを考慮すると、*-evu* と *-ngali* はコピュラ動詞ではなく、テンスやアスペクトを表す標識のようにも思われる。しかし、次の事実から、この二つの形態素はコピュラ動詞であると考えられる。

- 拘束代名詞の後続
- コピュラ動詞を義務的に要求するコピュラ補語との共起

まず、拘束代名詞の後続について説明する。(8-7) (8-8) に示す通り、*-evu* や *-ngali* の直後に、15, 16, 18 クラスの近称の指示詞縮約形は後続しない。また、(8-9) (8-10) に示す通り、コピュラの直後の *ko* のあとに、さらに 15, 16, 18 クラスの近称の指示詞縮約形が後続することができる。この二つから、*-evu* や *-ngali* に後続する *ko*, *βo*, *mo* は、指示詞縮約形ではなく拘束代名詞であると考えられる。拘束代名詞が後続するというのは、8.1.1 節で述べた通り、コピュラ動詞特有の形態的特徴である。

(8-7) **k-evu=ku*

3SG.SM-COP.PST=CL15.DEM.PROX

(8-8) **a-ngali=ku*

3SG.SM-COP.PER=CL15.DEM.PROX

(8-9) *k-evu-ko=ku*

3SG.SM-COP.PST-CL15.PRO=CL15.DEM.PROX

「彼はそこにいた」

(8-10) *a-ngali-ko=ku*

3SG.SM-COP.PER-CL15.PRO=CL15.DEM.PROX

「彼はまだこちらにいる」

¹²⁹ アフリカーンス語でも、コピュラ動詞のみが、過去を表す活用形をもち、他の動詞では過去を表す際、迂言的な形式が用いられることが知られる (Dahl 1985: 28–29)。

次にコピュラ動詞を義務的に要求するコピュラ補語との共起について説明する。コピュラ文の中には、コピュラ主語やコピュラ補語となる名詞句を並置させるだけで構成されるものと、コピュラ動詞を用いて構成されるものがあるが、場所を表す名詞句がコピュラ補語となる場合、コピュラ動詞が義務的に用いられる（8.3 節、8.4 節参照）。(8-11) (8-12) に示す通り、*-evu* や *-ngali* は場所を表すコピュラ補語をもつコピュラ文の述語となることができる。このことから、*-evu* や *-ngali* はコピュラ動詞としての機能を有していると考えられる。

(8-11) *k-evu* *kae*
 3SG.SM-COP.PST PN
 「彼はカエ（マクンドウチ）にいた」

(8-12) *a-ngali* *kae*
 3SG.SM-COP.PER PN
 「彼はまだカエにいる」

8.1.3 コピュラ補語の義務的な後続について

他の動詞は、ほとんどの場合、節末に現れることができ、別の語の後続を必ずしも必要としない。一方、コピュラ動詞には、ほぼ義務的にコピュラ補語が後続する。ただし、例外的に、(8-13A) に示すような主語の指示対象が存在するかを問う疑問文では、節末に現れる。平叙文では、(8-13B, B') に示す通り、拘束代名詞でマークされない限り、コピュラ動詞が節末に現れることはない。

(8-13) A: *fatuma ka-wa*
 PN 3SG.SM-COP.PFV
 「ファトゥマいる？」

B: *ka-wa-βo*
 3SG.SM-COP.PFV-CL16.PRO
 「(ここに) いる」

B': **ka-wa*
 3SG.SM-COP.PFV

8.2 コピュラ動詞のアスペクト特性

コピュラ動詞は、状態動詞の一つである。完結形では状態を表し、*na-*「未完結」でマークされた場合は、習慣のみを表し、進行を表すことはない。

まず、(8-14)(8-15) に、コピュラ動詞の完結形が状態を表すことを示す例を提示する。(8-14) は、コピュラ動詞完結形が、*bado*「まだ」と共起することを示す例である。*bado*「まだ」との共起可否は、完結形が状態を表すかどうかのテストとなる(7.1.1 節参照)。

(8-14) *bado ka-wa jambiani*
still 3SG.SM-COP.PFV PN
「彼はまだジャンビアーニにいる」

また、(8-15) では、*mbichi*「未熟」という形容詞がコピュラ補語となっている。この例からも、コピュラ動詞の完結形が、基準時以前の事象の完結ではなく、状態を表すことが分かる。

(8-15) a. *embe zi-wa {mbichi / mbivu}*
mango CL10.SM-COP.PFV unripe.CL10 / ripe.CL10
「マンゴーは未熟だ／熟している」

b. *embe zi-me-wa {*mbichi / mbivu}*
mango CL10.SM-PRF-COP unripe.CL10 / ripe.CL10
「マンゴーは*未熟になった／熟した」

仮にコピュラ動詞完結形が、基準時以前にある変化が生じたことを表すのであれば、「マンゴーが未熟になった」という出来事は想起しにくいいため、(8-15a) のような、*mbichi*「未熟」という形容詞とコピュラ動詞完結形との共起は容認されないことが予想される。実際、(8-15b) に示す通り、*me-*「完了」でコピュラ動詞がマークされた場合、*mbichi*「未熟」は、コピュラ補語とならない。(8-15b) が容認されないのは、コピュラ動詞-*wa* が *me-*でマークされると、基準時以前に生じた状態の変化を表すためであると考えられる。

次に、*na-*「未完結」でマークされたコピュラ動詞が、習慣を表す一方、進行を表さないことを示す。まず、(8-16) は進行を表さないことを示す例である。

- (8-16) a. **sigombe ka-na-wa* *ḿkongwe*
 PN 3SG.SM-IPFV-COP old_person
- b. *sigombe ke-mena-wa* *ḿkongwe*
 PN 3SG.SM-INCH-COP old_person
 「シゴンベ (人名) は老いつつある」

(8-16a) が容認されなかったのは、*na-*でマークされたコピュラ動詞が表すことができるのは習慣のみで、「ある特定の人物が習慣的に老人になる」ということが想起しえなかったためであると考えられる。仮に、*na-*でマークされたコピュラ動詞が進行を表すことができるのであれば、(8-16a) は、(8-16b) の *mena-*「起動」でマークされた形式と同じように「今老いつつある」という解釈がなされ容認されることが予想される。

次に、(8-17) で、*na-*「未完結」でマークされたコピュラ動詞が習慣を表すことを示す。

- (8-17) *kila ḿtʰu ka-na-wa* *ḿkongwe*
 every person 3SG.SM-IPFV-COP old_person
 「あらゆる人は老いる」

(8-17) は、(8-16) と同様に、TAM 接頭辞 *na-*でマークされたコピュラ動詞と、*ḿkongwe*「老いた」という形容詞を用いて、「老いる」ということを表しているが、(8-16) とは主語が異なる。(8-16) の主語は、固有名詞の *sigombe*「シゴンベ (人名)」だったが、(8-17) の主語は *kila*「あらゆる」を含む名詞句である。主語にこうした名詞句を含む (8-17) は、*na-*「未完結」でマークされたコピュラ動詞が、習慣 (普遍の事実) を表すことができれば容認されることが予想される。そして、実際にこの例が容認されるという事実から、*na-*「未完結」でマークされたコピュラ動詞は習慣を表せることが分かる¹³⁰。

¹³⁰ 本論文では、暫定的に普遍の事実が習慣に含まれると考えている。

8.3 コピュラ動詞を用いないコピュラ文

(8-18) に示す通り、コピュラ文は、コピュラ動詞を用いることなく、コピュラ主語とコピュラ補語を並置するだけでも成立する。

(8-18) *kino* *kisu* *kikali*
DEM.PROX.CL7 knife (CL7) sharp.CL7
「これは、鋭いナイフだ／これ、鋭いナイフ」

(8-18) では、7クラスの指示詞近称 *kino* が、コピュラ主語、*kisu kikali* 「鋭いナイフ」という名詞句がコピュラ補語になっている。

ちなみに、上の (8-18) は、構成素の並びをみただけでは、同格の関係をなす指示詞と名詞句の連続にすぎない可能性も捨てきれず¹³¹、並置された名詞句にコピュラ文としての解釈があるかは判然としない。並置された名詞句に、コピュラ文としての解釈もあると考えられる理由としては、指示詞縮約形との共起が挙げられる。まず、(8-19) をみてほしい。この例は、(8-18) のような名詞句の連続に、節としての解釈が生じない場合、指示詞縮約形との共起が容認されないことを示している。

(8-19) A: *ku-numuu* *nini*
2SG.SM-buy.PFV what
「あなたは何を買ったの？」

B': **kino* *kisu* *kikali=ki*
DEM.PROX.CL7 knife (CL7) sharp.CL7=DEM.PROX.CL7

B: *kino* *kisu* *kikali*
DEM.PROX.CL7 knife (CL7) sharp.CL7
「これ、鋭いナイフ」

この例から、(8-18) のような名詞句の連続に、節としての解釈が常に生じえないのであれば、指示詞縮約形との共起はどんな場合でも容認されないことが予想される。しかし、実際に指示詞縮約形の共起が許されないのは、(8-19) のように、節としての解釈が許されないような文脈を作った場合に限られる。なんの文脈も設定しない場合、(8-20) に示す通り、(8-18) の構成素の連続は、指示詞縮約形でマークされうる。

¹³¹ 3.4 節で述べた通り、指示詞は、後続する名詞と同格的な意味関係をもつ。

(8-20) *kino* *kisu* *kikali=ki*
 DEM.PROX.CL7 knife (CL7) sharp.CL7=DEM.PROX.CL7
 「これは、鋭いナイフだ」

このように指示詞縮約形が付加できるという事実から、並置された名詞句の連続に、コピュラ文（節）としての解釈もあるということを示していると考えられる。

コピュラ主語とコピュラ補語を並置するタイプのコピュラ文の否定は、コピュラ補語をホストとする接語 *si=*によって表される。(8-21) では、形容詞 *m̄korofi* 「わんぱくな」がコピュラ補語となる。

(8-21) *yuno* *mwanak^hele si=m̄korofi=yu*
 DEM.PROX.CL1 child (CL1) NEG=naughty.CL1=DEM.PROX.CL1
 「この子供はわんぱくではない」

8.4 コピュラ動詞型と並置型の使い分け

前節で述べた通り、コピュラ文には、コピュラ動詞を用いるタイプのもの（コピュラ動詞型）だけでなく、コピュラ主語とコピュラ補語を並置するタイプのもの（並置型）がある。コピュラ動詞を用いた場合は、基本的に TAM に関する情報が表されており、TAM に関する情報の有無に、二つのタイプのコピュラ文の違いを見出すことができる。

しかし、8.2 節で述べた通り、コピュラ動詞は完結形で現在の状態を表す動詞の一つであり、コピュラ動詞の完結形を用いてコピュラ文が形成される場合、コピュラ動詞型と並置型のコピュラ文の間に、一見して明らかな TAM の違いはない。

コピュラ動詞完結形の使用は、コピュラ補語の意味的な特性に対応していると考えられる (cf. Furumoto 2015)。本節では、コピュラ補語を以下のように分類して、並置型とコピュラ動詞型、二つのタイプのコピュラ文の使い分けを記述する。なお、本節では、訳のあとの () の中に、どれがコピュラ補語にあたるかを明記する。

- コピュラ主語と同一の指示対象
- コピュラ主語の指示対象の種類
- コピュラ主語の指示対象の属性と性質
- コピュラ主語の指示対象の所有者
- コピュラ主語の指示対象の状態
- コピュラ主語の指示対象の存在する場所

8.4.1 コピュラ主語と同一の指示対象

コピュラ動詞の完結形は、コピュラ主語と同一の指示対象をコピュラ補語としてとることができない。(8-22a) は、コピュラ補語 *mshamba* 「田舎者」がコピュラ主語の性質を表している。この例では、コピュラ動詞の完結形を用いることができるが、(8-22b, c) に示す通り、このコピュラ補語が指示詞遠称 *yulya* で修飾され、主語と同一の指示対象を指すようになると、コピュラ動詞を用いることができなくなり、コピュラ主語とコピュラ補語は並置される。

- (8-22) a. *yuno ka-wa mshamba*
 DEM.PROX.CL1 3SG.SM-COP.PFV countryman (CL1)
 「この人は田舎ものだ」(*mshamba* 「田舎者」)
- b. **yuno ka-wa mshamba yulya*
 DEM.PROX.CL1 3SG.SM-COP.PFV countryman (CL1) DEM.DIST.CL1
- c. *yuno mshamba yulya*
 DEM.PROX.CL1 countryman (CL1) DEM.DIST.CL1
 「この人はあの田舎ものだ」(*mshamba yulya* 「あの田舎者」)

ただし、何者であるか尋ねる文とそれに対する返答ではコピュラ動詞の完結形を用いることができる。(8-23) は、電話を通じた会話である。A の話者が行っているのは、会話の相手の特定である。このため、B の話者の返答は、コピュラ主語の指示対象とコピュラ補語の指示対象が同一のものであることを示していると考えるのが自然な解釈となる。

- (8-23) A: *weye ku-wa nani*
 2SG.PRO 2SG.SM-COP.PFV who
 「あなたは誰？」(*nani* 「誰」)
- B: *mie nyi-wa hidaya*
 1SG.PRO 1SG.SM-COP.PFV PN
 「私はヒダヤ (人名)」(*hidaya* 「ヒダヤ」)

なお、コピュラ補語として名前を用いる文は、主語が 1, 2 人称単数の場合に用いられやすい。主語が 3 人称単数の場合、コピュラ動詞の完結形に疑問詞 *nani* 「誰」が後続する文は、名前を同定する文ではなく、(8-24) に示す通り、職業のような属性を尋ねる文と

しての解釈が自然になり、名前の応答は、(8-25) のような並置型の方がより好ましいとされる。

(8-24) A: *uyo+ko* *ka-wa* *nani*
 DEM.MED.CL1+DEM.MED.CL15 3SG.SM-COP.PFV who
 「あのひとは何者？」 (*nani* 「誰」)

B: *ka-wa* *mwalimu*
 3SG.SM-COP.PFV teacher (CL1)
 「彼は先生です」 (*mwalimu* 「先生」)

(8-25) A: *kwani uyo+ko* *nani*¹³²
 why DEM.MED.CL1+DEM.MED15 who
 「それで、あいつは誰なの？」 (*nani* 「誰」)

B: *uyo+ko* *haziri*
 DEM.MED.CL1+DEM.MED15 PN (CL1)
 「あれはハズィリ (人名) だ」 (*haziri* 「ハズィリ」)

次の例に示す通り、コピュラ動詞の他の活用形では、コピュラ主語と同一の指示対象を指すものがコピュラ補語になり得る。(8-26) と (8-27) では、コピュラ動詞が、過去形、あるいは *me*-形に活用しており、コピュラ主語と同一の指示対象を指す指示詞がコピュラ補語となっている。

(8-26) *ino* *y-evu* *ilya*
 DEM.PROX.CL9 CL9.SM-COP.PST DEM.DIST.CL9
 「これはあれだった」 (*ilya* 「あれ」)

(8-27) *ilya* *i-me-wa* *ino*
 DEM.DIST.CL9 CL9.SM-PRF-COP DEM.PROX.CL9
 「あれはこれになった」 (*ino* 「これ」)

この二つの例から、同一の指示対象を指すコピュラ補語と共起できないというのは、コピュラ動詞が完結形に活用した場合にみられる特徴であるといえる。

¹³² 疑問詞 *kwani* については、3.7 節を参照されたい。

8.4.2 コピュラ主語の種類

(8-28) に示す通り、コピュラ主語の種類を表す名詞句がコピュラ補語として現れる場合、コピュラ動詞の完結形を用いることができない¹³³。

- (8-28) A: *tunda lino tunda gani*
 fruit (CL5) DEM.PROX.CL5 fruit (CL5) what_kind
 A': **tunda lino li-wa tunda gani*
 fruit (CL5) DEM.PROX.CL5 CL5.SM-COP.PFV fruit (CL5) what_kind
 「この果物は、どんな果物」 (*tunda gani* 「どんな果物」)
- B: *lino fenesi*
 DEM.PROX.CL5 jackfruit (CL5)
 B': **lino li-wa fenesi*
 DEM.PROX.CL5 CL5.SM-COP.PFV jackfruit (CL5)
 「これはジャックフルーツ」 (*fenesi* 「ジャックフルーツ」)

8.4.3 コピュラ主語の属性と性質

コピュラ補語が属性や性質を表す名詞や形容詞の場合、コピュラ動詞の完結形は随意的に用いられる。(8-29) の *mwaliimu* 「先生」のような職業を表す名詞は、属性を表すものの一つである。また、(8-30)(8-31) では、形容詞がコピュラ補語となり、コピュラ主語の属性、性質を表している。

- (8-29) a. *yuno mwaliimu*
 DEM.PROX.CL1 teacher (CL1)
 b. *yuno ka-wa mwaliimu*
 DEM.PROX.CL1 3SG.SM-COP.PFV teacher (CL1)
 「この人は先生だ」 (*mwaliimu* 「先生」)

¹³³ 関係節では、種類を表す名詞句がコピュラ補語となることがあるが、この場合、特殊な含意が生じる。次の例は、ジャックフルーツは他のところでも手に入れたが、特に質の高いものはカジェングワで手に入れたということを表している。

例: *li-ø-lyo-wa fenesi N-li-vata kajengwa*
 CL5.SM-PFV-CL5.REL-COP jackfruit (CL5) 1SG.SM-CL5.OM-get.PFV PN
 「ジャックフルーツと呼ぶに値するものは、カジェングワで手に入れた」

- (8-30) a. *yuno* *muongo*
 DEM.PROX.CL1 liar.CL1
 b. *yuno* *ka-wa* *muongo*
 DEM.PROX.CL1 3SG.SM-COP.PFV liar.CL1
 「この人は嘘つきだ」 (*muongo* 「嘘つき」)

- (8-31) a. *kisu* *kino* *kikali*
 knife (CL7) DEM.PROX.CL7 sharp.CL7
 b. *kisu* *kino* *ki-wa* *kikali*
 knife (CL7) DEM.PROX.CL7 CL7.SM-COP.PFV sharp.CL7
 「このナイフは鋭い」 (*kikali* 「鋭い」)

(8-32) に示す通り、コピュラ補語が、属性や性質を表すコピュラ文では、否定も二パターンある。*si=*を用いる (8-32a) は並置型に、コピュラ動詞の補充形を用いる (8-32b) は、コピュラ動詞型に対応する。

- (8-32) a. *kisu* *kino* *si=kikali*
 knife (CL7) DEM.PROX.CL7 NEG=sharp.CL7
 b. *kisu* *kino* *ha-ki-li* *kikali*
 knife (CL7) DEM.PROX.CL7 NEG-CL7.SM-COP sharp.CL7
 「このナイフは鋭くない」 (*kikali* 「鋭い」)

コピュラ補語が形容詞の場合、コピュラ動詞完結形の使用は容認されないこともある。例えば、(8-30b)(8-31b) のような例は、話者によっては容認されない。また、コピュラ補語の直後に現われる名詞が、コピュラ主語の指示対象の種類を示すものである場合、その名詞を含む名詞句が、属性や性質を表すものであっても、コピュラ動詞の完結形を用いることはできない。(8-33) のコピュラ補語 *ṁṁṁṁ* *ṁṁṁṁ* 「背が高い人」は、コピュラ主語 *juma* 「ジュマ (人名)」の性質を表しているが、この文でコピュラ動詞完結形を用いることはできない。こうした文でコピュラ動詞完結形が用いることができないのは、前述の通り、種類を示す名詞がコピュラ動詞の完結形と共起できないことと関連していると考えられる。

(8-33) **juma ka-wa m̄thu m̄refu*
 PN (CL1) 3SG.SM-COP.PFV person (CL1) tall.CL1
 「ジュマ (人名) は背が高い人だ」 (*m̄thu m̄refu* 「背の高い人」)

(8-34)(8-35) に示す通り、数量詞がコピュラ補語となる場合も、コピュラ動詞を随意的に用いることができる。(8-34) では、コピュラ主語 *maji* 「水」とコピュラ補語 *mengi* 「多い」の間でコピュラ動詞の完結形が用いられているが、(8-35) では、コピュラ主語 *wanafuzi* 「学生」とコピュラ補語 *wengi* 「多い」が並置されている。ちなみに、(8-35) がコピュラ文であることは、指示詞縮約形の使用から分かる (8.3 節参照)。

(8-34) *maji ya-wa mengi*
 water (CL6) CL6.SM-COP.PFV many.CL6
 「水が多い」 (*mengi* 「多い」)

(8-35) *wanafuzi wengi=wa*
 students (CL2) many.CL2=DEM.PROX.CL2
 「この学生たちが多い (学生がたくさんいる)」 (*wengi* 「多い」)

8.4.4 コピュラ主語の指示対象の所有者

コピュラ補語の位置に所有詞や属辞でマークされた名詞が現れ、コピュラ主語の指示対象の所有者を表す場合も、コピュラ動詞型と並置型の二つのタイプが用いられる。(8-36) では、所有詞 *yangu* 「私の」がコピュラ補語となっている。

(8-36) a. *yuno ng'ombe yangu*
 DEM.PROX.CL1 cow (CL1) my.CL1
 b. *yuno ng'ombe ka-wa yangu*
 DEM.PROX.CL1 cow (CL1) 3SG.SM-COP.PFV my.CL1
 「この牛は、私のものだ」 (*yangu* 「私の」)

(8-37) (8-38) はどちらも、属辞でマークされた名詞句がコピュラ補語となる例だが、(8-37) ではコピュラ動詞が用いられているのに対して、(8-38)はコピュラ動詞を欠いている。

(8-37) *yuno ng'ombe ka-wa ya=sigombe*
 DEM.PROX.CL1 cow (CL1) 3SG.SM-COP.PFV of.CL1=PN
 「この牛はシゴンベ (人名) のものだ」 (*ya=sigombe* 「シゴンベの」)

(8-38) A: *yano ya=nani*
 DEM.PROX.CL6 of.CL6=who
 「これ (グレープフルーツ) は誰の」 (*ya=nani* 「誰の」)

B: *yangu=ya*
 my.CL6=DEM.PROX.CL6
 「私の」 (*yangu* 「私の」)

筆者のインフォーマントによれば、コピュラ補語が所有者を表す場合、コピュラ型では、所有が一時的なもの (最近所有するようになったもの) であるのに対して、並置型では恒常的に所有しているという印象を受けるようである。

なお、所有詞や、属辞でマークされた名詞句がコピュラ補語となるコピュラ文でも、話者によっては、コピュラ動詞完結形の使用を容認しない。

8.4.5 コピュラ主語の状態

3.2 節で、形容詞的な意味をもちながら、形容詞とは異なる形態統語的特徴を有している状態副詞があることを述べた。状態副詞は、コピュラ補語となることができるが、コピュラ文で用いられる際は、コピュラ動詞を義務的に要求する。(8-39) は、状態副詞 *hai* 「生きている」がコピュラ補語となる例である。

(8-39) a. *ng'ombe ka-wa hai*
 cow 3SG.SM-COP.PFV alive
 b. **ng'ombe hai*
 cow alive
 「牛は生きている」 (*hai* 「生きている」)

(8-40) に示す通り、コピュラ補語に状態副詞が現れる際の否定文では、コピュラ動詞が用いられ、*si=*を用いることはできない。

(8-40) a. *ng'ombe ha-li hai*
cow 3SG.SM:NEG-COP alive

b. **ng'ombe si=hai*
cow NEG=alive

「牛は生きていない」(*hai* 「生きている」)

なお、コピュラ動詞が完結形以外に活用した場合も、状態副詞はコピュラ補語となる。

(8-41) は、コピュラ動詞が TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」でマークされる例、(8-42) はコピュラ動詞過去形-*evu* が用いられる例、(8-43) はコピュラ動詞持続形-*ngali* が用いられる例である。これら三つの例のコピュラ補語は、すべて状態副詞である。

(8-41) *ka-na-wa weka*
3SG.SM-IPFV-COP alone

「彼は（普段）一人でいる」（コピュラ補語：*weka* 「一人で」）

(8-42) *k-evu hai*
3SG.SM-COP.PST alive

「彼は生きていた」（コピュラ補語：*hai* 「生きている」）

(8-43) *a-ngali macho*
3SG.SM-COP.PER awake

「彼はまだ起きている」（コピュラ補語：*macho* 「目覚めている」）

8.4.6 コピュラ主語の指示対象が存在する場所

コピュラ主語の指示対象が存在する場所を表す名詞句がコピュラ補語となる場合も、コピュラ動詞が義務的に用いられる。(8-44) では、*nyumba-ni* 「家に」がコピュラ補語となる。

(8-44) a. *ali ka-wa nyumba-ni*
PN 3SG.SM-COP.PFV house-LOC

b. **ali nyumba-ni*
PN house-LOC

「アリは家にいる」（*nyumba-ni* 「家に」）

(8-45) に示す通り、場所を表す名詞句がコピュラ補語となる場合も、コピュラ動詞完結形に対応する否定形は、語幹-*li* が現われる補充形となる。

(8-45) *ha-li* *nyumba-ni*
3SG.SM:NEG-COP house-LOC
「彼は家にいない」 (*nyumba-ni* 「家に」)

また、コピュラ動詞の完結形以外の活用形でも、コピュラ補語として場所を表す名詞句は現れうる。(8-46) ではコピュラ動詞が *na-* 「未完結」 でマークされており、(8-47) ではコピュラ動詞が *me-* 「完了」 でマークされている。(8-48) は、コピュラ動詞の過去形 *-evu* が現れる例、(8-49) は、コピュラ動詞の持続形-*ngali* を用いた例である。

(8-46) *kila* *wakati* *wa=siku+k^huu* *pandu* *ka-na-wa* *mji-ni*
every time (CL3) of.CL3=day+big PN 3SG.SM-IPFV-COP town-LOC
「(ラマダン明けの) お祝いのときは、パンドゥはいつも街にいる」
(コピュラ補語: *mji-ni* 「街に」)

(8-47) *ku-me-wa* *kaskazi*
2SG.SM-PRF-COP north
「もうあなたは (マクンドウチの) 北にいるの？」 (コピュラ補語: *kaskazi* 「北」)

(8-48) *k-evu* *mji-ni*
3SG.SM-COP.PST town-LOC
「彼は街にいた」 (コピュラ補語: *mji-ni* 「街に」)

(8-49) *a-ngali* *kae*
3SG.SM-COP.PER PN
「彼はまだカエ (地名) にいる」 (*kae* 「カエ」)

なお、(8-50) に示す通り、主語が 1, 2 人称複数の場合に限り、コピュラ補語となる名詞句が、コピュラ動詞の前に現れ、コピュラ動詞の直後にコピュラ主語が現れることもある。

(8-50) A: *aβo* *mu-wa* *nani na=nani*
 DEM.MED.CL16 2PL.SM-COP.PFV who COM=who
 「そこには、あなたたち、誰と誰がいるの？」 (*aβo* 「そこ」)

B: *βano* *tu-wa* *makoto na=sigombe*
 DEM.PROX.CL16 1PL.SM-COP.PFV PN COM=PN
 「ここには、私たち、マコトとシゴンベがいる」 (*βano* 「ここ」)

上記の例では、すべて、コピュラ補語が、コピュラ主語の指示対象の存在する場所を表していた。しかしながら、(8-51) のように、コピュラ動詞が存在することを表すものの、コピュラ補語の位置に場所を表す名詞句が現れないこともある。(8-51) では、コピュラ補語の位置に、場所を表す名詞句ではなく、共格標識 *na=* でマークされた名詞句が現れ、全体で「～と一緒にいる」という意味を表している。

(8-51) *nyi-wa* *na=mgeni*
 1SG.SM-COP.PFV COM=guest
 「私は客人と一緒にいる」 (*na=mgeni* 「客人と」)

8.4.7 小括

完結形に活用した場合のコピュラ動詞の使用の可否を以下の表にまとめる。なお、比較のために、並置型のコピュラ文の分布も併せて示す。なお、+はコピュラ動詞が義務的に用いられることを、-はコピュラ動詞を用いることができないことを、±はコピュラ動詞の使用が随意的であることを示している。また、+/-はコピュラ文によって可能な場合と不可能な場合があることを、±~-は話者の容認性に差があることを示している。

表 8-1 : コピュラ補語の意味的特性とコピュラ動詞の使用の可否

	コピュラ動詞型	並置型
同一の指示対象	+/-	+
種類	-	+
属性と性質	±~-	+
所有者	±~-	+
状態	+	-
場所	+	-

8.5 コピュラ動詞の使用域が拡大している可能性について

前節では、コピュラ補語の意味的な特性によって、コピュラ動詞の完結形を用いることができる場合と、できない場合があることを示した。

ここで、なぜコピュラ動詞完結形の使用域に制限があるのか、なぜ使用が義務的な場合とそうでない場合があるのか、といった疑問が生じる。本節では、こうした疑問に答えるために、コピュラ動詞完結形の本来の用法が、コピュラ主語の指示対象の存在する場所を表すもので、そこから、徐々にほかの用法でもコピュラ動詞完結形が用いられるようになったという仮説を提示する。

8.5.1 通言語的な文法化の傾向

場所や存在を表す述語から、同一の指示対象や属性を表すようなコピュラへの変化は、通言語的にみられる (Faverey et al. 1976, Devitt 1990, Hengeveld 1992, Noonan & Grunow-Hårsta 2002)。また、場所や存在を表す述語に由来するコピュラが、属性や性質を表すために用いられているということもいくつかの言語で報告されている (Verhaar 1995¹³⁴, Noonan & Grunow-Hårsta 2002¹³⁵, Goddard & Harkins 2002¹³⁶, Reid 2002¹³⁷)。

マクンドゥチ方言におけるコピュラ動詞完結形の使用は、コピュラ補語がコピュラ主語と同一の指示対象を表す場合、限定的で、属性や性質を表す場合により用いられやすい。コピュラ動詞完結形の使用域が、場所を表す用法から拡大したという仮説を立てた場合、共時的な使い分けから、コピュラ動詞完結形の使用は、まずコピュラ補語でコピュラ主語の属性や性質を表すタイプに拡大したと考えられるが、この変化は、通言語的にみられる変化の傾向に合致したものとなる。

また、上述の通り、コピュラ補語が所有者を表す際、コピュラ動詞完結形を用いた場合、所有が一時的であることが表されている可能性があるが、もしそうであるとすれば、これも文法化が生じていることを示す傍証となる。通言語的にみて、場所や存在を表す

¹³⁴ トク・ピシン (パプア・ニューギニア、クレオール言語) の *stap* には、場所や存在を示す用法とともに性質を示すコピュラとしての用法がある (Verhaar 1995: 81)。

¹³⁵ チャンテル語 (Chantyal) (ネパール、チベットビルマ語派) の場所や属性を表すコピュラ動詞 *mu* は歴史的には「座る」「留まる」といった意味をもつ動詞に遡る (Noonan & Grunow-Hårsta 2002: 88)。

¹³⁶ ピチャンチャチャラ/ヤンクンチャチャラ語 (Pitjantjatjara/Yankunytjatjara) (オーストラリア、パマ・ニューガン語群) の *nyinani* 「座る」や *ngaranyi* 「立つ」が属性を表す補語と共に共起してコピュラとして機能する (Goddard & Harkins 2002: 229–231)。

¹³⁷ モイル語 (Ngan'gityemerri) (オーストラリア、デイリー語群) の「座る」「寝る」「立つ」「(鳥が木に) とまる」「行く」という意味を持つ動詞には存在や場所を示す用法とともに属性を示す用法がある (Reid 2002: 246)。

述語が、一時性を含意するというのもあり得る変化である (Faverey, Johns & Wouk 1976: 89, Devitt 1990: 109, Verhaar 1995: 83, Goddard & Harkins 2002: 232)。

8.5.2 スワヒリ語他変種の事例

8.5.2.1 場所を表す述語のコピュラへの変化

ウングジャ方言には、主語接頭辞と *-ko*, *-po*, *-mo* という形態素からなる述語がある。この述語は、もっぱら、主語の指示対象がある場所にあることを示すために用いられることが知られている (Ashton 1947: 19)。しかし、以下に示す通り、場所だけではなく、状態や属性を表すためにこの述語が用いられることがありうる¹³⁸。以下の三つは、そのことを示すウングジャ方言の例である。(8-52) では述語のあとに状態副詞が、(8-53) では形容詞が、(8-54) では名詞が現れている。

(8-52) *ng'ombe yu-ko hai*
cow 3SG.SM-KO alive
「牛は生きている」(ウングジャ方言の例)

(8-53) *ng'ombe yu-ko mzima*
cow 3SG.SM-KO fine.CL1
「牛は元気だ」(ウングジャ方言の例)

(8-54) *mimi ni-ko bado mwanafunzi*
1SG 1SG.SM-KO still student
「私はまだ学生だ」(ウングジャ方言の例)

また、ピジンスワヒリ語として知られるシャバスワヒリ語¹³⁹では、ウングジャ方言にみられるような場所を表す述語がコピュラへと文法化していることが報告されている。(8-55) の *iko* というコピュラは、ウングジャ方言にみられる *-ko* を用いた場所を表す述語に由来すると考えられる。

¹³⁸ (8-52) (8-53) (8-54) はザンジバル都市部出身の 20 代男性から得られたものである。

¹³⁹ 現在のコンゴ民主共和国カタンガ州で話されるスワヒリ語変種である。スワヒリ語は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてこの地域にもたらされ、その後ベルギーの支配下で発達 (ピジン化) したとされる (Kapanga 1991: 115–124)。

(8-55) *chakula iko kitu mukubwa*

food COP thing big

「食事は大切なものだ」 (Lecoste 1961: 220) (シャバスワヒリ語の例)

上記のスワヒリ語他変種における例を考慮すると、場所を表す述語から、一般的なコピュラへの変化は十分にあり得る変化であるといえる。

8.5.2.2 トウンバトゥ方言におけるコピュラ動詞の使用

トウンバトゥ方言でも、マクンドゥチ方言と同形のコピュラ動詞の完結形が用いられている。しかし、トウンバトゥ方言におけるコピュラ動詞完結形の使用域は、マクンドゥチ方言に比べて狭い。以下に、筆者が現段階で把握しているマクンドゥチ方言とトウンバトゥ方言におけるコピュラの使用できる用法の違いをまとめる。

表 8-2 : マクンドゥチ方言とトウンバトゥ方言のコピュラ動詞完結形の用法の違い

	マクンドゥチ方言	トウンバトゥ方言
名前 (1, 2 人称単数)	可	不可
属性と性質 (1, 2, 3 人称単数)	可	1, 2 人称のみ可 (否定は不可)
所有者	可	不可
状態	可	可
場所	可	可

上述のような言語変化を仮定した場合、この二つの変種間の違いも説明することができる。仮に、マクンドゥチ方言とトウンバトゥ方言のコピュラ完結形が同源であるとするならば、その用いられる範囲が狭い方と広い方のどちらが、より古い言語特徴と言えるかが問題となる。マクンドゥチ方言でコピュラ動詞の完結形の用法が拡大しているとするれば、変種間でコピュラ動詞を用いることができる用法に差があるのは、言語変化の進行の度合いの違いとして説明される。

8.5.2.3 コピュラ動詞の文法化のプロセス

Hengeveld (1992: 240–242) は、いくつかの言語で、場所述語が、副詞化した構成素と共起して、場所を表さない「属性付与 (ascriptive)」述語として用いられている例を挙げ、

こうした表現を場所述語からコピュラへの文法化の端緒と主張している。マクンドゥチ方言でも、同様のきっかけで、コピュラ動詞完結形の用法が拡大している可能性が指摘できる。マクンドゥチ方言では、場所を表す名詞句以外に、状態副詞も叙述の際はコピュラ動詞を必要とするが、現在、筆者が把握している状態副詞の多くは、借用か、名詞からのゼロ派生によって、生じている。

- 借用

barabara 「ちゃんとした、しっかりした」、*fiti* 「健康な」、*hai* 「生きている」、*tayari* 「準備のできた」、*wazi* 「開いている」

- 名詞由来

kimya 「静かに」、*macho* 「目を覚まして」、*uchi* 「裸で」、*weka* 「一人で」、*wima* 「立って」

- 由来不明

ch^hune 「上裸で」、*k^hundu* 「汚く」

その出自を考慮すると、状態副詞は比較的最近になってから、生じた可能性がある。上述の Hengeveld の想定に従えば、こうした状態副詞を叙述するために用いられるようになったことが、もともと場所を表す述語であったコピュラ動詞完結形の用法の拡大の端緒となったと考えられる。想定される文法化のプロセスは以下の通りである。

1. 場所を表す述語
2. 場所を表す述語／状態副詞を叙述する述語
3. 場所を表す述語／状態副詞を叙述する述語／より一般的なコピュラ

なお、Hengeveld (1992: 248–249) は、こうした文法化の動機として、TAM の標示を挙げているが、本論文では、借用や派生によって新たに生じた語を用いた叙述を文法化の動機として想定する。実際、次の例で示す通り、コピュラ動詞の完結形は一時的に借用された語を叙述するためにも用いられる。

(8-56) *nguo i-wa* “clean”
clothes CL9.SM-COP.PFV clean
「服はきれいだ」

8.6 コピュラ動詞を用いた「複合時制構文」について

コピュラ動詞は、助動詞として、TAM に関する情報を補助的に表すために用いられることもある。次の (8-57) では、*cha-*「未来」でマークされたコピュラ動詞が、TAM の情報を表し、それに別の動詞活用形が後続している。この例のコピュラ動詞は、コピュラとしての機能をもたない。なお、次の例では、コピュラ動詞を実線で、コピュラ動詞の後続する活用形を破線で囲っている。

(8-57) *hata mwakani* *ka-cha-wa* *ha-li-poa*
 ever next_year 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-cure
 「来年になっても彼は治っていないだろう」

本論文では、コピュラ動詞を介して、TAM の情報を表示する形式を、スワヒリ語の記述に倣って複合時制構文と呼ぶことにする (cf. Ashton 1947)。以下では、この複合時制構文の記述を行う。

8.6.1 複合時制構文による TAM の標示

完結形、及び TAM 接頭辞 *me-*「完了」¹⁴⁰、*li-*「完結否定」、*ja-*「完了否定」でマークされるコピュラ動詞の活用形は、複合時制構文で用いることができないが、それ以外の活用形であれば、複合時制構文で用いることができる¹⁴¹。複合時制構文で用いられるコピュラ動詞は、コピュラ文で用いられる場合と同様の TAM を表すことが多い¹⁴²。例えば、(8-58) に示す通り、*na-*でマークされたコピュラ動詞は、コピュラ文で用いられる場合と同様に、習慣を表す (8.2 節参照)。

¹⁴⁰ 次の a. に示す *me-*「完了」でマークされたコピュラ動詞に、*na-*「未完結」でマークされた活用形が後続する複合時制構文は、b. の *mena-*「起動」でマークされた活用形と同様に、動作を開始して、その動作が現在も継続していることを表すと解釈される。ただし、そのことを表す際は、複合時制構文ではなく、TAM 接頭辞 *mena-*「起動」でマークされた活用形を用いたほうが自然であるとされる。

例： a. *?ke-me-wa ka-na-βika*
 3SG.SM-PRF-COP 3SG.SM-IPFV-cook
 b. *ke-mena-βika*
 3SG.SM-INCH-cook
 「彼 (女) は、料理し始めている」

¹⁴¹ 複合時制構文の具体例については、付録も参照されたい。

¹⁴² 例外的に、コピュラ文と複合時制構文とで表す TAM が異なるコピュラ動詞も存在する。こうしたコピュラ動詞については、8.6.2 節で説明する。

- (8-58) *ka-na-wa* *ka-shibi*
 3SG.SM-IPFV-COP 3SG.SM-satisfy.PFV
 「彼はいつも満腹だ」

複合時制構文において、コピュラ動詞の活用形と後続する動詞の活用形でどのような組み合わせが可能なのかについて、詳細はまだよく分かっていない。ただ、コピュラ動詞が表す TAM の情報と、後続する動詞活用形の TAM に矛盾が生じるかどうか、組み合わせの可否を決める要因であることが推測される。例えば、コピュラ動詞が *cha-*「未来」でマークされる場合、定形などの活用形も、コピュラ動詞に後続することができる。一方、コピュラ動詞が、*na-*「未完結」でマークされる場合は、未来の事態を表す *cha-*「未来」でマークされる活用形や、否定完結形は後続できない。

また、次の例に示す通り、コピュラ動詞語幹-*wa* を含む形式に *ka-*「継起」でマークされた動詞活用形が後続することはできないが、コピュラ動詞の過去形-*evu* や持続形-*ngali* には、*ka-*「継起」でマークされた活用形が後続しうる。(8-59) は、*cha-*「未来」でマークされたコピュラ動詞に *ka-*「継起」でマークされた活用形が後続しないことを示している。また、(8-60)(8-61) では、それぞれ、コピュラ動詞の過去形-*evu* や持続形-*ngali* に、*ka-*「継起」でマークされた活用形が後続している。

- (8-59) a. **ka-cha-wa* *a-ka-tenda* *kazi*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-CONS-do work
 b. *ka-cha-wa* *ka-na-tenda* *kazi*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-IPFV-do work
 「彼は仕事をしているだろう」

- (8-60) *k-evu* *a-ka-choea* *kikae* *mama=angu*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-CONS-speak Kae_dialect mother=my
 「カエ方言をしゃべっていたよ、私のお母さんは」

- (8-61) *a-ngali* *a-ka-jenga* *nyumba*
 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-COND-build house
 「彼はまだ家を建てている」

複合時制構文で TAM の標識として機能するコピュラ動詞は、複数組み合わせることもできる。現段階では、(8-62) に示す通り、TAM 接頭辞 *cha-*「未来」でマークされる

コピュラ動詞、過去形-*evu*、持続形-*ngali* の共起を確認している。この組み合わせは、コピュラ動詞の順序を変えると容認されない

- (8-62) a. *ka-cha-wa* *k-evu* *ka-na-soma*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-study
 「彼は勉強していただろう」(モダリティ+テンス)
- b. *ka-cha-wa* *a-ngali* *ka-na-soma*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-IPFV-study
 「彼はまだ勉強しているだろう」(モダリティ+アスペクト)
- c. *k-evu* *a-ngali* *ka-na-soma*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-IPFV-study
 「彼はまだ勉強していた」(テンス+アスペクト)

後述する通り、複合時制構文において、*cha*-「未来」でマークされるコピュラ動詞は「おそらく～だろう」と訳すことのできるようなモダリティを表す標識として機能する。このことを考慮に入れると、(8-62) に示した組み合わせから、動詞の語彙的な意味を担う部分からの距離は、近い順に並べると、アスペクト、テンス、モダリティとなっていることが分かる。こうした TAM 標識の順序は通言語的にみられる傾向に合致している (Bybee 1985: 34–35, 196¹⁴³)。

8.6.2 複合時制構文とコピュラ文におけるコピュラ動詞の違い

複合時制構文におけるコピュラ動詞は、コピュラ文におけるコピュラ動詞(コピュラ主語とコピュラ補語の関係を示すコピュラ動詞)と次の三つの点で異なる。以下では、この三点について、詳しくみていく。

- 統語的な位置の違い
- 形態的な違い
- 意味的な違い

¹⁴³ Bybee は、Mood という用語を用いているが、これには、確実性や可能性を表す標識も含まれる (Bybee 1985: 165–166)。

8.6.2.1 統語的な違い

まず、(8-63)(8-64) に示す通り、複合時制構文におけるコピュラ動詞とコピュラ文のコピュラ動詞は共起しうる。このことから、この二つのコピュラ動詞は、統語的に異なる位置に現れるということがいえる。次の二つの例では、先に現れるコピュラ動詞が、複合時制構文のコピュラ動詞である。

(8-63) *uyo ka-cha-wa ka-wa nyumba-ni*
DEM.MED.CL1 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-COP.PFV house-LOC
「そのひとは家にいるだろう」

(8-64) *ny-evu nyi-wa mji-ni*
1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-COP.PFV town-LOC
「私は街にいた」

8.6.2.2 形態的な違い

形態面での違いとして、まず、主語との一致が挙げられる。コピュラ文のコピュラ動詞は主語との一致が義務的なものに対して、複合時制構文のコピュラ動詞は主語と一致しないこともある。まず、(8-65)(8-66) に、TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」でマークされたコピュラ動詞を用いた例を提示する。

(8-65) a. *ka-cha-wa k-ende p^hwa-ni*
3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-go.PFV sea-LOC
b. *i-cha-wa k-ende p^hwa-ni*
CL9.SM-FUT-COP 3SG.SM-go.PFV sea-LOC
「彼はおそらく、海に行っただろう」(複合時制構文)

(8-66) a. *ka-cha-wa mwalimu*
3SG.SM-FUT-COP teacher
b. **i-cha-wa mwalimu*
CL9.SM-FUT-COP teacher
「彼は教師になるだろう」(コピュラ文)

この二つの例の主語は、ともに 3 人称単数となるが、(8-65) に示す通り、複合時制構文で用いられるコピュラ動詞は、3 人称単数の主語接頭辞だけでなく、9 クラスの主語接頭辞でマークされることもある。一方、(8-66) に示す通り、コピュラ文で用いられるコ

ピュラ動詞が、9 クラスの主語接頭辞でマークされることはない。同じことは、(8-67) (8-68) に示す通り、コピュラ動詞の持続形を用いた複合時制構文とコピュラ文にもあてはまる。

- (8-67) a. *a-ngali* *ka-choko*
 3SG.SM-COP.PER 3SG.SM-get_tired.PFV
 b. *i-ngali* *ka-choko*
 CL9.SM-COP.PER 3SG.SM-get_tired.PFV
 「彼はまだ疲れている」(複合時制構文)

- (8-68) a. *a-ngali* *mwaliimu*
 3SG.SM-COP.PER teacher
 b. **i-ngali* *mwaliimu*
 CL9.SM-COP.PER teacher
 「彼はまだ教師だ」(コピュラ文)

こうした形態面での比較は、コピュラ動詞が *cha-* でマークされる場合と、*-ngali* になる場合しか確認していないが、他の活用形でも、複合時制構文のコピュラ動詞が主語と一致しないことが確認されている。ちなみに、コピュラ動詞が主語と一致しない場合、コピュラ動詞の主語接頭辞のロットには 9 クラスの接頭辞が現れることがほとんどだが、過去形の *-evu* は、(8-69) に示す通り、主語接頭辞をまったく伴わない形で現れる。

- (8-69) a. *mwaliimu zimba* *k-evu* *ka-na-lima* *muyuni*
 teacher PN 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-cultivate PN
 b. *mwaliimu zimba* *evu* *ka-na-lima* *muyuni*
 teacher PN COP.PST 3SG.SM-IPFV-cultivate PN
 c. **mwaliimu zimba* *y-evu* *ka-na-lima* *muyuni*
 teacher PN CL9.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-cultivate PN
 「ジンバ先生は、かつてムユニで耕していた」

形態面では、否定接頭辞でマークされるかどうかにも違いがある。(8-70)(8-71) に示す通り、コピュラ文のコピュラは否定の接頭辞でマークされるが、複合時制構文のコピュラ動詞は否定の接頭辞でマークされにくい

(8-70) *ha-cha-wa* *mwalimu*
 3SG.SM:NEG-FUT-COP teacher
 「彼は教師にならないだろう」(コピュラ文)

(8-71) a. *?ha-cha-wa* *ka-na-tenda* *kazi*
 3SG.SM:NEG-FUT-COP 3SG.SM-IPFV-do work
 b. *ka-cha-wa* *ha-na-tenda* *kazi*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM:NEG-IPFV-do work
 「彼はおそらく仕事をしていないだろう」(複合時制構文)

また、複合時制構文におけるコピュラ動詞が、完結形をはじめとするいくつかの活用形を欠いており、コピュラ文におけるコピュラ動詞とは異なる活用のパラダイムを有しているということも、形態的な違いとして指摘することができるだろう。

8.6.2.3 意味的な違い

意味上の違いは、まず、コピュラ動詞が *cha-*「未来」でマークされる場合にみられる。*cha-*「未来」でマークされた複合時制構文のコピュラ動詞は、未来を表さない。そのことは、(8-72) に示す通り、過去の時点を表す時間副詞 *juzi*「先日」と共起できることから分かる。仮に *cha-*「未来」でマークされたコピュラ動詞が、未来を表すのであれば、過去の時点を表す表現とは共起できないはずである。

(8-72) *ka-cha-wa* *ka-malizi* *kazi* *yake* *juzi*
 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM-finish.PFV work (CL9) his.CL9 the_other_day
 「彼はおそらく、先日仕事を終えただろう」

こうした例から、複合時制構文の、*cha-*でマークされたコピュラ動詞は、未来ではなく、「おそらく～だろう」と訳すことができるようなモダリティ標識として機能していると考えられる。次の (8-73) には、その主張を支持する別の例を挙げる。(8-73a) では、*cha-*でマークされたコピュラ動詞の直後に属性を表すコピュラ補語が現われている一方、(8-73b) では、*cha-*でマークされたコピュラ動詞の直後に、更にコピュラ動詞の完結形が現われていることに着目されたい。

(8-73) a. *N-cha-wa mwalimu*

1SG.SM-FUT-COP teacher

「私は教師になるだろう」

b. **N-cha-wa nyi-wa mwalimu*

1SG.SM-FUT-COP 1SG.SM-COP.PFV teacher

「私はおそらく教師だろう」

(8-73b) が容認されないのは、複合時制構文において、*cha-*でマークされたコピュラ動詞が、「おそらく～だろう」と訳すことができるようなモダリティ標識として機能していることに起因していると考えられる。*cha-*でマークされたコピュラ動詞の機能をこのように仮定して、(8-73b) が、「私がおそらく教師だろう」という意味で解釈されていると推測した場合、現実に関自分が教師であることが不確かであるような状況というのは、想定しにくいために、この例は容認されなかったと考えることができる。(8-73b) は、主語を3人称単数に変えると容認されるようになるが、この事実も、*cha-*でマークされたコピュラ動詞がモダリティ標識であるという分析を指示する。第三者が教師であるかが不確かな状況というのは、十分に起こりうるものである。

hu-「習慣」でマークされたコピュラ動詞も、コピュラ文と複合時制構文で、機能が異なる。まず、(8-74) に示す通り、*hu-*でマークされたコピュラ動詞がコピュラ文で用いられる場合は、習慣が表される。

(8-74) *pandu hu-wa nyumba-ni wakati ja=uno*

PN HAB-COP house-LOC time (CL3) like=DEM.PROX.CL3

「パンドゥはこれくらいの時間に家にいる」(コピュラ文)

しかしながら、複合時制構文で用いられる場合、*hu-*でマークされたコピュラ動詞は、「おそらく」というモダリティを表す (Racine-Issa 2002: 110, 205)。そのことを示すデータは、筆者の調査でも得られている、例えば、筆者のインフォーマントによれば、(8-75)のように *hu-*「習慣」でマークされたコピュラ動詞を用いるのは、この話し手が、「彼が書き方を知っている」という事実に関確信が持てない場合であるとされる。

(8-75) *hu-wa ka-v-ijua kw-andika*

HAB-COP 3SG.SM-CL8.OM-know.PFV INF-write

「彼はおそらく書き方を知っている」(複合時制構文)

8.7 8章のまとめ

本章では、コピュラ動詞とコピュラ文の記述を行った。マクンドゥチ方言のコピュラ動詞の形態的特徴に関しては、既に記述がなされているが、具体的にどのような点で、他の動詞と異なるのか、あるいは、過去形や継続形がなぜコピュラ動詞として分析可能なのかということについては、これまで論証されてこなかった。

また、本章では、コピュラ補語の意味的な特性に応じたコピュラ文の使い分けの記述も行った。こうした視点からの分析は、コピュラの記述の際に必要なとされるもののひとつだが (cf. Dixon 2010b: 170–177)、筆者の知る限り、これまでのところ、スワヒリ語他変種や他のバントゥ諸語の記述研究において、ほとんど考慮されていない。本章で提示した、コピュラ補語の意味的な特性に応じた場合分けは、他のバントゥ諸語のコピュラ文、あるいはコピュラ動詞の記述にとっても有効なものとなるだろう。こうした視点から得られたデータは、本章で提示した通り、通時的なコピュラの機能の変化を探る上でも有効なものとなる。

コピュラ動詞が、複合時制構文で TAM に関する情報を標示するためにも用いられるということも、特筆すべき点として指摘できる。複合時制構文におけるコピュラ動詞は、コピュラ文におけるコピュラ動詞と、形態的にも、統語的にも、意味的にも異なる特徴をもつ。本論文では、複合時制構文におけるコピュラ動詞を助動詞に分類しているが、コピュラ文におけるコピュラ動詞と、複合時制構文におけるコピュラ動詞の間にみられる違いは、これらが、異なる語類をなしていると分析する根拠として挙げるができるだろう。

9章 統語機能と語順

本章の目的は、節中の名詞句の統語機能を同定すること、倒置構文と呼ばれる特異な統語現象の詳細な記述を行うこと、そして主語、述語、目的語はどのような語順で現れるのかを示すことにある。

議論に入る前に、マクンドゥチ方言において、主語や目的語がどのような性質のものであるかを簡単に説明する。まず、動詞活用形中の主語接頭辞と一致する名詞句を主語と呼ぶことにすると、主語の典型的な特徴は以下のようにまとめることができる。

(9-1) 主語の特徴

- a. 主語接頭辞と一致する。
- b. 対応する受動文において¹⁴⁴、行為者標識 *nyi=* でマークされる¹⁴⁵。
- c. 対応する倒置構文で降格して述語の直後に現れる。
- d. 述語の前に現れやすい。
- e. 主語関係節接頭辞 *m-* でマークされた関係節の先行詞となる (1 クラス名詞のみ)¹⁴⁶。
- f. 再帰接頭辞と同一の指示対象を指す¹⁴⁷。

節中に現れる主語以外の形態的に無標の名詞句は、以下の (9-2a, b) の特徴をもつか否かで分類することができる。多くの場合、(9-2a) の特徴をもつ名詞句は (9-2b) の特徴ももつ。本論文ではこれら二つの特徴のうち、どちらか一方をもつものを目的語と呼ぶことにする¹⁴⁸。なお、(9-2c) は一部の目的語にみられる特徴である。

¹⁴⁴ ある文中の動詞と派生関係にあると考えられる受動動詞を用いた文を「対応する受動文」と呼ぶことにする。

¹⁴⁵ 行為者標識 *nyi=* には、*N=* という異形態もある。母音の前では、*nyi=* となるが、半母音を除く子音の前では、どちらの異形態も現れうる (4.1.4.1 節参照)。

¹⁴⁶ 10.1.1 節参照。

¹⁴⁷ 4.1.4.3 節参照。

¹⁴⁸ Hyman & Duranti (1982: 220) はバントゥ諸語において、目的語を同定するテストとして以下の三つを挙げている：(a) 動詞の直後に現れうる、(b) 受動文の主語となる、(c) 目的語接辞で標示可能である。本論文では、目的語を同定する基準として、このなかの (b) と (c) を用いている。本文中でも述べるが、(b) と (c) から目的語とみなされない名詞句でも、(a) は満たすものがある。

(9-2) 目的語の特徴

- a. 目的語接頭辞と一致することがある。
- b. 対応する受動文で主語となる。
- c. 対応する倒置構文で主語となる（一部の目的語のみ）。
- d. 述語の後に現れやすい。

本章で主に議論するのは、このうち、(9-1a, b, c, d) (9-2a, b, c, d) についてである。まず、9.1 節で、名詞句と動詞の一致や、対応する受動文のふるまいをみながら、名詞句の統語機能を記述する。9.2 節では、「倒置構文」と呼ばれる特殊な構文の記述を行う。9.3 節では、主語、目的語、述語からなる文の語順について説明する。

9.1 統語機能と統語現象

9.1.1 主語接頭辞と目的語接頭辞との一致の基本的な性格

動詞は、一部の活用形を除いて、主語名詞句との一致を示す主語接頭辞と、目的語名詞句との一致を示す目的語接頭辞でマークされる（4.1.4 節参照）。どちらも、主語、もしくは目的語の人称や名詞クラスに応じて異なる形となる。(9-3) では、TAM 接頭辞 *cha-*「未来」の前に、主語 *fatuma*「ファトマ（人名）」と一致する3人称単数の主語接頭辞 *ka-*が現れている。また語幹 *-bika*「料理する」の前には、3クラス名詞の目的語 *mchuzi*「スープ」と一致する3クラスの目的語接頭辞 *u-*が現れている。

(9-3) *fatuma ka-cha-u-bika mchuzi*
PN(CL1) 3SG.SM-FUT-CL3.OM-cook soup (CL3)
「ファトマ（人名）はスープを作るだろう」

次の例に示す通り、主語接頭辞や目的語接頭辞があれば、明示的な主語や目的語がなくても、文は成立しうる。(9-4) の *ka-nyi-uzu*「彼は私に尋ねた」や、(9-5) の *ku-i-fuguu*「あなたそれ開けた」に現れる主語接頭辞や目的語接頭辞と一致する名詞句は、文中に現れていない。

(9-4) *jana ka-nyi-uzu kwa=nini majimwi wa-na-choea kimji*
 yesterday 3SG.SM-1SG.OM-ask of.CL15=what genies (CL2) 3PL.SM-IPFV-speak town_dialect
 「昨日、彼はなぜ鬼たちは街の言葉でしゃべるのかと私に尋ねたんだよ」

(9-5) *ku-i-fuguu*

2SG.SM-CL9.OM-open.PFV

「それを開けた？（レコーダー（9クラス）のスイッチを入れた？）」

なお、バントゥ系言語のなかには、動詞が同時に複数の目的語接頭辞でマークされる言語もあるが (cf. Kimenyi 1980, Moshi 1998)、マクンドゥチ方言では、目的語が二つある場合でも、二つの目的語と一致する目的語接頭辞が動詞活用形中に同時に現れることはない。

9.1.2 一致と受動文の関係について

多くの場合、主語接頭辞と一致する項は、対応する受動文で行為者標識 *nyi=* でマークされ、目的語接頭辞と一致する項は、対応する受動文で主語接頭辞と一致する。以下の二つの例はそのことを示している。能動文 (9-6a) の主語 *juma* 「ジュマ (人名)」は、対応する受動文 (9-6b) で *nyi=* でマークされている。また、(9-6a) の目的語 *asani* 「アサニ (人名)」は、対応する受動文 (9-6b) で主語となっている。

(9-6) a. *juma ka-m-pigi asani*
 PN (CL1) 3SG.SM-3SG.OM-hit.PFV PN (CL1)
 「ジュマ (人名) はハッサンを殴った」

b. *asani ka-pigwa nyi=juma*
 PN (CL1) 3SG.SM-hit.PASS.PFV by=PN (CL1)
 「アサニは、ジュマによって殴られた」

(9-7a) では、(9-6a) と異なり、無生物を指示対象とする名詞 *mchuzi* 「スープ (3クラス)」が目的語となっている。(9-7b) に示す通り、無生物目的語も、対応する受動文で主語となる。

(9-7) a. *fatuma ka-cha-u-βika mchuzi*
 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-CL3.OM-cook soup (CL3)

「ファトマはスープを料理するだろう」

b. *mchuzi u-cha-βikwa N=fatuma*
 soup (CL3) CL3.SM-FUT-cook.PASS by=PN (CL1)

「スープはファトマによって料理されるだろう」

9.1.3 場所を表す名詞句の目的語らしさ

場所を表す名詞句は、15, 16, 18 クラスの目的語接頭辞と一致することができ、対応する受動文では主語となる。(9-8a) では、*-ja*「来る」が16クラスの指示詞 *βano*「ここ」と一致する16クラスの目的語接頭辞 *βa-*でマークされている。また、(9-8b) では、*-ja*に対応する受動動詞 *-jwa* が用いられているが、この動詞の主語は16クラスの指示詞近称の *βano* である。

(9-8) a. *βano juma ka-cha-βa-ja*
 DEM.PROX.CL16 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-CL16.OM-come
 「ここに、ジュマは来るだろう」(目的語接頭辞との一致)

b. *βano βa-cha-kujwa N=juma*
 DEM.PROX.CL16 CL16.SM-FUT-come.PASS by=PN (CL1)
 「ここはジュマに来られるだろう」(受動文)

この一致は、移動を表す動詞や姿勢を表す動詞のような場所を表す表現と共起しやすい動詞だけでなく、場所を表す表現を必須としないような動詞でも生じうる。以下の (9-9) (9-10) は移動動詞、(9-11) は姿勢動詞、(9-12) はそれ以外の動詞の例である。

(9-9) a. *mji-ni juma ka-ku-fiki=ko*
 town-LOC (CL15) PN (CL1) 3SG.SM-CL15.OM-arrive.PFV=DEM.MED.CL15
 「街に、ジュマは着いた」(目的語接頭辞との一致)

b. *mji-ni ku-fikwa N=juma*
 town-LOC (CL15) CL15.SM-arrive.PASS.PFV by=PN (CL1)
 「街は、ジュマによって着かれた」(受動文)

- (9-10) a. *sanduku-ni ch^hindi ka-m-ngii*
 box-LOC (CL18) squirrel (CL1) 3SG.SM-CL18.OM-go_in.PFV
 「箱の中に、リスは入った」(目的語接頭辞との一致)
- b. *sanduku-ni m-ngiwa N=ch^hindi*
 box-LOC (CL18) CL18.SM-go_in.PASS.PFV by=squirrel (CL1)
 「箱は、リスによって入られた」(受動文)¹⁴⁹
- (9-11) a. *kulya k-evu ka-ku-kaa*
 DEM.DIST.CL15 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-CL15.OM- take_a_seat.PFV
 「あそこに、彼は座っていた」(目的語接頭辞との一致)
- b. *βano β-evu βa-kaligwa N=nani*
 DEM.PROX.CL16 CL16.SM-COP.PST CL16.SM-take_a_seat.PASS.PFV by=who
 「ここは誰によって座られていたの？」(受動文)
- (9-12) a. *fatuma ka-cha-βa-βika mchuzi aβo jiko-ni*
 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-CL16.OM-cook soup (CL3) DEM.MED.CL16 kitchen-LOC (CL16)
 「ファトマはその台所でスープを料理するだろう」(目的語接頭辞との一致)
- b. *aβo jiko-ni βa-cha-βikwa mchuzi N=fatuma*
 DEM.MED.CL16 kitchen-LOC(CL16) CL16.SM-FUT-cook.PASS soup (CL3) by=PN (CL1)
 「その台所は、ファトマによってスープが料理されるだろう」(受動文)

目的語接頭辞との一致と、対応する受動文で主語となるという特徴を見ると、場所を表す名詞句は、目的語と呼ぶに値する統語的特徴を有しているといえる。

ただし、場所を表す名詞句と目的語接頭辞との一致は、容認こそされるものの、自然発話ではほとんど観察されない。また、筆者のインフォーマントによれば、(9-13) では、目的語接頭辞がある場合、その行為が主語の指示対象の意思に反して行われることが含

¹⁴⁹ 所格接尾辞の *-ni* でマークされた名詞は、*-ni* なしでも受動文の主語となりうる。同じことは、後述する倒置構文にも当てはまる。次の例では、(9-10b) と同様に *sanduku* 「箱」が、受動文の主語となっているが、*-ni* でマークされず、動詞の主語接頭辞も場所の 18 クラスではなく、*sanduku* に対応する 5 クラスのものとなっている。

例: *sanduku li-ngiwa N=ch^hindi*
 box (CL5) CL5.SM-go_in.PASS.PFV by=squirrel
 「箱は、リスによって入られた」

意されるとのことである。本論文ではこの点について、これ以上追究しないが、こうした含意があることも踏まえると、場所を表す名詞句と目的語接頭辞との一致と、それ以外の目的語と目的語接頭辞の一致は、異なる性質を有したものであると考えられる。

(9-13) a. *fatuma ka-cha-lala βano*
 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-fall_asleep DEM.PROX.CL16
 「ファトマはここで寝るだろう」(目的語接頭辞なし)

b. *βano ka-cha-βa-lala fatuma*
 DEM.PROX.CL16 3SG.SM-FUT-CL16.OM-fall_asleep PN (CL1)
 「ここではファトマが (いやいやながら) 寝るだろう」(目的語接頭辞あり)

9.1.4 二つの目的語の対称性

バントゥ系言語の中には、複他動詞の二つの目的語が、同じ統語的特徴をもち対称的なふるまいをみせる言語と、異なる統語的特徴をもち非対称的なふるまいをみせる言語がある (Bresnan & Moshi 1990¹⁵⁰)。目的語接頭辞との一致や、対応する受動文で主語となるかを基準に調べてみると、マクンドゥチ方言の複他動詞の二つの目的語は、目的語の意味役割や動詞によって、対称的な場合と非対称的な場合があることが分かる。

9.1.4.1 一次目的語と二次目的語

授受、受益、使役を表す動詞は、対象に加えて、受取手、受益者、被使役者をそれぞれ目的語としてとることができるが、この二つの目的語は、動詞との一致を示すかが異なる。動詞は、受取手、受益者、被使役者を表す名詞句との義務的に一致する一方、対象を表す名詞句と一致することができない。

(9-14) は授受を表す動詞-*kʰa*「与える」を用いた例である。(9-14a) に示す通り、動詞は受取手 *fatuma*「ファトマ (人名)」と一致する目的語接頭辞 *m-* でマークされるが、(9-14b) に示す通り、*pesa*「お金 (10 クラス)」と一致する目的語接頭辞 *zi-* でマークされることはない。

¹⁵⁰ Bresnan & Moshi (1990) は、一致を示す目的語接頭辞で動詞がマークされるかや、対応する受動文で主語となるかに加えて、動詞が受益者と非特定のな対象を目的語とするときに、非特定のな対象を表す目的語を省略できるかや、動詞が「相互」と「適用」の派生接尾辞でマークされた際に、対象を表す名詞句が主語となり、受益者や道具を表す名詞句が目的語となるかを、目的語の対称性を測るテストとして挙げている。

(9-14) a. *juma ka-m-k^ha pesa fatuma*
 PN (CL1) 3SG.SM-3SG.OM-give.PFV money (CL10) PN (CL1)

b. **juma ka-zi-k^ha pesa fatuma*
 PN (CL1) 3SG.SM-CL10.OM-give.PFV money (CL10) PN (CL1)

「ジュマはファトマに金を与えた」

(9-15) は受益を表す適用動詞-*βikia*「料理する」を用いた例、(9-16) は使役動詞-*imbisha*「歌わせる」を用いた例である。それぞれ、a.で、受益者 *juma*「ジュマ (人名)」、被使役者 *mwanangu*「私の子供 (1 クラス)」を表す項と目的語接頭辞が一致することを、b.で、対象を表す項 *mchuzi*「スープ (3 クラス)」、*nyimbo*「歌 (10 クラス)」と目的語接頭辞が一致しないことを示している。

(9-15) a. *fatuma ka-cha-m-βikia mchuzi juma*
 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-3SG.OM-cook.APPL soup (CL3) PN (CL1)

b. **fatuma ka-cha-u-βikia mchuzi juma*
 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-CL3.OM-cook.APPL soup (CL3) PN (CL1)

「ファトマ (人名) はジュマ (人名) にスープを料理してやるだろう」

(9-16) a. *na-mw-imbisha nyimbo mwanangu*
 IPFV:1SG.SM-3SG.OM-sing.CAUS songs (CL10) child:my (CL1)

b. **na-z-imbisha nyimbo mwanangu*
 IPFV:1SG.SM-CL10.OM-sing.CAUS songs (CL10) child:my (CL1)

「私は自分の子供に歌を歌わせる」

上記の通り、これらの動詞の対象を表す目的語は、目的語接頭辞と一致することができないが、対応する受動文の主語にはなる。次の例でそのことを示す。(9-17) は、-*k^ha*「与える」の受動動詞-*k^hwa*を用いた例で、(9-14) に対応している。

(9-17) a. *fatuma ka-k^hwa pesa nyi=juma*
 PN (CL1) 3SG.SM-give.PASS.PFV money (CL10) by=PN (CL1)

「ファトマはジュマに金を与えられた」

b. *?pesa zi-k^hwa fatuma nyi=juma*
 money (CL10) CL10.SM-give.PASS.PFV PN (CL1) by=PN (CL1)

「お金はジュマによってファトマに与えられた」

(9-17a) は、受取手の *fatuma* 「ファトマ」が受動文の主語となる例、(9-17b) は、対象の *pesa* 「お金」が受動文の主語となる例である。なお、(9-17b) は、同一の話者を対象にした調査であっても、調査時期によって容認されるかどうか異なるため、“?”を付している。

(9-18) には、受益を表す適用動詞-*βikia* 「料理する」に対応する受動動詞-*βikiwa* を用いた例を、(9-19) には使役動詞-*imbisha* 「歌わせる」に対応する受動動詞-*imbishwa* 「歌わせられる」を用いた例を提示する。それぞれ、a.では受益者や被使役者を表す名詞句が主語となり、b.では対象を表す名詞句が受動文の主語となっている。なお、受益を表す適用動詞や、使役動詞の対象を表す名詞句を主語とする受動文も、調査時期によって容認されることとされないことがある。

(9-18) a. *juma ka-cha-βikiwa mchuzi nyi=fatuma*
 PN (CL1) 3SG.SM-FUT-cook.APPL.PASS soup (CL3) by=PN (CL1)
 「ジュマはファトマにスープを料理してもらおうだろう」

b. ?*mchuzi u-cha-βikiwa juma nyi=fatuma*
 soup (CL3) CL3.SM-FUT-cook.APPL.PASS PN (CL1) by=PN
 「スープはファトマによってジュマに料理されるだろう」

(9-19) a. *mwanangu ka-na-kwimbishwa nyimbo nyi=mie*
 child:my (CL1) 3SG.SM-IPFV-sing.CAUS.PASS songs (CL10) by=1SG.PRO
 「私の子供は、私に歌を歌わされる」

b. ?*nyimbo zi-na-kwimbishwa mwanangu nyi=mie*
 songs (CL10) CL10.SM-IPFV-sing.CAUS.PASS child:my (CL1) by=1SG.PRO
 「歌は、私によって私の子供に歌われる」

目的語接頭辞と一致することができ、対応する受動文の主語となる名詞句を、典型的な目的語とみなした場合、授受、受益、使役を表す動詞の対象を表す目的語は、この典型から外れていることになる。

Dryer (1986) は、複他動詞の対象を表す名詞句を直接目的語、受取手や受益者を表す名詞句を間接目的語とみなした場合、直接目的語ではなく間接目的語が他動詞の目的語と同じ統語的特徴をもつタイプの言語が、通言語的にみられることを指摘している。こうしたタイプの言語における他動詞の目的語と複他動詞の間接目的語は一次目的語 (Primary Object)、複他動詞の直接目的語は二次目的語 (Secondary Object) と呼ばれる。

動詞との一致や、対応する受動文で主語となるかを見た場合、一次目的語の方が、より目的語らしいふるまいをみせる。

目的語接頭辞との一致や、対応する受動文において主語となりやすいかに着目して、授受や受益を表す動詞の二つの目的語を観察してみると、複他動詞の直接目的語ではなく間接目的語が、他動詞の目的語と同じ統語的特徴を有していることから、マクンドゥチ方言でも、一次目的語と二次目的語が統語的に区別されているといえる。また、マクンドゥチ方言では、同様の区別が、授受や受益を表す動詞だけでなく、使役を表す動詞でもなされているということになる¹⁵¹。

なお、バントゥ諸語において、目的語を同定するテストの一つとして動詞の直後に現れうるかがあげられることもあるが (Hyman & Duranti (1982: 220)、マクンドゥチ方言の一次目的語 (間接目的語) と二次目的語 (直接目的語) は、どちらも動詞の直後に現れることができる。(9-20a) では、二次目的語の *pesa* 「お金」が動詞-*kʰa* 「与える」の直後に現れている。また、(9-20b) では、一次目的語の *fatuma* 「ファトマ」が動詞の直後に現れている。

- (9-20) a. *juma ka-m-kʰa pesa fatuma*
 PN (CL1) 3SG.SM-3SG.OM-give.PFV money (CL10) PN (CL1)
- b. *juma ka-m-kʰa fatuma pesa*
 PN (CL1) 3SG.SM-CL10.OM-give.PFV PN (CL1) money (CL10)
- 「ジュマはファトマに金を与えた」

¹⁵¹ 上述の通り、二次目的語が対応する受動文で主語となるかには、揺れがみられる。Dryer (1986: 833–834) は、英語でも同様の揺れが個人間でみられることを指摘したうえで、その揺れが、一次目的語のみを受動文の主語とすることができるのか、目的語を受動文の主語とすることができるのかというパラメータの違いに起因するものであると説明している。

9.1.4.2 対称的な二つの目的語

動詞が二つの目的語をとる場合、その二つが、対称的な統語的特徴をもつこともある。まず、以下に適用動詞を用いた例を提示する。

- (9-21) a. *juma ka-i-kat^hii kamba kisu kino*
 PN (CL1) 3SG.SM-CL9.OM-cut.APPL.PFV rope (CL9) knife (CL7) DEM.PROX.CL7
 b. *juma kisu kino ka-ki-kat^hii kamba*
 PN (CL1) knife (CL7) DEM.PROX.CL7 3SG.SM-CL7.OM-cut.APPL rope (CL9)
 c. *juma ka-kat^hii kamba kisu kino*
 PN (CL1) 3SG.SM-cut.APPL.PFV rope (CL9) knife (CL7) DEM.PROX.CL7
 「ジュマ (人名) はこのナイフでロープを切った」

(9-21) は、適用動詞を用いた例だが、受益者と対象ではなく、道具を表す名詞句 *kisu kino* 「このナイフ (7 クラス)」と、対象を表す名詞 *kamba* 「ロープ (9 クラス)」が目的語となっている。(9-15) で示した通り、適用動詞が受益者と対象を目的語とする場合、目的語接頭辞と一致するのは、受益者に限られるが、(9-21) に示す通り、適用動詞が道具と対象を目的語とする場合、どちらも目的語接頭辞と一致することができる。(9-21a) は、適用動詞-*kat^hia* 「切る」が *kamba* 「ロープ」と一致する目的語接頭辞でマークされることを、(9-21b) は、-*kat^hia* 「切る」が *kisu kino* 「このナイフ」と一致する目的語接頭辞でマークされることを示している。なお、(9-21c) に示す通り、動詞が目的語接頭辞でマークされないこともある。

(9-22) は、(9-21) に対応する受動文の例である。この例に示す通り、適用動詞-*kat^hia* 「切る」の二つの目的語 *kisu kino* 「このナイフ」と、*kamba* 「ロープ」は、対応する受動文の主語となることができる。(9-22a) では道具 *kisu kino* 「このナイフ」が、(9-22b) では対象 *kamba* 「ロープ」が、受動文の主語となっている。

- (9-22) a. *kisu kino ki-kat^hiwa kamba nyi=juma*
 knife (CL7) DEM.PROX.CL7 CL7.SM-cut.APPL.PFV rope (CL9) by=PN (CL1)
 「このナイフでは、ロープがジュマによって切られた」
 b. *kamba i-kat^hiwa kisu kino nyi=juma*
 rope (CL9) CL9.SM-cut.APPL.PASS.PFV knife (CL7) DEM.PROX.CL7 by=PN (CL1)
 「ロープはこのナイフでジュマによって切られた」

また、派生動詞以外で、対称的な統語的特徴をもつ二つの目的語をとる動詞も、一例だけだが、みつかっている。*-ongoa*「見せる」は受取手と対象を目的語とするが、どちらも目的語接頭辞と一致することができ、対応する受動文で主語となる。(9-23)では、対象 *picha*「写真」(9クラス)と受取手 *fatuma*「ファトマ(人名)」が*-ongoa*の目的語となっている。(9-23a)で、動詞は *fatuma* と一致する1クラスの目的語接頭辞でマークされている。それに対して、(9-23b)で、動詞をマークしているのは、*picha* との一致を示す9クラスの目的語接頭辞である。

- (9-23) a. *juma ka-na-mu-ongoa picha fatuma*
 PN (CL1) 3SG.SM-IPFV-3SG.OM-show photo (CL9) PN (CL1)
 b. *juma ka-na-i-ongoa picha fatuma*
 PN (CL1) 3SG.SM-IPFV-CL9.OM-show photo (CL9) PN (CL1)
 「ジュマ(人名)はファトマ(人名)に写真を見せている」

(9-24) は*-ongoa*に対応する受動動詞*-ongolwa*を用いた例である。(9-24a)では受取手である *fatuma*「ファトマ」が、(9-24b)では対象の *picha*「写真」が主語となっている。

- (9-24) a. *fatuma ka-na-ongolwa picha N=juma*
 PN 3SG.SM-IPFV-show.PASS photo (CL9) by=PN (CL1)
 「ファトマは写真をジュマに見せられている」(受動文)
 b. *picha i-na-ongolwa fatuma N=juma*
 photo (CL9) CL9.SM-IPFV-show.PASS PN by=PN (CL1)
 「写真はファトマにジュマによって見せられている」(受動文)

9.1.5 非典型的な目的語

前節で、二次目的語が動詞と一致しないことを述べたが、動詞と一致することのない目的語は他にもある。また、逆に動詞と一致はするものの、対応する受動文で主語となることのない目的語もある。

9.1.5.1 動詞と一致しない目的語

「くしゃみをする」「あくびをする」「しゃっくりをする」は、*-enda*「行く」と、*chafya*「くしゃみ」、*miayu*「あくび」、*kwikwi*「しゃっくり」を組み合わせられて表される。この

chafya, miayu, kwikwi は、対応する受動文の主語となることはできるが、目的語接頭辞と一致することはできない。(9-25) は *chafya* 「くしゃみ (9 クラス)」を用いた例である。(9-25a, b) から、*chafya* と一致する目的語接頭辞で動詞がマークされないことが分かる。また、(9-25c) は、*chafya* が対応する受動文で主語となることを示している。

- (9-25) a. *juma k-ende chafya*
 PN (CL1) 3SG.SM-go.PFV sneeze (CL9)
- b. **juma k-y-ende chafya*
 PN (CL1) 3SG.SM-CL9.OM-go.PFV sneeze (CL9)
 「ジュマは、くしゃみをした」
- c. *chafya y-endwa N=juma*
 sneeze (CL9) CL9.SM-go.PASS.PFV by=PN (CL1)
 「くしゃみは、ジュマによってなされた」

なお、*chafya, miayu, kwikwi* が、受動文の主語となる場合、その行為を行った人が他にもいるが、ひときわ目立つのが、*nyi=*によってマークされた名詞の指示対象によって行われたものであるという解釈がなされる。こうした解釈は、後述する通り、倒置構文でこれらが主語となる場合にもなされる (9.2 節参照)。

9.1.5.2 受動文の主語とならない目的語

(9-26) に示す通り、身体部位や体内から排出されるものを表す名詞が主語となり、それらの所有者が目的語接頭辞と一致することがある。(9-26) では、所有物の *mguu* 「足」が主語となり、所有者の *juma* 「ジュマ (人名)」が目的語接頭辞と一致している。

- (9-26) *mguu u-m-vimbi juma*
 leg (CL3) CL3.SM-3SG.OM-swell.PFV PN (CL1)
 「ジュマ (人名) の足が腫れた」

(9-27) に示す通り、こうした「人」の状態文 (cf. 小森 1991) では、所有者を表す名詞句と動詞との一致が義務的に生じる。(9-27a) では、*damu* 「血」が主語となり、その所有者の *juma* が目的語接頭辞と一致している。(9-27b) に示す通り、この目的語接頭辞を欠くことはできない。なお、(9-27c) に示す通り、所有者を表す名詞句が、属辞でマークされ所有物を表す名詞を修飾する場合、目的語接頭辞は現れない。

- (9-27) a. *damu i-m-lawa juma*
 blood (CL9) CL9.SM-3SG.OM-come_from.PFV PN (CL1)
- b. **damu i-lawa juma*
 blood (CL9) CL9.SM-come_from.PFV PN (CL1)
 「血がジュマから出た」
- c. *damu ya=juma i-lawa*
 blood (CL9) of.CL9=PN (CL1) CL9.SM-come_from.PFV
 「ジュマの血が出た」

次の (9-28a) では、*machozi* 「涙」が主語となり、その涙の所有者 *fatuma* 「ファトマ (人名)」との一致を示す目的語接頭辞によって動詞がマークされている。(9-28b) に示す通り、*fatuma* 「ファトマ」を主語とする (9-28a) に対応する受動文は容認されない¹⁵²。この例から、「人」の状態文で所有者を表す目的語は、目的語接頭辞と一致はするが、対応する受動文で主語とはならないことが分かる。

- (9-28) a. *machozi ya-m-kauku fatuma*
 tear (CL6) CL6.SM-3SG.SM-dry_up.PFV PN (CL1)
- b. **fatuma ka-kauku nyi=machoz*
 PN (CL1) 3SG.SM-dry_up.PASS.PFV by=tear (CL6)
- c. *fatuma ka-kauku machozi*
 PN (CL1) 3SG.SM-dry_up.PFV tear (CL6)
 「ファトマ (人名) の涙は乾いた」

ちなみに、この *fatuma* 「ファトマ」を主語とする「人」の状態文もあるが、そうした文では、(9-28c) に示す通り、動詞は元の形で現れる。こうした文において、(9-28c) の *machozi* 「涙」のような身体部位や体内からの排出物を表す名詞は動詞の直後に現れるが、この身体部位や体内からも排出物を表す名詞句は、目的語接頭辞と一致したり、受動文の主語とならず、目的語とみなすことができない。(9-29a) は、(9-28c) の *machozi* 「涙」が目的語接頭辞と一致しないことを、(9-29b) は、(9-28c) の *machozi* 「涙」が受動文の主語とならないことを示している。

¹⁵² 小森 (1991: 1, 8) によれば、スワヒリ語では、(9-28c) のように動詞が元の形で現れる文だけでなく、(9-28b) のような受動文も容認される。

- (9-29) a. **machozi ka-ya-kauku fatuma*
 tear (CL6) 3SG.SM-CL6.OM-dry_up.PFV PN (CL1)
- b. **machozi ya-kaukwa nyi=fatuma*
 tear (CL6) CL6.SM-dry_up.PASS.PFV by=PN (CL1)

本節でみた、「人」の状態文は、スワヒリ語にも存在しており、「人」の状態文に現れる身体部位や身体から排出されるものは、「譲渡不可能な所有物」と言われる (小森 1991: 10)。本論文では、(9-28c) のような構造の「人」の状態文に現れる主語とも目的語ともならない名詞句を「譲渡不可能名詞 1」と呼ぶことにする。

9.1.6 主語、目的語以外の名詞句

前節で、譲渡不可能名詞 1 が、主語とも目的語ともならないことを述べたが、節中に現れる形態的に無標の名詞句の中には、他にも主語とも目的ともならないものが存在する。なお、後述する通り、倒置構文の元主語も、主語とも目的語ともならない名詞句の一つだが、倒置構文については節を分けて説明する。

9.1.6.1 譲渡不可能名詞 2

主語とも目的語ともならない譲渡不可能名詞は、(9-28c) とは異なる構造の文でも現れることがある。(9-30) に示す通り、節中の、主語以外の二つの形態的に無標の名詞句の指示対象が、所有者と所有物という関係をもって現れることがある。(9-30) の *juma* 「ジュマ (人名)」は、*mkono* 「腕」の所有者である。

- (9-30) *nyi-m-gwii mkono juma*
 1SG.SM-3SG.OM-hold.PFV arm (CL3) PN (CL1)
 「私は、ジュマ (人名) の腕をつかんだ」

(9-30) のような構造の文の所有者を表す名詞句は、目的語接頭辞と一致することも、受動文の主語となることもでき、目的語と分析することができる。一方、所有物を表す名詞句は、目的語接頭辞と一致することも、対応する受動文の主語となることもできない。(9-31) では、*mkono* 「腕 (3 クラス)」が所有物、*mwanak'ele* 「子供 (1 クラス)」が所有者となる。この二つが形態的に無標の形で現れた場合、動詞は、(9-31a) に示す通り、*mwanak'ele* 「子供」との一致を示す目的語接頭辞で義務的にマークされるが、(9-31b)

に示す通り、目的語接頭辞のスロットに *ṁkono* 「腕」との一致を示す接頭辞が現れることはない。

- (9-31) a. *nyi-ṁ-vunju* *ṁkono* *mwanak^hele*
 1SG.SM-3SG.OM-break.PFV arm (CL3) child (CL1)
 b. **nyi-u-vunju* *ṁkono* *mwanak^hele*
 1SG.SM-CL3.OM-break.PFV arm (CL3) child (CL1)
 「私は子供の腕を折った」

(9-32) は、(9-31) に対応する受動文の例である。(9-32a) の通り、*mwanak^hele* 「子供」は対応する受動文の主語となるが、(9-32b) の通り、*ṁkono* 「腕」は受動文の主語となることができない。

- (9-32) a. *mwanak^hele ka-vunjwa* *ṁkono* *N=mie*
 child (CL1) 3SG.SM-break.PASS.PFV hand(CL3) by=1SG.PRO
 「子供は私に腕を折られた」
 b. **ṁkono u-vunjwa* *mwanak^hele N=mie*
 hand(CL3) CL3.SM-break.PASS.PFV child (CL1) by=1SG.PRO
 「子供の腕は私に折られた」

ちなみに、所有者を表す名詞句が属辞を介して所有物を表す名詞を修飾する際は、所有物を表す名詞が目的語接頭辞と一致することも、受動文の主語となることもできる。(9-33a) は、属辞でマークされた *mwanak^hele* 「子供」によって修飾された *ṁkono* 「腕」が目的語接頭辞と一致することを、(9-33b) は、同じ名詞句が対応する受動文の主語となることを示している。

- (9-33) a. *nyi-u-vunju* *ṁkono* *wa=mwanak^hele*
 1SG.SM-CL3.OM-break.PFV hand(CL3) of.CL3=child (CL1)
 「私は子供の腕を折った」
 b. *ṁkono wa=mwanak^hele u-vunjwa* *N=mie*
 hand(CL3) of.CL3=child (CL1) CL3.SM-break.PASS.PFV by=1SG.PRO
 「子供の腕は私によって折られた」

本論文では、(9-30) のような構造の文に現れる、所有物を表す、主語でも目的語でもない名詞句のことを「譲渡不可能名詞 2」と呼ぶことにする¹⁵³。

(9-34) に示す通り、述語のあとに現れるのであれば、所有物と所有者の語順は入れ替え可能であるが¹⁵⁴、(9-35a) に示す通り、この構造の所有物は述語の前に現れることができない。なお、所有者を表す名詞は、(9-35b) に示す通り、述語の前に現れることができる。

- (9-34) a. *nyi-m-gwii* *ṁkono* *juma*
 1SG.SM-3SG.OM-hold.PFV hand (CL3) PN (CL1)
 b. *nyi-m-gwii* *juma* *ṁkono*
 1SG.SM-3SG.OM-hold.PFV PN (CL1) hand (CL3)
 「私は、ジュマの手をつかんだ」

- (9-35) a. **ṁkono* *nyi-m-vunju* *mwanak^hele*
 hand (CL3) 1SG.SM-3SG.OM-break.PFV child (CL1)
 b. *mwanak^hele* *nyi-m-vunju* *ṁkono*
 child (CL1) 1SG.SM-3SG.OM-break.PFV hand (CL3)
 「子供の腕を私は折った」

9.1.6.2 付加語

節中に現れる名詞句の中には、上述の譲渡不可能名詞以外にも、主語接頭辞・目的語接頭辞と一致せず、受動文で主語となることもないものがある。(9-36a) では、*pesa zino* 「この金」という対価を表す名詞句が現れている。この名詞句は、目的語接頭辞と一致したり、受動文の主語となることはない。(9-36b) は *pesa zino* 「この金」が目的語接頭辞と一致しないことを、(9-36c) は *pesa zino* 「この金」が対応する受動文の主語にならないことを示している。

¹⁵³ 体に接しているものであれば、身体部位以外でも、譲渡不可能名詞 2 になりうる。次の例では、現在 *juma* 「ジュマ」が身につけている *shati* 「シャツ」が譲渡不可能名詞 2 となっている。

例: *nyi-m-gwii* *shati* *juma*
 1SG.SM-3SG.OM-hold shirt PN
 「私はジュマのシャツをつかんだ」

¹⁵⁴ Hyman & Duranti (1982: 221) は、バントゥ系言語のハヤ語の譲渡不可能名詞 2 が述語の直後に現れないとしている。

- (9-36) a. *pesa zino ny-uzu gari yangu*
 money (CL10) DEM.PROX.CL10 1SG.SM-sell.PFV car (CL9) my.CL9
- b. **pesa zino N-z-uzu gari yangu*
 money (CL10) DEM.PROX.CL10 1SG.SM-CL10.OM-sell.PFV car (CL9) my.CL9
 「この金で、私は私の車を売った（車を売ってこの金を得た）」¹⁵⁵
- c. **pesa zino z-uzwa gari yangu nyi=mie*
 money (CL10) DEM.PROX.CL10 CL10.SM-sell.PASS.PFV car (CL9) my.CL9 by=1SG.PRO
 「車を売って、この金が私に得られた」

この *pesa zino* 「この金」は、譲渡不可能名詞 2 や、後述する倒置構文の元主語と異なり、生起できる位置に関する制限がない。(9-36a) では、*pesa zino* が述語の前に現れていたが、(9-37) は *pesa zino* が述語の後に現れている。

- (9-37) *ny-uzu gari yangu pesa zino*
 1SG.SM-sell.PFV car (CL9) my.CL9 money (CL10) DEM.PROX.CL10
 「私は、この金で私の車を売った」

本論文では、この *pesa zino* 「この金」のような名詞句のことを付加語と呼ぶ。(9-36) (9-37) の *pesa zino* 「この金」は、対価を表す名詞句だが、マクンドゥチ方言で他に、付加語とみなせそうな名詞句として、*-fwa* 「死ぬ」と共起して、死因を表すものが挙げられる。(9-38) では *kepu* 「スナノミ」が死因となっている。

- (9-38) *wat'u w-evu wa-ka-fwa kepu*
 people (CL2) 3PL.SM-COP.PST 3PL.SM-CONS-die tunga_penetrans
 「人々は、かつてスナノミで死んだ」

これらの付加語は、どちらも 15 クラスの属辞 *kwa=* でマークされて現れることもある。(9-39) は、*kwa=* でマークされた *pesa zino* 「この金」を用いた例、(9-40) は、*kwa=* でマークされた *kepu* 「スナノミ」を用いた例である。

¹⁵⁵ (9-36) (9-37) の日本語の対訳は、容認しない日本語母語話者もいるが、マクンドゥチ方言では、日本語訳の () 内に記した通りの解釈がなされる自然な文となる。なお、これと同じ内容のことは、*-uza* 「売る」の適用動詞 *-uzia* を用いても表すことができる。動詞が適用動詞となる場合、*pesa zino* 「この金」は目的語となり、目的語接頭辞と一致することも、対応する受動文の主語となることもできるようになる。

(9-39) *ny-uzu gari yangu kwa=pesa zino*
 1SG.SM-sell.PFV car (CL9) my.CL9 of.CL15=money(CL10) DEM.PROX.CL10
 「私は、この金で私の車を売った」

(9-40) *wat^{hu} w-evu wa-ka-fwa kwa=kepu*
 people 3PL.SM-COP.PST 3PL.SM-CONS-die of.CL15=tunga_penetrans
 「人々は、かつてスナノミで死んだ」

9.1.7 小括

ここまで、目的語接頭辞と一致するかや、対応する受動文で主語となるかを観察しながら、特に主語以外の名詞句が担う統語機能について記述をしてきた。無標の名詞句が担う統語機能は、主語、目的語、付加語に大別することができるが、目的語のなかには、典型からはずれたものも存在する。また、主語や目的語に分類されない名詞句も存在する。以下に、そうした非典型的な目的語や、語・目的語・付加語のいずれにもならないものを列挙する。なお、場所を表す名詞句については、目的語接頭辞との一致があまりみられないことや、目的語接頭辞との一致によって特殊な含意が生じることを考慮に入れて、非典型的な目的語としている。

(9-41) 非典型的な目的語

- a. 場所を表す名詞句
- b. 時間を表す名詞句
- c. 二次目的語（授受動詞、受益動詞、使役動詞の対象）
- d. *-enda* 「行く」と共起する生理現象を表す名詞

（例：*chafya*「くしゃみ」、*miayu*「あくび」、*kwikwi*「しゃっくり」）

- e. 「人」の状態文に現れる身体部位や体内からの排出物の所有者
 （身体部位や体内からの排出物が主語となる場合）

(9-42) 主語、目的語、付加語のいずれにもならないもの

- a. 譲渡不可能名詞 1
- b. 譲渡不可能名詞 2

9.2 倒置構文

ここまで、動詞との一致と、受動文におけるふるまいを中心に、節中の名詞句の統語機能についてみてきたが、本章の冒頭でも述べた通り、典型的な主語や目的語には、「倒置構文」で主語となる、あるいは「倒置構文」で降格して述語のあとに現れるといった特徴もある。以下では、この倒置構文について説明する。なお、本節では、例文の訳の横の（ ）内に、どのような目的語が倒置構文の主語となっているのかを示す。

9.2.1 倒置構文とは

バントゥ系言語の中には、動詞が受動動詞に派生することなく、目的語や場所を表す名詞句が主語になる「倒置構文」をもつ言語があるが (cf. Bearth 2003)、マクンドゥチ方言にも、この倒置構文が存在する。

まず、(9-43) は、他動詞-*βika*「料理する」の目的語 *vyakulya*「食べ物」が主語となる倒置構文の例である。この例に示す通り、倒置構文において、元の文の主語（この例では *fatuma*「ファトマ (人名)」) は、主語としてのステータスを失い、述語の後に現れる。

(9-43) *vyakulya vi-βiki fatuma*
food (CL8) CL8.SM-cook.PFV PN (CL1)

「食事はファトマ (人名) が料理した」(他動詞目的語: *vyakulya* 「食事」)

マクンドゥチ方言では、主に無生物目的語と、場所を表す名詞句や時間を表す名詞句が、対応する倒置構文で主語となる。授受動詞、受益動詞、使役動詞の対象を表す項 (二次目的語) は倒置構文の主語とならない。また、譲渡不可能名詞や付加語も、倒置構文で主語とならない。(9-44) は、適用動詞の対象を表す名詞句も、道具を表す名詞句も倒置構文の主語となりうることを示す例である。

(9-44) a. *kisu kino ki-kat^{hii} juma kamba*
knife (CL7) DEM.PROX.CL7 CL7.SM-cut.APPL.PFV PN (CL1) rope (CL9)

「このナイフで、ジュマがロープを切った」

(適用動詞の道具: *kisu kino* 「このナイフ」)

b. *kamba i-kat^{hii} juma kisu*
rope (CL9) CL9.SM-cut.APPL.PFV PN (CL1) knife (CL7)

「ロープは、ジュマがナイフで切った」(適用動詞の対象: *kamba* 「ロープ」)

(9-45) (9-46) (9-47) (9-48) は、場所を表す名詞句が主語となる倒置構文である。(9-45) (9-46) (9-47) は、他動詞目的語をとらない動詞を用いた例だが、(9-48) に示す通り、他の他動詞目的語をとる動詞でも、場所を主語とする倒置構文を形成することができる。

(9-45) *mji-ni* *kw-ende* *mt^hu*
town-LOC (CL15) CL15.SM-go.PFV person (CL1)
「街には、人が行った」(場所: *mji-ni* 「街に」)

(9-46) *sanduku-ni* *m-ngii* *ch^hindi*
box-LOC (CL18) CL18.SM-go_in.PFV squirrel (CL1)
「箱には、リスが入った」(場所: *sanduku-ni* 「箱に」)

(9-47) *βano* *βa-kaa* *juma*
DEM.PROX.CL16 CL16.SM-take_a_seat PN (CL1)
「ここには、ジュマが座っている」(場所: *βano* 「ここに」)

(9-48) *aβo* *jiko-ni* *βa-βiki* *vyakulya fatuma*
DEM.MED.CL16 kitchen-LOC (CL16) CL16.SM-cook.PFV food PN (CL1)
「その台所では、ファトマが料理した」(場所: *aβojiko-ni* 「その台所で」)

ここまで挙げたもの以外でも、以下のような目的語が倒置構文で主語となることが確認されている。まず、(9-49) は、*-enda* 「行く」と共起して生理現象を表す名詞句が主語となる倒置構文の例である。なお、(9-49) は、*chafya* 「くしゃみ」が受動文の主語となる場合と同様に、くしゃみを行った人が他にもいるが、ひときわ目立つくしゃみをしたのが、述語に後続する名詞句の指示対象という解釈がなされる (9.1.5.1 節参照)。

(9-49) *chafya* *y-ende* *juma*
sneeze (CL9) CL9.SM-go.PFV PN (CL1)
「くしゃみは、ジュマがした」(*chafya* 「くしゃみ」)

(9-50b) に示す通り、時間を表す名詞も倒置構文の主語となることができる。ただし、時間を表す名詞は、倒置構文の主語とする場合、指示詞をつけたほうが好ましいと判断される。なお、時間を表す表現は、(9-50c) の通り、受動文の主語となることもできるが、目的語接頭辞と一致できるかは未確認である。

(9-50) a. *wat^{hu}* *wengi* *wa-na-kuja* *ino* *siku* *ya=leo*
 people (CL2) many.CL2 3PL.SM-IPFV-come DEM.PROX.CL9 day (CL9) of.CL9=today
 「多くの人が、この今日という日に来た」(倒置されていない元の文)

b. *ino* *siku* *ya=leo* *i-na-kuja* *wat^{hu}* *wengi*
 DEM.PROX.CL9 day (CL9) of.CL9=today (CL9) CL9.SM-IPFV-come people (CL2) many.CL2

c. *ino* *siku* *ya=leo* *i-na-kujwa* *nyi=wat^{hu}* *wengi*
 DEM.PROX.CL9 day (CL9) of.CL9=today(CL9) CL9.SM-IPFV-come.PASS by=people (CL2) many. CL2
 「この今日という日は、多くの人に來られた」

(時: *ino siku ya=leo*「この今日という日」)

倒置構文は、倒置された名詞句の主題化を引き起こすともいわれる (Russell 1985)。本論文では、この問題をこれ以上追究しないが、倒置構文で *chafya* 「くしゃみ」が主語となる場合の解釈や、時間表現が倒置構文で主語となる際に指示詞とともに用いることが好まれることは、主題化と関連させて説明できるかもしれない。

なお、スワヒリ語の倒置構文の元主語は、不定であるとされるが (Krifka 1995: 1408)、上に人名を表す名詞が現れる例を挙げた通り、そうした一般化をマクンドゥチ方言に適用することはできない。ただし、主語が 1,2 人称となる文に対応する倒置構文は容認されにくい。

9.2.2 倒置構文の語順

倒置構文では、必ず述語の後に、対応する元の文の主語となる名詞句が現れる。この元主語を省略したり、別の位置に置いたり、元主語と述語の間に別の要素を挿入することはできない。(9-51a) は可能な例で、非倒置構文の主語 *juma* 「ジユマ (人名)」が、述語の後に現れている。(9-51b) は元主語を省略できないことを、(9-51c) は元主語が述語の前に置けないことを、(9-51d) は述語と後続する元主語の間に、場所を表す名詞句 *aβo jiko-ni* 「そこの台所で」を置けないことを示している。

- (9-51) a. *vyakulya vi-na-βika juma aβo jiko-ni*
 food (CL8) CL8.SM-IPFV-cook PN (CL1) DEM.MED.CL16 kitchen-LOC
 「食事は、その台所でジュマ (人名) が料理している」 (目的語: *vyakulya* 「食事」)
- b. **vyakulya vi-na-βika aβo jiko-ni*
 food (CL8) CL8.SM-IPFV-cook DEM.MED.CL16 kitchen-LOC
- c. **juma vi-na-βika vyakulya*
 PN (CL1) CL8.SM-IPFV-cook food (CL8)
- d. **vyakulya vi-na-βika aβo jiko-ni juma*
 food (CL8) CL8.SM-IPFV-cook DEM.MED.CL16 kitchen-LOC PN (CL1)

ただし、(9-52) に示す通り、無生物目的語と場所を表す名詞句を含む他動詞文に対応する倒置構文で、場所を表す名詞句が主語となる場合、元の文の無生物目的語は、動詞と元主語の間に現れることができる。(9-52) では、場所名詞句 *aβo jiko-ni* 「その台所で」が主語となり、元の文の目的語 *vyakulya* 「食事」が述語の直後に現れている。そして元主語の *juma* 「ジュマ」は、その *vyakulya* のあとに現れている。

- (9-52) *aβo jiko-ni βa-na-βika vyakulya juma*
 DEM.MED.CL16 kitchen-LOC (CL16) CL16.SM-IPFV-cook food (CL8) PN (CL1)
 「その台所では、ジュマが料理をしている」 (場所)

なお、倒置構文の主語 (主語接頭辞と一致する名詞句) は、節末に現れることもできる。(9-53) では、(9-51a) で述語の前に現れていた主語 *vyakulya* 「食事」が節末に現れている。

- (9-53) *vi-na-βika juma aβo jiko-ni vyakulya*
 CL8.SM-IPFV-cook PN (CL1) DEM.MED.CL16 kitchen-LOC food (CL8)
 「食事は、その台所でジュマが料理している」 (目的語: *vyakulya* 「食事」)

9.2.3 例外的な倒置構文

倒置構文で主語となるものは、基本的に対応する目的語としての統語的性質を備えたもの (場所名詞句を含む) だが、コピュラ動詞を用いた倒置構文と、所有を表す動詞-*na* を用いた倒置構文はこの一般化にあてはまらない。

まず、(9-54) にコピュラ動詞の倒置構文の例を挙げる。コピュラ動詞のあとに場所を表すコピュラ補語が後続することで、主語の指示対象の存在する場所が表されるが(8.4.6 節参照)、倒置が起きた場合、その場所を表す名詞句が主語となる。(9-54) では、場所を表す *kulya mwakani* 「あのお祭りで」が倒置され主語となっている。

(9-54) *kulya mwakani*¹⁵⁶ *kw-evu ku-wa wat^hu wengi kweli*
 DEM.DIST.CL15 festival (CL15) CL15.SM-COP CL15.SM-COP.PFV people (CL2) many.CL2 really
 「お祭りには、とても多くの人があった」(場所: *kulya mwakani* 「あそこお祭りに」)

次に、所有を表す動詞-*na* を用いた文の倒置について説明する。*-na* を用いて所有を表す場合、所有者を表す名詞が主語となり、所有物が-*na* の直後に現れるが、倒置構文では、所有物が主語となる。(9-55) はそのことを示す例である。所有物 *kisu kilya* 「あのナイフ」は、非倒置文の (9-55a) で-*na* の直後に現れているが、倒置構文の (9-55b) では、主語接頭辞と一致して主語となっている。

(9-55) a. *juma ka-na kisu kilya*
 PN (CL1) 3SG.SM-POSS knife (CL7) DEM.DIST.CL7
 「ジュマがあこのナイフをもっている」

b. *kisu kilya ki-na juma*
 knife (CL7) DEM.DIST.CL7 CL7.SM-POSS PN (CL1)
 「あのナイフはジュマがもっている」(所有物: *kisu kilya* 「あのナイフ」)

なお、所有を表す動詞-*na* は、15, 16, 18 クラスの主語接頭辞でマークされる場合、(9-56) に示す通り、-*na* に後続する名詞句の指示対象の存在を表す。

(9-56) *kajengwa ku-na nyumba nyingi*
 PN (CL15) CL15.SM-POSS houses (CL10) many.CL10
 「カジェングワには家がたくさんある」

この存在を表す所有文は、場所を表す名詞句が主語となるという点で、倒置構文に類似しているが、倒置構文とは考えられない。仮に、存在を表す所有文が倒置構文であると

¹⁵⁶ *mwakani* は、「来年」を意味するために用いられることも多いが、(9-55) では、年に一度行われる祭りを指している。

するならば、(9-55b) の通り、元の文で主語となる名詞句も現れるはずだが、(9-56) のような 15 クラスの主語接頭辞でマークされた-na を用いて存在を表す文では、元の文の主語にあたる名詞句が現れない。

9.3 主語・目的語・述語の語順

マクンドゥチ方言において、主語、目的語、述語の語順は固定的ではなく、いくつかの選択肢が存在する。(9-57) では、*pandu* 「パンドゥ (人名)」が主語、*peni* 「ペン」が目的語、*ka-na-chaka* 「欲する」が述語となるが、これらの主語、目的語、述語には、以下に示す通り、6 通りの語順があり得る。

- (9-57) a. *pandu ka-na-chaka peni*
 PN (CL1) 3SG.SM-IPFV-want pen (SVO)
- b. *pandu peni ka-na-i-chaka*
 PN (CL1) pen (CL9) 3SG.SM-CL9.OM-want (SOV)
- c. *peni pandu ka-na-i-chaka*
 pen (CL9) PN (CL1) 3SG.SM-CL9.OM-want (OSV)
- d. *peni ka-na-i-chaka pandu*
 pen (CL9) 3SG.SM-CL9.OM-want PN (CL1) (OVS)
- e. *ka-na-i-chaka peni pandu*
 3SG.SM-CL9.OM-want pen (CL9) PN (CL1) (VOS)
- f. *ka-na-i-chaka pandu peni*
 3SG.SM-CL9.OM-want PN (CL1) pen (CL9) (VSO)
- 「パンドゥ (人名) はペンが欲しい」

マクンドゥチ方言の主語、目的語、述語の語順には、上記の通り、複数のバリエーションがあるが、これらのうち、主語・述語・目的語 (SVO) という並びが基本語順であると考えられる。以下でそのように考えられる理由を述べる。

マクンドゥチ方言の語順を決定する要因の一つとして、情報構造を挙げることができる。次の例に示す通り、疑問詞疑問文の答えとなる文の疑問詞に対応する名詞句は、述語の前に現れることができない。まず、(9-58) から、目的語が、疑問詞 *nini* に対応する場合、述語の前に現れることができないことが分かる。

(9-58) A: *ku-okoto* *nini*
 2SG.SM-pick_up.PFV what
 「あなた、何を拾ったの」

B: *nyi-okoto* *embe*
 1SG.SM-pick_up.PFV mango (CL9)

B': #*embe* *nyi-i-okoto*
 mango (CL9) 1SG.SM-CL9.OM-pick_up.PFV
 「私はマンゴーを拾った」

(9-58B') のように、目的語 *embe* 「マンゴー」が述語の前に現れる語順は、なんの文脈も設定しなければ容認されるが、(9-58A) のような、その目的語に対応する疑問詞を用い疑問文を予め設定した場合、容認されなくなる。

また、(9-59) から、自動詞の主語も疑問詞に対応する場合、述語の前に現れえないことが分かる。(9-59B') のような、主語 *pandu* 「パンドゥ (人名)」が、述語に先行する語順も、その主語に対応する疑問詞を用いた疑問文があらかじめなければ容認される。

(9-59) A: *ka-ja* *nani*
 3SG.SM-come.PFV who
 「誰が来たの？」

B: *ka-ja* *pandu*
 3SG.SM-come.PFV PN (CL1)
 「パンドゥ (人名) が来た」

B' #*pandu* *ka-ja*
 PN (CL1) 3SG.SM-come.PFV

この二つの例から、マクンドゥチ方言の語順の決定には情報構造が関わっており、新情報を表す名詞句は、述語の前に現れることができないという制限があることが分かる。

それでは、主語、目的語、述語の情報構造上のステータスを同じにした場合どのような語順になるのだろうか。それを調べるために、事象報告文の語順をみってみる。事象報告文は、文全体で新情報を表す文で、構成素間に情報構造上の差はない。

(9-60A) は事象報告文を導出する疑問文となるが、「白人が踊りを踊っている」という命題内容を表す文が事象報告文となる場合、容認されるのは、(9-60B) に示す通り、主語 *mzungu* 「白人」・述語 *ka-na-cheza* 「踊る」・目的語 *ngoma* 「踊り」がこの語順で現れ

る場合に限られる。

(9-60) A: *βa-na nini mbona wat^{hu} wengi*
CL16.SM-POSS what why people (CL2) many.CL2
「(そこで) 何があるの?なんでたくさんの人がいるの?」

B: *ḡzungu ka-na-cheza ngoma*
white_person (CL1) 3SG.SM-IPFV-play dance (CL9) (SVO)
「白人が踊りを踊っている」

B' *#ḡzungu ngoma ka-na-i-cheza*
white_person (CL1) dance (CL9) 3SG.SM-IPFV-CL9.OM-play (SOV)

B'' *#ngoma ḡzungu ka-na-i-cheza*
dance (CL9) white_person (CL1) 3SG.SM-IPFV-CL9.OM-play (OSV)

B''' *#ngoma ka-na-i-cheza ḡzungu*
dance (CL9) 3SG.SM-IPFV-CL9.OM-play white_person (CL1) (OVS)

B'''' *#ka-na-cheza ngoma ḡzungu*
3SG.SM-IPFV-play dance (CL9) white_person (CL1) (VOS)

この事象報告文を用いたテストから、情報構造上は、SVO という語順が無標であると
考えられる。なお、このテストを自動詞文に適用した場合、答えの文で倒置構文の使用
が好まれるため、自動詞文における主語と述語の語順を調べるために用いることはでき
ない。(9-61B) では、*-fwa*「死ぬ」という動詞が、場所名詞のクラスである 16 クラスの
主語接頭辞でマークされて現れ、そのあとに元主語の *ḡt^{hu}*「人」が現れている。

(9-61) A: *βa-na nini mbona wat^{hu} wengi*
CL16.SM-POSS what why people (CL2) many.CL2
「(そこで) 何があるの?なんでたくさんの人がいるの?」

B: *βa-fu ḡt^{hu}*
CL16.SM-die.PFV person (CL1)
「人が死んだ」

SVO が基本語順であると考えられる第二の理由は、主語と目的語が同じ人称の場合
の語順である。主語と目的語の人称が同じ場合、(9-62) に示す通り、SVO, SOV, VOS と

いう語順がありえるが、最も好まれるのは、(9-62a) の SVO である。なお、VOS という語順では、O と S の間にポーズが置かれ、主語が付け足しのような形で現れる。

- (9-62) a. *askari ka-m-kamata mwivi*
 police 3SG.SM-3SG.OM-catch.PFV thief
 b. *askari mwivi ka-m-kamata*
 police thief 3SG.SM-3SG.OM-catch.PFV
 c. *ka-m-kamata mwivi askari*
 3SG.SM-3SG.OM-catch.PFV thief police
 「警察が泥棒を捕まえた」

ちなみに、(9-63) に示す通り、主語名詞句を疑問詞にした疑問詞疑問文は、主語と目的語の人称が同じ場合、受動文や関係節を用いて形成されることが好まれる。(9-63a) では疑問詞 *nani* 「誰」が動詞の前に、(9-63b) では *nani* が動詞の後に現れているが、どちらも不自然な形式と判断される。こうした疑問を表現するためには、(9-63c) のように受動文を用いるか、(9-63d) のように関係節を用いることが好まれる。

- (9-63) a. *?nani ka-m-pigi juma*
 who 3SG.SM-3SG.OM-hit.PFV PN
 b. *?ka-m-pigi juma nani*
 3SG.SM-3SG.OM-hit.PFV PN who
 「誰がジュマを殴った？」
 c. *juma ka-pigwa N=nani*
 PN 3SG.SM-hit.PASS.PFV by=who
 「ジュマは誰に殴られた？」
 d. *[mw-a-m-piga juma] nani*
 CL1.SM.REL-PFV-3SG.OM-hit PN who
 「ジュマを殴ったのは誰？」¹⁵⁷

(9-63) のように主語を疑問詞にする疑問詞疑問文で、受動文や関係節の使用が好まれる

¹⁵⁷ 疑問詞は、次の A に示す通り、関係節の前に現れることもできる。また、その答えで疑問詞に対応する名詞句が、その関係節の前に現れることもできるが、その場合、次の B

のは、主語と目的語の人称が同じ場合、主語は述語に先行すべきという制約と、新情報は述語に後続しなくてはいけないという情報構造上の制約の間に生じる不整合性を回避するためであると考えられる。

9.4 9章のまとめ

本章では、まず、9.1節で、典型的な主語や目的語の特徴をあげたうえで、動詞との一致や対応する受動文におけるふるまいを観察しながら、節中にどのような統語機能を担う名詞句が現れるのかを記述した。その結果、場所名詞が目的語としての特性を兼ね備えていること、複他動詞のなかには、一次目的語と二次目的語をもつものと、統語的に対称的な目的語を二つもつものがあること、目的語接頭辞と一致しなかったり、対応する受動文で主語とならなかつたりする非典型的な目的語があること、更には、付加語や譲渡不可能名詞といった主語でも目的語詞句も節中に現れることが分かった。次の10章では、関係節について論じるが、こうした統語機能の同定は、どのような統語機能を担う名詞句が関係節の先行詞となるかという記述にとって必要なものとなる。

9.2節では、倒置構文の記述を行った。この節では、どのような目的語が倒置されるかや、倒置構文に現れる構成素の語順、場所を表すコピュラ補語や所有物も倒置されうることを記述した。特に、場所を表すコピュラ補語や所有物の倒置については、筆者の知る限り、スワヒリ語の他の変種でもこれまで報告がされていない現象である。

9.3節では、主語、目的語、述語の語順について記述を行った。マクンドゥチ方言の語順は、固定的ではないが、情報構造や、主語と目的語が同じ人称の時の語順を考慮に入れると、SVOを基本語順とみなすことができる。

に示す通り、関係節は必ず前提標識 *njo=* でマークされる。この *njo=* がいない場合、疑問詞に対応する名詞句は必ず関係節の後に現れる。

例：A: *nani mw-a-m-piga juma* B: *pandu njo=mw-a-m-piga juma*
 who CL1.SM.REL-PFV-3SG.OM-hit PN PN BGR=CL1.SM.REL-3SG.OM-PFV-hit PN
 「ジュマを殴ったのは誰？」 「ジュマを殴ったのはパンドゥだ」

10章 関係節

本章では、マクンドゥチ方言の関係節の記述を行う。マクンドゥチ方言の関係節は、動詞が関係節接頭辞でマークされることにより形成されるが、この関係節接頭辞には二つのタイプがある。また、関係節には、語彙的な内容を表す動詞が関係節接頭辞で直接マークされることにより形成されるタイプと、関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞に、語彙的な内容を表す動詞の定形が後続することにより形成されるタイプがある。どちらのタイプの関係節接頭辞を用いるかと、コピュラ動詞を用いるかどうかを基準にして分類した場合、関係節には四つのタイプがあることになる。これらの関係節は、表し分けることのできる TAM や極性に違いがみられる。また、関係節内で主語となる名詞句のみを先行詞とすることができるか、それ以外の統語機能を担う名詞句も先行詞とすることができるかという点でも異なる。

マクンドゥチ方言の関係節に関して、他に特筆すべき点として、先行詞が必ずしも現れないということが挙げられる。単独で主語や目的語に位置に現れることができるため、関係節は、「名詞化」された形式のようにもみえるが、関係節の統語的性質は、他の名詞と全く同じというわけでもない。

本章では、まず 10.1 節で、四つの関係節の形態的特徴を中心に記述を行う。10.2 節では、9 章で提示した統語機能ごとに場合分けしながら、どのような統語機能を担う名詞句が先行詞となるのかを確認する。10.3 節では、上記の形態的特徴と先行詞の関係節内での統語機能を踏まえたうえで、四つの関係節の使いわけについて述べる。10.4 節では、先行詞のない関係節が、関係節を含む節内で現れることのできる位置について記述しながら、関係節が、名詞と動詞の中間的な統語的性質をもつことを指摘する。

10.1 関係節の形態的特徴について

マクンドゥチ方言では、(10-1) に示すような四つの形式が関係節として記述されている (Racine-Issa 2002: 153–170)。

- (10-1) a. [*m-na-tenda* *kazi*] *ka-cha-vata* *pesa*¹⁵⁸
 CL1.SM.REL-IPFV-do work 3SG.SM-FUT-get money
- b. [*a-na-e-tenda* *kazi*] *ka-cha-vata* *pesa*
 3SG.SM-IPFV-CL1.REL-do work 3SG.SM-FUT-get money
- c. [*mw-a-wa* *ka-na-tenda* *kazi*] *ka-cha-vata* *pesa*
 CL1.SM.REL-PFV-COP 3SG.SM-IPFV-do work 3SG.SM-FUT-get money
- d. [*a-ø-e-wa* *ka-na-tenda* *kazi*] *ka-cha-vata* *pesa*
 3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 3SG.SM-IPFV-do work 3SG.SM-FUT-get money
- 「仕事をする人はお金を得るだろう」

この四つの関係節は、形式的特徴に着目した場合、以下の二つの基準で分類できる。

- 動詞が主語関係節接頭辞 *m-* でマークされるか、それとも関係節接頭辞でマークされるか。
- コピュラ動詞を介して形成されるか否か。

上の、(10-1a, c) は主語関係節接頭辞 *m-* でマークされた動詞を含む例で、(10-1b, d) は関係節接頭辞 *e-* でマークされた動詞を含む例となっている。また (10-1a, b) では、語彙的な内容を表す動詞の語幹-*tenda* 「する」が直接、主語関係節接頭辞や関係節接頭辞でマークされ関係節が形成されている。それに対して、(10-1c, d) では、主語関係節接頭辞や関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞に TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」でマークされた-*tenda* 「する」の定形が後続することにより関係節が形成されている。以下で、それぞれの関係節について、形態的特徴を中心に記述を行う。

¹⁵⁸ 本章では関係節を [] で括り提示する。

10.1.1 動詞語幹が接頭辞で直接マークされる形式

本節では、動詞語幹が、主語関係節接頭辞や関係節接頭辞で直接マークされることにより形成される関係節の動詞の形式について説明する。まず、(10-2) は、主語関係節接頭辞 *m-* で語幹がマークされることにより形成される関係節（以下タイプ 1）の動詞の形式を一般化したテンプレートである。なお、(10-2) の（ ）内の接頭辞は現れないことがある。

(10-2) *m-*（否定）－（TAM）－（目的語）－語幹（タイプ 1）

タイプ 1 の関係節接頭辞 *m-* は、1 クラスの名詞接頭辞と同形である（例：*m-tʰu* 「人（1 クラス）」）。また、タイプ 1 の関係節の先行詞となるものは、1 クラス名詞に限られる。この二つの特徴から、タイプ 1 の *m-* という接頭辞は、1 クラスの名詞接頭辞と歴史的には同源である可能性が指摘できる¹⁵⁹。なお、先行詞となるものが 1 クラスに限られるという特徴は、同じ接頭辞でマークされるタイプ 3 の関係節にも当てはまる。

タイプ 1 の動詞をマークできる TAM 接頭辞は *na-* 「未完結」、*cha-* 「未来」、*ne-* 「完了」、*nen-* 「起動」、*a-* 「完結」である。このうち、定形には現れない *ne-* 「完了」、*nen-* 「起動」、*a-* 「完結」について、以下で簡単に説明する。

まず、*ne-* 「完了」、*nen-* 「起動」は、TAM 接頭辞の直前に現れる主語関係節接頭辞が *m-* という形式であることから、*me-* 「完了」、*men-* 「起動」の初頭音に異化が生じることで形成された異形態であると考えられる。(10-3) は、主語関係節接頭辞 *m-* と *ne-* 「完了」でマークされた関係節を含む例である¹⁶⁰。

¹⁵⁹ スワヒリ語には、後述するタイプ 2 の関係節はあるが、タイプ 1 の関係節はない。ただし、関係節とは呼ばれていないものの、接頭辞 *m-* でマークされた動詞が項をとり関係節を形成しているように見える例はスワヒリ語にも存在する。以下の例はスワヒリ語のものだが、*-pita* 「打つ」という動詞が *m-* という接頭辞でマークされて関係節のようなものを形成している。

例：*m-piga konde ukuta-ni hu-umiza mkonowe*
CL1-hit fist wall-LOC HAB-hurt his hand

「拳を壁に打ち付けるものは自身の手を痛める」(Ashton 1947: 292)

なお、マクンドゥチ方言の聞き出し調査では、上記の *m-piga* のような語幹と接頭辞 *m-* のみからなる語形は容認されなかったが、民話の中では、次のような例がみられる。以下の例では *-cheka* 「笑う」が接頭辞 *m-* でマークされ、関係節のようなものを形成している。

例：*m-cheka kilema si=mkwe wangu*
CL1-laugh cripple NEG=family_in law my.CL1

「不具を笑うものは、私の義理の家族ではない」

¹⁶⁰ 定形でも、タイプ 1 の関係節でも *me-*、*men-* と *ne-*、*nen-* の交替が容認される。しかし自発的に用いる形式を観察してみると、定形では *me-*、*men-* が用いられ、関係節では *ne-*、*nen-* が用いられる。

(10-3) [*m-ne-kwiba*] *tu-cha-m-kamata*

CL1.SM.REL-PRF-steal 1PL.SM-FUT-3SG.OM-catch

「盗んだやつは我々が捕まえるだろう」(*ne-*「完了」の例)

TAM 接頭辞 *a-*「完結」は、(10-4) に示す通り、*mw-a-*という形で接頭辞 *m* と融合した形で現れる。

(10-4) [*mw-a-vyaligwa*] *kulya*]

CL1.SM.REL-PFV-bear.PASS DEM.DIST.CL15

「あそこで生まれた人」(*a-*「完結」で非状態動詞がマークされる例)

(10-4) で示した通り、非状態動詞がこの TAM 接頭辞 *a-*「完結」でマークされた場合、基準時以前の事象の完結が表されるが、状態動詞がこの *a-*でマークされた場合は、(10-5) に示す通り状態が表される。

(10-5) [*mw-a-v-ijua*] *kikae*]

CL1.SM.REL-PFV-CL8.OM-know Kae_dialect

「カエ方言を知っている人」(*a-*「完結」で状態動詞がマークされる例)

この二つの例から、*a-*「完結」は、定形の完結形と同等のAspect特性を有しているといえる¹⁶¹。なお、*a-*「完結」でマークされた際の語幹は、完結形と異なり、完結語幹ではなく、基本語幹となることに留意されたい。

以下には、これ以外の TAM 接頭辞でマークされたタイプ 1 の関係節の例を挙げる。

() 内には、動詞をマークする TAM 接頭辞を記す。

(10-6) *yulya* [*m-na-chaka*] *mke*]

DEM.DIST.CL1 CL1.SM.REL-IPFV-want wife

「妻が欲しいあの人」(*na-*「未完結」)

¹⁶¹ Racine-Issa (2002: 154) は、この *mwa* という形式を積極的には分節せず、接頭辞 *m* とコピュラ動詞-*wa* に分けられる可能性を指摘している。しかしながら、他の TAM 接頭辞が、主語関係節接頭辞の直後に現れることや、*a-*でマークされた状態動詞は定形の完結形と同じように状態や結果状態を表すことを考慮に入れると、TAM 接頭辞と分析するほうが適当であると考えられる。なお、スワヒリ語の他変種には「過去」というラベルの付けられた *a-*という接頭辞がある (Nurse & Hinnebusch 1993: 389)。

(10-7) *yuno* *njo=[ɱ-cha-mu-oa* *mwanangu]*
 DEM.PROX.CL1 BGR=CL1.SM.REL-FUT-3SG.OM-marry child:my
 「私の子供と結婚するのはこの人だ」 (*cha-* 「未来」)

(10-8) [*ɱ-nena-tenda* *kazi]* *ka-cha-vata* *pesa*
 CL1.SM.REL-INCH-do work 3SG.SM-FUT-get money
 「仕事を始めている人は、お金を得るだろう」 (*nena-* 「起動」)

タイプ1の関係節で否定は、*si-*という接頭辞によって表される。動詞が関係節接頭辞でマークされた場合、この*si-*と共起できる TAM 接頭辞は *cha-* 「未来」のみである。(10-9) に *si-*でマークされたタイプ1の例を挙げる。(10-9a, b) は TAM 接頭辞 *cha-* 「未来」の有無が異なることに着目されたい。

(10-9) a. [*ɱ-si-tenda* *kazi]*
 CL1.SM.REL-NEG-do work
 b. [*ɱ-si-cha-tenda* *kazi]*
 CL1.SM.REL-NEG-FUT-do work
 「仕事をしないやつ」

次に、関係節接頭辞で語幹が直接マークされることで形成される関係節（以下タイプ2）の動詞の形式を一般化したテンプレートを (10-10) に提示する。

(10-10) 主語－（否定）－（TAM）－関係節－（目的語）－語幹 （タイプ2）

タイプ2の関係節接頭辞は、先行詞の名詞クラスによって形式が異なる。表 10-1 にクラスごとの関係節接辞の形式を挙げる。

表 10-1：関係節接頭辞の形式

CL1	CL2	CL3	CL4	CL5	CL6	CL7	CL8	CL9	CL10	CL15	CL16	CL18
<i>e-ye-~yo-</i>	<i>o-</i>	<i>o-</i>	<i>yo-</i>	<i>lyo-</i>	<i>yo-</i>	<i>cho-</i>	<i>vyo-</i>	<i>yo-</i>	<i>zo-</i>	<i>ko-</i>	<i>βo-</i>	<i>mo-</i>

上記の関係節接頭辞は1クラスの *ye-~yo-*を除いて、表 10-2 に挙げる拘束代名詞と同形である。

表 10-2 : 拘束代名詞の形式

1SG	2SG	3SG/CL1	3PL/CL2	CL3	CL4	CL5	CL6	CL7	CL8	CL9	CL10	CL15	CL16	CL18
-mi	-we	-e	-o	-o	-yo	-hyo	-yo	-cho	-yvo	-yo	-zo	-ko	-βo	-mo

関係節接頭辞と拘束代名詞は、現れる環境や ((10-11) 参照)、担う機能 (関係節を形成するかどうか)、1, 2 人称単数に対応する形式の有無が異なる。このため、本論文では、この二つを共時的には別の形態素と分析している。ただし、Nurse & Hinnebusch (1993: 406) が述べる通り、歴史的に見た場合、この二つの形態素は密接に関連していると考えるのが自然だろう。なお、Nurse & Hinnebusch (1993) は -(y)e-という 1 クラスの関係節接頭辞の歴史的由来については言及していないが、1, 2 人称単数の拘束代名詞が、それぞれ -mi, -we、人称代名詞が mie, weye であることを踏まえると、1 クラスの関係節接頭辞は、yeye という 3 人称単数の独立代名詞と同源である可能性が疑われる。

(10-11) 拘束代名詞の現れる位置

- 所有を表す動詞-na の直後 (1~10 クラスの拘束代名詞に限る)
- コピュラ動詞の直後 (15, 16, 18 クラスの拘束代名詞に限る)
- 主語接頭辞の直後 (不在を表す場合、15, 16, 18 クラスの拘束代名詞に限る)
- 共格標識の na= の直後
- 否定標識 si= の直後
- 提題標識の ndi- の直後

タイプ 2 に現れる TAM 接頭辞は na- 「未完結」、cha- 「未来」、me- 「完了」、ø- 「完結」である。起動、完了否定、完結否定を示す TAM 接頭辞は現れない。まず、以下に、na- 「未完結」、cha- 「未来」、me- 「完了」でマークされた動詞を用いた例を提示する。

(10-12) siku zote [u-na-zo-kwenda p^hwa-ni]
 days (CL10) all.CL10 2SG.SM-IPFV-CL10.REL-go sea-LOC
 「あなたが海に行くすべての日」(na- 「未完結」の例)

(10-13) tu-cha-m-kamata [a-cha-e-kwiba]
 1PL.SM-FUT-3SG.OM-catch 3SG.SM-FUT-CL1.REL-steal
 「我々は、盗みを働くやつを捕まえるだろう」(cha- 「未来」の例)

(10-14) [*a-me-e-tenda kazi njo=[m-cha-vata pesa]*
 3SG.SM-PRF-CL1.REL-do work BGR=CL1.SM.REL-FUT-get money
 「お金を得るのは、仕事をしたものだ」(*me-*「完了」の例)

(10-15) (10-16) に示す通り、 \emptyset -「完結」でマークされた状態動詞は、状態や結果状態を、非状態動詞は事態の完結を表す。なお、「完結」を表す活用形で TAM 接頭辞が現れないというのは定形の完結形と共通する特徴だが、タイプ 2 の関係節で動詞が \emptyset -「完結」でマークされた場合、完結語幹ではなく、基本語幹が現れることに留意されたい。

(10-15) [*a- \emptyset -e-choka bado] nani*
 3SG.SM-PFV-CL1.REL-get_tired still who
 「まだ疲れているのは誰？」(\emptyset -「完結」でマークされる状態動詞の例)

(10-16) [*ji-shetani [li- \emptyset -lyo-kwea ujiti]*
 AUG-devil (CL5) CL5.SM-PFV-CL5.REL-climb tree
 「木に登った鬼」(\emptyset -「完結」でマークされる非状態動詞の例)

タイプ 2 の関係節で動詞をマークする否定接頭辞は、タイプ 1 と同様に *si-*である。この否定接頭辞 *si-*と共起できる TAM 接頭辞は *cha-*「未来」のみというのはタイプ 1 と変わらない¹⁶²。(10-17) に *si-*でマークされた動詞を用いた関係節の例を提示する。

(10-17) a. [*a-si-tenda kazi]*
 3SG.SM-NEG-do work
 b. [*a-si-cha-e-tenda kazi]*
 3SG.SM-NEG-FUT-CL1.REL-do work
 「仕事をしないやつ」

なお、(10-17a) の TAM 接頭辞を欠いた形式は、その表面的な形式だけみると、TAM 接頭辞のロットが \emptyset -「完結」で埋められている可能性も考えられるが、次の二つの例からその可能性は否定される。まず、(10-18) では、関係節接頭辞と *si-*「否定」でマークされた非状態動詞-*tenda*「する」が、*kesho*「明日」と共起している。

¹⁶² スワヒリ語でも、関係節接頭辞でマークされた動詞は *si-*で否定が表されるが、スワヒリ語において、この否定接頭辞 *si-*は他の TAM 接頭辞と共起しない (cf. Ashton 1947)。

(10-18) [*a-si-e-tenda* *kazi kesho*] *nani*
 3SG.SM-NEG-CL1.REL-do work tomorrow who
 「明日仕事をしないのは誰？」

この例から、否定接頭辞 *si-* でマークされ、なおかつ TAM 接頭辞を欠いた活用形が、必ずしも基準時以前の事象の完結を表さないことが分かる。また、(10-19) に示す通り、*si-* でマークされた状態動詞-*choka* 「疲れる」を用いた疑問文に対する答えでは、-*choka* が *na-* 「未完結」でマークされた定形に活用している。

(10-19) A: [*a-si-ye-choka*] *nani*
 3SG.SM-NEG-CL1.REL-get_tired who
 「疲れないのは誰？」

B: *makoto yeye ha-na-choka*
 PN 3SG.PRO 3SG.SM:NEG-IPFV-get_tired
 「マコトだ、彼は疲れない」

この (10-19B) の活用形から、(10-19A) の *si-* でマークされた状態動詞-*choka* 「疲れる」が、現在疲れているという結果状態ではなく、疲れにくいという性質を表すために用いられていることが分かる。

この二つの例から、否定接頭辞 *si-* でマークされ、なおかつ TAM 接頭辞を欠いた活用形は、必ずしも完結や結果状態を表すわけではなく、TAM 接頭辞 \emptyset - 「完結」でマークされているわけではないと考えることができる。

なお、TAM 接頭辞が \emptyset - の場合、1 クラスの関係節接頭辞 *e-ye-~yo-* は自由交替する。また、否定接頭辞 *si-* でマークされ TAM 接頭辞がない場合は、*e-* と *ye-* が現れることが確認されている。 \emptyset - 以外の TAM 接頭辞でマークされる場合に現れるのは *e-* のみである。

タイプ 2 の関係節接頭辞でマークされる動詞は、主語接頭辞の形式についても注意が必要である。まず、タイプ 2 の動詞をマークする 2 人称単数、3 人称単数主語接頭辞は、定形の *ku-*, *ka-* ではなく、非定形の *u-*, *a-* となる。また、(10-20) や (10-21) に示す通り、定形では、主語が 1 人称単数で TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」であれば主語接頭辞が現れず、TAM 接頭辞が *cha-* 「未来」であれば、*cha-* が有気音になることがあるが、(10-22) (10-23) に示す通り、関係節では、主語が 1 人称単数なら、いずれの場合も必ず *N-* という形の接頭辞が現れる。

(10-20) *ino na-i-chaka*
 DEM.PROX.CL9 IPFV:1SG.SM-CL9.OM-want
 「これを私はほしい」

(10-21) a. *N-cha-kwenda paje*
 1SG.SM-FUT-go PN
 b. *ch^ha-kwenda paje*
 FUT:1SG.SM-go PN
 「私はパジェに行くだろう」

(10-22) a. [*N-na-yo-i-chaka*] *si=iyo*
 1SG.SM-IPFV-CL9.REL-CL9.OM-want NEG=DEM.MED.CL9
 b. **[na-yo-i-chaka]* *si=iyo*
 IPFV-CL9.SM-CL9.OM-want NEG=DEM.MED.CL9
 「私がほしいのはそれではない」

(10-23) a. *paje njo=[N-cha-ko-kwenda]*
 PN BGR=1SG.SM-FUT-CL15.REL-go
 b. **paje njo=[ch^ha-ko-kwenda]*
 PN BGR=1SG.SM-FUT-CL15.REL-go
 「私が行くのはパジェだ」

10.1.2 コピュラ動詞を介して形成される関係節

関係節は、関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞に、動詞の定形が後続することでも形成される¹⁶³。以下に、このタイプの関係節形式を一般化して提示する。

¹⁶³ 他言語、他変種の記述を十分に精査したわけではないが、コピュラ動詞を介した関係節形成は、バントゥ諸語で一般的にみられるものではなさそうである。なお、コピュラ動詞を介した関係節形成は、コピュラを助動詞として用いる複合時制構文と関連しているように見えるが、助動詞としてコピュラ動詞を用いる言語では、関係節もコピュラ動詞を用いて形成されるという一般化は成り立たない。例えば、コピュラ動詞を TAM の標識として用いる複合時制構文はスワヒリ語にもみられるが、スワヒリ語では、関係節形成にコピュラ動詞が用いられることはない。スワヒリ語では、コピュラ動詞の代わりに [*amba*-関係節接辞] という形式の標識が用いられる (Ashton 1947: 110–114)。

(10-24) *m-*TAM-*wa* 定形節 (タイプ 3)

(10-25) 主語-TAM-関係節接頭辞-*wa* 定形節 (タイプ 4)

タイプ 3 のコピュラ動詞は、タイプ 1 の動詞と同様に接頭辞 *m-* でマークされる。それに対して、タイプ 4 のコピュラ動詞は、タイプ 2 の動詞と同様に、先行詞の名詞クラスによって異なる形をとる関係節接頭辞によってマークされる。タイプ 3 の関係節の先行詞となるものは、タイプ 1 と同様に 1 クラス名詞に限られる。タイプ 4 の関係節の先行詞となるものに、名詞クラスに関する制限はない。なお、後述する通り、タイプ 1 の先行詞となるものは、関係節内の主語に限られるが、タイプ 3 は、他の統語機能を担う名詞句も先行詞とすることができる (10.2 節参照)。

タイプ 3 のコピュラ動詞は TAM 接頭辞 *na-* 「未完結」、*cha-* 「未来」、*ne-* 「完了」、*a-* 「完結」でマークされることが、タイプ 4 のコピュラ動詞は *na-* 「未完結」、*cha-* 「未来」、*ø-* 「完結」でマークされることが確認されているが、頻繁に用いられるのは、完結の接頭辞 *a-*、*ø-* でマークされた形式である。完結の接頭辞でマークされたコピュラ動詞は、他の TAM 接頭辞でマークされたコピュラ動詞と異なり、特にアスペクトやモダリティに関する情報を付加することなく、ただ関係節標識として機能する。それに対して、完結以外の接頭辞でコピュラ動詞がマークされる場合は、複合時制構文と同様に、アスペクトやモダリティに関する情報が付加される。以下で挙げる、タイプ 3、タイプ 4 の関係節の例は、すべて、TAM 接頭辞 *a-*、*ø-* 「完結」でマークされたコピュラ動詞を用いたものである。

a-、*ø-* 「完結」でマークされるコピュラ動詞には、ある特定の TAM 接頭辞や否定接頭辞でマークされた活用形が後続できないというような制限がなく、定形であればどの活用形でも後続しうる。そのため、タイプ 3,4 では、タイプ 1,2 と異なり、定形と同様のアスペクトやムード、極性が関係節中で表現し分けられる。(10-26) はタイプ 3 の関係節、(10-27) はタイプ 4 の関係節の例である。どちらも TAM 接頭辞 *ja-* 「完了否定」でマークされた動詞活用形がコピュラ動詞に後続している。

(10-26) [*mw-a-wa* *ha-ja-dungwa*] *ha-tambuu* *mbio*
CL1.SM.REL-PFV-COP 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-kick_out.PASS 3SG.SM:NEG-understand.PFV speed
「追い出されたことのない人は、逃げるということを理解しない」(タイプ 3)
(未だ困難に遭遇していない人は困難というものを知らない)

- (10-27) *[a-ø-yo-wa ba-sigombe ha-ja-tengeza] iβi*
 3SG.SM-PFV-CL9.REL-COP Mr.-PN 3SG.SM:NEG-PRF.NEG-repair which.CL9
 「シゴンベおじさんが修理していないの（自転車）はどれ？」（タイプ4）¹⁶⁴

TAM 接頭辞 *ja-* 「完了否定」でマークされた活用形が表す事態は、タイプ1,2の関係節では表現することができない。タイプ1,2の関係節では表すことができないが、タイプ3,4の関係節では表すことができるものとしては、これ以外に、否定接頭辞と *na-* 「未完結」や *cha-* 「未来」、あるいは *li-* 「完結否定」からなる活用形や否定完結形が表す事態が挙げられる。

タイプ4の関係節で目的語が先行詞となる場合、コピュラ動詞は、関係節内の主語との一致を示す主語接頭辞ではなく、先行詞との一致を示す主語接頭辞でもマークされることがある。(10-28)はそのことを示す例である。

- (10-28) a. *mwanafuzi [u-ø-ye-wa ku-m-kut^hu jana]*
 student(CL1) 2SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 2SG.SM-3SG.OM-meet.PFV yesterday
 b. *mwanafuzi [a-ø-ye-wa ku-m-kut^hu jana]*
 student(CL1) 3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 2SG.SM-3SG.OM-meet.PFV yesterday
 「あなたが昨日あった学生」

(10-28a) では、関係節標識として機能するコピュラ動詞が、関係節内の動詞と同じように2人称単数の主語接頭辞でマークされている。それに対して、(10-28b) では、コピュラ動詞が、3人称単数の主語接頭辞でマークされ、関係節内で目的語となる先行詞との一致が関係節接頭辞だけでなく、主語接頭辞でも生じている。関係節内で主語とならない先行詞とコピュラ動詞をマークする主語接頭辞との一致は、(10-29) や (10-30) に示す通り、先行詞が無生物を表す目的語や、場所を表す名詞の場合でも起こりうる。

- (10-29) a. *mchuzi [a-ø-o-wa ka-βiki mama]*
 soup(CL3) 3SG.SM-PFV-CL3.REL-COP 3SG.SM-cook.PFV mother
 b. *mchuzi [u-ø-o-wa ka-βiki mama]*
 soup(CL3) CL3.SM-PFV-CL3.REL-COP 3SG.SM-cook.PFV mother
 「お母さんが作ったスープ」

¹⁶⁴ (10-27) は、先行詞を欠いているが、この例の関係節接頭辞は、*baskeli* 「自転車（9クラス）」と一致している。

- (10-30) a. *nyumba-ni* *[a-ø-ko-wa* *ka-na-lala* *makoto]*
house-LOC (CL15) 3SG.SM-PFV-CL15.REL-COP 3SG.SM-IPFV-fall_asleep PN
- b. *nyumba-ni* *[ku-ø-ko-wa* *ka-na-lala* *makoto]*
house-LOC (CL15) CL15.SM-PFV-CL15.REL-COP 3SG.SM-IPFV-fall_asleep PN
「マコトが泊っている家で」

10.1.3 例外的な形態的特徴をもつ関係節

10.1.3.1 動詞語幹を欠いたコピュラ動詞

関係節接頭辞と完結を表す接頭辞 *a-*, *ø-* でマークされるコピュラ動詞は、関係節標識としてだけでなく、コピュラとして機能することもある。次の二つは、そのことを示す例である。

- (10-31) a. *[mw-a-wa* *macho]* *nani*
CL1.SM.REL-PFV-COP awake who
- b. *[a-ø-e-wa* *macho]* *nani*
3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP awake who
「目覚めているのは誰？」

- (10-32) a. *[mw-a-wa* *nyumba-ni]* *nani*
CL1.SM.REL-PFV-COP house-LOC who
- b. *[a-ø-e-wa* *nyumba-ni]* *nani*
3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP house-LOC who
「家にいるのは誰？」

(10-31) では状態副詞 *macho* 「目覚めて」がコピュラ動詞に後続しており、(10-32) では場所を表す名詞 *nyumba-ni* 「家で」がコピュラ動詞に後続している。コピュラ文は、コピュラ動詞を用いることなく、名詞と名詞、あるいは、名詞と形容詞を並置するだけでも形成されうるが、状態副詞と場所名詞は、どちらも叙述に際して、コピュラ動詞を義務的に必要とする (8.4.5 節、8.4.6 節参照)。仮に、関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞が、コピュラ動詞としての機能をもたず、関係節標識としての機能しかもたないのであれば、状態副詞と場所名詞は、関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞の直後に現れることができないはずである。

こうしたコピュラ動詞から語幹-*wa* を省略したようにみえる形式によって形成されて

いる関係節も観察される。(10-33)(10-34) では、動词语幹がなく、関係節接頭辞と TAM 接頭辞のみからなる形式に、コピュラ補語となる名詞が後続している。

- (10-33) a. [mw-a mwalimu] nani
 CL1.SM.REL-PFV teacher who
 b. [a-∅-e mwalimu] nani
 3SG.SM-PRF-CL1.REL teacher who
 「先生であるのは誰」

- (10-34) a. [mw-a nyumba-ni] nani
 CL1.SM.REL-PRF house-LOC who
 b. [a-∅-e nyumba-ni] nani
 3SG.SM-PFV- CL1.REL house-LOC who
 「家にいるのは誰」

この語幹の脱落したコピュラ動詞には、コピュラ補語となる語の後続が一般的だが、(10-35a) に示す通り、主語関係節接頭辞 *m-* マークされる形式へは、動詞定形が後続することができる。なお、(10-35b) に示す通り、関係節接頭辞でマークされる形式に、動詞定形が後続することはできない。

- (10-35) a. ng'ombe [mw-a ka-na-kunywa maji]
 cow (CL1) CL1.SM.REL-PFV 3SG.SM-IPFV-drink water
 b. *ng'ombe [a-∅-e ka-na-kunywa maji]
 cow (CL1) 3SG.SM-PFV-CL1.REL 3SG.SM-IPFV-drink water
 「水を飲んでいる牛」

10.1.3.2 所有を表す-na

所有を表す動詞-na は、他の動詞とは異なる活用形を有するが (4.2.2 節参照)、その特殊性は、関係節接頭辞でマークされる場合にも観察される。

-na の特殊な点として、第一に、-na をマークできる TAM 接頭辞に限りがある点が挙げられる。関係節接頭辞でマークされた-na は一部の TAM 接頭辞としか共起できない。筆者の調査で共起が容認されたのは、主語関係節接頭辞 *m-* でマークされる場合は、*cha-* 「未来」、*ne-* 「完了」のみ、関係節接頭辞でマークされる場合は、*cha-* 「未来」のみである。(10-36) には、関係節接頭辞と *cha-* でマークされた-na の活用形の例を提示する。

- (10-36) a. [*m-cha-na* *oga na=mi*]
 CL1.SM.REL-FUT-POSS fear COM=1SG.PRO
- b. [*a-cha-e-na* *oga na=mi*]
 3SG.SM-FUT-CL1.REL-POSS fear COM=1SG.PRO
 「私に恐れをいただくであろう人」

また、主語関係節接頭辞や関係節接頭辞でマークされる *-na* は、他の動詞にはない特殊な活用形をもつ。そのことを示すために、(10-37) に関係節接頭辞でマークされる所有を表す動詞 *-na* の活用形のテンプレートを提示する。

(10-37) 関係節接頭辞でマークされる *-na* 「所有」のテンプレート

- a. *m-na*
 b. *m-TAM-na*
 c. 主語 *-na-o*
 d. 主語 *-o-na*
 e. 主語 *-TAM-o-na*

(10-37a) の、TAM 接頭辞を欠き、主語関係節接頭辞 *m-*と *-na* のみからなる形式は、*-na* の特殊な活用形のひとつである、(10-38) は、その形式を用いた具体例である。

- (10-38) *u-m-saidie* [*m-na* *shida*]
 2SG.SM-3SG.OM-help.SUBJ CL1.SM.REL-POSS difficulty
 「困っている人を助けなさい」

(10-37c) に示す通り、TAM 接頭辞でマークされない場合、関係節接頭辞が *-na* に後続するというのも *-na* の特殊な活用形として挙げることができる¹⁶⁵。(10-39) はその具体例である。

¹⁶⁵ 次の例に示す通り、15, 16, 18 クラスの主語接頭辞と関係節接頭辞でマークされた *-na* は、後続する名詞の指示対象が存在することを表す。

例: *k-ende* [*ku-na-ko* *mbuzi*]
 3SG.SM-go.PFV CL15.SM-POSS-CL15.REL goat
 「彼はヤギのいるところに行った」

(10-39) *u-m-saidie* [*a-na-e* *shida*]
 2SG.SM-3SG.OM-help.SUBJ 3SG.SM-POSS-CL1.REL difficulty
 「困っている人を助けなさい」

なお、(10-37c) と (10-37d) の形式は、関係節接頭辞が、動詞-*na* の現れる位置が異なるが、この二つは、先行詞とすることができるものに違いがみられる。(10-40a)(10-41a) に示す通り、関係節接頭辞が-*na* に後続する場合は、主語（所有者）でも所有物も、先行詞となることができる。一方、関係節接頭辞が、-*na* の前に現れる場合は、(10-40b)(10-41b) に示す通り、主語（所有者）しか先行詞となることができない。

(10-40) a. *tajiri* *njo*=[*a-na-e* *pesa*]
 rich (CL1) BGR=3SG.SM-POSS-CL1.REL money
 b. *tajiri* *njo*=[*a-e-na* *pesa*]
 rich (CL1) BGR=3SG.SM-CL1.REL-POSS money
 「お金をもっている人というのが “tajiri”（金持ち）だ」

(10-41) a. *nguo* [*a-na-zo* *juma*]
 clothes (CL10) 3SG.SM-POSS-CL10.REL PN
 b. **nguo* [*a-zo-na* *juma*]
 clothes (CL10) 3SG.SM-CL10.REL-POSS PN
 「ジュマのもっている服」

10.1.3.3 コピュラ動詞語幹の異形態-*li*

コピュラ動詞語幹の異形態-*li* は様態や場所を示す関係節を形成する際に現れる。(10-42) は、その形を一般化したテンプレート、(10-43) は様態を、(10-44) は場所を表す例である。

(10-42) [主語-*li*-*o*]

(10-43) *na-chaka* *nyi-we* *m^hu* *m^hkubwa* *ja*=[*a-li-vyo* *juma*]
 IPFV:1SG.SM-want 1SG.SM-COP.SUBJ person (CL1) big.CL1 like=3SG.SM-COP-CL8.REL PN
 「私はジュマ（人名）のような偉大な人になりたい」

(10-44) *N-ku-beleke* [*a-li-ko* *gwegwe*]

1SG.SM-2SG.OM-send.SUBJ 3SG.SM-COP-CL15.REL PN

「グウェグウェ（人名）がいるところにあなたを連れて行こうか？」

(10-43) に示す通り、*-li* が 8 クラスの関係節接頭辞 *vyo-* でマークされた場合は、様態が表される。また、(10-44) では *-li* が 15 クラスの関係節接頭辞でマークされているが、このように、15, 16, 18 クラスの関係節接頭辞 *ko-*, *bo-*, *mo-* を用いた場合は、場所が表される¹⁶⁶。*-li* というコピュラ動詞の語幹が、これ以外の関係節接頭辞でマークされることはない。また、*-li* は TAM 接頭辞でマークされることもない。TAM 接頭辞が現れる際は、(10-45) に示す通り、コピュラ動詞-*wa* によって関係節は形成される。

(10-45) [*a-cha-ko-wa* *juma kesho*] *wapi*

3SG.SM-FUT-CL15.REL-COP PN tomorrow where

「ジュマが明日いるところはどこ？」

8 クラスの関係節接頭辞でマークされる *-li* を用いる (10-44) のような例は、空所に対応する名詞句を想定できないタイプの関係節の一つであると考えられる。こうした関係節については、10.2.2.7 節で説明する。

なお、8 クラスの関係節接頭辞でマークされた動詞を含む関係節は時を表すこともあるが、8 クラスの関係節接頭辞 *vyo-* でマークされた *-li* は、時間を表さない。これは、他の動詞が、*vyo-* でマークされる場合に、関係節中の時間副詞の位置が空所となっているのに対して、コピュラ動詞語幹の *-li* が用いられる関係節では、コピュラ補語の位置が空所になっているためであると考えられる。(10-46a) では、コピュラ動詞語幹-*wa* が 8 クラスの関係節接頭辞 *vyo-* でマークされ、その直後にコピュラ補語の *kae* 「カエ（地名）」が現れている。(10-46b) では、(10-46a) と異なり、コピュラ動詞語幹-*li* が 8 クラスの関係節接頭辞 *vyo-* でマークされている。

(10-46) a. *wakati* [*N-na-vyo-wa* *kae*] *na-kaa* *kwa=mwalimu zimba*

time (CL3) 1SG.SM-IPFV-CL8.REL-COP PN IPFV:1SG.SM-live of.CL15=teacher PN

b. **wakati* [*N-li-vyo* *kae*] *na-kaa* *kwa=mwalimu zimba*

time (CL3) 1SG.SM-COP-CL8.REL PN IPFV:1SG.SM-live of.CL15=teacher PN

「カエにいるときは、私はジンバ先生のところに滞在する」

¹⁶⁶ Racine-Issa (2002: 173) には、*-li* を用いた関係節で場所を示す用法は記述されているが、様態を示す用法については言及がない。

10.1.3.4 関係節ではない形式

(10-47a) に示す通り、二つの動詞の定形に挟まれた名詞が双方の動詞の項となることがある。この例は、ともすると後ろの定形節が関係節のようにもみえるが、(10-47b) に示す通り、*mwanak^hele*「子供」とその名詞を主語とする動詞-*kwea*「登る」を、-*kut^ha*「会う」の前に移動させることはできない。このことから、(10-47a) の後続する節 *ka-na-kwea m^hnazi*「彼がココナツの木に登っている」は関係節を形成しているわけではないと考えられる。

- (10-47) a. *nyi-m-kut^hu* *mwanak^hele ka-na-kwea* *m^hnazi*
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV child (CL1) 3SG.SM-IPFV-climb coconut_tree
- b. **mwanak^hele ka-na-kwea* *m^hnazi* *nyi-m-kut^hu*
 child (CL1) 3SG.SM-IPFV-climb coconut_tree 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV
- c. *mwanak^hele [m-na-kwea* *m^hnazi]* *nyi-m-kut^hu*
 child (CL1) CL1.SM.REL-IPFV-climb coconut_tree 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV
 「子供がココナツの木に登っているのを見た」

なお、(10-47c) に示す通り、-*kwea* が主語関係節接頭辞でマークされた場合は、*mwanak^hele*「子供」を、-*kut^ha*「会う」の前に移動させることができる。

(10-47a) は、二つの定形動詞が、その間に現れる一つの名詞句を双方の項としているとみなすのが妥当であろう。こうした項の共有は、他にも観察される。(10-48) では、*mahaa* が、-*βita*「通り過ぎる」と存在を表す所有動詞-*na*によって共有されている。

- (10-48) *u-ka-βita* *mahaa* *βa-na* *mto*
 2SG.SM-COND-pass place (CL16) CL16.SM-POSS river
 「あなたが、川のあるところを通り過ぎたら」

10.2 先行詞の関係節内における統語機能

タイプ1の関係節の先行詞となる名詞句は、関係節内で主語となるものに限定されるが、タイプ2,3,4には、そうした制限はなく、様々な統語機能を担う名詞句が、先行詞となりうる。以下で、それぞれどのような統語機能を担う名詞句が、先行詞となるのかについてみていく。

10.2.1 タイプ1の先行詞は主語に限られるという制限について

タイプ1の関係節において、主語は先行詞となるが、直接目的語は先行詞とならない。そのことは、*-ua*「殺す」を用いたテストから分かる。*-ua*「殺す」は、殺す動作主を主語に、殺される対象を目的語にとる動詞である。まず、(10-49) に示す通り、(10-49B) の *fatuma* 「ファトマ (人名)」を対象と解釈した文も、(10-49B') の *fatuma* 「ファトマ」を動作主と解釈した文も、タイプ2の関係節接頭辞でマークされた *-ua* 「殺す」を用いた疑問文に対する答えとなる。このことから、タイプ2の関係節は、主語も目的語も先行詞としてとることができることが分かる。

(10-49) A: [*a-ø-e-mu-ua* *fatuma*] *nani*

3SG.SM-PFV-3SG.REL-3SG.OM-kill PN who

「ファトマ (人名) を殺したのは誰? / ファトマが殺したのは誰?」

B: *fatuma ka-uligwa* *N=makoto*

PN 3SG.SM-kill.PASS.PFV by=PN

「ファトマはマコト (人名) に殺された」

B': *fatuma ka-mu-uu* *makoto*

PN 3SG.SM-3SG.OM-kill.PFV PN

「ファトマはマコトを殺した」

一方、最初の疑問文にタイプ1の関係節を用いた (10-50) では、*fatuma* 「ファトマ」を対象として解釈した答えのみが容認される。この例から、主語は、タイプ1の関係節の先行詞となるものの、目的語はタイプ1の先行詞とならないことが分かる。

(10-50) A: [*mw-a-mu-ua* *fatuma*] *nani*

CL1.SM.REL-PFV-3SG.OM-kill PN who

「ファトマを殺したのは誰?」

B: *fatuma ka-uligwa* *N=makoto*

PN 3SG.SM-kill.PASS.PFV by=PN

「ファトマはマコトに殺された」

B' **fatuma ka-mu-uu* *makoto*

PN 3SG.SM-3SG.OM-kill.PFV PN

「ファトマはマコトを殺した」

これまでのところ、タイプ1の関係節で、どのような統語機能を担う名詞句が先行詞になるかについては、主語と目的語しか確認していない。しかし、Keenan & Comrie (1977) の提案する接近可能性の階層 (Accessibility Hierarchy) に関する仮説が正しければ、タイプ1の関係節は主語しか先行詞とすることができないと考えられる。

Keenan & Comrie (1977) は、接近可能性の階層として、統語機能を、(10-51) のように階層化することを提案している。

(10-51) 主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格名詞句 > 属格名詞句 > 比較の対象

(10-51) のなかのある特定の統語機能を担う名詞句を関係節化できるのであれば、上記の階層のそれより上 (左側) に位置する統語機能を担う名詞句も関係節化できるという普遍性があるとされる (Keenan & Comrie 1977: 68)¹⁶⁷。例えば、主語を関係節化する関係節構文が、主語だけでなく斜格名詞句も関係節化できるのであれば、その関係節構文では、目的語も関係節化される。目的語を関係節化できず、主語と斜格名詞句だけを関係節化できる関係節化構文は存在しない。

マクンドゥチ方言のタイプ1の関係節で、主語は関係節化されるが、目的語は関係節化されない。上述の Keenan & Comrie (1977) の仮説に従えば、タイプ1の関係節では、目的語以外の統語機能を担う名詞句も関係節化されず、先行詞とはならないと考えられる。マクンドゥチ方言で直接目的語と間接目的語を区別すべきか、あるいは何が斜格名詞句にあたるのかについては、別途検討する必要があるかもしれないが、主語以外がタイプ1の関係節の先行詞となる例はこれまでのところ確認されていない。

10.2.2 タイプ2, 3, 4の先行詞の関係節中での統語機能

タイプ2, 3, 4の関係節では、主語や目的語だけでなく、付加語、共格標識の *na=* でマークされる名詞句、所有者も先行詞となる。以下で、どのような統語機能を担う名詞句が、関係節の先行詞となるのかをみていく。なお、上述の接近可能性の階層の中には、比較の対象が挙げられている。筆者の調査では、タイプ3, 4の関係節で比較の対象を先行詞とする例が容認されることもあったが、決して自然な例ではないようである。

¹⁶⁷ この一般化が当てはまるのは、主語を関係節化できる関係節構文に限定される。

10.2.2.1 主語

タイプ 2, 3, 4 の関係節では、タイプ 1 と同様に、主語が先行詞となる。以下にその例を挙げる。(10-52) では、*mwanak^hele* 「子供」が先行詞となっている。また、(10-53) は、倒置構文の主語 *nyimbo* 「歌」が先行詞となっている。

- (10-52) a. *mwanak^hele* [*a-na-e-kwimba* *nyimbo*]
 child (CL1) 3SG.SM-IPFV-CL1.REL-sing song タイプ 2
- b. *mwanak^hele* [*mw-a-wa* *ka-na-kwimba* *nyimbo*]
 child (CL1) CL1.SM.REL-PFV-COP 3SG.SM-IPFV-sing song タイプ 3
- c. *mwanak^hele* [*a-ø-e-wa* *ka-na-kwimba* *nyimbo*]
 child (CL1) 3SG.SM-PRF-CL1.REL-COP 3SG.SM-IPFV-sing song タイプ 4
 「歌を歌っている子供」

- (10-53) a. *nyimbo* [*i-na-yo-kwimba* *mwanak^hele* *vino* *sasa*]
 song(CL9) CL9.SM-IPFV-CL9.REL-sing child DEM.PROX.CL8 now タイプ 2
- b. *nyimbo* [*i-ø-yo-wa* *i-na-kwimba* *mwanak^hele* *vino* *sasa*]
 song(CL9) CL9.SM-PFV-CL9.REL-COP CL9.SM-IPFV-sing child DEM.PROX.CL8 now タイプ 4
 「子供がちょうど今歌っている歌」

10.2.2.2 目的語

タイプ 2, 3, 4 の関係節の先行詞となりうるのは、主語に限らない。以下に、目的語が先行詞となる例を挙げる。9章で目的語の典型と、その典型から外れる目的語があることを述べたが、典型的な目的語だけでなく、非典型的な目的語もタイプ 2, 3, 4 の関係節構文で関係節化される。なお、以下の例の訳のあとの () 内には、どのようなタイプの目的語が関係節化されているのかを示している。

(10-54) は、目的語を一つだけとる他動詞-*kut^ha* 「会う」の目的語 *mwanafuzi* 「学生」が先行詞となる例である。

- (10-54) a. *mwanafuzi* [*u-ø-ye-m-kut^ha* *jana*]
 student(CL1) 2SG.SM-PFV-CL1.REL-3SG.OM-meet yesterday タイプ 2
- b. *mwanafuzi* [*mw-a-wa* *ku-m-kut^hu* *jana*]
 student (CL1) CL1.SM.REL-PFV-COP 2SG.SM-PFV-3SG.OM-meet.PFV yesterday タイプ 3
- c. *mwanafuzi* [*u-ø-ye-wa* *ku-m-kut^hu* *jana*]
 student (CL1) 2SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 2SG.SM-3SG.OM-meet.PFV yesterday タイプ 4
 「あなたが昨日会った学生」(他動詞目的語)

次に複他動詞-*kʰa*「与える」の一次目的語（間接目的語）と二次目的語（直接目的語）が関係節の先行詞となる例を挙げる。(10-55)は、受取手を表す一次目的語が先行詞となる例、(10-56)は、対象を表す二次目的語が先行詞となる例である。なお、受益や使役を表す動詞の一次目的語と二次目的語も、同じように関係節化することができる。

- (10-55) a. *fundi* [u-ø-yo-m-kʰa pesa]
 craftsman(CL1) 2SG.SM-PFV-CL1.REL-3SG.OM-give money タイプ 2
- b. *fundi* [mw-a-wa ku-m-kʰa pesa]
 craftsman(CL1) CL1.SM.REL-PFV-COP 2SG.SM-3SG.OM-give.PFV money タイプ 3
- c. *fundi* [a-ø-e-wa ku-m-kʰa pesa]
 craftsman (CL1) 3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 2SG.SM-3SG.OM-give.PFV money タイプ 4
 「あなたがお金をあげた職人」（複他動詞の一次目的語）

- (10-56) a. *pesa* [u-ø-zo-m-kʰa fundi]
 money (CL10) 2SG.SM-PFV-CL10.REL-3SG.OM-give craftsman タイプ 2
- b. *pesa* [u-ø-zo-wa ku-m-kʰa fundi]
 money (CL10) 2SG.SM-PFV-COP 2SG.SM-3SG.OM-give.PFV craftsman タイプ 4
 「あなたが職人にあげたお金」（複他動詞の二次目的語）

次に、対称的な統語的特徴をもつ二つの目的語をとる適用動詞-*katʰia*「切る」の例を挙げる。この動詞は、対象と道具を目的語とすることができるが、そのどちらも関係節化される。(10-57)は対象 *kamba*「ロープ」が先行詞となる例、(10-58)は道具 *kisu*「ナイフ」が先行詞となる例である。

- (10-57) a. *kamba* [a-ø-yo-katʰia kisu kino]
 rope (CL9) 3SG.SM-PFV-CL9.REL-cut.APPL knife DEM.PROX.CL7 タイプ 2
- b. *kamba* [a-ø-yo-wa ka-katʰii kisu kino]
 rope (CL9) 3SG.SM-PFV-CL9.REL-COP 3SG.SM-cut.APPL.PFV knife DEM.PROX.CL7 タイプ 4
 「彼がこのナイフで切ったロープ」（対象と道具が目的語となる場合の対象）

- (10-58) a. *kisu* [a- \emptyset -cho-kat^hia] *kamba ino*
 knife (CL7) 3SG.SM-PFV-CL7.REL-cut.APPL rope DEM.PROX.CL9 タイプ 2
- b. *kisu* [a- \emptyset -cho-wa] *ka-kat^hii* *kamba ino*
 knife (CL7) 3SG.SM-PFV-CL7.REL-COP 3SG.SM-cut.APPL.PFV rope DEM.PROX.CL9 タイプ 4
 「彼がロープを切ったナイフ」(対象と道具が目的語となる場合の道具)

非典型的な目的語も、関係節の先行詞となる。(10-59) では、場所を表す名詞 *nyumba-ni* 「家 (に)」が関係節化されている。

- (10-59) a. *nyumba-ni* [a-na-ko-kaa] *juma*
 house-LOC (CL15) 3SG.SM-IPFV-CL15.REL-live PN タイプ 2
- b. *nyumba-ni* [a- \emptyset -ko-wa] *ka-na-kaa* *juma*
 house-LOC (CL15) 3SG.SM-PFV-CL15.REL-COP 3SG.SM-IPFV-live PN タイプ 4
 「ジュマの住んでいる家」(場所)

(10-60) では、-*enda* 「行く」とともに用いられる生理現象を表す名詞 *chafya* 「くしゃみ」が先行詞となっている。

- (10-60) a. *chafya* [a- \emptyset -yo-kwenda]
 sneeze (CL9) 3SG.SM-PFV-CL9.REL-go タイプ 2
- b. *chafya* [a- \emptyset -yo-wa] *k-ende*
 sneeze (CL9) 3SG.SM-PFV-CL9.REL-COP 3SG.SM-go.PFV タイプ 4
 「彼がしたくしゃみ」(-*enda* 「行く」を用いた慣用表現)

(10-61) は、「人」の状態文の所有者を表す目的語が関係節化されることを示す例である(9.1.5.2 節参照)。また、(10-62) は、時を表す名詞が関係節化されることを示す例である。なお、この二つの目的語が、タイプ 3, 4 の関係節の先行詞となるかどうかは未確認である。

- (10-61) a. *mwanak^hele* [u-ø-ye-ṁ-vimba mguu]
 child (CL1) CL3.SM-PFV-CL1.REL-3SG.OM-swell leg タイプ 2
 b. *mwanak^hele* [a-ø-ye-vimba mguu]
 child (CL1) CL9.SM-PFV-CL1.REL-3SG.OM-swell leg タイプ 2
 「足の腫れた子供」
 (「人」の状態文の所有者を表す目的語、(10-61b)の「子供」は主語)

- (10-62) *siku* ya=ja=kesho njo=[a-ø-yo-kufwa nyerere]
 day (CL9) of.CL9=like=tomorrow BGR=3SG.SM-PFV-CL9.REL-die PN タイプ 2
 「ニエレレが死んだのは、明日だ」(時間)

10.2.2.3 付加語

(10-63) (10-64) に示す通り、対価や死因を表す付加語は先行詞となる¹⁶⁸。

- (10-63) a. *pesa* [N-ø-zo-kuza gari yangu]
 money (CL10) 1SG.SM-PFV-CL10.REL-sell car my.CL9 タイプ 2
 b. *pesa* [N-ø-zo-wa ny-uzu gari yangu]
 money (CL10) 1SG.SM-PFV-CL10.REL-COP 1SG.SM-sell.PFV car my.CL9 タイプ 4
 「私が車を売って得たお金」(対価)

- (10-64) a. *maradhi* [wa-ø-yo-kufwa wat^hu wengi]
 disease (CL9) 3PL.SM-PFV-CL9.REL-die people many.CL2 タイプ 2
 b. *maradhi* [wa-ø-yo-wa wa-fu wat^hu wengi]
 disease (CL9) 3PL.SM-PFV-CL9.REL-COP 3PL.SM-die.PFV people many.CL2 タイプ 4
 「多くの人が死んだ病気」(死因)

なお、これらの付加語は、15 クラスの属辞 *kwa*=でマークされ現れることもあるが、

¹⁶⁸ 注 163 でも述べた通り、スワヒリ語には、マクンドゥチ方言のタイプ 2 と同じ形式的特徴をもつ関係節と、マクンドゥチ方言のタイプ 3, 4 の関係節のコピュラ動詞に相当する [amba-関係節接頭辞] を用いた関係節が存在する。米田 (2012: 20, 21) によれば、(10-63) (10-64) の *pesa* 「お金」や *maradhi* 「病気」のような名詞句を関係節化する際は、タイプ 2 相当の関係節ではなく、[amba-関係節接辞] を用いた関係節が用いられる。なお、米田は、(10-63) (10-64) のような例では、先行詞と関係節は「外の関係」にあり、先行詞に対応する空所が関係節にはないと考えているようだが、本論文ではそうした立場をとらない。

同じように *kwa=* でマークされる名詞でも、道具を表すものは、(10-65) に示す通り、タイプ2の先行詞とならない。道具が先行詞となる場合は、必ず、適用動詞が用いられる¹⁶⁹。

- (10-65) a. **kisu* [a-ø-cho-kat^ha]
 knife (CL7) 3SG.SM-PFV-CL7.REL-cut
 b. *kisu* [a-ø-cho-kat^hia]
 knife (CL7) 3SG.SM-PFV-CL7.REL-cut.APPL
 「彼が切るのに使ったナイフ」(付加語(道具))

10.2.2.4 主語・目的語・付加語以外の名詞句

主語、目的語、付加語とならない名詞句のうち、「譲渡不可能名詞」は、関係節の先行詞となる。(10-66a) は、「人」の状態文の譲渡不可能名詞1が関係節の先行詞となることを示す例である。なお、譲渡不可能名詞が主語、その所有者が目的語となる構造の「人」の状態文もあるが(9.1.5.2 節参照)、(10-66b) に示す通り、主語となる譲渡不可能名詞も先行詞となることができる。なお、譲渡不可能名詞1が、タイプ4の関係節の先行詞となるかは未確認である。

- (10-66) a. *damu* [a-ø-yo-lawa mwanangu]
 blood (CL9) 3SG.SM-PFV-CL9.REL-come_out child:my タイプ2
 b. *damu* [i-ø-yo-m-lawa mwanangu]
 blood (CL9) CL9.SM-PFV-CL9.REL-3SG.OM-come_out child:my タイプ2
 「私の子供の流した血」(譲渡不可能名詞1)

¹⁶⁹ 関係節が理由を表す場合も、適用動詞が用いられる。ちなみに、この理由を表す関係節は、5クラスの関係節接頭辞を用いて形成されるが、明示的な先行詞をもたない。ただし、次のb.に示す通り、*jambo* 「こと」という5クラス名詞が、定形節で15クラスの属辞 *kwa=* でマークされ理由を表すことを考慮にいと、*jambo* が、この理由を表す関係節の先行詞である可能性が指摘できる。興味深いことに、定形節では、適用動詞が理由を表す *jambo* を目的語とすることはない。定形節中において、理由を表す *jambo* は *kwa=* でマークされ現れる。次のa.では、適用動詞が5クラスの関係節接頭辞 *lyo-* でマークされ理由を表している。b.では、定形節中に *kwa=* でマークされた *jambo* が現れ、理由を表している。

例：a. *ku-l-ijua* [a-na-lyo-kwendea kajengwa makoto]
 2SG.SM-CL5.OM-know.PFV 3SG.SM-IPFV-CL5.REL-go.APPL PN PN
 「マコトがカジェングワに行く理由を知っている？」
 b. *juma ka-cha-kwenda mji-ni kwa=jambo gani*
 PN 3SG.SM-FUT-go town-LOC of.CL15=matter what_kind
 「ジュマはどんな理由で街に行くの？」

(10-67) に示す通り、譲渡不可能名詞 2 も関係節の先行詞となる。なお、譲渡不可能名詞 2 の所有者を表す名詞句は目的語となるが、(10-68) に示す通り、そうした名詞句も関係節化することができる。

- (10-67) a. *ṁkono* [nyí-ø-o-ṁ-gwíá ba-sígombe]
 arm (CL3) 1SG.SM-PFV-CL3.REL-3SG.OM-hold Mr.-PN タイプ 2
- b. *ṁkono* [nyí-ø-o-wá nyí-ṁ-gwíí ba-sígombe]
 arm (CL3) 1SG.SM-PFV-CL3.REL-COP 1SG.SM-3SG.OM-hold.PFV Mr.-PN タイプ 4
 「私がつかんだシゴンベおじさんの腕」(譲渡不可能名詞 2)

- (10-68) a. *ṁtʰu* [nyí-ø-ye-ṁ-gwíá ṁkono]
 person (CL1) 1SG.SM-PFV-CL1.REL-hold hand タイプ 2
- b. *ṁtʰu* [mw-a-wá nyí-ṁ-gwíí ṁkono]
 person (CL1) CL1.SM.REL-PFV-COP 1SG.SM-3SG.OM-hold.PFV hand タイプ 3
- c. *ṁtʰu* [nyí-ø-yo-wá nyí-ṁ-gwíí ṁkono]
 person (CL1) 1SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 1SG.SM-3SG.OM-hold.PFV hand タイプ 4
 「私を手をつかんだ人」(「譲渡不可能名詞 2」の所有者)

ここまで見てきた通り、節中の形態的に無標の名詞句は、統語機能にかかわらず概ねタイプ 2, 3, 4 の関係節構文で関係節化できる。ただし、倒置構文の元主語だけは、関係節化することができない。(10-69) は、動詞-*imba*「歌う」の主語として、*nyimbo*「歌」が現れる倒置構文で、*watʰu*「人」が対応する非倒置文の主語となる。なお、倒置構文の元主語がタイプ 3, 4 の関係節の先行詞となることができるかについては未確認である。

- (10-69) **watʰu* [i-na-o-kwimba nyimbo]
 people (CL2) CL9.SM-IPFV-CL2.REL-sing song (倒置構文の降格した元主語)

10.2.2.5 共格標識 *na=* でマークされる名詞句

上記の形態的に無標な名詞句だけでなく、共格標識の *na=* でマークされる名詞句もタイプ 2, 3, 4 の関係節構文で関係節化できる。対応する定形節で *na=* でマークされる名詞句が、関係節の先行詞となる場合、関係節中に現れる共格標識は拘束代名詞でマークされる。(10-70b, c, d) は、(10-77a) の定形節で *na=* でマークされている名詞句 *mwanakʰele*「子供」が関係節の先行詞となることを示している。なお、この場合、関係節中の *na=* は、1 クラスの拘束代名詞でマークされる。

(10-70) a. *N-cha-kwenda* *ɲji-ni* *na=mwanak^hele* *yuno*

1SG.SM-FUT-go town-LOC COM=child DEM.PROX.CL1

「私はこの子供と街に行くだろう」(定形節)

b. *mwanak^hele* [*N-cha-e-kwenda* *ɲji-ni* *na=e*]

child (CL1) 1SG.SM-FUT-CL1.REL-go town-LOC COM=CL1.PRO タイプ2

c. *mwanak^hele* [*mw-a-wa* *N-cha-kwenda* *ɲji-ni* *na=e*]

child (CL1) CL1.SM.REL-PFV-COP 1SG.SM-FUT-go town-LOC COM=CL1.PRO タイプ3

d. *mwanak^hele* [*a-ø-e-wa* *N-cha-kwenda* *ɲji-ni* *na=e*]

child (CL1) 3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 1SG.SM-FUT-go town-LOC COM=CL1.PRO タイプ4

「私が一緒に街に行く子供」

10.2.2.6 所有者

属辞でマークされ所有者を表す名詞句は、タイプ 2, 3, 4 の関係節の先行詞となる。(10-71b, c, d) に示す通り、(10-71a) の属辞でマークされた所有者を表す名詞句が先行詞となる場合、関係節中には、先行詞の名詞句が所有者であることを示す所有詞が現れる。

(10-71) a. *nyi-m-kut^hu* *baba* *ya=mwanafuzi*

1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV father of.CL1=student

「私は生徒の父に会った」(定形節)

b. *mwanafuzi* [*nyi-ø-e-m-kut^ha* *baba-ake jana*]

student(CL1) 1SG.SM-PFV-CL1.REL-3SG.OM-meet father-his yesterday タイプ2

c. *mwanafuzi* [*mw-a-wa* *nyi-m-kut^hu* *baba-ake jana*]

student (CL1) CL1.SM.REL-PFV-COP 1SG.SM-PFV-3SG.OM-meet father-his yesterday タイプ3

d. *mwanafuzi* [*a-ø-e-wa* *nyi-m-kut^hu* *baba-ake jana*]

student (CL1) 3SG.SM-PFV-CL1.REL-COP 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV father-his yesterday タイプ4

「昨日私がその父親にあった生徒」(所有物が目的語)

10.2.2.7 先行詞となる名詞句を想定できない関係節

ここまで、マクンドゥチ方言の関係節に先行詞があることを前提に記述を行ってきた。マクンドゥチ方言の関係節では、先行詞が明示的に現れないことも多いが、ほとんどの場合、関係節内の空所に対応する名詞を想定することはできる。例えば、1クラスの関係節接頭辞でマークされる関係節については *mt^hu* 「人」が先行詞になっていると考えられる。あるいは、15, 16, 18 クラスの関係節接頭辞でマークされる関係節については

mahaa「場所」を、関係節接頭辞と一致する名詞句として想定することができる。また、あとの (10-80) は、*vipolo*「袋 (8 クラス)」があるという文脈を設定して聞き出しを行っているが、1 クラスや 15, 16, 18 クラス以外の関係節接頭辞でマークされる場合も、文脈から空所に対応する名詞句がどのようなものが明らかな場合が多い。

しかし、中には、先行詞が現れないだけでなく、関係節接頭辞と一致する名詞句を想定できない関係節もある。(10-72) (10-73) は、8 クラスの関係節接頭辞でマークされた関係節によって、時を示す副詞節が形成される例である。(10-73) に示す通り、*wakati*「時」という名詞がこうした節に前接することもあるが、*wakati* は、3 クラス名詞であるため、先行詞とみなすことができない。

(10-72) *wakati* [tu-ø-vyo-rudi p^hwa-ni] tw-evu tu-choko
 time (CL3) 1PL.SM-PFV-CL8.REL-come_back sea-LOC 1PL.SM-COP.PST 1PL.SM-get_tired.PFV
 「海から戻ったとき、私たちは疲れていた」(タイプ 2)

(10-73) [a-ø-vyo-ja-wa ka-na-tembea] ka-m-ono mwalimu
 3SG.SM-PFV-CL8.REL-come-COP 3SG.SM-IPFV-walk 3SG.SM-3SG.OM-see.PFV teacher
 「彼は歩いていたとき、先生に会った」(タイプ 4)

また、(10-74) では、8 クラスの関係節接頭辞でマークされる関係節によって様態が表されているが、様態に対応するような 8 クラス名詞も見当たらない。

(10-74) *ku-v-ijua* [i-na-vyo-ligwa]
 2SG.SM-CL8.OM-know.PFV CL9.SM-IPFV-CL8.REL-eat.PASS
 「(マンゴーの) 食べられ方 (食べ方) 知ってる？」(タイプ 2)

ただし、対応する具体的な名詞こそないものの、こうした関係節も空所を含むと考えられる。そして、空所に対応する部分は、定形節において、8 クラスの指示詞を含む名詞句として現れることがある。次の (10-75) では、主名詞の *saa*「時間」は、8 クラス名詞ではないが、8 クラスの指示詞と共起している。

(10-75) *ka-uku* vino saa sita
 3SG.SM-leave.PFV DEM.PROX.CL8 hour six
 「彼はこのちょうど 12 時に発った」

また、(10-76) では、様態が 8 クラスの指示詞近称 *vino* で表されている。なお、様態を表す指示詞は、形態的に無標ではなく様態標識 *ja*=「ように」でマークされて現れることが多い¹⁷⁰。

(10-76) *ka-na-kweta ja=vino*
 3SG.SM-IPFV-butt_walk like=DEM.PROX.CL8
 「彼女は、こんな風に尻をひきずって進む」

マクンドゥチ方言には、上記のように、先行詞となる名詞句を想定できない関係節は存在するものの、空所を含まないと断定できる関係節はこれまでのところ確認されていない。例えば、日本語の「外の関係」に対応する表現は、関係節構文ではなく、不定形のコピュラ動詞を介して表される。(10-77) では、*hadithi*「話」の内容を表す定形節が、コピュラ動詞不定形 *ku-wa* に後続して現れている¹⁷¹。

(10-77) *my-evu N-sikii hadithi ku-wa sungura ka-shindwa mashindano*
 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-hear.PFV story (CL9) INF-COP hare 3SG.SM-win.PASS.PFV race
 「私は、ウサギがレースに負ける話を聞いた」

10.3 四つの関係節の使い分け

ここまで、タイプ 1 からタイプ 4 までの関係節の形態的特徴、先行詞となりうる名詞句の統語的特徴を観察してきた。タイプ 1,2 とタイプ 3,4 には、特に否定極性に関して表現し分けることのできるものに差があること、タイプ 1 の先行詞となるものは、主語に限られること、タイプ 1,3 の先行詞は 1 クラス名詞を主名詞とする名詞句であるといったことは指摘できるが、それ以外の使い分けの条件については分からない。ただ、話者が自発的に発する例を観察する限りでは、複数の選択肢がある場合、制限のゆるいも

¹⁷⁰ 歌の中では *ja*=「ように」が省略されているようにみえる例が観察される。次の a. では *ja* が現れているが、b. では *ja* が無い。ただし、この二つは同じメロディにのせて歌われるもので、*ja*=の不在は、モーラ数を整えるために生じている可能性が考えられる。

例 : a. *tu-choke ja=vivyo*
 1PL.SM-get_tired.SUBJ like=DEM.MED.CL8
 b. *na=tu-choke vivyo*
 COM=1PL.SM-get_tired.SUBJ DEM.MED.CL8
 「そんな風に休みましょう」

¹⁷¹ 米田 (2012: 19) によれば、スワヒリ語では、(10-77) に相当する例で、[*amba*—関係節接頭辞] を介した関係節 (注 162 参照) が用いられる。

のよりも、制限のきついものが好まれるようである。例えば、先行詞が主語で、その名詞クラスが1クラス、アスペクトが未完結の場合、タイプ2-4ではなく、タイプ1の関係節が用いられる。Racine-Issa (2002: 165) も、特に否定極性と TAM の使い分けに関して、同様の指摘を行っている。

なお、本章の以下の部分で、タイプ3,4の関係節構文の例を提示しないこともあるが、以下で述べることに限っては、タイプ1,2の関係節構文だけでなく、タイプ3,4の関係節構文にもあてはまる。

10.4 関係節の名詞らしさ

前節でも指摘した通り、マクンドゥチ方言の関係節は、先行詞を伴わずに現れることがある。先行詞が伴わない関係節は、主語や目的語となるため、一見すると名詞と同じ統語的性質をもっているように見える。しかし、関係節は、名詞が現れることのできる位置すべてに現れるわけではない。本節では、関係節の現れる位置と現れない位置について記述を行い、関係節の名詞らしさについて考察する。

まず、(10-78) では、関係節が後続する動詞の主語となっている。

- (10-78) a. [*m-na-tenda* *kazi*] *ka-cha-vata* *pesa*
 CL1.SM.REL-IPFV-do work 3SG.SM-FUT-get money
 b. [*a-na-e-tenda* *kazi*] *ka-cha-vata* *pesa*
 3SG.SM-IPFV-CL1.REL-do work 3SG.SM-FUT-get money
 「仕事をする人はお金を得るだろう」(主語)

(10-79)(10-80) では、それぞれ関係節が目的語の位置に現れ、目的語接頭辞と一致している。

- (10-79) *nyi-m-kut^hu* [*m-na-kwea* *mnazi*]
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV CL1.SM.REL-IPFV-climb coconut_tree
 「私はヤシの木に登っている人を見た」(目的語)

- (10-80) [*N-me-vyo-funga*] *vi-chukue*
 1SG.SM-PRF-CL8.REL-tie CL8.OM-take.IMP
 「わたしが縛ったもの(袋)はもっていきなさい」(目的語)

(10-81) は、関係節が場所を表す例である。

(10-81) *N-ku-beleke* [*a-na-ko-kaa* *juma*]
1SG.SM-2SG.OM-send.SUBJ 3SG.SM-IPFV- CL15.REL-live PN
「ジュマが住んでいるところにあなたを連れて行こうか？」(場所)

(10-82) は、関係節が所有を表す動詞-*na* に後続する例で、関係節の指示対象が不在であることを表している。

(10-82) a. *ha-ku-na* [*ṁ-na-kwimba* *nyimbo*]
NEG-CL15.SM-POSS CL1.SM.REL-IPFV-sing song
「歌っている人はいない」(所有の-*na* に後続する例)

b. *ha-ku-na* [*wa-na-o-kwimba* *nyimbo*]
NEG-CL15.SM-POSS CL2.SM-IPFV-CL2.REL-sing song
「歌っている人々はいない」(所有の-*na* に後続する例)

関係節は、接語でマークされることもある。(10-83) は、「自転車を運転する人」を意味する関係節が共格標識 *na=* で関係節がマークされている。

(10-83) a. *ny-ende* *na=[ṁ-na-kwendesha* *baskeli]*
1SG.SM-go.PFV COM=CL1.SM.REL-IPFV-drive bicycle
b. *ny-ende* *na=[a-na-e-kwendesha* *baskeli]*
1SG.SM-go.PFV COM=3SG.SM-IPFV-CL1.REL-drive bicycle
「私は自転車を運転する人と行った」(共格標識 *na=* でマークされる例)

(10-84) (10-85) は、関係節が「~のように」を意味する様態標識 *ja=* でマークされる例である。(10-84) では、人を指示対象とする関係節が、(10-85) では、物(ナイフ)を意味する関係節が、*ja=* でマークされている。

(10-84) *na-chaka* *u-cheze* *ja=[mw-a-cheza* *vino* *sasa]*
IPFV:1SG.SM-want 2SG.SM-play.SUBJ like=CL1.SM.REL-PFV-play DEM.PROX.CL8 now
「私はあなたに、たった今踊った人のように踊ってほしい」
(*ja=* でマークされる例)

- (10-85) *na-chaka* *kisu* *ja=[N-ø-cho-ki-tumia* *juzi]*
 IPFV:1SG.SM-want knife (CL7) like=1SG.SM-PFV-CL7.REL-CL7.OM-use the_other_day
 「先日私が使ったようなナイフが欲しい」 (*ja*=でマークされる例)

(10-86)(10-87) は関係節がコピュラ文中に現れる例である。それぞれ、「誰がジュマを殴ったか」、「あなたは何を拾ったか」という WH 疑問文の答えである。WH 疑問文の答えとなる文中で、*mw-a-m-piga* 「殴った人」、*nyi-ø-yo-okota* 「私が拾ったもの」という既知の情報を表す関係節は、(10-86a)(10-87a) のように、節頭に現れることもあれば、(10-86b)(10-87b) のように、前提標識 *njo*=のあとに現れることもある。

- (10-86) a. [*mw-a-m-piga* *juma]* *pandu*
 CL1.SM.REL-PFV-3SG.OM-hit PN PN
 b. *pandu* *njo=[mw-a-m-piga* *juma]*
 PN BGR=CL1.SM.REL-PRF-hit PN
 「ジュマを殴ったのはパンドゥだ」
 (コピュラ主語になる例、及び *njo*=でマークされる例)

- (10-87) a. [*nyi-ø-yo-okota]* *embe*
 1SG.SM-PFV-CL9.REL-pick_up mango(CL9)
 b. *embe* *njo=[nyi-ø-yo-okota]*
 mango (CL9) BGR=1SG.SM-PFV-CL9.REL-pick_up
 「私が拾ったのはマンゴーだ」
 (コピュラ主語になる例、及び *njo*=でマークされる例)

ここまで挙げてきた例をみると、先行詞を欠いた関係節は、統語的に名詞と同じ性質を有しており、名詞が現れることのできる位置であれば、関係節も現れることができるように思われる。しかし、中には、関係節単独で現れることのできない位置も存在する。

例えば、(10-88) に示す通り、名詞は属辞に後続できるが、関係節は属辞に直接後続することができない。関係節が属辞に後続する際は、(10-88a) の *kit^hu* 「モノ」のような名詞類に属する語が属辞と関係節の間に必ず介在する。

(10-88) a. *si-i-ji* *bei ya=kit^{hu}* [*a-na-cho-chaka*]
 1SG.SM:NEG-CL9.OM-know.PFV price of.CL9=thing(CL7) 3SG.SM-IPFV-CL7.REL-want
 「私は彼がほしいものの値段を知らない」

b. **si-i-ji* *bei ya=[a-na-cho-chaka]*
 1SG.SM:NEG-CL9.OM-know.PFV price of.CL9=3SG.SM-IPFV-CL7.REL-want

また、関係節は、英語の受動文の *by* にあたる行為者標識 *nyi=* の直後に現れることもできない。(10-89a) では、行為者標識と関係節の間に、5クラスの指示詞遠称 *lilya* が現れているが、行為者標識に関係節が後続する際も、必ず名詞類に属する語が間に現れる。

(10-89) a. *N-kazwa* *N=lilya* [*tu-ø-lyo-kulya* *jana*]
 1SG.SM-please.PASS.PFV by=DEM.DIST.CL5 1PL.SM-PFV-.REL.CL5-eat yesterday
 「私は、私たちが昨日食べたあれ（果物）が好きだ」

b. **N-kazwa* *N=[tu-ø-lyo-kulya* *jana]*
 1SG.SM-please.PASS.PFV by=1PL.SM-PFV-.REL.CL5-eat yesterday

関係節を直接マークすることのできない属辞や行為者標識というのは、もっぱら名詞をホストとする。それに対して、関係節を直接マークすることのできる様態標識 *ja=* 「～のように」、共格標識 *na=* 「～とともに」、前提標識 *njo=* というのは、名詞だけでなく、(名詞化された不定形以外の) 動詞をホストとすることもある。以下にそのことを示す例を挙げる。まず、(10-90) (10-91) (10-92) は、それぞれ、*ja=*、*na=*、*njo=* に名詞が後続することを示している。

(10-90) *ku-na-lia* *ja=komba*
 2SG.SM-IPFV-cry like=galago
 「ガラゴ（ブッシュベイビー）のようにあなたは泣いている」

(10-91) *mambo* *ya=nyimbo* *i-wa-kaza* *na=mashuzi*¹⁷²
 things (CL6) of.CL6=song (CL9) CL9.SM-3PL.OM-please.PFV COM=farts
 「歌の内容を彼らは気に入りました、それとおならも」

¹⁷² この例の主語の主名詞は6クラスの *mambo* 「こと」と考えられるが、主語接頭辞は9クラスのものが現れている。この一致は、動詞の直前の9クラス名詞 *nyimbo* 「歌」によって引き起こされている可能性がある。

(10-92) *yuno* *njo=ṁke* *yangu*
 DEM.PROX.CL1 BGR=wife my.CL1
 「この人こそが私の妻だ」

これらの接語が、名詞（類）だけでなく、（不定形でない）動詞もホストとすることは、(10-93) から分かる。(10-93) は、様態標識 *ja=*、共格標識 *na=*、前提標識 *njo=* をすべて含んでいるが、どの接語も名詞ではなく、動詞活用形をホストとしている。現れる順に説明すると、まず、*njo=* は、拘束代名詞を伴ったコピュラ動詞完結形 *vi-wa-ko* 「(食べ物がある) ある」をマークしている¹⁷³。また、*na=* は、1 人称複数の主語接頭辞でマークされたコピュラ動詞過去形 *tw-evu* をホストとしている。*ja=* は、2 人称複数の主語接頭辞と TAM 接頭辞 *ka-* 「条件」でマークされた *-lima* 「耕す」をホストとしている。

(10-93) *vyakulya* *u-ka-na* *pesa* *vy-evu* *njo=vi-wa-ko*
 food (CL8) 2SG.SM-COND-POSS money CL8.SM-COP.PST BGR=CL8.SM-COP.PFV- CL15.PRO
na=tw-evu *tu-ka-lima*
 COM=1PL.SM-COP.PST 1PL.SM-CONS-cultivate
ja=ṁ-ka-lima *ku-na-vi-βata*
 like=2PL.SM-COND-cultivate 2SG.SM-IPFV-CL8.OM-get
 「食べ物は、あなたにお金があればあった、そして私たちは耕していた、あなたたちが耕したら、ご飯を手に入れるように」

統語的特徴から、関係節の名詞らしさを考えた場合、単独で項の位置に現れることに着目すれば、関係節は「名詞的」であるといえる。しかし、名詞だけでなく動詞もホストとする接語しか関係節をマークすることができないという事実からは、関係節が「節」であることが示唆される。この二つを考慮すると、マクンドゥチ方言の関係節は、名詞句と節との中間に位置づけられる統語的性質をもつと考えるのが穏当であろう。

なお、名詞化された動詞である動詞不定形は、属辞や行為者標識 *nyi=* の直後に現れることができる。次の (10-94) では属辞に動詞不定形 *ku-choea* 「話すこと」が後続している。また、(10-95) では行為者標識 *nyi=* に動詞不定形 *ku-lya* 「食べること」が後続して

¹⁷³ *njo=* は、スワヒリ語のコピュラの強調形に対応することが翻訳調査から分かっているが、(10-93) に示す通り、名詞類だけでなく、名詞化されていない動詞活用形も後続することを踏まえると、コピュラとは呼べない。*njo=* に後続する名詞類は、既に文脈にあるものを表すということは言えそうだが、*njo=* に後続する名詞化されていない動詞が何を表しているのかは現段階では一般化できていない。

いる。

- (10-94) *hu-na* *lya=ku-choea*
2SG.SM:NEG-POSS of.CL5=INF-speak
「あなたは話すこと（言葉）はないか？」

- (10-95) *jimwi li-kazwa* *N=ku-lya maboga*
genies CL5.SM-pleas.PASS.PFV by=INF-eat pumpkins
「鬼はカボチャを食べることを好む」

10.5 10章のまとめ

本章では、マクンドゥチ方言の関係節の記述を行った。マクンドゥチ方言の関係節の形成法には四つのタイプがある。主語関係節接頭辞や関係節接頭辞で語彙的な内容を表す動詞が直接マークされることにより形成されるタイプの関係節には、表し分けることのできる TAM や否定極性に制限がある一方、主語関係節接頭辞や関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞を介して形成される関係節には、こうした制限はない。また、主語関係節接頭辞で動詞が直接マークされることにより形成されるタイプの関係節は、主語しか先行詞とすることができないが、残りの三つの関係節では、主語だけでなく、目的語や、付加語、所有者を表す名詞句、共格標識 *na=* でマークされた名詞句も先行詞とすることができる。このように、関係節化できる名詞句の統語機能に大きな制限がないというのは、マクンドゥチ方言の関係節の特徴の一つとして挙げることができるだろう。ただし、マクンドゥチ方言の関係節は必ず空所を含むということも同時に留意すべきである。

マクンドゥチ方言の関係節の別の特徴として、先行詞なしで、関係節を含む節中の項の位置に現れることができるという点が挙げられる。この特徴だけみると、関係節は統語的に名詞と同じ性質を有しているようにも思われるが、共起できる接語まで含めて考えてみると、節としての特徴をもつことがみえてくる。なお、スワヒリ語の関係節も、先行詞なしで現れることが一応指摘されているが (Krifka 1995: 1404)、どの位置に生起できるか、あるいはできないかといった統語的性質については記述がない。

11章 指示詞縮約形と主題の標示

マクンドゥチ方言の指示詞は、近称・中称・遠称の三系列からなる。このうち、近称と中称には、基本形に加えて、縮約形が存在することが知られる (Racine-Issa 2002: 59, 62)。(11-1) では、*-ja*「来る」の完結形の前に現れる *mt^hu*「人」が、近称基本形の *yuno*、中称基本形の *uyo* で修飾されており、*-ja*「来る」の後には、近称、あるいは中称の縮約形が現れている。

(11-1) a. *mt^hu yuno ka-ja=yu*
person DEM.PROX.CL1 3SG.SM-come.PFV=DEM.PROX.CL1
「この人は来た」

b. *mt^hu uyo ka-ja=yo*
person DEM.MED.CL1 3SG.SM-come.PFV=DEM.MED.CL1
「その人は来た」

この指示詞縮約形については、「切り離されて現れ、(同じ節内の) 他の指示詞の参照として用いられる」(Racine-Issa 2002: 59) という説明に留まっており、音形以外の形式的特徴や機能の詳細については明らかにされていない。本章では、この指示詞の縮約形が主題構成素と一致する主題標識であることを示す。

11.1 節では、指示詞縮約形と基本形の音形を確認する。11.2 節では、指示詞縮約形が基本形とは異なる統語的性質を有することを示す。11.3 節では、指示詞縮約形が主題構成素と一致することを示す。11.4 節では、遠称については、基本形が主題構成素との一致のために用いられることを示す。11.5 節では、述語に先行する位置に現れる構成素であれば、統語機能にかかわらず、指示詞縮約形と一致することを示す。11.6 節では、指示詞縮約形を用いた構文は、+Addressation という指定がなされている点で、左方移動構文や倒置構文といったほかの主題化構文とは異なることを示す。

11.1 指示詞縮約形の音形

マクンドゥチ方言の指示詞は、照応関係にある名詞の名詞クラスに応じて音形が異なる。指示詞の基本形は、近称、中称ともに2音節だが、縮約形は1音節で、近称は基本形の初頭音節に、中称は基本形の末音節に対応する。遠称は基本形のみで縮約形をもた

ない。以下に近称と中称の基本形と縮約形、遠称の基本形を挙げる。なお、近称と中称には、重複形もあるが、重複形は本章の議論と関わらないため、以下の表では割愛する。

表 11-1：指示詞の基本形と縮約形

	近称基本	近称縮約	中称基本	中称縮約	遠称基本
CL1	<i>yuno</i>	= <i>yu</i>	<i>uyo</i>	= <i>yo</i>	<i>yulya</i>
CL2	<i>wano</i>	= <i>wa</i>	<i>wao</i>	= <i>o</i>	<i>walya</i>
CL3	<i>uno</i>	= <i>u</i>	<i>uo</i>	= <i>o</i>	<i>ulya</i>
CL4	<i>ino</i>	= <i>i</i>	<i>iyoy</i>	= <i>yo</i>	<i>ilya</i>
CL5	<i>lino</i>	= <i>li</i>	<i>ilyoy</i>	= <i>lyoy</i>	<i>lilya</i>
CL6	<i>yano</i>	= <i>ya</i>	<i>yayoy</i>	= <i>yo</i>	<i>yalya</i>
CL7	<i>kino</i>	= <i>ki</i>	<i>ichoy</i>	= <i>cho</i>	<i>kilya</i>
CL8	<i>vino</i>	= <i>vi</i>	<i>ivyoy</i>	= <i>vyo</i>	<i>vilya</i>
CL9	<i>ino</i>	= <i>i</i>	<i>iyoy</i>	= <i>yo</i>	<i>ilya</i>
CL10	<i>zino</i>	= <i>zi</i>	<i>izoy</i>	= <i>zo</i>	<i>zilya</i>
CL15	<i>kuno</i>	= <i>ku</i>	<i>ukoy</i>	= <i>ko</i>	<i>kulya</i>
CL16	<i>βano</i>	= <i>βa</i>	<i>aβoy</i>	= <i>βoy</i>	<i>valya</i>
CL18	<i>ṃno</i>	= <i>mu</i>	<i>umoy</i>	= <i>mo</i>	<i>ṃlyay</i>

11.2 指示詞縮約形の統語的特徴

指示詞縮約形は、統語的に、以下の二点で基本形と異なる。

- 指示詞縮約形は、述語の後に現れて述語の前の名詞句と一致する。
- 指示詞縮約形は、名詞を修飾できない。

まず、(11-2) に示す通り、指示詞縮約形は述語の後に現れて、節内の述語に先行する位置に現れる名詞句と一致する。一致が生じていることは、述語の前に現れる名詞句内の指示詞基本形に応じて、述語の後の縮約形も交替することから分かる。(11-2a) は、述語の前に近称の基本形が現れる場合、述語の後の縮約形も近称となることを示している。また、(11-2b) は、述語の前に中称の基本形が現れる場合、述語の後の縮約形も中称となることを示している。この基本形と縮約形の組み合わせを変えることはできない。

(11-2) a. *baskeli ino i-bomoko={i/*yo}*
 bicycle DEM.PROX.CL9 CL9.SM-break.NEU.PFV=DEM.PROX.CL9/*DEM.MED.CL9
 「この自転車は壊れている」

b. *baskeli iyo i-bomoko={yo/*i}*
 bicycle DEM.MED.CL9 CL9.SM-break.NEU.PFV=DEM.MED.CL9/*DEM. PROX.CL9
 「その自転車は壊れている」

また、(11-3) に示す通り、基本形は述語の後に現れて、述語の前の名詞句と一致することができない¹⁷⁴。

(11-3) a. *mt^hu yuno {ka-ja=yu /*ka-ja yuno}*
 person DEM.PROX.CL1 3SG.SM-come.PFV=DEM.PROX.CL1 *3SG.SM-come.PFV DEM.PROX.CL1
 「この人は来た」

b. *mt^hu uyo {ka-ja=yo /*ka-ja uyo}*
 person DEM.MED.CL1 3SG.SM-come.PFV=DEM.MED.CL1 *3SG.SM-come.PFV DEM.MED.CL1
 「その人は来た」

なお、(11-4) に示す通り、指示詞縮約形がなくても、文は成り立つ。

(11-4) *yuno mwalimu ka-ja*
 DEM.PROX.CL1 teacher 3SG.SM-come.PFV
 「この先生は来た」

(11-5) は、指示詞縮約形が名詞を修飾することができないことを示している。基本形は、単独で項となるだけでなく、名詞に後続してその名詞を修飾することもできるが、縮約形はその特徴を持たない。なお、基本形は名詞の直前に現れることもあるが¹⁷⁵、(11-6) に示す通り、縮約形はその位置に現れることもできない。

¹⁷⁴ 主語の指示対象と、その述語の指示対象が異なる場合、指示詞基本形は、述語のあとに現れることができる。

¹⁷⁵ 名詞の前に現れる指示詞は、名詞と同格的な意味関係にある (3.4 節参照)。

(11-5) a. *N-m-ono* *mwalimu* *yuno*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV teacher DEM.PROX.CL1

b. **N-m-ono* *mwalimu=yu*
 1SG.SM-3SG.OM-see.PFV teacher=DEM.PROX.CL1

「私はこの先生を見た」

(11-6) a. *uyo* *mwalimu ka-ja*
 DEM.MED.CL1 teacher 3SG.SM-come.PFV

b. **yo* *mwalimu ka-ja*
 DEM.MED.CL1 teacher 3SG.SM-come.PFV

「その先生は来た」(指示詞前置の例)

11.3 指示詞縮約形と主題構成素との一致

11.3.1 左方移動された目的語との一致

統語的性質の違いから、指示詞縮約形は、単に基本形を短縮したものではなく、基本形とは異なる特殊な用法をもつ可能性が考えられる。

ここまで示した例において、指示詞縮約形と一致する構成素は主語だけだったが、指示詞縮約形は、主語とだけでなく、目的語と一致することもある。(11-7) は、指示詞縮約形が有生物目的語と一致することを、(11-8) は、指示詞縮約形が無生物目的語と一致することを示している。

(11-7) *yuno* *mwalimu* *jana* *nyi-m-kut^hu=yu*
 DEM.PROX.CL1 teacher (CL1) yesterday 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV=DEM.PROX.CL1

「昨日、この先生に、私は会った」

(11-8) *embe* *ino* *nyi-i-okoto=i*
 mango (CL9) DEM.PROX.CL9 1SG.SM-CL9.OM-pick_up.PFV=DEM.PROX.CL9

「このマンゴーは、私が拾った」

マクンドゥチ方言において、述語に先行する位置に現れる目的語は、既に文脈にある旧情報を表す。そのことは、WH句に対応する構成素が、述語の前に現れることができないことから分かる。(11-9) は *nini* 「何」に対する *embe* 「マンゴー」が述語の前に現れ

ないことを、(11-10) は *nani* 「誰」に対する *juma* 「ジュマ (人名)」が述語の前に現れないことを示している。あらかじめ WH 疑問文を設定しなければ、(11-9B') (11-10B') はどちらも容認される。

- (11-9) A: *ku-okoto* *nini*
 2SG.SM-pick_up.PFV what
 「あなた、何を拾ったの」
- B: *nyi-okoto* *embe*
 1SG.SM-pick_up.PFV mango
- B': #*embe nyi-i-okoto*
 mango 1SG.SM-CL9.OM-pick_up.PFV
 「私はマンゴーを拾った」

- (11-10) A: *ku-ŋ-kut^{hu}* *nani*
 2SG.SM-3SG.SM-meet.PFV who
 「あなたは誰にあったの？」
- B: *nyi-ŋ-kut^{hu}* *juma*
 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV PN
- B' #*juma nyi-ŋ-kut^{hu}*
 PN 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV
 「私はジュマにあった」

旧情報を表すという事実から、述語の前に現れる目的語は、他のバントゥ諸語で指摘されている通り (cf. Kimenyi 1980, Yoneda 2011)、主題構成素である可能性が考えられる。そして、述語の前に現れる目的語と一致することから、指示詞縮約形は、主題構成素と一致する主題標識であることが推測される。

11.3.2 指示詞縮約形が主題構成素と一致しているかの診断

指示詞縮約形が主題構成素と一致するかどうかを、次の三つのテストを用いて確認する。この三つのテストは、いずれも指示詞縮約形が、非主題構成素と一致できるかを調べるものである。指示詞縮約形が主題標識であるのであれば、非主題構成素とは一致できないことが予想される。

- WH 疑問文の WH 句に対応する句と一致できるか。
- 事象報告文の主語と一致できるか。
- *kila* “every” 「あらゆる」を含む名詞句と一致できるか。

まず、(11-11) に示す通り、指示詞縮約形は、非主題構成素である WH 疑問文の WH 句に対応する句と一致することができない。

(11-11) A: *jana ka-ja nani*
 yesterday 3SG.SM-come.PFV who
 「昨日誰が来たの？」

B: *jana ka-ja pandu*
 yesterday 3SG.SM-come.PFV PN (CL1)

B': #*jana ka-ja=yo pandu*
 yesterday 3SG.SM-come.PFV=DEM.MED.CL1 PN (CL1)
 「昨日パンドゥ（人名）が来た」

(11-11B') は、指示詞縮約形と一致する名詞句が述語に後続するという非典型的な語順の文だが、疑問文「昨日パンドゥは来た？」の答えにはなる。指示詞縮約形が主題を標示していると仮定すると、(11-11B') が (11-11A) の答えとはならないのは、主語の *pandu* 「パンドゥ」が指示詞縮約形により主題構成素と解釈されて、*pandu* が非主題となるべきこの文脈にそぐわないものになっているためであると考えられる。なお、指示詞縮約形と一致する構成素が述語の前に現れる典型的な語順の文は、指示詞縮約形があることによってではなく、語順によって、WH 疑問文の答えとならないことが説明できてしまい、テストとして用いることができない。

次に、事象報告文 (*event-reporting sentence*) に指示詞縮約形が現れることができないことを示す。指示詞縮約形が主題構成素と一致していると仮定すると、(11-12B') は指示詞縮約形によって、主語の *mzungu* 「白人」が、主題構成素として解釈されるために、容認されないと考えられる。事象報告文の主語は主題構成素とはならない (Lambrecht 1994: 137)。なお、事象報告文を答えとして要求する (11-12A) のような疑問文をあらかじめおこななければ、(11-12B') はなんの問題もなく容認される。

(11-12) A: *βa-na nini mbona wat^hu wengi*
 CL16.SM-POSS what why people many.CL2
 「(そこで) 何があるの? なんでたくさんの人がいるの?」

B: *mzungu ka-na-cheza ngoma*
 white_person(CL1) 3SG.SM-IPFV-play dance
 「白人が踊りを踊っている」

B': *#mzungu ka-na-cheza ngoma=yo*
 white_person(CL1) 3SG.SM-IPFV-play dance=DEM.MED.CL1

最後に、指示詞縮約形が *kila* “every” 「あらゆる」を含む名詞句と一致できないことを示す。主題表現は、同定可能な指示対象を持たねばならず、“everybody”のような量化された表現は主題にならないとされる (Lambrecht 1994: 156, Jacobs 2001: 652–654)。指示詞縮約形が主題構成素と一致していると仮定すると、(11-13) が容認されないのは、指示詞縮約形が *kila* でマークされた非主題構成素と一致することができないためであると説明できる。

(11-13) **kila mt^hu ka-ja=yo*
 every person (CL1) 3SG.SM-come.PFV=DEM.MED.CL1
 「あらゆる人が来た」

上記三つのテストから、指示詞縮約形が一致するのは、主題構成素に限られ、指示詞縮約形が主題標識として機能していると考えられる。以下では、この指示詞縮約形を用いて主題を標示する構文を、指示詞縮約形構文と呼ぶ。なお、後述する通り、指示詞遠称の基本形が、主題を標示するために用いられることもあるが、こうした文も指示詞縮約形構文に含めて議論を行う。

11.4 遠くにある指示対象を主題として取り立てる方法

指示詞縮約形には、近称と中称に対応する形式しかなく、指示詞縮約形によって主題として取り立てられる対象も、近称や中称で指示されるものに限定される。指示詞遠称で指示されるものが主題であることを標示する場合は、近称や中称の指示詞縮約形が現れる位置に指示詞遠称の基本形が現れる。ただし、指示詞遠称で指示されるもの以外でも、指示詞遠称基本形によって主題として取り立てられることがある。

マクンドゥチ方言の 1~10 クラスの指示詞近称と中称は視界にあるものを指示できるが、同じ 1~10 クラスの遠称は視界にあるものを指示できない (3.4.3 節参照)。ある指示対象が、視界にあるが、指示詞中称で表せないほど遠くにある場合は、中称基本形+*ko* という複合的な形式が用いられる。(11-14) は遠称基本形が視界にあるものを指示できないことを示す例である。なお、中称基本形+*ko* の *ko* は 15 クラスの中称に由来すると考えられる。

(11-14) a. **tazama gari ilya*

look car DEM.DIST.CL9

b. *tazama gari iyo+ko*

look car DEM.MED.CL9+DEM.MED.CL15

「あの車をみろ」¹⁷⁶

しかしながら、(11-15) に示す通り、指示詞縮約形構文では、指示対象が視界にない場合だけでなく、視界にある場合でも、その指示対象が遠くであれば、遠称基本形が使われうる¹⁷⁷。言い換えると、遠称基本形によって指示できない対象であっても、遠称基本形によって主題標示されることがある。

(11-15) a. *gari ilya i-cha-kugwa ilya*

car (CL9) DEM.DIST.CL9 CL9.SM-FUT-drop DEM.DIST.CL9

「あの車は事故を起こすだろう」(すでに過ぎ去った車を指して)

b. *gari iyo+ko i-cha-kugwa ilya*

car (CL9) DEM.MED.CL9+ DEM.MED.CL15 CL9.SM-FUT-drop DEM.DIST.CL9

「あそこの車は事故を起こすだろう」(眼前の遠くにある車を指して)

c. *gari iyo+ko i-cha-kugwa=yo*

car (CL9) DEM.MED.CL9+ DEM.MED.CL15 CL9.SM-FUT-drop=DEM.MED.CL9

「そこの車は事故を起こすだろう」(眼前の近くにある車を指して)

¹⁷⁶ (11-14) の容認性判断は、マクンドゥチ郡南部出身の話者 (男性、推定 40~50 代) のものである。

¹⁷⁷ 指示詞遠称が、視界にあるものを主題化できるという共時的な事実は、かつて指示詞遠称がそれ以外の用法でも視界にあるものを指示していたことを示しているかもしれない。スワヒリ語他変種 (ウングジャ方言、トゥンバトゥ方言) の指示詞遠称は視界にあるものを指示できる。

(11-15a) では、遠称基本形で修飾された *gari ilya* 「(過ぎ去った) あの車」が、述語の後に現れる別の遠称基本形によって主題として取り立てられている。一方、(11-15b) では、*gari iyo+ko* 「(あそこにある) あの車」が、述語の後に現れる指示詞遠称によって主題として取り立てられている。(11-15a) の *gari ilya* 「あの車」は、発話の時点で話者の視界にないが、(11-15b) の *gari iyo+ko* 「あそこの車」は、この発話の時点で、まだ話者の視界にある。なお、(11-15c) に示す通り、*gari iyo+ko* 「あそこの車」は、相対的に近くにある場合、中称の縮約形によって主題標示されることもある。

11.5 指示詞縮約形によって取り立てられる構成素

ここまで指示詞縮約形が主語か目的語と一致する例のみを提示してきたが、指示詞縮約形は、述語に先行する位置に現れる構成素であれば、主語や目的語でなくても一致することができる。

まず、(11-16) は、授受動詞-*kʰa* 「与える」を用いた例である。(11-16) に示す通り、複他動詞の目的語は、どちらも指示詞縮約形と一致することができる。

(11-16) a. *makoto chʰa-m-kʰa tunda=yo*
 PN (CL1) FUT:1SG.SM-3SG.OM-give fruit=DEM.MED.CL1
 「マコトには、私が果物をあげるだろう」(受取手)

b. *tunda chʰa-m-kʰa makoto=lyo*
 fruit (CL5) FUT:1SG.SM-3SG.OM-give PN=DEM.MED.CL5
 「果物は、私がマコトにあげるだろう」(対象)

(11-17) では、道具を表す名詞句と指示詞縮約形が一致している。道具を表す *mkono uno* 「この腕」が、(11-17a) では付加語として、(11-17b) では、適用動詞の項として現れている。

(11-17) a. *mkono uno nyi-m-gwii ba-sigombe=u*
 hand (CL3) DEM.PROX.CL3 1SG.SM-3SG.OM-grab.PFV Mr.-PN=DEM.PROX.CL3
 b. *mkono uno nyi-m-gwiii ba-sigombe=u*
 hand (CL3) DEM.PROX.CL3 1SG.SM-3SG.OM-grab.APPL.PFV Mr.-PN=DEM.PROX.CL3
 「この手で、私はシゴンベおじさんをつかんだ」(道具)

次の (11-18) では、自転車の所有者である *mwnak^hele* 「子供」が指示詞縮約形と一致している。また、(11-19) の場所を表す固有名詞 *kajengwa* 「カジェングワ」や、(11-20) の関係節で修飾された *wakati* 「時」も、指示詞縮約形と一致している。

(11-18) *yuno* *mwanak^hele* *baskeli* *yake* *i-bomoko=yu*
 DEM.PROX.CL1 child (CL1) bicycle his.CL9 CL9.SM-break.NEU.PFV=DEM.PROX.CL1
 「この子供は、彼の自転車が壊れている」(所有者)

(11-19) *kajengwa* *nyi-okoto* *embe=ko*
 PN (CL15) 1SG.SM-pick_up.PFV mango=DEM.MED.CL15
 「カジェングワ (地名) で私はマンゴーを拾った」(場所)

(11-20) *wakati* *a-ø-o-vyaligwa* *mwanangu*
 time (CL3) 3SG.SM-PFV-CL3.REL-bear.PASS child:my
ny-evu *mji-ni=o*
 1SG.SM-COP.PST town-LOC=DEM.MED.CL3
 「私の子供が生まれたとき、私は街にいた」(時)

ところで、主題には二つのタイプがあることが指摘されている (Chafe 1976: 50–51, Jacobs 2001: 655–658, cf. Lambrecht 1994: 118)。一つは、所与の場面で、命題がある指示対象について述べる際の、その指示対象のことである (Lambrecht 1994: 131)。もう一つのタイプの主題は、枠組設定 (*frame-setting*) と呼ばれるもので、命題の真理条件 (命題が成立する領域) を制限する空間、時間、個体といった枠組みを設定する (Chafe 1976: 50, Jacobs: 2001: 656)。

マクンドゥチ方言の指示詞縮約形は、主語や目的語だけでなく、枠組みを設定する所有者や場所、時を表す名詞句とも一致することができる。このことから、指示詞縮約形は、枠組み設定主題を標示する際にも用いられうるといえる。

11.5.1 「冗長な」主題標示

バントゥ諸語で、ある構成素が主題を表していることを示す方法として、左方移動構文と倒置構文があることがこれまでの研究で指摘されている (cf. Kimenyi 1980, Russell 1985, Morimoto 2006, Yoneda 2011)。この二つの構文は、マクンドゥチ方言でも観察される。左方移動構文では、主題構成素が述語に先行する位置に現れる。この左方移動が生

じる場合と生じない場合とで、動詞と項の一致関係に違いはない。それに対して、倒置構文では、基本的に、非倒置文の直接目的語や場所を表す名詞句が、述語に先行する位置に現れ、動詞の主語接頭辞と一致する (9.2 節参照)。

指示詞縮約形は、この二つのタイプの主題化構文で主題化された構成素と一致することができる。まず、(11-21) では、左方移動させられた目的語 *yuno mwalimu* 「この先生」と一致する 1 クラスの近称の指示詞縮約形が、節末に現れている。

(11-21) *yuno mwalimu jana nyi-m-kut^hu=yu*
 DEM.PROX.CL1 teacher (CL1) yesterday 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV=DEM.PROX.CL1
 「昨日、この先生に私は会った」

また、(11-22) では、倒置構文で主語に「昇格」させられた構成素 *msitu uno* 「この森」が、指示詞縮約形と一致している。この例では、*-lala* 「寝る」という動詞が、*msitu* 「森 (3 クラス)」と一致する主語接頭辞でマークされていることに注目されたい。

(11-22) *msitu uno u-lala ngruwe=u*
 forest (CL3) DEM.PROX.CL3 CL3.SM-sleep.PFV hog(s)=DEM.PROX.CL3
 「この森では、イノシシが眠っている」

ここで、「左方移動」や「倒置」された構成素が指示詞縮約形と一致するのはなぜなのか、という疑問が生じる。仮に左方移動構文や倒置構文が、主題化を実現する構文であるとすれば、主題標示のために指示詞縮約形は不必要にみえる。

11.5.2 指示詞縮約形による Addressation の指定

文中のある一つの構成素の指示対象が主題となる場合、その構成素以外の部分で、その主題について、聞き手の知識を増やすような解説がなされると一般的に言われている (Hockett 1958: 201, Lambrecht 1994: 131)。Jacobs (2001) は、主題化構文のこうした性質を Addressation と呼び、主題化構文と呼ばれるものが必ずしもこの性質を有しているわけではないことを指摘している。

談話のある時点における話し手と聞き手の共有知識のなかの命題は、テーマごとにまとめられており、そのまとまりはファイルに例えられる。ある主題化構文が、Addressation という性質をもつ場合、主題構成素によって、その指示対象に関するファイルが同定され、主題構成素以外の部分でファイルに追加されるべき命題が提示される。このた

め、主題構成素の指示対象は、ファイルの同定ができるものでなければならず、特定のファイルを指し示すことのない “a nonspecific x”, “every x”, “no x” のような句は、主題構成素にならない (Jacobs 2001: 650–652)。

指示詞縮約形構文は、Addressation の指定がなされているという点で、左方移動構文や倒置構文と異なると考えられる。

Addressation の指定があるかどうかは、量化詞 *kila* “every” を伴った名詞句が主題構成素となるかどうかによって確認できる。前述の通り、*kila* で修飾された名詞句は、指示詞縮約形と一致することができない。これは、枠組み設定主題となる場所を表す名詞句でも同じである。以下の (11-23) は *kila* で修飾された目的語 *mt^hu* 「人」が指示詞縮約形と一致できないことを、(11-24a) は場所を表す名詞 *nyumba* 「家」が *kila* で修飾された場合に指示詞縮約形と一致できないことを示している。なお、名詞が *kila*、数量詞、形容詞で修飾される場合、その名詞が場所を表すとしても、所格接尾辞-*ni* は現れない (3.1.6 節参照)。そのため、*nyumba* が、(11-24a) では所格接尾辞-*ni* でマークされていない一方、(11-24b) では所格接尾辞-*ni* でマークされている。

(11-23) **kila mt^hu nyi-m-kut^hu=yo*
 every person (CL1) 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV=DEM.MED.CL1
 「あらゆる人は来た」¹⁷⁸

(11-24) a. **siku ya=siku+k^huu kila nyumba wa-na-βika pilau=yo*
 day of.CL9=day+big.CL9 every house (CL9) 3PL.SM-IPFV-cook pilaf=DEM.MED.CL9
 「お祝いの日は、あらゆる家で人々はピラウを料理する」

b. *siku ya=siku+k^huu nyumba-ni wa-na-βika pilau=ko*
 day of.CL9=day+big.CL9 house-LOC (CL15) 3PL.SM-IPFV-cook pilaf=DEM.MED.CL15
 「お祝いの日は、家で人々はピラウを料理する」

これとは対照的に、左方移動構文や倒置構文では、主題構成素として *kila* を伴った名詞句が現れうる。(11-25)(11-26) は、それぞれ (11-23)(11-24) に対応する左方移動構文の例、(11-27) は、倒置構文の例である。

¹⁷⁸ (11-23, 25) の容認性判断は、マクンドウチ郡マタズィ集落在住の 50 代女性による。

(11-25) *kila m̥tʰu nyi-m̥-kutʰu*
every person (CL1) 1SG.SM-3SG.OM-meet.PFV
「あらゆる人が来た」(左方移動構文)

(11-26) *siku ya=siku+kʰuu kila nyumba wa-na-βika pilau*
day of.CL9=day+big.CL9 every house (CL9) 3PL.SM-IPFV-cook pilaf
「お祝いの日は、あらゆる家で人々はピラウを料理する」(左方移動構文)

(11-27) *kila nyumba i-na-kaa watʰu wengi*
every house (CL9) CL9.SM-IPFV-live people many
「あらゆる家に多くの人々が住んでいる」(倒置構文)

この *kila* 「あらゆる」との共起の可否から、指示詞縮約形構文は、+Addressation という指定がなされている一方、左方移動構文と倒置構文は、Addressation に関して未指定であると考えられる。言い換えると、左方移動構文や倒置構文で、「主題化」された構成素は、指示詞縮約形がない場合、必ずしも解説の対象とはなっていないが、指示詞縮約形が付加されると、必ず解説の対象になる。

11.5.3 指示詞縮約形は一つしか現れない

指示詞縮約形は、述語の前に現れる主語と目的語のどちらとも一致するが、その二つと一致する指示詞縮約形が、同時に現れることはできない。(11-28) はそのことを示している。(11-28a) では、述語 *ka-zi-okoto* 「彼女は拾った」の後に *fatuma* 「ファトマ (人名)」と一致する 1 クラスの指示詞縮約形中称が現れている。また、(11-28b) では、*embe* 「マンゴー」と一致する 10 クラスの指示詞縮約形中称が述語の後に現れている。(11-28c, d) に示す通り、順序にかかわらず、この二つの指示詞縮約形は共起することができない。

- (11-28) a. *fatuma embe ka-zi-okoto=yo*
 PN (CL1) mangoes (CL10) 3SG.SM-CL10.OM-pick_up.PFV=DEM.MED.CL1
- b. *fatuma embe ka-zi-okoto=zo*
 PN (CL1) mangoes (CL10) 3SG.SM-CL10.OM-pick_up.PFV=DEM.MED.CL10
- c. **fatuma embe ka-zi-okoto=yo=zo*
 PN (CL1) mangoes (CL10) 3SG.SM-CL10.OM-pick_up.PFV=DEM.MED.CL1=DEM.MED.CL10
- d. **fatuma embe ka-zi-okoto=zo=yo*
 PN (CL1) mangoes (CL10) 3SG.SM-CL10.OM-pick_up.PFV=DEM.MED.CL10=DEM.MED.CL1
 「ファトゥマ (人名) はマンゴーを拾った」

Lambrecht (1994: 146–150) は、一つの文に二つの主題表現が含まれうることを指摘しており、(11-28a, b) の述語の前に現れる二つの構成素がともに主題表現であるとみなす分析はあり得ないものではない。しかし、一つの文に主題構成素が二つ現れうると考えた場合、指示詞縮約形構文で、主題と標示されるのがどちらか一方に限られるのはなぜなのかという疑問が生じる。

前述の通り、指示詞縮約形構文では、+Addressation という指定がなされていると考えられる。このことから、主題構成素が二つ含まれる文では、どちらが聞き手の知識を増やすような解説の対象となる情報を表すかを明示する必要がある場合に、指示詞縮約形が現れることが推測される。

11.6 11章のまとめ

本章では、マクンドゥチ方言の近称と中称の指示詞縮約形が、主題を標示するために用いられていることを示した。指示詞縮約形を用いた指示詞縮約形構文によって主題化された構成素が表す情報は、他の主題化構文（倒置構文と左方移動構文）の主題構成素の表す情報とは異なり、義務的に聞き手の知識を増やすような解説の対象となっていると考えられる。

なお、本章で用いたデータは、聞き出し調査から得られたものである。他の主題化構文との違いや、指示詞縮約形が一つしか現れることができないという制限がある理由を説明するためには、実際の用例をみて、どのような文脈や場面で、この指示詞縮約形が現れるかを分析することが必要となる。

12章 結論

本論文では、ザンジバル・ウングジャ島で話されるスワヒリ語マクンドゥチ方言の文法の記述を行った。本章では、結論として、3章以降のそれぞれの章について、内容のまとめと、意義や今後の課題を述べる。

3章では、名詞類に分類される語類（名詞、形容詞、代名詞、指示詞、所有詞、疑問詞）の特徴に加えて、属辞でマークされる名詞句、名詞句内の語順について記述を行った。名詞類に分類されるものは、単独で項の位置に現れるという特徴を共有している。

名詞は、名詞と一致する語や形態素の形式を基準とした場合、1から18までの番号の付された13の名詞クラスに分類される（11から14と17クラスは欠番）。

多くの形容詞は、名詞と形態的特徴を共有している。また、形容詞から名詞にゼロ派生している語もある。こうした事情から、形容詞と名詞を区別することは容易ではない。しかし、単独で項の位置に現れにくく、他の修飾語で修飾できないという点で、形容詞は、名詞と異なる。なお、それぞれの名詞クラスに応じた語形を有しているというのも、典型的な形容詞と名詞の異なる点として挙げることができるが、形容詞のなかには、限られた名詞クラスの語形しかもたないものや、名詞クラスに応じて語形を変えないものもある。

代名詞には、自立的な形式をもつ人称代名詞と、拘束的な形式をもつ拘束代名詞がある。特に、後者の拘束代名詞の形態統語的な位置づけについては、今後検討する必要があるだろう。拘束代名詞は、他の名詞と同じ位置に生起する場合は、接語のようにみえるが、接辞として、語の内部に含まれることもある。

指示詞は、近称、中称、遠称の3系列からなり、照応関係にある名詞の名詞クラスに応じて異なる形式をとる。この指示詞は、名詞とともに用いられる場合、名詞の前と後ろ、どちらに現れるかによって、名詞との意味関係が異なる。名詞の後ろに現れる場合は、名詞を限定的に修飾するが、名詞の前に現れる場合は、後続する名詞句と同格的な意味関係をもつ。なお、形容詞も名詞を修飾する場合、限定的に修飾するが、こうした、名詞と名詞修飾語の意味的な関係については、分析を加え、一般化していく必要があるだろう。また、近称と中称には、基本形に加えて縮約形や重複形が存在する。縮約形は、11章で述べた通り、主題標示の機能を有しているということがいえそうだが、重複形の機能については、まだはっきりと分かっていない。

所有詞には、基本的な形式に加えて、縮約形も存在する。縮約形は、親族関係を表す名詞を修飾する際に現れる。

属辞は、属辞でマークされた名詞句Aと、その名詞句に修飾された名詞句Bが「Aの

B」と訳すことができる関係にあることを表す。属辞のうち、15クラスの *kwa*=は、対価や死因、道具を表す前置詞として用いられることもある。また、15, 16, 18クラスの属辞と所有詞は、所有者が存在する場所を表すために用いられることもある。

疑問詞には、*nini*「何」、*nani*「誰」、*wapi*「どこ」、*lini*「いつ」、*gani*「どんな」、*-ngafi*「いくつの」、*-βi*「どの」に加えて、*=je, jaje, kwani, mbona*がある。*=je, jaje, kwani, mbona*については、機能が判然としない、特に *kwani* については、これまでスワヒリ語の記述において「なぜ」を意味するとされてきたが、実際のマクンドウチ方言の用例をみると、異なる機能をもつことが推測される。

名詞修飾語の語順は、名詞から近い順に並べると、所有詞、形容詞、指示詞、属辞でマークされる名詞句となっている。ただし、名詞修飾語が三つ以上同時に現れることはまれである。

4章では、動詞類の記述を行った。動詞類には、語彙的な内容を表す動詞と TAM (テンス・アスペクト・ムード/モダリティ) の標識として機能する助動詞が含まれるが、この二つは、主語接頭辞でマークされる語形をもつという特徴を共有している。

多くの動詞活用形は、語幹、TAM 接頭辞、否定接頭辞、人称接頭辞からなる。語幹には、主に基本語幹、完結語幹、接続語幹の三つがある。この三つは語幹末の母音が異なる。完結語幹は完結形に現れることが多く、接続語幹は接続形に現れることが多いが、どちらも例外がある。主な TAM 接頭辞としては、定形に現れる *cha-*「未来」、*na-*「未完結」、*me-*「完了」、*mena-*「起動」、*li-*「完結否定」、*ja-*「完了否定」と、非定形に現れる *ka-*「継起」「条件」「行程」、*nge-*「反実仮想」が挙げられる。なお、TAM 接頭辞は、すべての活用形に現れるわけではない。例えば、完結形では、TAM 接頭辞なしで TAM が標示される。否定接頭辞には、定形に現れる *ha-*と、非定形に現れる *si-*がある。人称接頭辞には、主語接頭辞、目的語接頭辞、関係節接頭辞がある。それぞれ、主語、目的語、関係節の先行詞となる名詞の人称や名詞クラスに応じて異なる形式をとる。なお、人称接頭辞の異形態の出現や脱落は、形態音韻論的变化として説明できるものとそうでないものがある。

動詞の中には、特殊な形式をもつものがある。*-ebu*「要る」、*-na*「所有」、*-enda*「行く」、*-chaka*「欲する」といった動詞は、他の動詞にはある活用形を欠いていたり、他の動詞にはない活用形を有していたりする。

また、*-ja*「来る」、*-enda*「行く」、*-isa*「終わる」、*-aza*「始まる」は、後続する動詞と、動詞連続を形成するが、これも動詞に関して特筆すべき点として挙げるができる。このうち、*-ja*「来る」と *-isa*「終わる」には、TAM 標識への文法化が生じていると考えられる。

動詞は、派生接尾辞が付加されて項構造を変化させることがある。こうした派生接尾

辞を伴った派生動詞には、受動動詞、適用動詞、使役動詞、中立動詞、反転動詞、相互動詞がある。

TAM の標識として機能する助動詞には、コピュラ動詞に由来するものや、*-ja*「来る」、*-tenda*「する」、*-chaka*「欲する」といった動詞に由来するもの、TAM 接頭辞-*mena*「起動」に由来するものがある。これらは、後続する動詞の形式や、TAM に応じた活用の有無が異なる。

ここまで説明した 3 章と 4 章の内容の多くは、整理の仕方こそ異なれど、既に先行研究で指摘されている。しかしながら、本論文の記述的貢献というのも少なからずある。例えば、本論文では、名詞接頭辞ではなく、名詞と一致する語や形態素を基準として名詞クラスを同定するという立場をとった。これは、バントゥ諸語研究の伝統に反するものだが、こうした方針をとることで、3 クラスと 11 クラスの合流が生じているという事実を浮かび上がらせたり、親族関係を表す 1/2 クラス名詞や、指大化された 5/6 クラス名詞、指小化された 7/8 クラス名詞が、他の 1/2, 5/6, 7/8 クラス名詞とは異なる名詞クラスを形成していると指摘することができた。なお、指大化された 5/6 クラス名詞、指小化された 7/8 クラス名詞が一致に関して例外的な性質をもつというのは、そもそも記述もされていなかった事実である。

形態的特徴だけでなく、統語的性質もおさえたうえで、名詞修飾語の記述を行ったというのも、本論文の目新しい点といえる。これにより、限られた名詞クラスの語形しかもたず名詞なのか、形容詞なのかはっきりとしていなかった語が、他の形容詞と統語的特徴を共有していることや、数量詞が、他の形容詞とは異なり遊離できるという特徴をもつことを指摘できた。また、形容詞とは別に状態副詞というカテゴリーを設定したが、これも意味だけではなく、統語的性質にも着目しながら、形容詞の記述を行うことによって得られた成果である。さらに、指示詞が、名詞の前後、どちらに現れるかによって、名詞との意味的な関係が異なるという観察も、こうした視点から得られたものである。筆者の知る限り、指示詞に関して、同様の指摘はスワヒリ語の他の変種においてもなされていない。

同様の貢献は、4 章にもみられる。例えば、動詞語幹の直前に現れる無意味形態 *ku-*の脱落は、筆者がはじめて指摘したが、この脱落現象は、マクンドゥチ方言が「ストレス」と呼ぶべきプロソディ特徴をもたない言語であるという発見につながる重要な事実である。また、特殊な屈折形式をもつ動詞に関するまとまった記述や、TAM (テンズ・アスペクト・ムード/モダリティ) の標示に特化した助動詞というカテゴリーの設定も本論文の貢献といえる。

5 章では、名詞と動詞不定形の音調実現について記述を行った。マクンドゥチ方言は、他のスワヒリ語の諸変種と異なる音調実現をみせることが古くから知られており、加え

て、トーン（語声調）があるという指摘もなされてきた。本章では、こうした先行研究の記述通りのトーンの対立や、音調の実現が確認されないことを述べたうえで、単独で発音されたマクンドゥチ方言の名詞や、動詞不定形が、音節間で大きなピッチの変動のない平坦な音調実現をみせることを、音響分析の結果とともに示した。こうした観察から、まず、マクンドゥチ方言に、トーンがないことが示唆される。また、スワヒリ語の他の多くの変種では、語の次末音節にストレスと呼ばれる卓立が現れるが、次末音節でピッチの上昇がないという事実から、マクンドゥチ方言が、ストレスを欠いた言語であることも推測される。このストレスに関する仮説は、1音節からなる9/10クラス名詞の存在や、動詞活用形中の無意味形態 *ku-*の脱落といった形態論的な事実からも支持される。他の言語との対照は、今後の課題としたいが、トーンもストレスも欠いているという特徴は、他のバントゥ諸語と比較しても、非常に珍しいものである可能性が指摘できる (cf. Kisseberath & Odden 2003: 59)。

6章では、動詞語幹末に現れる末母音の形態論的な特徴について、記述と分析を行った。末母音は、バントゥ諸語研究において、一般的に TAM の標示を担う接尾辞として分析される。マクンドゥチ方言でも、末母音の交替と分布をみると、アスペクトやムードの標示を担う接尾辞として分析可能なように思われる。しかしながら、末母音の中には、どのような機能を担うかが判然としないものや、不規則であったり、例外的な形式をとりその形成プロセスが不明なものも含まれる。また、動詞の中には、末母音を欠いたり、表す事態と末母音の形式に齟齬があるものもみられる。本章では、まず、こうした言語事実について、詳細な記述を行い、そのあとで、語基盤モデルと PFM という理論的枠組みを導入して、語幹形成や、活用形形成の説明を試みた。ちなみに、末母音の形態論的な分析は、他の多くのバントゥ系言語でも問題となるが、これまでの研究で、深く追求されることは少なかった。本章で提示した分析は、他のバントゥ系言語の末母音の分析にとっても役立つものとなるかもしれない。

7章では、TAM の標示について記述を行った。まず、7.1 節では、完結形と TAM 接頭辞 *na-*「未完結」でマークされた活用形の表す事態から、動詞に内在する語彙アスペクトには六つのタイプがあることを示した。このうち、完結形に活用して、状態や結果状態を表す「状態動詞」は、他のバントゥ諸語にも広くみられるものである。本論文では、状態動詞のリストを提示したが、このリストは、他のバントゥ諸語との比較において役立つものとなるだろう。ちなみに、Nurse (2008: 97) は、バントゥ諸語間の状態動詞の比較がほとんどなされていないことを指摘している。

7.2 節では、完結形が、典型的な「完結 (perfective)」に近いアスペクト特徴をもつ活用形である一方、TAM 接頭辞 *me-*でマークされた活用形が、典型的な「完了 (perfect)」に近いアスペクト特徴をもっていることを示した。この二つはどちらも、基準時以前の

事象の完結を表すため、一見しただけでどのような区別がなされているのかが分かりにくい。

7.3 節では、TAM 接頭辞や語幹の交替といった活用で、発話時を基準時としたテンス(時制)が標示されないことを述べた。テンスについては、明示的な標識がない場合に、どのように基準時が設定されるのかの解明を今後の課題として挙げることができる。

7.4 節では、*-ja*「来る」、*-chaka*「欲する」、*-tenda*「する」が、それぞれ、時制標識、将然標識、習慣標識へと文法化しつつあることを示した。特に*-ja*「来る」は、未来と過去の事態を表すために用いられるという点で、類型論的にみても非常に興味深い。今後は、この*-ja*の機能の詳細な分析が課題となる。

7.5 節では、接続形の記述を行った。接続形は、モダリティを表す形式ということはいえそうだが、用例をみると、表されるモダリティには、必然、義務、推奨、勧誘、意向というようにいくつかのヴァリエーションがある。一見すると、様々な機能をもっているように見えるこの活用形の中心的な意味がどのようなものであるかという分析を今後行う必要があるだろう。

8 章では、コピュラ動詞とコピュラ文の記述を行った。まず、コピュラ動詞が、他の動詞と異なる特異な形態的特徴をもつことや、状態動詞としてのアスペクト特徴をもつこと、名詞句を並置しただけでもコピュラ文が成立することを示した。そして、そのあとで、コピュラ動詞の完結形の使用が、コピュラ補語の意味的な特性に左右されることを示した。コピュラ動詞の完結形は、コピュラ補語に状態副詞や場所を表す名詞句が現れる場合、義務的に用いられる一方、コピュラ補語に主語と同一の指示対象を表す名詞句や、コピュラ主語の種類を表す名詞句が現れる場合、原則として用いられない。また、コピュラ補語が、コピュラ主語の属性や性質、所有者を表す場合は、随意的に用いられる。なお、本論文では、トゥンバトゥ方言の同形のコピュラ動詞との用法の比較を行ったが、コピュラ動詞の通時的な機能変化を解明するためには、他のスワヒリ語変種や、バントゥ諸語との比較も必要となるだろう。この章では、コピュラ動詞を用いて TAM の標示を行う複合時制構文の記述も行った。複合時制構文のコピュラ動詞は、コピュラ文のコピュラ動詞と、形態統語的にも、意味的にも異なる特徴をもつ。

9 章では、まず、9.1 節で、動詞との一致と、対応する受動文におけるふるまいを観察して、節中の名詞句を統語機能ごとに分類した。これにより、場所名詞句がほかの目的語と同じ統語的性質をもつこと、目的語に、一次目的語と二次目的語の区別があること、複他動詞のなかには、二つの統語的に対称な目的語をとるものがあること、主語、目的語のほかに、付加語や、主語、目的語、付加語のいずれにも分類されない名詞句があることなどが分かった。なお、主語にも、目的語にも、付加語にもならない名詞句は、主に、身体部位や体内からの排出物を表す譲渡不可能名詞である。

9.2 節では、倒置構文の記述を行った。倒置構文では、主に無生物を指示対象とする（一次）目的語や、場所を表す名詞句が、受動の派生接尾辞などを伴わない無標の動詞の主語となり、その動詞の元の主語が、主語としてのステータスを失い、述語の直後に現れる。本文中でも述べた通り、倒置構文の主語は主題化されているとも言われ、実際マクンドゥチ方言の例でも、主題化と関連しているようなものがみられる。今後は、この倒置構文による主題化の本質を、構造的に似ている受動文や、他の主題化構文（左方移動構文、指示詞縮約形構文）と対照させながら、明らかにしていく必要があるだろう。

9.3 節では、基本語順について論じた。マクンドゥチ方言では、語順が固定的ではないが、三つの構成素の情報構造上のステータスを同じにしたときの語順や、主語と目的語の人称が同じときの語順をみると、SVO が基本語順であると考えられる。

10 章では、関係節の記述を行った。マクンドゥチ方言の関係節は、動詞が関係節接頭辞でマークされることにより形成されるが、この関係節接頭辞には二つのタイプがある。また、関係節には、語彙的な内容を表す動詞が関係節接頭辞で直接マークされることにより形成されるタイプと、関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞に、語彙的な内容を表す動詞の定形が後続することで形成されるタイプがある。どちらの関係節接頭辞を用いるかと、コピュラ動詞を用いるかどうかを基準に分類した場合、関係節には四つのタイプがあることになる。これらの関係節は、表し分けることのできる TAM や極性に違いがみられる。

また、先行詞の関係節内における統語機能に着目してみると、主語関係節接頭辞で動詞が直接マークされることにより形成される関係節は主語しか先行詞とすることができないが、それ以外の三つは、原則として、どんな統語機能を担う名詞句でも、先行詞にできる。例えば、主語や目的語に加えて、付加語や共格標識 *na* = 「と、ともに」でマークされた名詞句などもこれら三つの関係節の先行詞となる。ただし、これらの関係節は、先行詞に対応する空所を関係節内に必ず含む。

本章では、関係節の「名詞らしさ」についても論じた。マクンドゥチ方言の関係節は、先行詞なしで主語や目的語となるが、先行詞を伴わない関係節をマークできる接語は、名詞だけでなく動詞もホストとすることができるものに限られる。こうしたことから、関係節は、名詞句と節の間に位置づけられる統語的性質をもつと考えられる。

11 章では、指示詞縮約形が、主題標示の機能をもつことを示した。指示詞縮約形は、指示詞基本形と異なり、名詞を修飾することができない一方、述語のあとに現れて、述語の前の名詞句と一致することができる。述語の前が主題位置であることに加えて、疑問詞疑問文の疑問詞に対応する名詞句とは一致できないことや、事象報告文の主語とは一致できないこと、量化詞 *kila* 「あらゆる」を含む名詞句とは一致できないことから、この指示詞縮約形は、主題構成素と一致していることが分かる。なお、マクンドゥチ方

言において、「主題化」は、左方移動や倒置構文によっても実現されるが、これらの主題化構文とは異なり、指示詞縮約形を用いた構文には、+Addressation という指定がなされていると考えられる。そのため、指示詞縮約形と一致する構成素は、義務的に、聞き手の知識を増やすような解説の対象となる情報を表す。

主題化は、バントゥ諸語研究のなかでも、多くの研究者が関心を寄せるテーマの一つで、他のバントゥ系言語でも一定程度研究がされている。しかしながら、指示詞に由来する形式が、主題標示を行っている例というのは、筆者の知る限りこれまでに報告されていない。

付録1：ピッチを計測した名詞と動詞不定形のリスト

以下に5章でピッチを計測した名詞と動詞不定形を列挙する。

2 音節名詞

<i>baba</i> 「父」	<i>goti</i> 「膝」
<i>babu</i> 「祖父」	<i>haba</i> 「少量の (形容詞)」
<i>basi</i> 「バス」	<i>jani</i> 「葉」
<i>bata</i> 「アヒル」	<i>kadi</i> 「カード」
<i>bati</i> 「板」	<i>kaka</i> 「兄」
<i>bega</i> 「肩」	<i>kapu</i> 「かご」
<i>bibi</i> 「祖母」	<i>kata</i> 「ひしゃく」
<i>bisi</i> 「ポップコーン」	<i>kazu</i> 「カンズ」
<i>boga</i> 「カボチャ」	<i>keki</i> 「ケーキ」
<i>bubu</i> 「口のきけないひと」	<i>kesho</i> 「明日」
<i>buku</i> 「ノート」	<i>kisa</i> 「話」
<i>buti</i> 「靴」	<i>kisu</i> 「ナイフ」
<i>chaki</i> 「チョーク」	<i>kit^hu</i> 「物」
<i>ch^hatu</i> 「大蛇」	<i>kiza</i> 「闇」
<i>chizi</i> 「愚か者」	<i>kosa</i> 「罪、失敗」
<i>chozi</i> 「涙」	<i>k^huku</i> 「ニワトリ」
<i>chupa</i> 「瓶」	<i>kuno</i> 「こちら (指示詞)」
<i>chupi</i> 「パンツ」	<i>kuti</i> 「ヤシの葉」
<i>dada</i> 「姉」	<i>pacha</i> 「双子」
<i>dafu</i> 「ヤシの実」	<i>pafu</i> 「肺」
<i>daku</i> 「ラマダン中の夜明け前の食事」	<i>p^haka</i> 「ネコ」
<i>dishi</i> 「鍋」	<i>p^hapa</i> 「サメ」
<i>dodo</i> 「マンゴーのある種」	<i>pasi</i> 「アイロン」
<i>duka</i> 「店」	<i>pesa</i> 「お金」
<i>dumu</i> 「ポリタンク」	<i>pete</i> 「指輪」
<i>figo</i> 「腎臓」	<i>picha</i> 「写真」
<i>fisi</i> 「ハイエナ」	<i>pipi</i> 「飴」
<i>futi</i> 「膝」	<i>saba</i> 「七 (数詞)」
<i>gogo</i> 「丸太」	<i>sasa</i> 「今」

shaba 「銅」
shada 「束」
shaka 「疑い」
shati 「(襟付き) シャツ」
shida 「困難」
shuka 「シーツ」
shuzi 「屁」
sifa 「特徴」
siku 「日」
sita 「六 (数詞)」
somo 「勉強」
tabu 「困難」
t^hatu 「三」
tena 「再び (副詞)」
tisa 「九」
tochi 「懐中電灯」
tusi 「卑語」
βano 「ここ (指示詞)」
visa 「話 (複数)」
visu 「ナイフ (複数)」
vita 「戦争」
viti 「椅子 (複数)」
vit^hu 「物 (複数)」
viza 「ビザ」
zizi 「柵」

3 音節名詞

bahasha 「封筒」
bahati 「運」
busati 「ござ」
chunusi 「ニキビ」
fenesi 「ジャックフルーツ」
gazeti 「新聞」
hadithi 「物語」

hakika 「確信」
heshima 「尊敬」
hikima 「思慮」
hisabu 「計算」
hishima 「尊敬」
hitima 「(死後の) 儀式」
kabisa 「完全に (副詞)」
kamusi 「辞書」
kanisa 「教会」
kasida 「宗教歌」
kasuku 「オウム」
kibati 「小板」
kibibi 「痺れ」
kiboko 「カバ」
kichogo 「額」
kidebe 「缶」
kidege 「小鳥」
kidevu 「顎」
kifuko 「小袋」
kikapu 「小さなかご」
kipofu 「盲人」
kisima 「井戸」
kitaburu 「本」
kitako 「台尻」
kokoto 「小石」
kunazi 「ナツメ」
kusudi 「意図」
mashine 「機械」
pukusa 「ある種のバナナ」
sababu 「理由」
sabini 「七十 (数詞)」
sabuni 「石鹼」
sadaka 「寄付」
samaki 「魚」

sehemu 「地域」
shemegi 「義理の兄妹、姉妹」
shetani 「おばけ」
subihi 「昼食」
tatizo 「問題」
tikiti 「スイカ」
vibati 「小板（複数）」
viboko 「カバ（複数）」
vichogo 「額（複数）」
videge 「小鳥（複数）」
videvu 「顎（複数）」
vifuko 「小袋（複数）」
vikapu 「小さなかご（複数）」
vipofu 「盲人（複数）」
visima 「井戸（複数）」
vitabu 「本（複数）」
vitako 「台尻（複数）」

動詞不定形（2音節）

koga 「沐浴する」
kuja 「来る」
kuza 「売る」

動詞不定形（3音節）

kubana 「挟む」
kuβapa 「探す」
kufika 「料理する」
kufita 「通り過ぎる」
kuchaka 「欲する」
kucheka 「笑う」

kucheza 「遊ぶ」
kuchoka 「疲れる」
kuchoma 「燃やす」
kuchuma 「摘む」
kufuga 「飼う」
kufika 「着く」
kufuta 「消す」
kugeza 「思う」
kuhama 「引越す」
kukaba 「絞める」
kuk^hata 「切る」
kukopa 「借りる」
kukut^ha 「会う」
kumeza 「飲み込む」
kunuka 「匂う」
kupaka 「塗る」
kupiga 「打つ」
kusaga 「狩る」
kusema 「言う」
kushiba 「満腹になる」
kushika 「つかむ」
kusuka 「編む」
kutaka 「焦げる」
kutega 「畏にかける」
kutoga 「刺す」
kuvuja 「漏る」
kuvuta 「吸う」
kuziba 「蓋をする」
kuzika 「埋める」

付録 2 : 完結形とコピュラ動詞過去形の共起を示す例

7.1.1 節で、状態動詞の完結形によって表される事態から生じる状態がキャンセルされたことを表す文が後続する際は、コピュラ動詞の過去形-*evu* が義務的に用いられるが、非状態動詞では、-*evu* の使用が随意的となることを述べた。以下に、そのことを調べるために確認した例を提示する。本文中と同様に、問題となる動詞を太字で表記し、訳の横に付した () 内に、どの動詞が問題となるか、その動詞か状態動詞であるか、非状態動詞であるかを示す。

- (1) a. *juma k-evu ka-fungu mlango hea sasa u-ji-fuguu*
 PN 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-close.PFV door but now 3SG.SM-REFL-open.PFV
 b. **juma ka-fungu mlango hea sasa u-ji-fuguu*
 PN 3SG.SM-close.PFV door but now 3SG.SM-REFL-open.PFV
 「ジュマはドアを閉めたが、今は(ひとりで)開いた」(状態動詞-*funga*「閉める」)
- (2) a. *peni yangu ny-evu nyi-i-tuu βano hea ha-i-βo*
 pen my.CL9 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-CL9.OM-put.PFV DEM.PROX.CL16 but NEG-CL9.SM-CL16.PRO
 b. **peni yangu nyi-i-tuu βano hea ha-i-βo*
 pen my.CL9 1SG.SM-CL9.OM-put.PFV DEM.PROX.CL16 but NEG-CL9.SM-CL16.PRO
 「このペンは、私がここに置いたが、(今は)ない」(状態動詞-*tua*「置く」)
- (3) a. *k-evu ka-uku unju hea ke-me-rudi*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-leave.PFV morning but 3SG.SM-PRF-come_back
 b. **ka-uku unju hea ke-me-rudi*
 3SG.SM-leave.PFV morning but 3SG.SM-PRF-come_back
 「彼は朝発ったが、戻ってきた」(状態動詞-*uka*「発つ」)
- (4) a. *k-evu ka-vwaa ngu hea sasa ka-wa uchi*
 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-wear.PFV clothes but now 3SG.SM-COP.PFV naked
 b. **ka-vwaa ngu hea sasa ka-wa uchi*
 3SG.SM-wear.PFV clothes but now 3SG.SM-COP.PFV naked
 「彼は服を着(てい)たが、今は裸だ」(状態動詞-*vwaa*「着る」)

- (5) a. *maji yano y-evu ya-chemku hea ye-me-polea*
 water DEM.PROX.CL6 CL6.SM-COP.PST CL6.SM-boil.NEU.PFV but CL6.SM-PRF-turn_tepid.APPL
- b. *maji yano ya-chemku hea ye-me-polea*
 water DEM.PROX.CL6 CL6.SM-boil.NEU.PFV but CL6.SM-PRF- turn_tepid.APPL
 「この水は沸いたが、冷めた」(非状態動詞-*chemka* 「沸く」)
- (6) a. *ny-evu N-chimbi shimo hea sasa li-me-fukiwa*
 1SG.SM-COP.PST 1SG.SM-dig.PFV hole but now CL5.SM-PRF-fill.PASS
- b. *N-chimbi shimo hea sasa li-me-fukiwa*
 1SG.SM-dig.PFV hole but now CL5.SM-PRF-fill.PASS
 「私は、穴を掘ったが、今は埋められている」(非状態動詞-*chimba* 「掘る」)
- (7) a. *βano k-evu ka-fiki=βa hea ke-me-uka*
 DEM.PROX.CL16 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-reach.PFV=DEM.PROX.CL16 but 3SG.SM-PRF-leave
- b. *βano ka-fiki=βa hea ke-me-uka*
 DEM.PROX.CL16 3SG.SM-reach.PFV=DEM.PROX.CL16 but 3SG.SM-PRF-leave
 「ここに、かれは着いたが、彼は発った」(非状態動詞-*fika* 「着く」)
- (8) a. *pandu nyumba k-evu ka-jenge hea i-bomoko*
 PN house 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-built.PFV but CL9.SM-break.NEU.PFV
- b. *pandu nyumba ka-jenge hea i-bomoko*
 PN house 3SG.SM-built.PFV but CL9.SM-break.NEU.PFV
 「パンドゥは家を建てたが、壊れた」(非状態動詞-*jenga* 「建てる」)

付録3：複合時制構文の例

以下に、8.6節で説明した複合時制構文の具体例を提示する。ここで提示する例には、本文中で挙げたものも含まれる。なお、以下では、コピュラ動詞を実線で囲み、後続する別の動詞活用形を破線で囲んで例示する。また、訳のあとの（ ）内には、どのコピュラ動詞活用形を用いているかを明記している。

- (1) *hata mwakani* *ka-cha-wa* *ha-li-poa*
 ever next_year 3SG.SM-FUT-COP 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-cure
 「来年になっても彼は治っていないだろう」(*cha-*「未来」)
- (2) *ka-na-wa* *ka-shibi*
 3SG.SM-IPFV-COP 3SG.SM-satisfy.PFV
 「彼はいつも満腹だ」(*na-*「未完結」)
- (3) *ke-mena-wa* *ka-na-tenda* *kazi*
 3SG.SM-INCH-COP 3SG.SM-IPFV-do work
 「彼は仕事をし始めている」(*mena-*「起動」)
- (4) *a-ka-okota* *zilya* *ch'hicha* *a-ka-wa* *ka-na-kulya*
 3SG.SM-CONS-pick_up DEM.DIST.CL10 coconut_flake 3SG.SM-CONS-COP 3SG.SM-IPFV-eat
 「彼女はそのココナツの削りカスを拾って、そして食べていた」(*ka-*「継起」)
- (5) *u-ka-wa* *ku-shibi* *vy-ache*
 2SG.SM-COND-COP 2SG.SM-satisfy.PFV CL8.OM-leave.IMP
 「満腹なら残しなさい」(*ka-*「条件」)
- (6) *a-nge-wa* *ka-na-soma* *kitabu kama ka-wa-βo*
 3SG.SM-CF-COP 3SG.SM-IPFV-read book if 3SG.SM-COP.PFV-CL16.PRO
 「もしここにいたら、彼は本を読んでいただろうに」(*nge-*「反実仮想」)
- (7) *a-ø-vyo-ja-kaa* *baraza-ni* *k-evu* *ka-na-paaza* *kamba*
 3SG.SM-PFV-CL8.REL-come-sit stone_seat-LOC 3SG.SM-COP.PST 3SG.SM-IPFV-lay rope
 「縁側に座っていたとき、彼女はロープをなっていた」(過去形-*evu*)

- (8)

<i>a-ngali</i>
3SG.SM-COP.PER

<i>ka-na-kulya</i>
3SG.SM-IPFV-eat

「彼はまだ食べている」(持続形-*ngali*)

- (9) *a-cha-e-ngia* *nyumba-ni*

<i>a-we</i>
3SG.SM-COP.SUBJ

<i>ka-na-kwitwa</i>	<i>juma</i>
3SG.SM-IPFV-call.PASS	PN

「家に入ってくる人は、ジュマと呼ばれる (もの) に違いない」(接続形)

付録 4 : 民話テキスト「子供が鬼に連れ去られた話」

以下に、インフォーマントの一人、Zainabu 氏が語ってくれた、民話をテキスト化したものを付す。このテキストの話者と録音に関する情報は以下の通りである。

- 収録日 : 2016 年 9 月 19 日
- 収録場所 : 話者の自宅 (マクンドゥチ郡マタズィ集落)
- 収録時間 : 5 分 52 秒
- 語り手 : Zainabu Khatibu Bonde 氏、収録時推定 60 代前半、女性、マタズィ集落出身
- 隣席者 : Zainabu 氏の娘 (10 代中ごろ)、本論文の筆者

なお、このテキスト資料は既に、古本 (2017) として公開されているが、筆者はこの民話に、「子供が鬼に連れ去られた話」という仮題をつけている。また、テキストの中には、民話の本文だけでなく、いわゆる地の文 ((1) (9) (23)) も含まれる。

(1) *ku-i-fuguu*.

2SG.SM-CL9.OM-open.PFV

「(レコーダーを) 開けた? (録音し始めた?)」

(2) *paukwa*.¹⁷⁹

tale_opening

「お話を始めます。」

(3) (*pakawa*).

reply_to_tale_opening

(「始めて。」)

¹⁷⁹ *paukwa* は物語を始めるときの決まり文句である。聴衆は *pakawa* と応答する。

(4) *a-li-ondokea. makame wa=makame.*¹⁸⁰

3SG.SM-PST-prosper PN of.CL1=PN

「マカメの子、マカメというものがおりました。」

(5) *makeme wa=makame yulya a-ka-oa*

PN of.CL1=PN DEM.DIST.CL1 3SG.SM-CONS-marry

「そのマカメの子、マカメは結婚しました。」

(6) *a-ø-vyo-oa a-ka-vyaa. wana ishirini*

3SG.SM-PFV-CL8.REL-marry 3SG.SM-CONS-bear children twenty

「彼は結婚したとき、子供をもうけました。20人の子供。」

(7) *a-ø-vyo-vyaa wana ishirini kia mwana ka-vyaligwa siku yake.*

3SG.SM-PFV-CL8.REL-bear children twenty every child 3SG.SM-bear.PASS.PFV day his.CL9

「20人の子供をもうけた際、それぞれの子は、別々の日に生まれました。」

(8) *a-ø-vyo-vyaa wana ishirini yulya.*

3SG.SM-PFV-CL8.REL-bear children twenty DEM.DIST.CL1

a-ka-kaa hata siku iyo.

3SG.SM-CONS-sit even day DEM.MED.CL9

「20人の子供が生まれたときは、その日も、その人はおりました。」

¹⁸⁰ Zainabu 氏の話の冒頭には、多くの場合、このフレーズが現われる。なお、*a-li-ondokea* の *li-* という接頭辞は、マクンドゥチ方言のものではなく、威信変種であるウングジャ方言からの借用であることが推測される。

- (9) *paukwa izo N-me=ga-tenda=zo icho kipindi cha=nyuma*
 tales DEM.MED.CL10 1SG.SM-PRF=bit-do=DEM.MED.CL10 DEM.MED.CL7 period of.CL7=rear
*si-jui*¹⁸¹ *ama umo a-ø-vyo-kwenda ka-tii iyo.*
 1SG.SM:NEG-know.NEG COMP DEM.MED.CL18 3SG.SM-PFV-CL8.REL-go 3SG.SM-put.PFV DEM.MED.CL9
ama iyo y-ende na=maji tu.
 COMP DEM.MED.CL9 CL9.SM-go.PFV COM=water only
 「これらのお話は前にしたことがあるよ。その中（レコーダーの中）に、彼（筆者）
 が行ったときに、それを彼が入れたか、私は知らない。あるいは、それは水とともに
 に行ってしまったか（無くなってしまったか）。」

- (10) *a-ø-vyo-vyaa wana ishirini.*
 3SG.SM-PFV-CL8.REL-bear children twenty
walya wanak^hele a-ka-wa-vo ya=mwisho kazi yake.
 DEM.DIST.CL2 children 3SG.SM-CONS-COP-EXIST of.CL1=end work his.CL9
k-enda a-ka-bana ndege. njo=kazi yake.
 3SG.SM-go 3SG.SM-CONS-press bird BGR=work his.CL9
 「彼（マカメ）が 20 人の子供をもうけたとき、その子供たちの中で、最後の子が
 いて、彼の仕事は、鳥を挟み（捕まえる？）に行くことです。それが彼の仕事です。」

- (11) *hata siku iyo a-k-enenda mahaa mwitu-ni uko.*
 even day DEM.MED.CL9 3SG.SM-CONS-go place forest-LOC DEM.MED.CL15
a-k-ona ki-jumba ja=icho+ko.
 3SG.SM-CONS-see DIM-building like=DEM.MED.CL7+DEM.MED.CL15
 「その日も、彼は、その森に行きまして、あそこにあるような小屋を目にしまし
 た。」

¹⁸¹ この活用形は、ウングジャ方言からの影響を受けたものであると考えられる。

- (12) *ki-jumba kilya a-ø-vyo-ch-ona a-ka-sema*
 DIM-building DEM.DIST.CL7 3SG.SM-PFV-CL8.REL-CL7.OM-see 3SG.SM-CONS-tell
nda=ga-omba maji ya=ku-nywa ki-jumba icho+ko
 go:1SG.SM=bit-ask water of.CL6=INF-drink DIM-building DEM.MED.CL7+DEM.MED.CL15
maji yangu y-esi mno ki-buyu-ni.
 water my.CL6 CL6.SM-finish.PFV DEM.PROX.CL18 DIM-calabash-LOC
 「その小屋を見つけたとき、『あそこの小屋に飲み水をもらいに行く、この瓢箪の
 中の私の水はなくなってしまった』と彼は言いました。」

- (13) *a-k-enenda a-ka-ngia nlyā nyumba-ni*
 3SG.SM-CONS-go 3SG.SM-CONS-enter DEM.DIST.CL18 house-LOC
a-ka-nywa maji ha-li-wahi ku-nywa maji
 3SG.SM-CONS-drink water 3SG.SM:NEG-PFV.NEG-be_in_time INF-drink water
ka-na-sikia nyannyannyannyan majimwi ya-na-kuja.
 3SG.SM-IPFV-hear ONM genies CL6.SM-IPFV-come
 「彼が行って、その家の中に入って水を飲み、水を飲み終わる前に、にゃんにゃん
 にゃんという音を彼は耳にします。小鬼たちがやっています。」

- (14) *ma-ji-kelele moja kwa=moja majimwi ya-na-kuja.*
 PL-AUG-noise one of.CL15=one genies CL6.SM-IPFV-come
 「耳障りな音はまっすぐに（近づいています）、小鬼たちがやってきます。」

- (15) *ya-ø-vyo-kuja yalya. yulya mwanak^hele*
 CL6.SM-PFV-CL8.REL-come DEM.DIST.CL6 DEM.DIST.CL1 child
ka-ji-tungu juu ya=mwamba ja=uko.
 3SG.SM-REFL-put.PFV above of.CL9=garret like=DEM.MED.CL15
 「そいつらがやってきたとき、その子供はあそのような屋根裏の上に身を潜め
 ました。」

- (16) *ka-na-jamba pyupyupyupyu ka-na-jamba*
 3SG.SM-PFV-fart ONM 3SG.SM-IPFV-fart
 「彼（子供）はピュピュピュピュと屁をこいています。彼は屁をこいています。」

(17) *he he yamaa inyo nyinyi nyee. he yamaa ino nini he.*
 INT INT colleague DEM.PROX.CL9 what Q INT colleague DEM.PROX.CL9 what INT
*he yamaa kina na-sikia pyu na-sikia pyu. he yamaa.*¹⁸²
 INT colleague HESIT IPFV:1SG.SM-hear ONM IPFV:1SG.SM-hear ONM INT colleague
 『おい、お前これはなんだ。』『おい、お前これはなんだ。』『お前、俺はピュっ
 という音が聞こえるぞ。』『俺はピュっという音が聞こえるぞ。』『おいお前。』

(18) *tena yulya mwanak^hele a-k-emba.*
 then DEM.DIST.CL1 child 3SG.SM-CONS-sing
 「そして、その子供は歌いました。」

(19) *heee heee mayombe woo.*
 INT INT ? INT
 『へーエエ、へーエエ、マヨンベー オオ。』

(20) *wao majimwi wa-kazwa wa mambo*
 DEM.MED.CL2 genies 3PL.SM-please.PASS.PFV HESIT things
ya=nyimbo i-wa-kaza. na=mashuzi.
 of.CL6=song CL9.SM-3PL.OM-please.PFV COM=farts
 「その小鬼たちは、歌の内容が気に入りました。それとおならも。」

¹⁸²⁾ Zainabu 氏の民話の中では、小鬼のセリフの歯茎音はしばしば口蓋化する。小鬼というキャラを特徴づけるために、こうした口蓋化が用いられていると考えられる。

(21) *hee hee mayombe woo. hu-onana msitu wa=kiwengwa eee eee mayombe woo.*

INT INT ? INT HAB-see.RECP forest of.CL3=PN INT INT ? INT
kwa=heri na-kwenda za.

of.CL15=happiness IPFV:1SG.SM-go my.CL10.HESIT

hu-onana msitu wa=kiwengwa we hee hee mayombe woo.

HAB-see.RECP forest of.CL3=PN 2SG INT INT ? INT

mie njo=kamili+ishirini we eee oo mayombe wooo.

1SG.PRO BGR=exactly+twenty 2SG INT INT ? INT

「『へーエエ、へーエエ、マヨンベ、オオ。キウエングワの森の中で出会うものだよ。へーエエ、へーエエ、マヨンベ オオ。さよなら、私は行っちゃうよ、キウエングワの森の中で出会うものだよ。へーエエ、へーエエ、マヨンベ オオ。私こそがちょうど 20 番目 (子) だよ。エエエ、オオ、マヨンベ、オオ。』」

(22) *eeee eeee mayombee woo. hu-onana msichu wa=kiwengwa we yee yee.*

INT INT ? INT HAB-see.RECP forest of.CL3=PN 2SG INT INT

「『エーエエエ、エーエエエ、マヨンベ、オオ。キウエングワの森の中で出会うものだよ。エエエエ エエエエ。』」

(23) *jana ka-nyi-uzu kwa=nini majimwi*

yesterday 3SG.SM-1SG.OM-ask.PFV of.CL15=what genies

wa-na-choea kimji ha-wa-na-choea kika.

3PL.SM-IPFV-speak town_dialect NEG-3PL.SM-IPFV-speak Kae_dialect

「昨日、彼 (筆者) は、なぜ、小鬼たちは街の言葉でしゃべるのか、カエ方言を話さないのかと尋ねたんだよ。」

(24) *eee eee mayombe woo.*

INT INT ? INT

「『エーエエ、エーエエ、マヨンベ、オオ。』」

(25) *tena kia mtu kesho a-je kwangu. kesho a-je kwangu.*
 then every person tomorrow 3SG.SM-come.SUBJ my.CL15 tomorrow 3SG.SM-come.SUBJ my.CL15
kesho ki-dege N-ja-ki-chukua. kesho ki-dege kwangu.
 tomorrow DIM-bird 1SG.SM-come-CL7.OM-take tomorrow DIM-bird my.CL15
 「そして、みんなが、『明日は、彼は、私のところにいらっしやい。』 『明日は、私のところにいらっしやい。』 『明日は、小鳥を私が捕まえます。』 『明日は、小鳥は私のところで。』」

(26) *haya.*

FIL

「はい」

(27) *hata siku iyo ke-me-kaa hata kuno mama-ake*
 even day DEM.MED.CL9 3SG.SM-PRF-sit even DEM.PROX.CL15 mother-his
ha-na-koneka kwa=machosi
 3SG.SM:NEG-IPFV-see.STAT of.CL15=tear
ke-me-konda ka-na-lawa t'ongo na=mavi.
 3SG.SM-PRF-slim 3SG.SM-IPFV-come_from eye_mucus COM=feces
 「その日も、彼は（小鬼たちのところに）滞在しました。こちらで、彼のお母さんは、涙で見ることができません (?)。彼女はやせて、目ヤニと糞を出しています。」

(28) *mwana=we ha-na-m-ona na=baba=ake ja=vivyo.*
 child=his 3SG.SM:NEG-IPFV-3SG.OM-see COM=father=his like=DEM.MED.CL8
 「彼女の子供を、彼女は見ません。彼の父親も同様です。」

(29) *hata siku iyo a-ka-sema*
 even day DEM.MED.CL9 3SG.SM-CONS-tell
jamaa mie kesho nyi-enende kwetu kesho+kutwa ee cha.
 colleague 1SG.PRO tomorrow 1SG.SM-go.SUBJ our.CL15 tomorrow+daytime INT FIL
 「その日、『お前さん、私は、明日、私たちのところに行ってもよいか、明後日も』と彼（子供）は言いました。」

(30) *jamaa ki-dege ki-na-chaka ki-ka-belekwe (?) kwao=cho*
 colleague DIM-bird CL7.SM-IPFV-want CL7.SM-CONS-send.PASS.SUBJ their.CL15=DEM.MED.CL7
ḡ-nya ng'ombe ḡ-nya punja ḡ-nya ngamia ḡ-nya fayashi
 CL1.SM.REL-POSS cow CL1.SM.REL-POSS donkey CL1.SM.REL-POSS camel CL1.SM.REL-POSS horse
a-yeche βano zawadi. a-s-enende mikono michupu
 3SG.SM-bring.SUBJ DEM.PROX.CL16 gift 3SG.SM-NEG-go.SUBJ hands empty.CL4
yuno βano ke-me-kaa hacha kwei yeche zawadi
 DEM.PROX.CL1 DEM.PROX.CL16 3SG.SM-PRF-sit even really bring.IMP gift
kia ḡch^hu a-ø-enja-mw-imbia.

every person 3SG.SM-PFV-go:REL.CL1-CL1.OM-sing.APPL

a-n-yechee na=mie βano.

3SG.SM-3SG.OM-bring.APPL.SUBJ COM=1SG.PRO DEM.PROX.CL16

『お前さん、小鳥は、彼らのところに送られたがっている。牛を持っているもの、ロバを持っているもの、ラクダを持っているもの、馬を持っているものは、ここに贈り物を持ってこい。こいつは、手ぶらで行くわけにはいかない。彼はしばらく住んだ。贈り物を持ってこい。彼が歌いに行った人はみんな、彼に私と一緒に（贈り物を）渡そう。』

(31) *haya.*

FIL

「はい」

(32) *hata ja=kesho. ḡ-na farasi ḡ-na ng'ombe ḡ-na mbuzi*
 even like=tomorrow CL1.SM.REL-POSS horse CL1.SM.REL-POSS cow CL1.SM.REL-POSS goat
ḡ-na p^hunda kia ḡt^hu ka-tii kwapa-ni.

CL1.SM.REL-POSS donkey every person 3SG.SM-put.PFV armpit-LOC

「そして翌日も、牛を持っているもの、ヤギを持っているもの、ロバを持っているもの、みんな、わきの下に（ロープを）入れています。」

(33) *wa-ka-ja haya safari saa t^hatu.*

3PL.SM-CONS-come FIL travel hour three.CL9

「彼らがきて、『はい、出発は9時です。』」

- (34) *wat^hu wa-ka-toka i-ø-vyo-timu saa t^hatu*
 people 3PL.SM-CONS-come_from CL9.SM-PFV-CL8.REL-be_complete hour three.CL9
umo njia-ni wa-na-piga mbio
 DEM.MED.CL18 road-LOC 3PL.SM-IPFV-hit speed
wa-ja βano na=uko majezi.
 3PL.SM-come.PFV DEM.PROX.CL16 COM=DEM.MED.CL15 PN
 「9時ちょうどになると、人々は道に出てきて、彼らは走っています。彼らはこ
 や、マジエズィに来ました。」

- (35) *wa-na-kwenenda ja=βano ja=na=uko majezi*
 3PL.SM-IPFV-go like=DEM.PROX.CL16 like=COM=DEM.MED.CL15 PN
wa-na-piga mbio tu wa-na-piga mbio tu.
 3PL.SM-IPFV-hit speed only 3PL.SM-IPFV-hit speed only
 「彼らはこのようなところや、マジエズィのようなところに行きます。彼らは急
 いでいます。彼らは急いでいます。」

- (36) *hata.*
 even
 「そして。」

- (37) *eee eee mayombe woo. mie njo=kamili+ishirini we eee eee mayombe woo.*
 INT INT ? INT 1SG.PRO BGR=exactly+twenty 2SG INT INT ? INT
kwa=heri na-kwenda zangu we kwa=mama na=baba=angu we.
 of.CL15=happiness IPFV:1SG.SM-go my.CL10 2SG.PRO of.CL15=mother COM=father=my 2SG.PRO
yeee eee mayombe woo.
 INT INT ? INT
 「『エエエ、エエエ、マヨンベ、オオ、私こそが 20 番目だ。エエエ、エエエ、マ
 ヨンベ、オオ。さよなら、わたしは行きます。お母さんとお父さんのところへ。
 エエエ、エエエ、マヨンベ、オオ。』」

- (38) *haya.*
 FIL
 「はい」

- (39) *wa-k-enenda umo njia-ni. mie njo=kamili+ishirini na-kwenda zangu*
 3PL.SM-CONS-go DEM.MED.CL18 road-LOC 1SG.PRO BGR=exactly+twenty IPFV:1SG.SM-go my.CL10
mie njo=kamili+ishirini na-kwenda zangu.
 1SG.PRO BGR=exactly+twenty IPFV:1SG.SM-go my.CL10
 「彼らはその道の中に行きました。『私こそが、ちょうど 20 番目、私は行く。私こそがちょうど 20 番目、私は行く。』」
- (40) *a-k-enenda kwao.*
 3SG.SM-CONS-go their.CL15
 「彼は彼らのところへ行きました。」
- (41) *wa-ø-vyo-fika wazee wa-ka-ji-tia mivungu-ni*
 3PL.SM-PFV-CL8.REL-arrive elders 3PL.SM-CONS-REFL-put under_the_bed-LOC
wa-na-kona lamilami ya=wat^hu wa-na-sema
 3PL.SM-IPFV-see troop of.CL9=people 3PL.SM-IPFV-tell
βano tu-na-ja-chinjwa tu-na-ja-ligwa.
 DEM.PROX.CL16 1PL.SM-IPFV-come-slaughter.PASS 1PL.SM-IPFV-come-eat.PASS
 「彼らがついたとき、(彼の) 両親はベッドの下に身を隠し、人の群れを見ています。彼ら(両親)は『私たちは、殺される、私たちは食べられる』と言っています。」
- (42) *wa-ø-vyo-kona lamilami ya=wat^hu*
 3PL.SM-PFV-CL8.REL-see troop of.CL9=people
wa-ka-zidi ku-ji-chochomeka mivungu-ni
 3PL.SM-CONS-become_greater INF-REFL-get_inside under_the_bed-LOC
wat^hu wa-ø-vyo-fika βalya βao a-ka-sema
 people 3PL.SM-PFV-CL8.REL-arrive DEM.DIST.CL16 their.CL16 3SG.SM-CONS-tell
βano mie njo=βetu.
 DEM.PROX.CL16 1SG.PRO BGR=our.CL16
 「彼らは人の群れを見たとき、ベッドの下のさらに奥へと隠れました。人々が、その彼らのところに着いたとき、彼(子供)は『こここそが私たちのところだ』と言いました。」

(43) *ki-k-enda-lavigwa* *ki-mama=ake* *na=ki-baba=ake*
 CL7.SM-CONS-go-take_out.PASS DIM-mother =his COM= DIM-father=his
vi-wa *ja=vilya* *uzi.*
 CL8.SM-COP.PFV like=DEM.DIST.CL8 thread
 「小なお母さんは引っ張り出されに行きます。小さなお父さんも。彼らはまるで糸
 のようです。」

(44) *vi-ka-korogewa* *uji=ga* *vi-ka-nywa*
 CL8.SM-CONS-stir.APPL.PASS gruel=bit CL8.SM-CONS-drink
vi-k-oswa *vi-ka-vwaa* *nguo zuri.*
 CL8.SM-CONS-wash.PASS CL8.SM-CONS-wear clothes good.CL10
 「彼らはおかゆをつくってもらい、飲み、(体を)洗われ、よい服を着ました。」

(45) *ilya* *siku ilya* *wat^hu tena kiambo-ni pwi.*
 DEM.DIST.CL9 day DEM.DIST.CL9 people then village-LOC plenty
 「その日、村には人がたくさん。」

(46) *wa-ka-ja.*
 3PL.SM-CONS-come
 「彼らは来て、」

(47) *he jamaa shida ilya.* *ee jamaa kamili+ishirini ka-ja.*
 INT colleague difficulty DEM.DIST.CL9 INT colleague exactly+twenty 3SG.SM-come.PFV
ee jamaa mie ta yuno *N-ja-ḡ-leta.*
 INT colleague 1SG.PRO no DEM.PROX.CL1 1SG.SM-come.PFV-3SG.OM-bring
 『『ああ、お前さん、その困難』 『あら、お前さん、ちょうど二十番目が来た』 『違
 います。私が彼 (二十番目) を連れてきたんです。』』

(48) *a-ka-wa* *ka-vizi* *wazee wake.*
 3SG.SM-CONS-COP 3SG.SM-interrupt.PFV elders his.CL2
 「彼は、両親を遮りました。」

(49) *yuno tw-evu tu-mu-okoto suwe ka-ja kwetu.*
 DEM.PROX.CL1 1PL.SM-COP.PST 1PL.SM-3SG.OM-pick_up.PFV 1PL.PRO 3SG.SM-come.PFV our.CL15
 『こいつは、私たちが拾いました。彼は我々のところへやって来ました。』

(50) *kwa=ivyo ki-pete wa=ki-pete kino.*
 of.CL15=DEM.MED.CL8 DIM-ring of.CL1=DIM-ring DEM.PROX.CL7
 「こういうわけで、この魔法の指輪。」

(51) *a-ka-βeleka njipete wa=nijipete.*
 3SG.SM-CONS-send ring of.CL1=ring
 「彼は、魔法の指輪を送りました。」

(52) *shida yoyoti i-na-yo-wa-ko njipete*
 difficult any.CL9 CL9.SM-IPFV-CL9.REL-COP-EXIST ring
ino iyo iyo to i-lole.
 DEM.PROX.CL9 DEM.MED.CL9 DEM.MED.CL9 HESIT CL9.OM-look.SUBJ
u-y-ambie u-y-otee uko kwetu tu
 2SG.SM-CL9.OM-tell.SUBJ 2SG.SM-CL9.OM-point.APPL.SUBJ DEM.MED.CL15 our.CL15 only
sawa ya=uko kwetu basi tu-cha-kuja.
 direction of.CL9=.DEM.MED.CL15 our.CL15 FIL 1PL.SM-IRR-come
 『存在するありとあらゆる困難に、この指輪、を眺めなさい。これに話しかけ、
 これを私たちの方向に向けなさい。そうすれば私たちが来ます。』

(53) *a-ka kama ki-pete wa=ki-pete*
 3SG.SM-CONS.HESIT like DIM-ring of.CL1=DIM-ring
ki-ka-jenga ma-j-umba.
 CL7.SM-CONS-build PL-AUG-building
 「指輪は御殿を建てました。」

(54) *βavo βalya ma-ji-duka wa=arabu wa=masa wa=ɱzungu.*
 DEM.MED.CL16 DEM.DIST.CL16 PL-AUG-shop of.CL1=Arabs of.CL1=Masai.HESIT of.CL1=Westerner
 「そこには、アラブ人の、マサイの、白人の店。」

(55) *kia jambo wa-na-tumiza tu wa-na-tumiza tu*
 every thing 3PL.SM-IPFV-employ.CAUS only 3PL.SM-IPFV-employ.CAUS only
walya wat^hu wa-li-tendeka wasichana ulya ukongwe pya u-uku.
 DEM.DIST.CL2 people 3PL.SM-PST-do.STAT girls DEM.DIST.CL3 old.age also CL3.SM-leave.PFV
 「ありとあらゆることを彼らはさせにさせました。その人々は、娘になりました。
 年老いた姿も消え去りました。」

(56) *ha-wa-na-nuka jambo.*
 NEG-3PL.SM-IPFV-smell thing
 「彼らは臭いません。」

(57) *kia jambo maana tena wa-a juu*
 every thing reason then 3PL.SM-COP.PFV above
kwa=juu mapolo ya=michele ya-wa umo kati.
 of.CL15=above sack of.CL6=rice CL6.SM-COP.PFV DEM.MED.CL18 inside
 「ありとあらゆること、だから、彼らは上のさらに上にいます。その中には米の詰
 まった袋があります。」

(58) *paukwa yangu isi.*
 tale my.CL9 finish.PFV:CL9.SM
 「私のお話はおしまい。」

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra. Y. (2000) *Classifiers: A typology of noun categorization device*. Oxford: Oxford University Press.
- Ashton, Ethel. O. (1947) *Swahili grammar (including intonation)* (2nd. ed.). London: Longman.
- Baraza la Kiswahili la Zanzibar (BAKIZA). (2012) *Kamusi la lahaja ya Kimakunduchi*. Zanzibar: Baraza la Kiswahili la Zanzibar.
- Bastin, Yvonne, & Schadeberg, Thilo C. (Eds.) (2003) *Bantu lexical reconstructions 3 (BLR3)*. Online database. Tervuren: Musée Royal de l’Afrique Centrale. Retrieved June 7, 2016, from <http://www.africamuseum.be/collections/browsecollections/humansciences/blr>.
- Batibo, Herman. M. (2005) Future tense and aspect markings in Southern Bantu. In F. K. Erhard Voeltz (Ed.), *Studies in African linguistic typology* (pp. 1–12). Amsterdam: Benjamins.
- Bearth, Thomas. (2003) Syntax. In Derek Nurse, & Gérard Philippson (Eds.), *The Bantu languages* (pp. 121–142). London: Routledge.
- Blevins, Jame P. (2006) Word-based morphology. *J. Linguistics*, 42, 531–573.
- Bochner, Harry. (1993) *Simplicity in generative morphology*. Berlin: de Gruyter.
- Boersma, Paul & Weenink, David (2013) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.3.50, retrieved from <http://www.praat.org/>
- Brinton, J. Laurel, & Traugott, Elizabeth Closs. (2005) *Lexicalization and language change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: Benjamins.
- Bybee, Joan L., Perkins, Revere, & Pagliuca, William. (1994) *The evolution of grammar: The grammaticalization of tense, aspect and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chafe, Wallace L. (1976) Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In Charles N. Li (Ed.), *Subject and topic* (pp. 25–55). New York: Academic Press.
- Chum, Haji. (1962/3a) Wano (a specimen of Kae (Hadimu) prose). *Swahili*, 33 (1), 25–28.
- . (1962/3b) Utenzi wa Tariku Salati. *Swahili*, 33 (1), 28–34.
- . (1962/3c) A vocabulary of the Kikae (Kimakunduchi) dialect. *Swahili*, 33 (1), 51–68.
- . (1994) *Msamiatu wa pekee wa Kikae, Kae specific vocabulary*. Uppsala: Nordic Association of African Studies.

- Clements, George N. (1991) Place of articulation in consonants and vowels: a unified theory. *Working Papers of the Cornell Phonetics Laboratory*, 5, 77–123.
- Comrie, Bernard. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Contini-Morava, Ellen. (1983) Relative tense in Discourse: The inference of time orientation in Swahili. In Flora Klein-Andreu (Ed.), *Discourse perspective on syntax* (pp. 3–21). New York: Academic Press.
- . (1989) *Discourse pragmatics and semantic categorization: The case of negation and tense-aspect with special reference to Swahili*. Berlin: de Gruyter.
- Dahl, Östen. (1985) *Tense and aspect systems*. Oxford: Blackwell.
- Devitt, Dan. (1990) The diachronic development of semantics in copulas. *Proceedings of the annual meeting of the Berkeley linguistics society*, 16, 103–115.
- Dixon, R. M. W. (2010a, b) *Basic linguistic theory*, Vols. 1–2. New York: Oxford University Press.
- Dryer, Matthew S. (1986) Primary objects, secondary objects, and antitativity. *Language*, Vol. 62, No. 4, 808–845.
- Favery, Margot, Breda Johns & Fay Wouk. (1976) The historical development of locative and existential copula constructions in Afro-English creole languages. In Sanford B. Steever, Carol A. Walker, & Salikoko S. Mufwene (Eds.), *Papers from the parasession on diachronic syntax* (pp. 88–95). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Furumoto, Makoto. (2015) On the copula in the Kikae dialect of Swahili. *Swahili Forum*, 22, 20–41.
- Givón, Talmy. (1976) Topic, pronoun, and grammatical agreement. In Charles N. Li (Ed.), *Subject and topic* (pp. 149–188). New York: Academic Press.
- Goddard, Cliff & Jean Harkins. (2002) Posture, location, existence, and states of being in two central Australian languages. In John Newman (Ed.), *The linguistics of sitting, standing and lying* (pp. 213–238). Amsterdam: Benjamins.
- Greenberg, Joseph H. (1978) How does a language acquire gender markers? In Joseph H. Greenberg, Charles A. Ferguson, & Edith A. Morcsik (Eds.), *Universals of human language: Word structure* (pp. 47–82). Stanford: Stanford University Press.
- Guthrie, Malcolm. (1967–1971) *Comparative Bantu: an introduction to the comparative linguistics and prehistory of the Bantu languages* (Vols. 1–4). Farnborough: Gregg Press.
- Güldemann, Tom. (2003) Grammaticalization. In Derek Nurse, & Gérard Philippson (Eds.), *The Bantu languages* (pp. 182–194). London: Routledge.
- Haspelmath, Martin, & Sims, Andrea D. (2010) *Understanding morphology* (2nd ed.). London: Hodder Education.

- Heine, Bernd. (1982) African noun class systems. In Hansjakob Seiler & Christian Lehmann (Eds.), *Apprehension: Das sprachliche Erfassen von Gegenständen, I: Bereich und Ordnung der Phänomene* (pp. 189-216). Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Heine, Bernd & Tania Kuteva. (2002) *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2007) *The genesis of grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Hengeveld, Kees. (1992) *Non-verbal predication: Theory, typology, diachrony*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Hockett, Charles. F. (1958) *A course in modern linguistics*. New York: The Macmillan.
- Hyman, Larry M. (2003) Segmental Phonology. In Derek Nurse, & Gérard Philippson (Eds.), *The Bantu languages* (pp. 42–58). London: Routledge.
- . (2009). The natural history of verb-stem reduplication in Bantu. *Morphology*, 19, 177–206.
- Hyman, Larry M., & Duranti, Alessandro. (1982) On the object relation in Bantu. *Syntax and semantics*, 15, 217–239.
- Hyman, Larry M., Inkelas, Sharon, & Sibanda, Galen. (2008) Morphosyntactic Correspondence in Bantu Reduplication. In Krstin Hanson, & Sharon Inkelas (Eds.), *The nature of the word* (pp. 273–309). Cambridge, MA: MIT Press.
- Ingrams, W. H. (1924) The dialects of the Zanzibar sultanate. *Bulletin of the School of Oriental Studies*, Vol.3 (3), 544–550.
- . (1925) The people of Makunduchi, *Zanzibar Man*, Vol. 25, 138–142
- Jacobs, Joachim. (2001) The dimensions of topic-comment. *Linguistics*, 39, 641–682.
- Johnson, Frederick. (1939) *A Standard Swahili-English dictionary*. Nairobi: Oxford University Press.
- Kapanga, Mwamba Tshishiku. (1991) *Language variation and change: A case study of Shaba Swahili*. PhD Thesis: University of Illinois.
- Katamba, Francis. (2003) Bantu nominal morphology. In Derek. Nurse, & Gérard Philippson (Eds.), *The Bantu Languages* (pp. 103–120). London: Routledge.
- Keenan, Edward. L., & Comrie, Bernard. (1977) Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry*, Vol. 8(1), 64–99.
- Kimenyi, Alexandre. (1980) *A relational grammar of Kinyarwanda*. Berkeley: University of California Press.

- Kiparsky, Paul. (2002) Event structure and the perfect. In David I. Beaver, Luis D. Casillas Martínez, Brady Z. Clark, & Stefan Kaufmann (Eds.), *The construction of meaning* (pp. 113–136). Stanford: CSLI.
- Kisseberth, Charles & Odden, David. (2003) Tone. In Derek Nurse, & Gérard Philippson (Eds.), *The Bantu languages* (pp. 59–70). London: Routledge.
- Krifka, Manfred Austin. (1995) Swahili. In Joachim Jacobs, Arnim. von Stechow, Wolfgang Sternefeld, & Theo Vennemann (Eds.), *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research* (pp. 1397–1418). Berlin: Walter de Gruyter.
- Lambrecht, Knud. (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lecoste, Beaudouin. (1961) A grammatical study of two recordings of Belgian Congo Swahili. *Swahili*, 31, 219–226.
- Lindstedt, Jouko. (2000) The perfect – aspectual, temporal and evidential. In Östen Dahl (Ed.), *Tense and aspect in the language of Europe* (pp.259 – 277). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Maho, Jouni Filip. (1999) *A comparative study of Bantu noun classes*. Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.
- . (2005) *Select Proto-Bantu vocabulary*. Retrieved June 7, 2016, from <http://gotoglobalnet.net/jfmaho/pbapp.pdf>
- . (2009) *The online version of the new updated Guthrie list, a referential classification of the Bantu languages*. Retrieved November 14, 2013, from https://brill.com/fileasset/downloads_products/35125_Bantu-New-updated-Guthrie-List.pdf
- Marten, Lutz. (2002) A lexical treatment for stem markers in Swahili. *Swahili Forum*, 9, 87–100.
- Meeussen, A. E. (1967) Bantu grammatical reconstructions. *Africana Linguistica*, 3, 79–121.
- Maw, Joan. (1969) *Sentences in Swahili: A study of their internal relationships*. London: School of Oriental and African Studies.
- Maw, Joan. & Kelly, John. (1975) *Intonation in Swahili*. London: School of Oriental and African Studies.
- Meinhof, Carl. (1932) *Introduction to the phonology of the Bantu languages* (Translated and revised by N. J. van Warmelo). Berlin: Verlag von Dietrich Reimer.
- Michealis, Laura A. (1994) The ambiguity of the English present perfect. *Journal of Linguistics*, Vol. 30, No.1, 111–157.
- Mohammed, M. A. (2001) *Modern Swahili grammar*. Nairobi: East African Educational Publishers.

- Moshi, Lioba. (1998) Word order in multiple object constructions in KiVunjo-Chaga. *Journal of African Languages and Linguistics*, 19, 137–152.
- Morimoto, Yukiko. (2006) Agreement properties and word order in comparative Bantu. *ZAS papers in linguistics*, 43, 161–187.
- Noonan, Micheal & Karan Grunow-Hårsta. (2002) Posture verbs in two Tibeto-Burman languages of Nepal. In John Newman (Ed.), *The linguistics of sitting, standing and lying*. (pp. 79–101). Amsterdam: Benjamins.
- Nedjalkov, Vladimir P. & Jaxontof, Sergej Je. (1988) The typology of resultative constructions. In Vladimir P. Nedjalkov (Ed.), *Typology of resultative constructions* (pp. 3–62). Amsterdam: Benjamins.
- Nurse, Derek. (1982a) A tentative classification of the primary dialects of Swahili. *Sprache und Geschichte in Afrika*, 4, 165–206.
- . (1982b) The Swahili dialects of Somalia and the northern Kenya coast. In Marie-Françoise Rombi (Ed.), *Etudes sur le Bantu oriental (Comores, Tanzanie, Somalie, et Kenya)* (pp. 73–146). Paris: Société d'Etudes Linguistiques et Anthropologiques de France.
- . (1984) A historical view of the Southern Dialects of Swahili. *Sprache und Geschichte in Afrika*, 6, 225–250.
- . (2008) *Tense and aspect in Bantu*. New York: Oxford University Press.
- Nurse, Derek, & Hinnebusch, Thomas J. (1993) *Swahili and Sabaki: A linguistic history*. Berkeley: University of California Press.
- Philippon, Gérard. (1993) Tone (and stress) in Sabaki. In Derek Nurse & Thomas J. Hinnebusch, *Swahili and Sabaki: A Linguistic History*. (pp. 248–265). Berkeley: University of California Press.
- Racine-Issa, Odile. (2002) *Description du Kikae: Parler Swahili du sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters Publishers.
- Reid, Nicholas. (2002) Sit right down the back. In John Newman (Ed.), *The linguistics of sitting, standing and lying* (pp. 239–267). Amsterdam: Benjamins.
- Russel, Joan. (1985) Swahili quasi-passive: the question of context. In Didier L. Goyvaerts (Ed.), *African linguistics, essays in memory of M. W. K. Semkenke* (pp. 477–490). Amsterdam: Benjamins.
- Sasse, Hans-Jürgen (1991) Aspect and Aktionsart: a reconciliation. In Carl Vetters & Willy Vandeweghe (Eds.), *Perspectives on Aspect and Aktionsart (Belgian Journal of Linguistics, 6)* (pp. 31–45). Amsterdam: Benjamins.
- Sacleux, Charles de. (1909) *Grammaire des dialectes swahilis*. Paris: Procure des Pères du Saint-Esprit.

- Schultze-Berndt, Eva & Himmelmann, Nikolaus. (2004) Depictive secondary predicates in crosslinguistic perspective. *Linguistic Typology*, 8, 59–131.
- Stewart, Thomas, & Stump, Gregory. (2007) Paradigm Function Morphology and the morphology-syntax interface. In Gillian Ramchand, & Charles Reiss (Eds), *The oxford handbook of linguistic interfaces* (pp. 383–421). Oxford: Oxford University Press.
- Stump, Gregory. (2001) *Inflectional morphology: a theory of paradigm structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Verhaar, John W. (1995) *Toward a reference grammar of Tok Pisin: An experiment in corpus linguistics*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Vitale, Anthony J. (1981) *Swahili syntax*. Dordrecht: Foris.
- Werner, A. (1916) The Wahadimu of Zanzibar. *Journal of the Royal African Society*, Vol. 15, No. 60, 356–360.
- Whiteley, Wilfred. H. (1959) An introduction to the rural dialects of Zanzibar, part 1. *Swahili*, 30, 41–69.
- . (1960) An introduction to the rural dialects of Zanzibar, part 2. *Swahili*, 30, 200–218.
- . (1969) *Swahili: The rise of the national language*. London: Methuen.
- Xu, Y. (2013) ProsodyPro — A Tool for Large-scale Systematic Prosody Analysis. In Proceedings of Tools and Resources for the Analysis of Speech Prosody (TRASP 2013), Aix-en-Provence, France. 7–10.
- Yoneda, Nobuko. (2011) Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles. *Lingua*, 121, 754–771.
- Zwicky, Arnold M. (1985) How to describe inflection. In Mary Niepokuj, Mary Van Clay, Vassiliki Nikiforidou, & Deborah Feder (Eds.), *Proceedings of the Eleventh Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (pp. 372–86). Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.
- 井戸根綾子 (2013) 「ペンバ島キユユにおけるスワヒリ語基礎語彙 600 語の記述調査」『スワヒリ & アフリカ研究』24, 1–15.
- 岸本秀樹 & 菊池 朗 (2008) 『叙述と修飾』東京：研究社.
- 小森淳子 (1991) 「スワヒリ語にみられる主語交替現象について」『言語学研究』10, 1–22.
- 下地理則 (2011) 「文法書を編纂する」『琉球諸語記録保存の基礎』166–193.
- 竹村景子 (2012) 「スワヒリ語トゥンバトゥ方言 (G43)」塩田勝彦 (編) 『アフリカ諸語文法要覧』211–226. 広島：溪水社.
- (2013) 「スワヒリ語諸変種記述調査報告 (2) —キベニ変種およびキドティ変種基礎語彙 600 語」『スワヒリ & アフリカ研究』24, 50–72.
- 中島 久 (2000) 『スワヒリ語文法』東京：大学書林.

- 古本 真 (2015) 「奇妙な複数形と文法的性としての名詞クラスについて—スワヒリ語の二つの地域変種における事例—」『京都大学言語学研究』 34, 25–40.
- (2017) 「スワヒリ語マクンドゥチ方言の民話資料—編—子供が鬼に連れ去られた話—」『スワヒリ & アフリカ研究』 29, 135–152.
- 宮崎久美子 (2013) 「ジャンビアーニ変種記述調査報告 (1) —基礎語彙 600 語—」『スワヒリ & アフリカ研究』 24, 32–49.
- (2017) 「パジェ変種記述調査報告 (1) —基礎語彙 600 語」『スワヒリ & アフリカ研究』 28, 122–139.
- 米田信子 (2012) 「スワヒリ語における 2 種類の関係節」『CLAVEL』 2, 13–25.